

徳島文理大学 大学院 文学研究科

平成二六年度 博士学位論文

『源氏物語』の研究

―女性と権力のかかわりを中心に―

上田 満寿美

『源氏物語』の研究

―女性と権力のかかわりを中心に―

『源氏物語』の研究 ―女性と権力のかかわりを中心に― 目次

序 『源氏物語』の研究について	1
-----------------	---

第一部〈源氏〉とそれを支えた女性たち	
--------------------	--

第一章〈源氏〉の始発

第一節 兄弟の変貌―齋宮との関わりから	5
---------------------	---

第二節 朱雀帝の政治	19
------------	----

第二章 大臣家の姫君が担う役割

第一節 右大臣家の姫君

1 弘徽殿太后	31
---------	----

2 四の君	45
-------	----

第二節 左大臣家の姫君	58
-------------	----

第三章 六条院という空間―疑似後宮で生きる〈源氏〉

第一節 光源氏の創った世界―六条院	73
-------------------	----

第二節 政治家としての夕霧	83
---------------	----

第三節 観察者としての夕霧	93
---------------	----

第四節 後継者としての柏木	102
---------------	-----

第二部〈源氏〉の女性たち

第一章 皇女の生き方

第一節 女三の宮が暴き出すもの

1	結婚―父・朱雀院の立場から	113
2	結婚―准太上天皇の正妻として	128
3	出家がもたらしたもの	142
4	狂わされた男―柏木	152
第二節 落葉の宮が背負わされたもの		
1	落葉の宮の出自	163
2	柏木との結婚	173
3	夕霧との再婚	182
4	皇女の再婚	193

第二章 宮家の姫君

第一節 末摘花が表したもの

1	末摘花巻と左大臣家	201
2	蓬生巻と〈受領〉	213
第二節 朝顔の姫君を形作つたもの		
第三節 宮の御方が消えた理由		
第四節 姫君たちの生き方		
第三部『紫式部日記』		
式部の〈出仕〉		
結 『源氏物語』における女性たちの生き方		
初出一覧		
		273
		269
		259
		249
		236
		226
		213
		201

序 『源氏物語』の研究について

『源氏物語』は〈源氏〉の物語といわれる。帝の皇子として生まれた光源氏が臣下に降り位人臣を極めていく。五十四帖という膨大な物語は、そこに流れる時間も永い。帝は四代かわり、生まれた赤子がだんだんと年を重ね青年から成年へそして老いを迎える。男女を問わず様々な人物が登場し、光源氏の人生に関わっていく。

この物語における〈源氏〉は光源氏だけを指すものではない。朱雀帝の皇女である落葉の宮、女三の宮。先帝の四の宮である藤壺中宮。常陸宮の娘・末摘花。桃園式部卿の娘・朝顔姫君。兵部卿宮の娘・紫の上。物語には〈源氏〉の女たちの人生も描かれている。

『源氏物語』については、毎年発表される論文も他の作品に比べかなりの数に達している。それは伝本や注釈史をはじめとした作品の基盤に関わるものから、准拠、思想、和歌、漢詩文、風俗等とのかかわりや文体、構成論、構想論、人物論といった作品そのものに至るまで様々な視点や方法で盛んに研究されている。

特に解釈に関しては一九六八年九月『国語と国文学』で深沢三千男氏が「光源氏の運命」でいわゆる王権論を提示した後、藤井貞和氏や高橋亨氏によって議論された。この王権論は光源氏の栄華に冷泉帝の実父としての「潜在王権」を見るもので、八〇年代において

も研究の主流をなしていたといえる。一方、河添房江氏は比喩的な関係でとり結ばれた事象の相互の関係性をさす概念としての〈喩〉を用いた『源氏物語』論を提示した。この〈喩〉を用いた王権論は小嶋菜温子氏らによって「潜在王権」が皇権と対立する概念として論じられるようになり、王権論についての議論は少なくなっていた。

九〇年代になると王権論からこぼれた女性の視点から物語を読むジェンダー論が盛んに論じられるようになる。王権論からの流れで、河添房江氏や小嶋菜温子氏をはじめとして多くの研究者がジェンダーに関する論を展開していった。このジェンダー論は〈女性性〉だけでなく〈男性性〉とも併せて論じられただけでなく、様々な問題に結びつけられて広範囲にテーマが設定されることになった。その一方で、『源氏物語』には男女の関係が描かれていることから〈性〉の問題は避けて通ることのできないテーマとして必ず取り上げられており、現在も研究が続いている。

ジェンダー論と結んで多くのテーマが展開されたなかに身体論がある。手のように作中人物の身体に着目した論は三田村雅子氏や松井健児氏らを中心に展開され、現在も若手の特に女性研究者によって論じられている。ジェンダー論や身体論は物語を詳細に読むことでその論が成立するため、現在もこうした試みは続いている。

さらに、最近では皇女に注目した研究が多く見られるようになった。史実と比較することで物語の独自性が示され、そこに皇女が描かれた意味を見いだすとともに、宿世論や構成論、主題論へと発展している。さらに彼女たちの背景にいる帝や院との関連から王権論とも絡めて論じられている。

このように、解釈に関しては物語を詳細に読むことに再び目が向けられるようになった。二〇〇〇年代に入って勉強出版から「人物で読む源氏物語」と題して一連のシリーズが出版されたことは、登場人物を詳細に分析することで『源氏物語』を読み解くという物語研究の原点に立ち返る方向が示されたといえる。

本研究は、いわゆる人物論である。そのなかで、特に女性に関わる権力に着目して論じている。

光源氏が臣下に降りて〈源氏〉となったのは、宮中における権力争いの一端であった。彼がライバルと競いその争いを勝ち抜くためには権力が必要である。その政権争いを支えているのが『源氏物語』の女性たちであり、そのために彼女たちは何らかの権力に関わっている。彼女たちの得る権力は、生まれた家が纏う血筋や財産に負うところが大きいことも事実である。同じ家に生を受けても、生母の身分や実家の財力でその権力が有する意味は異なり、そのために人生を左右される者もいる。

今回、人物と権力の関係を考えるうえで、〈公〉と〈私〉というキーワードを設定した。〈公〉とは何を差すのか。

国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷のかためとなりて、天の下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし

(桐壺 ① 三九〇四〇頁)

これは高麗人の相人による観相であるが、ここでの〈おおやけ〉は宮中のことである。帝を中心とし各大臣をはじめとした相応の官位を持つ者が集い、政を行う。少々漠然とした感はあるが、私はこの政を行う場所、そこに集う人々、その人たちの有する権力、そういったものをまとめて〈公〉と呼ぶことにした。人は権力を持つが、その権力は固定化されたものではない。個人に属するものもあれば、官位に属するもの、氏に属するもの、様々な権力が存在する。それを元々手にしている者もいれば、手に入れようと望む者もいる。得たものを大きくする者もいれば、失う者もいる。政は権力を産み、権力を必要とする。宮中で政を動かすものを〈公〉と考える。そして、一個人としての立場を〈私〉とした。

主人公である光源氏は〈公〉を生きる人物である。ただ単に〈公〉の世界を生きているのではなく、権力争いを勝ち抜いていく。そこに女性の影響を見落としてはならない。〈公〉を生きる男性を支え

ているのがこの物語の女性たちであり、彼女たちもまた〈公〉に関わりながら生き抜いているのである。

そこで、まずそれぞれの女たちが関わっている権力がどのようなものかを分析し、その権力が彼女たちの人生にどのような影響を与えたかについて検討していった。その一方で、彼女たちの関わる権力の何を男たちは望み、手に入れようとしたのか。そのことで女たちの人生に変化はあったのか。権力の大小はどのように影響したのか。それらを物語から読み取ることで、彼女たちが造型された意味を提示することを心がけた。

まず第一部では『源氏物語』第一部といわれる藤裏葉巻までを主に取り上げている。

第一章と第三章は光源氏、朱雀院、夕霧、柏木といった男たちが権力と〈私〉の関係からどのように影響し合うのかについて論じるとともに、そこに見え隠れする女たちにも触れるよう心がけた。

第二章は、大臣家の娘としてその権力で男を支える三人の女性を取り上げた。摂関家の姫としての彼女たちの言動をその権力に焦点を当てて読み解くことで新たな人物像を提示することを意識した

第二部は本論の主たる目的である〈源氏〉の女性とその権力について論じている。彼女たちの持つ権力が人生にどのような影響を与え、何をもたらしたのかを物語にそって読み取っている。

第一章では朱雀院の皇女二名を取りあげた。彼女たちの持つ権力と皇家の力が男たちにどのように作用したのかについて考えるだけでなく、二人の出自の違いがおよぼした影響についても詳しく検討した。

第二章では宮家の姫君を取りあげた。皇女に次ぐ高い身分である彼女たちの持つ権力は、皇女ほどの影響力がないにもかかわらず彼女たちの人生を縛っている。ここでは男たちに与えた影響よりも、むしろ権力によって左右された彼女たちの人生について考えた。

第三部は『紫式部日記』に描かれた式部の〈出仕〉経験が、第二部・第二章・第四節「姫君たちの生き方」で示した姫君たちの〈出仕〉を描くうえで必要だったことを提示した。

高橋亨氏が「光源氏と女君たちとの恋物語の基底には、政治権力や皇位継承をめぐる物語が強く作用している。」と述べているが、^{〔註〕}論じられるのは男性側の権力であり皇位継承権がほとんどであった。しかし、『源氏物語』は女性側にも権力を与え、それを行使することで男たちの権力闘争を支えている。皇位継承権もその母や妻の権力によって左右されていることは事実である。女性の持つ権力がどのように男性に作用し、物語を推し進めていくのかを明らかにすることが本論の目的である。

なお、本稿ではいわゆる主たる人物について論じてはいない。そ

れは、『源氏物語』に限らず物語を動かす原動力は傍役にあると考えるからである。『源氏物語』には男女を問わず多くの人物が登場するが、そのほとんどがいわゆる傍役である。しかし、彼や彼女たちのつながりの中には大なり小なり権力が存在し、影響し合うことで物語は進んでいく。その権力について丁寧に読み解くことは、最終的に物語全体を構成する主題に近づいていくはずだと私は考えている。

註

註1 高橋 亨 『源氏物語』の後宮と密通」八二頁（『王朝人の生活誌』所収 森話社 平25・3）

※『源氏物語』本文及び（ ）内の巻数・頁数は新編日本古典文学全集（小学館）に拠る。

第一部 〈源氏〉とそれを支えた女性たち

第一章 〈源氏〉の始発

第一節 兄弟の変貌 ―斎宮との関わりから

一 はじめに

『源氏物語』第一部は桐壺帝の時代に始まり、朱雀帝、冷泉帝と三代にわたる帝の時代、そこに生を受けた光源氏の成長、失脚と復権、その後の栄華が描かれている。改めて指摘するまでもなく、光源氏は桐壺帝の二の宮であり〈源氏〉の姓を賜って臣下に降った人物である。桐壺帝は一の宮に位を譲り、二の宮だけを〈源氏〉とし、他の宮たちは親王に留めた。桐壺帝には、後の冷泉帝を含めると十人の宮がいるはずであるが、物語に登場し光源氏と関係するのは、一の宮・朱雀帝と堂兵部卿の二名である。そして十の宮とされる冷泉帝は光源氏の子であるので除外すれば、あと一人、八の宮だけが物語に登場している。八の宮は後に冷泉帝を廃太子にするために右大臣家に担ぎ出されるだけの存在であり、直接光源氏と関わるわけではない。その彼が物語に再登場してくるのは第三部・宇治十帖で

あった。

二の宮を〈源氏〉とした要因の一つは一の宮の存在であり、二人の関係は物語を読み解くうえで無視できるものではない。例えば、第二部冒頭における女三の宮の降嫁に朱雀帝は父親として大きく関わっている。女三の宮の降嫁先について苦悩する朱雀帝と、彼女を受け入れる光源氏、二人の心の揺れは物語を読み解くためにも見過ごすことはできない。女三の宮の降嫁については数多くの論が展開されていることから、この二人の関係が重要な意味をもつことは明らかである。

しかし、第一部では朱雀帝について語られることは少ない。いわゆる昔物語として認識される第一部の中心にあるのは、光源氏の人生である。その中で朱雀帝が登場するのは限られた場面であった。彼は、光源氏の〈私〉的な場に登場することはなく、宮中という〈公〉の場においてのみ登場する。つまり、光源氏の若き日の恋愛が描かれる前半部分には、朱雀帝がいる〈公〉の場が関係することはない。その一方で、明石から帰京し、光源氏が政治権力を行使して〈公〉の場に関わるようになると、朱雀帝の登場する場が多くなるのだ。そこで、まず第一部において、宮中での二人の關係に着目し、その変化を追うことにする。なかでも、六条御息所の姫宮である斎宮の入内を通して、政治的な立場での二人の關係の変化とそれぞれの

心の動きを見ていきたい。

二 幼少期の二人

元服前の光源氏を描いた桐壺巻において、朱雀帝は常に彼の比較対象として登場する。

一の皇子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなきまうけの君と、世にもてかしづきこゆれど、この御にほひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、私物に思ほしかしづきたまふこと限りなし。

（桐壺 ① 一八～一九頁）

朱雀帝は、右大臣の娘である女御を母に持ち次期春宮と目されている。当然母が更衣である光源氏よりは宮中における政治の場において優位に立っている。一方の光源氏は、朱雀帝よりも優れた容貌と才能を持っていることで父帝の寵愛を受けており、周囲もこうした状況を踏まえて動くために光源氏の存在感は大きくなっている。二人の立場は父帝によって「疑ひなきまうけの君」と「私物」に分けられるが、この位置付けが後の二人の関係を形作っていくといえる。

二人の成長過程における儀式は、皇子という身分から宮中行事として執り行われる。したがって、宮中の秩序にのっとり、朱雀帝の

場合は次期春宮として（公）の場では格別のものでなければならぬ。その一方で、「私物」である光源氏の儀式も朱雀帝のそれに劣らぬ様で執り行われる。

この皇子三つになりたまふ年、御袴着のこと、一の宮の奉りしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くしていみじうせさせたまふ。それにつけても世の譏りのみ多かれど、この皇子のおよすけておはする御容貌心ばへありがたくめづらしきまで見えたまふを、えそねみあへたまはず。

（桐壺 ① 二二頁）

この君の御童姿、いと変へまうく思せど、十二にて御元服したまふ。居起ち思しいとなみて、限りあることに事を添へさせたまふ。一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式のよそほかりし御ひびきにおとさせたまはず。所どころの饗など、内蔵寮、穀倉院など、公事に仕うまつれる、おろそかなることとぞと、とりわき仰せ言ありてきよらを尽くして仕うまつれり。

（桐壺 ① 四四～四五頁）

こうした儀式において朱雀帝と光源氏を同等に扱うことは、父帝の光源氏への愛情の深さを示すものである。宮中という（公）の場において、そこでは上位にいるはずの朱雀帝よりも高い評価を得ることで、主人公としての光源氏の存在が印象付けられている。

朱雀帝は「疑ひなきまうけの君」として春宮・帝へと進むため、

その生活も宮中で公人として過ごすことになる。「私物」光源氏は、臣籍に降ることもあり、宮中から距離を置いた自由な生活を楽しむことができた。二人の立ち位置を定めた桐壺帝が政治権力の中心に在る間は、彼らの立場は保証されている。二人は、後継者と「私物」の二つの立場に分けられたことで、表立って争う要因が少なく、互いに深く関わることもなくそれぞれの生活を送る。したがって、光源氏の〈私〉的生活が中心である第一部前半に朱雀帝が登場することはないのだ。

二人の関係の変化にともなって朱雀帝の登場が増えるのは、賢木巻以降である。朱雀帝は即位し、光源氏も春宮の後見という地位につくことで政治の場への関わりが大きくなっている。しかし、依然として政治の中心に在るのは桐壺院であった。そのために政治の場で相対することになった二人の関係には、大きな変化は生じていない。しかし桐壺院の崩御を境に二人は否応なく宮中で互いの立場について強く認識し、行動せざるを得なくなる。

二人に対する桐壺院の遺言は、自らが定めた二人の立場を再確認させるものであった。

院の御なやみ、神無月になりては、いと重くおはします。世の中に惜しみきこえぬ人なし。内裏にも思し嘆きて行幸あり。弱き御心地にも、春宮の御事を、かへすがへす聞こえさせたまひ

て、次には大将の御事、「はべりつる世に変わらず、大小のことを隔てず何ごとも御後見と思せ。齢のほどよりは、世をまつりごたむにも、をさをさ憚りあるまじうなむ見たまふる。かならず世の中たもつべき相ある人なり。さるによりて、わづらはしさに、親王にもなさず、ただ人にて、朝廷の御後見をせさせむと思ひたまへしなり。その心違へさせたまふな」と、あはれる御遺言ども多かりけれど

（賢木 ② 九五〜九六頁）

大将にも、朝廷に仕うまつりたまふべき御心づかひ、この宮の御後見したまふべきことをかへすがへすのたまはず。

（賢木 ② 九七頁）

桐壺院は、帝という政治の最高位についた朱雀帝に、「私物」光源氏の処遇を託している。一方の光源氏に対しては、朝廷を支える者への心構えを伝えるものであった。桐壺院の生前は、政治権力が桐壺院に掌握されており、朱雀帝と光源氏の立場が明確に分けられていたこともあって、一人が宮中で相対することはほとんどなかった。しかし、二人の庇護者であった桐壺院の死は、否応なく二人を政治の場で対峙させることになった。

三 〈公〉の場での二人

白方勝氏は、源氏物語第一部における明の側面を支えるのが光源氏と頭中将の関係であり、暗の側面を支えるのが朱雀帝との関係であると述べている。^(註2)氏は、政治的な立場を考えた場合、「頭中将が源氏と同じ政治勢力の側の人物」であり、朱雀帝は「彼の意志に反して母後の私怨から政治的対立までを含んだ関係」であると指摘している。桐壺院は左大臣の姫を光源氏の添臥とすることで、左大臣を光源氏の後見にした。朱雀院は右大臣の娘を母としていたため、二人は左右大臣の対立を負う立場になったことが見て取れる。そして桐壺院の崩御後、この対立が二人の關係に大きな影響を及ぼしていくのである。

御位を去らせたまふといふばかりにこそあれ、世の政をしづめさせたまへることも、わが御世の同じことにておはしまいつるを、帝はいと若うおはします。祖父大臣、いと急にさがなくおはして、その御ままになりなん世を、いかならむと、上達部、殿上人みな思ひ嘆く。
(賢木 ② 九七く九八頁)

帝は、院の御遺言たがへずあはれに思したれど、若うおはしますうちに、御心なよびたる方に過ぎて、強きところおはしまさぬなるべし、母后、祖父大臣とりどりにしたまふことはえ背かせたまはず、世の政御心になはぬやうなり。

(賢木 ② 一〇四頁)

ここで一つ注意しておきたいのは、桐壺院は帝の地位を朱雀帝に譲つて後も自らが権力を握っていたということである。御代は移つても宮中は桐壺院が帝であつた時と変わらなかった。それ故に桐壺院の死は大きな変化をもたらすのである。

次に宮中を支配したのは朱雀帝の祖父・右大臣であつた。朱雀帝がもつとも高い地位にありその権力を行使できる立場にあるが、実際に政治を司るのは祖父・右大臣だつた。人々は右大臣の短氣な性格と、その右大臣や母后を押さえることのできない朱雀帝の弱さに不安を感じている。この様な状況でも、帝が桐壺院の遺言を守る意思を失っていないことも忘れてはいけな^(註3)い。こうした状況を踏まえ、鈴木日出男氏は次のように述べている。

朱雀帝は、右大臣一統に操作されざるをえない外貌を見せつつも、それを潔しとしない内面をかかえこんでいる。いったい物語への朱雀帝の登場はこの桐壺院崩御前後がほぼ最初にあたるといつてよいのだが、以後その人間像が外側と内側に區別されながら造型されている点に注目すべきであろう。

鈴木氏が指摘するように、朱雀帝が一人の人間として描かれるのは桐壺院が病に伏せた後であると考えられる。それ以前の朱雀帝は、先に述べたように光源氏の比較対象でしかなく、彼自身の内面が表されることはなかった。これは、宮中において朱雀帝と光源氏が互

いに関わることが少なかったためである。しかし、桐壺院の死によつて二人は政治的に対立する部分と影響し合う部分をあわせ持つようになる。桐壺院亡き後、宮中における光源氏の立場を保証する者は朱雀帝であるはずであつた。このことは、桐壺院の遺言の中に示されている。したがって、朱雀帝がその力を發揮できない現状が、光源氏の宮中における立場を危ういものに行っているのだ。

朧月夜との一件が引き金となつて母后をはじめとする右大臣一派が光源氏の失脚を謀り、それを察した光源氏は自ら須磨に蟄居することで宮中から距離をおくことにする。その光源氏を政治の中心に引き戻したのは、朱雀帝の意志であつた。

年かはりぬ。内裏に御薬のことありて、世の中さまさまにのしる。当帝の御子は、右大臣のむすめ、承香殿女御の御腹に男御子生まれたまへる、二つになりたまへば、いといはけなし。春宮にこそは譲りきこえたまはめ、朝廷の御後見をし、世をまつりごつべき人を思しめぐらすに、この源氏のかく沈みたまふこといとあたらしうあるまじきことなれば、つひに後の御諫めをも背きて、赦されたまふべき定め出で来ぬ。

(明石 ② 二六一―二六二頁)

宮中における朱雀帝と光源氏の関係は、ここにおいて再構築される。祖父右大臣は亡くなり母后も病がちという状況は、右大臣一派とい

うしがらみから朱雀帝を解き放つこととなり、ようやく彼は政治の場において自ら望む行動をとることが出来たのだ。しかし、それは自身が譲位し、宮中における政治勢力を一新することでもあつた。一方の光源氏は、帰京後新帝・冷泉帝の後見として政治の中心となつて力を發揮していく。

四 齋宮をめぐる二人

今まで見てきたように、第一部前半において朱雀帝は「疑ひなきまうけの君」として常に宮中に存在し、光源氏は臣下として宮中の外で生活している。そのなかで、彼らに関わりを持ったのが六条御息所の姫宮・齋宮(註4)であつた。第一部において、彼女の登場から入内・絵合に至るまでに二人の立場は変化していくが、それぞれが彼女との関わりのなかで互いに駆け引きを行っている。それは、二人の新しい一面を示すものであるといえるだろう。

齋宮は十四にぞなりたまひける。いとうつくしうおはするさまを、うるはしうしたてたてまつりたまへるぞ、いとゆゆしきまで見えたまふを、帝御心動きて、別れの櫛奉りたまふほど、いとあはれにてしほたれさせたまひぬ。(賢木 ② 九三頁)

彼女は齋宮という責を負つて宮中に姿を現し、朱雀帝は帝という

立場で彼女に別れの櫛を挿す。この出立の儀における齋宮の美しさは後に朱雀帝によつて繰り返し語られており、強く印象付けられたことが解る。彼女は朱雀帝の心を奪うほど美しかった。そして、その彼女の美しさを見ることが出来たのは宮中で儀式に臨む朱雀帝のみであつた。

一方、光源氏はその齋宮の姿を見ることが出来なかつた。齋宮決定の頃、六条御息所と光源氏の関係は終わりにかけていた。六条御息所は、齋宮の幼さを表向きの理由に、そして光源氏との関係を見苦しくない形で終わらせるために伊勢下向を決心したのである。こうした個人的な経緯から、光源氏は齋宮の出立の儀に出席していない。朱雀帝が涙をこぼすほど感動した齋宮の美しさを光源氏は見ることができなかつたのである。しかも、光源氏は御息所の住まう六条において、齋宮の姿をかいま見ることすら出来なかつたのである。

この時点で齋宮に対しては、彼女の美しさを視ることができ、出立の儀を思い出として共有出来たという点で、朱雀帝が光源氏より優位に立っていたといえよう。

齋宮出立が互いの会話に表れるのは、先に述べた桐壺院崩御にともない彼女が都に帰ることになった頃である。

よろづの御物語、書の道のおぼつかなく思さることどもなど問はせたまひて、またすきずきしき歌語なども、かたみに聞こ

えかはさせたまふついでに、かの齋宮の下りたまひし日のこと、容貌のをかしくおはせしなど語らせたまふに、我もうちとけて、野宮のあはれなりし曙もみな聞こえ出でたまひてけり。

(賢木 ② 一二四頁)

朱雀帝が余暇を過ごしている所に光源氏が参内し語り合う中で、朱雀帝の方から出立の儀の際の齋宮の美しさを語り、それを受けた光源氏は六条御息所を野宮に訪ねた際のことを語っている。それは宮中という〈公〉の間ではあるが、余暇という政治から離れた時間の中で、兄弟という心安さの中に生まれた会話であつた。朱雀帝は帝として見聞きしたことを語り、光源氏は私的経験を語っている。この点について鈴木日出男氏は、朱雀帝の齋宮への思いは「別離を宣言せねばならぬ相手に対する恋慕であるだけに、帝にはあるまじき自縄自縛の執着」であるとして

帝としての立場からは、帝位の存続とも関わっている齋宮への恋慕など、決して口外すべき内容ではない。他方、源氏の御息所との離別とても、諦念と執着の複雑に交錯する、あまりに個人的な体験であり、その限りで口外無用の出来事であつた。

と述べるとともに、こうした二人を「心開いた者同士」であるとして^(註5)いる。ここでの二人は、お互いの政治的立場や後見人の思惑から離れたところで存在している。朱雀帝の執着心は鈴木氏が指摘する

ようにあるまじきことかもしれないが、彼の人間味を感じさせるものとしてとらえたい。さらにいえば朱雀帝の御代の繁栄を祈る者として選ばれた齋宮に心を寄せる彼の姿には、恋多き人と噂された若き日の光源氏の姿をも見ることができる。一方の光源氏も、こうした朱雀帝の艶めいた話に和んだのか、自らの野宮での出来事を語ってしまう。

さらに、ここで朱雀帝の齋宮への思いを直接聞いたことは、光源氏自身の齋宮との関わり方に影響を与えている。齋宮の容姿を直接視ていない光源氏は、朱雀帝の言葉によって彼女への興味を掻き立てられることになる。単に六条御息所の娘を見たいという気持ちに加えて、朱雀帝が涙したその美しさを自分の目で確かめたいという好奇心が加わっているといえよう。また、朱雀帝の齋宮への気持ち が直接語られたことは、後に光源氏が齋宮を冷泉帝の女御として入内させる際に彼の心理的な足枷となってくる。つまり、この二人の会話は重要な意味を持つものと考えられる。

五 御世代わりと齋宮

このように、齋宮に対する二人の言動は、それまでの彼らとは違う別の面が表出されていると考えられる。その原因としては、宮中

での二人の立場の変化があげられるだろう。そして、朱雀帝の譲位 は再び二人の立場に変化をもたらすとともに、齋宮を伊勢から帰京 させることにもなった。再び齋宮が二人の手の届くところに戻って 来たことは、彼らの関係を考える上でも大変興味深い出来事である といえる。

朱雀帝は譲位する事で、直接政治を行う立場ではなくなる。一方、 光源氏は後見する冷泉帝の即位にともない内大臣となり、政治の中 枢に座ることになる。つまり宮中における立場やそれに伴う責任の 重さは、光源氏と朱雀帝の間で逆転したのだ。

院はのどやかに思ひなりて、時々につけて、をかしき御遊びな
ど好ましげにておはします。 (濡標 ② 三〇〇頁)

朱雀帝は、桐壺院の遺言や自分と右大臣の政治的方針の違いから 生じる苦悩から解放され、のびやかで風流な生活を送っている。政 治から距離を置いたところで自らの生活を楽しむさまは、桐壺院生 前の光源氏に通じるものがある。一方、朱雀帝の齋宮に対する執着 は、それまでの彼の言動からは考えられないほどに強いものであっ た。

院にも、かの下りたまひし大極殿のいつかしかりし儀式に、ゆ ゆしきまで見えたまひし御容貌を、忘れがたう思ひおきければ、 「参りたまひて、齋院など御はらからの宮々おはしますたぐひ

にて、さぶらひたまへ」と、御息所にも聞こえたまひき。されど、やむごとなき人々さぶらひたまふに、数々なる御後見もなくてやと思しつつみ、上はいとあつしうおはしますも恐ろしう、またもの思ひや加へたまはん、と憚り過ぐしたまひしを、今はまして誰かは仕うまつらむと人々思ひたゆるを、ねむごろに院には思しのたまはせけり。

（濔標 ② 三一九頁）

齋宮に対する朱雀帝の想いは、あの伊勢出立の儀の彼女の美しさに魅せられたことに発しており、それは先にあげた二人の会話からも明らかである。朱雀帝の彼女への執着は齋宮の帰京によつて彼女を得るための行動へと彼を駆り立てる。それは、度重なる申し出に繋がつていったのだ。

実際に、朱雀帝は六条御息所の生前から齋宮の出仕を所望しており、その気持ちは六条御息所が亡くなつた後も変わることがない。彼は、自分の妻にはいわず姉妹と同様に過ごすように申し入れている。これは、出仕という申し出に対して齋宮方が抱く不安を少しでも解消したいという朱雀帝の気持ちの表れではなからうか。政治の場から距離を置いた今、彼は周囲を気にすることなく自らの齋宮への想いを示す。おそらく、朱雀帝が帝という立場にあれば、この様に齋宮への執着心を表立つて表すことはできなかったであろう。

一方の光源氏と齋宮の関係について検討する前に、朱雀帝退位後

の宮中はどのような状況だったのか確認しておく。

「世の中の事、ただなかばを分けて、太政大臣、この大臣の御まなり。」（濔標 ②三〇一頁）とあることから、冷泉帝の御代に変わつて後世の中は光源氏とその舅である太政大臣とで治められていることが解る。光源氏は、政権の場の中心に自分の位置を確立したといえよう。しかし、その直後に「権中納言の御むすめ、その年の八月に参らせたまふ。祖父殿みたちて、儀式などいとあらまし。」（濔標 ②三〇一頁）と権中納言の娘が太政大臣の養女として入内したことが描かれていることは興味深い。娘を入内させることは、将来宮中において外戚として政治の実権を握る可能性を得ることである。そうなれば、現在二分されている政治権力が、太政大臣・権中納言方に集約されることにもなりかねない。この件に関して、年頃の娘を持たぬ光源氏は対抗するすべがない。しかも、権大納言の娘の入内は、以前は自分の後見であり同じ政治勢力に属していた彼らが、光源氏と対立する立場に立つことを示唆しているともとれるだろう。宮中において確立したと思われる光源氏の立場は、実はいつまた崩れるかわからないという危険をはらんでいたのである。

こうした状況のもとで、光源氏は六条御息所から齋宮の後見を依頼される。

心細くてとまりたまはむを、かならず事にふれて数まへきこえたまへ。また見ゆづる人もなく、たぐひなき御ありさまになむ。

(澤標 ② 三一〇～三一一頁)

「いと難きこと。まことにうち頼むべき親などにて見ゆづる人だに、女親に離れぬるは、いとあはれなることにこそはべるめれ。まして、思ほし人めかさむにつけても、あぢきなき方やうちまじり、人に心もおかれたまはむ。うたてある思ひやりごとなれど、かけてさやうの世づいたる筋に思しよるな。うき身をつみはべるにも、女は思ひの外にても思ひを添ふるものになむはべりければ、いかでさる方をもて離れて見たてまつらむと思うたまふる」

(澤標 ② 三一一～三一二頁)

齋宮の後見を引き受けた光源氏に対して、六条御息所は齋宮を自身の恋人として扱わないよう釘をさす。六条御息所は、光源氏と関係を持ったがそれは決して幸せであつたといえるものではなかった。彼女はそうした体験から、齋宮を男女の恋愛で苦しませないようにして欲しいと光源氏に依頼するのである。この六条御息所の遺言が、光源氏の齋宮に対する好き心を抑制するのにかなり影響を与える事になった。

帳の東面に添ひ臥したまへるぞ宮ならむかし、御几帳のしどけなく引きやられたるより、御目とどめて見通したまへれば、頬

杖つきて、いともの悲しと思いたるさまなり。はつかねれど、いとうつくしげならむと見ゆ。御髪のかかりたるほど、頭つきけはひあてに気高きものから、ひちちかに愛敬づきたまへるけはひしるく見えたまへば、心もとなくゆかしきにも、さばかりのたまふものを、と思し返す。

(澤標 ② 三一二頁)

かいま見る齋宮の姿に心を動かされつつも、御息所の言葉を思い出してとどまる光源氏の姿が描かれている。こうした光源氏の姿が、この後何度も繰り返されるのは、彼の齋宮に対する関心が朱雀帝に刺激されかなり強いものになっていたのだと推測できる。以前の彼なら、手段を選ばず齋宮の容貌を確かめたであろうし、欲しいと思えば御息所の遺言を破棄しても彼女を自分のものにしたであろう。しかし、光源氏は何度となく齋宮に対する好き心が動くにもかかわらず、夫としてではなく父親代わりとして後見人の立場を貫くのである。そこには、先にあげた権中納言の娘の入内が関係していると考えられる。

「かかる御遺言の列に思しけるもいとどあはれになむ。故院の御子たちあまたものしたまへど、親しく陸び思ほすもをさをさなきを、上の同じ御子たちの中に数まへきこえたまひしかば、さこそは頼みきこえはべらめ。すこしおとなしきほどになりぬる齡ながら、あつかふ人もなければさうざうしきを」

先にも述べたように、光源氏には太政大臣方のように入内させる娘がいないため宮中における将来的な見通しが立っていない。彼らに對抗するには、養女を迎え入内させさらに中宮に推す必要がある。

冷泉帝よりも九歳上という年齢差はあっても、齋宮を自分の養女として入内させることは、光源氏にとって自分の政治基盤を守るためにどうしても必要なことだったのである。

こうしてみると、光源氏は齋宮を自身の政治基盤を固めるための道具として扱っているような感じを受ける。宮中で強い力を持ち始めた光源氏は、その力をより強めながら維持し続けるために、齋宮を利用したのである。若い光源氏の行動力となった好奇心より、現在手にいれつつある政治権力への執着が勝った結果が、齋宮の入内であった。朱雀帝の齋宮に対する恋の執着が描かれることで、光源氏の変貌が強く印象づけられることになったといえよう。

齋宮の入内に際して、光源氏は親代わりとして一通りの用意を引き受けるだけでなく、入内後も心を配っている。弘徽殿女御との絵合でも、光源氏の須磨日記によって齋宮方が勝利を治める。やがて中宮となった齋宮は、光源氏の宮中における地位を確たるものにしただけでなく、彼の子ども達の後見の役割をも果たすようになる。齋宮は、光源氏の地位と権力を維持し発展させる上で、なくてはな

らない存在になったのである。

六 政治家光源氏と朱雀帝

濡標巻において、光源氏は宮中において政治手腕を発揮し、政治力を印象づけている。その一方で、齋宮の入内に関しては、彼の朱雀帝に対する心の迷いも描かれる。それは、政治家としての道を進む光源氏にも人間味のあるところが残されていることを示すものであり、齋宮入内を画策する彼に見られた冷酷さを緩和することにもなっている。朱雀帝の未練は、光源氏の二面性を照らし出しているといえるだろう。

院はいと口惜しく思しめせど、人わろければ御消息など絶えにたるを、その日になりて、えならぬ御よそひども、御櫛の箱、うちみだりの箱、香壺の箱ども世の常ならず、くさぐさの御薫物ども薫衣香またなきさまに、百歩の外を多く過ぎ匂ふまで、心ことにととのへさせたまへり。大臣見たまひもせんにと、かねてよりや思し設けけむ、いとわざとがましかめり。

殿も渡りたまへるほどにて、かくなむと女別当御覽ぜさす。ただ御櫛の箱の片つ方を見たまふに、尽きせずこまかになまめてきめづらしきさまなり。さし櫛の箱の心葉に、

わかれ路に添へし小櫛をかごとにてはるけき仲と神やいさ
めし
(総合 ② 三六九～三七〇頁)

齋宮入内の当日に豪華な贈り物を贈るところに、朱雀帝の光源氏
に対する意地を見ることが出来る。他に類を見ない道具の素晴らし
さは、光源氏を意識したものであり、自分の気持ちを無視した彼に
対する抗議の意味が込められたものである。しかも、齋宮が伊勢に
出立する際に挿した別れの櫛に寄せて想いを伝えることで、未だ齋
宮を忘れ得ないことを表している。かの大極殿での出立の儀は、朱
雀帝と齋宮の共通の思い出としてそれぞれの心の中に存在するもの
であり、光源氏の知り得ないものである。こうした二人だけの思い
出を持ち出すことで、朱雀帝は自分と齋宮との結ばれなかった縁を
反芻しているのだ。入内した齋宮に送る絵も、あの出立の儀を朱雀
帝自ら指示して描かせたものであった。

年の内の節会どものおもしろく興あるを、昔の上手どものとり
どりに描けるに、延喜の御手づからの事の心書かせたまへるに、
またわが御世のこと描かせたまへる巻に、かの齋宮の下りた
まひし日の大極殿の儀式、御心にしてみて思ければ、描くべき
やうくはしく仰せられて、公茂が仕うまつれるがよいといみじき
を奉らせたまへり。艶に透きたる沈の箱に、同じ心葉のさまな
どいといまめかし。御消息はただ言葉にて、院の殿上にさぶら

ふ左近中将を御使にてあり。かの大極殿の御輿寄せたる所の神
々しきに、

身こそかくしめのほかなれそのかみの心のうちを忘れしも
せず

とのみあり。
(総合 ② 三八三～三八四頁)

ここでも、朱雀院の贈り物は趣のある見事なものである。そして、
思い出の場所に自らの思いを示している。

しかし、最初の出会いであつた大極殿の儀式に寄せて繰り返され
る朱雀帝の齋宮に対する執着心は、ここにおいて哀れすら感じさせ
る。光源氏が齋宮を現在から将来に向けて宮中を生き抜くために必
要な人物として見ているのに対し、朱雀帝は齋宮との過去しか見て
いない。ここには白方氏のいう「負け馬の論理」が当てはまる
だ^(註6)らう。今という現実から逃避して過去に生きる朱雀帝は、現在か
ら未来までを見つめて行動する光源氏になうはずがないのだ。

院には、かの櫛の箱の御返り御覽ぜしにつけても、御心離れが
たかりけり。そのころ大臣の参りたまへるに、御物語こまやか
なり。事のついでに、齋宮の下りたまひしこと、さきざきもの
たまひ出づれば、聞こえ出でたまひて、さ思ふ心なむありしな
どはえあらはしたまはず。大臣も、かかる御気色聞き顔にはあ
らで、ただいかが思したるとゆかしきに、とかうかの御事をの

たまひ出づるに、あはれなる御気色あさはかならず見ゆれば、
いといとほしく思す。 (絵合 ② 三七四～三七五頁)

齋宮に対する執着を棄てきれず、かといってそれをいい出すこともできない。朱雀帝が捕らわれているのは、あの大極殿の思い出だった。そんな朱雀帝に同情する一方で、彼の気持ちを探る光源氏がいる。そこには、宮中での駆け引きに勝った者と負けた者の構図が読みとれる。朱雀帝の心境を探るために齋宮のうわさ話をする光源氏には、勝者の驕りすら感じられる。齋宮の入内は、政治権力の場合に逆転した二人の立場を鮮やかに描き出したのだ。

その一方で、ここに見られる光源氏の心の乱れには、朱雀帝の気持ち思いやる優しさを見ることが出来る。

大臣これを御覧じつけて、思しめぐらすに、いとかたじけなくいとほしくて、わが御心のならひあやくなる身をつみて、かの下りたまひしほど、御心に思ほしけんこと、かう年経て帰りたまひて、その御心ざしをも遂げたまふべきほどに、かかる違ひ目のあるをいかに思すらむ、御位を去り、もの静かにて世を恨めしと思すらむなど、我になりて心動くべきふしかな、と思しつづけたまふに、いとほしく、何にかくあながちなることと思ひはじめて、心苦しく思ほしなやますらむ、つらしとも思ひきこえしかど、またなつかしうあはれなる御心ばへを、など

思ひ乱れたまひて、とばかりうちながめたまへり。

(絵合 ② 三七〇～三七二頁)

かつて政治的には対立した関係にありながら、兄弟としては認め合い心の通じていた相手である。帝という身分、自分の兄であるという血のつながり、ここには光源氏の朱雀帝に対する尊敬の気持ちを読みとることが出来るのではない。敗者ともいえる朱雀帝だが、光源氏にとってはやはり無視できない人物であった。白方氏は若菜巻を取り上げて「源氏の行為の意味を絶えず問い続けてきたのが負け馬の朱雀院であった。」と述べている。^(註7) 白方氏は、第一部における朱雀帝を主に朧月夜との関係から論じているが、そうした関係はこの齋宮の入内においても明らかであろう。光源氏にとって彼の立場を自らの立場に置き換えてその心境を想像することは、己の言動を省みることであった。しかし、朱雀帝を思う光源氏に通じる者に対する純粋な優しさがあつたことも忘れてはならない。勝者としての光源氏が、策略家としての冷酷さを強めながらも、主人公の要素である人情味あるやさしさを失わないために朱雀帝は必要だったのだ。

七 おわりに

第一部において、光源氏と朱雀帝の関係は、それぞれの宮中における立場の影響を受けている。宮中では互いの後見が対立する中にありながら、兄弟としては互いに理解し合っていたと考えられる。

そのなかで、桐壺院の死が与えた影響は大きい。それまで光源氏の比較対象でしかなかった朱雀帝の内面が描かれ、光源氏は政治家としての側面が強調される。

伊藤博氏は次のように述べている。^(註8)

父帝の影響下から完全に離れた源氏が、宮廷政治世界の中核に身を置き、そこで自らの手で権力の座を固め、築いていくのが
潯標以後の巻々であったが、俗にまみれる策謀の人としての面貌を、わたしはそこに読みとった。だがこの策をめぐらすかれが、ときにいかにも苦しげな面持ちを示していることも、見落とせぬ事実だ。

伊藤氏の指摘する光源氏像は、齋宮の入内を勧める彼の姿に見ることができ。そこでの光源氏は、策略家である。朱雀帝の齋宮に対する気持ちを、彼女の入内を藤壺の意向という形をとることで、自らの存在を目立たないようにしている。ただ、これは朱雀帝だけでなく太政大臣方に向けてのものでもある。そこには着実に将来への布石を打つ政治家光源氏の姿が見られる。齋宮は、光源氏にとって若い頃の好き心を刺激するとともに、将来の自分の地

位を維持するために欠かせぬ人物となった。宮中で生き残るためには、齋宮を自分の養女として入内させ、中宮にすることが必要不可欠であったのだ。

その一方で、朱雀帝の気持ちを完全に無視できない光源氏がいることも事実である。朱雀帝の気持ちを推し量る彼には、人間味が感じられる。自らの行動を反芻し、苦悩する姿に人々は共感を覚えるだろう。そこに描かれた光源氏は、政治的に対立しつつも個人としては彼の帝という立場や兄弟という血のつながりを忘れてはいない。朱雀帝は、こうした光源氏を描き出すために造型されたといえよう。齋宮の入内が導き出した二人の関係は、光源氏の政治家としての策謀と朱雀帝に対する思いとの葛藤を描き出した。それは、女三の宮の降嫁を受け入れることになった光源氏にも当てはまるのである。

註

註1 白方勝「朱雀院の生涯―負け馬の論理とその変身―」(『源

氏物語の探究』第一輯 風間書房 昭和49・6) 二二九頁

註2 鈴木日出男「朱雀帝と光源氏―『源氏物語』ノート―」(『成

「城國文學論集」第十三輯 昭和56・3）一一三頁

註3 齋宮の呼称についても、朱雀帝と同様に処理した。

註4 註2に同じ 一一五～一一六頁

註5 註1に同じ

白方氏は光源氏と朧月夜に対する朱雀院について「朱雀院が必要以上に源氏の立場に迎合して源氏を赦そうとする論理は、完全な負け馬の論理であり、そう考える朱雀院は底ぬけのお人好しであると言える。」と述べている。二三八頁

註6 註1に同じ 二五四頁

註7 伊藤博「「霽標」以後く光源氏の変貌く」（『源氏物語の基底と創造』 武蔵野書院 平成6・10）二二二頁

第二節 朱雀帝の政治

一 はじめに

第二部冒頭において女三の宮の行く末について悩む朱雀帝は、その後展開される物語の鍵を握るといっても過言ではない。女三の宮の降嫁を受け入れたことで光源氏を取り巻く環境は著しく変化し、六条院世界の崩壊を招いた。准太上天皇の地位に就いた光源氏だったが、朱雀帝とその子・今上帝の存在は、女三の宮を通して彼に皇家の力がいかに強大かを改めて認識させたといえるだろう。そこには彼の兄を敬う心や彼自身の老いといったものもあつただろうが、少なくとも女三の宮の件については帝の権力というものを意識せずにはいられなかった。

しかし、朱雀帝自身が帝の地位にいた時代、彼の印象ははなはだ薄い。彼が帝位にあつたのは巻にして葵・賢木・花散里・須磨・明石・潯標の六帖であるが、花散里巻は光源氏と花散里の関係を描いたもので朱雀帝に関する記述はなく省くべきだろう。また、葵巻においても冒頭で「世の中変りて後」と桐壺院から朱雀帝への讓位が示されるだけで、その際に行われたであろう儀式一切の記述がないことからこれも除く。つまり、朱雀帝の御代が語られるのは、賢木

・須磨・明石・潯標の四帖だけなのである。

朱雀帝の御代は、その巻名から判るように光源氏の失脚と復権の時代である。さらに、葵巻では光源氏の正妻・葵、賢木巻では桐壺院、明石巻では弘徽殿女御の父・右大臣と次々と人の死が語られる。また、光源氏が須磨へ退去した後の京は天変地異に見舞われる。こうした出来事を見れば、朱雀帝の御代に対する印象は暗く重いものにならざるを得ない。果たして朱雀帝は帝位に着くに足る人物だったのだろうかという疑問すら感じられる。いったい朱雀帝にとって帝位とは何だったのだろうか。讓位後の彼の政治力を支える基盤となつた帝の位や皇家の力が当時の彼にどの様に受け止められていたのか、検討してみたい。

二 桐壺院の影響

第一部・第一章・第一節・三「(公)」の場での二人」で指摘したように、讓位したとはいえ政治的な実権は桐壺院が握っていたことは明らかである。朱雀帝の即位の儀式一切が描かれなかったことも、実質的権力の移行が行われなかったためではないかと推測できる。桐壺院から朱雀帝へ讓位されることは、朱雀帝が立坊した時点では明らかであった。実際に朱雀帝が即位したのは二十五歳、桐壺院の

崩御の際は二十六歳であり、決して「帝はいと若うおはす」といわれる年齢ではない。にもかかわらず、こうした批評が読み手に違和感無く受け入れられるのは、それまで彼に関する記述が少ないことと、桐壺院だけでなく母・弘徽殿女御の言動に対する印象が強いことがあげられる。桐壺更衣を始めとしたライバル達、また意に反する夫・桐壺院の言動に対して、弘徽殿女御は激しい反撃を行っている。そうした攻撃的なイメージが強いが故に、その子・朱雀帝に対する印象が稀薄になっていることは否めない。

また、桐壺院としても朱雀帝の立場はその当時の政治状況から鑑みて妥当な選択であつたが、^(註1)彼には光源氏立場への未練があつた。

源氏の君を限りなきものに思しめしながら、世の人のゆるしきこゆまじかりしによりて、坊にもえ据ゑたてまつらずなりにしを、あかず口惜しう、ただ人にてかたじけなき御ありさま容貌にねびもておはするを御覧ずるままに、心苦しく思しめすを、かうやむごとなき御腹に、同じ光にてさし出でたまへれば、瑕なき玉と思ほしきづくに

(紅葉賀 ① 三二八頁)

朱雀帝は第一子で男皇子であり、祖父は右大臣であることから、後ろ盾としても問題はない。光源氏は、母の実家を支えるべき人物の不在故に後ろ盾がなく、立場は難しかった。さらに、当時の桐壺院が自分の意志を押し通すだけの権力を持っていなかった事も推測で

きる。

かつて光源氏を春宮に出来なかつた悔しさは、光源氏の成長と共に桐壺院の中で燦り続けた。そこに皇女腹という血筋でしかも光源氏に似た皇子を得たことで、この皇子の立場を考えるに至ったことは当然の結果であつた。

七月にぞ后ゐたまふめりし。源氏の君、宰相になりたまひぬ。帝おりゐさせたまはむの御心づかひ近うなりて、この若宮を坊にと思ひきこえさせたまふに、御後見したまふべき人おはせず、御母方、みな親王たちにて、源氏の公事知りたまふ筋ならねば、母宮をだに動きなきさまにしおきたてまつりて、強りにと思すになむありける。弘徽殿、いとど御心動きたまふ、ことわりなり。されど、「春宮の御世、いと近うなりぬれば、疑ひなき御位なり。思ほしのどめよ」とぞ聞こえさせたまひける。げに、春宮の御母にて二十余年になりたまへる女御をおきたてまつりては、引き越したてまつりたまひがたきことなりかしと、例の安からず世人も聞こえけり。(紅葉賀 ① 三四七〜三四八頁)

まず、桐壺院はこの皇子のために藤壺女御を立后させる。それは次期帝の母である弘徽殿女御を差し置いてのものであり、それに対する世間の非難も当然のことである。しかし、ここでの桐壺院は年月を経て、そういった非難を押さえ込むだけの政治力を有していたと

いえる。そして皇子の後見として光源氏を宰相に任じた。かつて、心から望みながら果たせなかった光源氏の立坊を彼に似た皇子で実現させるための人事であった。そして、彼が自分の譲位後もこの皇子の将来を守るためには何をすべきかを考え実行に移したことは、想像に難くない。極端ないい方をすれば、桐壺院生存中の朱雀帝の御代は、次の冷泉帝即位の為の準備期間であったと考えられる。

この様に、自分の譲位と藤壺女御腹の皇子の立坊を決めて後、桐壺院はその実現のために自らの権力を行使した。皇子がやがて帝位に着きその後見を光源氏が行う。己の愛し子二人による政治は、桐壺院にとって理想に近い姿だったのではないか。一方で、先帝であり父親でもある桐壺院が政治にかかわる限り、朱雀帝は帝でありながら異を唱えることが出来なかった。桐壺院は光源氏と冷泉帝の御世を盤石にするため考えられる限りの布石を打っていくのである。その最後の布石が、彼の遺言であった。

弱き御心地にも、春宮の御事を、かへすがへす聞こえさせたまひて、次には大将の御事、「はべりつる世に変わらず、大小のこゝとを隔てず何ごとも御後見と思せ。齢のほどよりは、世をまつりごたむにも、をさをさ憚りあるまじうなむ見たまふる。かならず世の中たもつべき相ある人なり。さるによりて、わづらはしさに、親王にもなさず、ただ人にて、朝廷の御後見をせさせ

むと思ひたまへしなり。その心違へさせたまふな」と、あはれる御遺言ども多かりけれど (賢木 ② 九五〜九六頁)

ここに記されているのは光源氏の処遇についてであるが、春宮のことについても光源氏の場合と同様に遺言があったと考えるのが妥当であろう。そして、朱雀帝は院に遺言の実行を約束している。そのことで後に朱雀帝はこの遺言に縛られて苦しむことになった。なぜなら彼を取り巻く状況は彼にこの遺言を遂行させる事を拒んだからだ。

右大臣が亡くなり弘徽殿女御が病を得ることで、右大臣家の力は弱くなった。そこで、ようやく朱雀帝は院の遺言に添った政治を行うことができて晴れ晴れとした姿を表している。遺言を違えているという事実が、それだけ朱雀帝を苦しめていたのだ。自分の意志を押し通す強さが欠けていただけでなく、父院と母及び祖父の政治方針が正反対であったことの犠牲になったともいえるのではあるまいか。

三 弘徽殿女御一派の影響

弘徽殿女御は、朱雀帝が人々から軽んじられていることを嘆き、その恨みの矛先を光源氏に向けている。しかし、彼が軽んじられる

原因は果たして光源氏だけにあったのだろうか。第一部・第一章・

第一節二「宮中の二人」で述べたように、朱雀帝は即位したとはいえ宮中は桐壺院の政治力に支配されていた。桐壺院の死によって彼は宮中を支配する権利を得るが、そこに彼の実権はなく弘徽殿女御とその父・右大臣一派が権力を握ることとなった。しかし、彼らはその性質に問題があり、人々はそれに対して不安を抱いているのだ。

かつて藤壺の入内話が出た際に母后が「あな恐ろしや、春宮の女御のいとさがなくて、桐壺更衣のあらにはかなくもてなされにし例もゆゆしう」（桐壺 ① 四二頁）と怖れたように、物語当初より弘徽殿女御は気性が激しい女性として描かれていた。彼女は桐壺院のもとに入内し、一の宮を産んだ。しかし、桐壺院は後から入内した桐壺更衣と彼女の産んだ二の宮を溺愛し、そのことで一の宮を差し置いて二の宮が立坊するのではないかと噂された。桐壺更衣の死後、帝は彼女と瓜二つの藤壺女御を愛した。夫の愛も得られず、我が子に対する愛情も二の宮に比べて劣る感のある現状は、弘徽殿女御に恨みを抱かせるのに充分であった。実家が右大臣家であること、一の宮を産んだこと、この二点をもつてすれば、本来桐壺院の中宮は弘徽殿女御であつたはずである。一の宮が春宮に立ったことで彼女は安心するが、春宮妃にと望んだ左大臣家の姫は光源氏の添臥になり、自身も立后できず、彼女の望みは一の宮の立坊以外叶え

られたものはなかったのだ。

右大臣の性質についても上達部達が嘆くように彼が気短で他に対して意地が悪い事は人々の認めるところであつた。桐壺院の時代、政治を担っていたのは左大臣であつた。彼は娘を光源氏の添臥に立てることで後見人となり、春宮を擁する右大臣とは対立関係にあつた。政治力も人望も左大臣より劣るうえに期待された娘の立后もなくなつた。右大臣が桐壺院や左大臣に対して恨みを抱いたとしても不思議はない。

桐壺院の死によって、宮中の政治勢力は変化する。権力は右大臣側に移り、彼らが今まで味わった屈辱を晴らすために権力を行使した。そこに朱雀帝の意志はなかった。

この権力の移行は、様々に状況を変化させた。中宮は仕える人々の官職や御封などが出家を理由に以前と異なることが増え、左大臣も致仕の表を出して引きこもつた。光源氏は「世の中いとわづらはしくはしたなきことのみまされば、せめて知らず顔にあり経ても、これよりまさることもやと思しなりぬ。」（須磨 ② 一六一頁）と須磨に退くことを決意した。しかし、弘徽殿女御の攻撃は止むことがない。

朝廷の勘事なる人は、心にまかせてこの世のあぢはひをだに知ること難うこそあなれ、おもしろき家居して、世の中を譏りも

どきて、かの鹿を馬と言ひけむ人のひがめるやうに追従する

(須磨 ② 二〇六頁)

光源氏に心を寄せる人々を排除し、徹底的に彼を孤立させる。こうした一連の出来事が弘徽殿女御によって行われていることは周知の事実であり、朱雀帝本人に対する非難は表出されないが皆がこの宇様な事態を惜しみ、陰では調停を非難して恨みに思う状況が続くのである。

四 遺言の機能

先に述べたように、桐壺院の遺言と弘徽殿女御及び右大臣が考える政治は正反対のものであった。朱雀帝について白方勝氏が「公的には右大臣家側にありながら、私的には光源氏に心寄せる人」と指摘する^(註3)ように、彼の意思は遺言の遂行にあったといていい。彼の優しさは、右大臣一派に利用され、自分を追いつめる原因となっている。

左大臣も、公私ひきかへたる世のありさまに、ものうく思ひて、致仕の表たてまつりたまふを、帝は、故院のやむごとなく重き御後見と思ひて、長き世のかためと聞こえおきたまひし御遺言を思しめすに、棄てがたきものに思ひきこえたまへるに、かひ

なきことと、たびたび用ゐさせたまはねど、せめてかへさひ申したまひて、籠りゐたまひぬ。(賢木 ② 一三八頁)

この記述を指して阪上けい氏は「朱雀帝は、右大臣方にせよ、左大臣方にせよ、強き意志の中にあって、その弱き意志が行き場を失っているさまが描かれる。」と述べている^(註4)。しかし、左大臣を引き留めることに対しては、朱雀帝は強い意志を持っていた。おそらく朱雀帝にとって左大臣は祖父・右大臣に対抗できる数少ない権力者であり、亡き院が重用しその処遇を遺言した人物であったからだ。その彼の辞表を受け取らないのは、右大臣達の専横を彼の力を借りて阻止する目的もあつたのではないか。しかし、彼の意向は右大臣たちには取り上げられず、左大臣は自邸に籠もり政權から降りてしまった。これによって「一族のみ、かへすがへす榮えたまふこと限りなし」という状況が生じたが、朱雀帝にとっては桐壺院の遺言の遂行が更に難しくなったことを意味するものであった。

状況の厳しさは、朧月夜に対する次の言葉にも明らかである。

「院の思しのたまはせし御心を違へつるかな。罪得らむかし」とて涙ぐませたまふに、え念じたまはず。「世の中こそ、あるにつけてもあぢきなきものなりけれと思ひ知るままに、久しく世にあらむものとなむさらに思はぬ。さもなりなむに、いかが思さるべき。近きほどの別れに思ひおとされんこそねたけれ。

生ける世にとは、げによからぬ人の言ひおきけむ」と、いとなつかしき御さまにて、ものをまことにあはれと思し入りてのたまはするにつけて、ほろほろとこぼれ出づれば、「さりや。いづれに落つるにか」とのたまはす。「今まで御子たちのなきこそさうざうしけれ。春宮を院のたまはせしさまに思へど、よからぬことども出で来めれば心苦しう」

（須磨 ② 一九七―一九八頁）

ここで、朱雀帝は桐壺院の遺言に背いたことが罪になると認識している。そして、後に彼の眼病や右大臣家を襲う不幸を生み出す原因をそこに求める。更に、彼が朧月夜に対して「今まで御子たちのなきこそさうざうしけれ。春宮を院のたまはせしさまに思へど、よからぬことども出で来めれば心苦しう」と語る言葉が、彼の置かれた状況の厳しさを示している。右大臣達が春宮を廃し八の宮の立場を画策していたことは後に橋姫巻で語られるが、もし朧月夜が朱雀帝の皇子を産んでいれば、事態はまったく別の方向に向かっただろう。右大臣一派はどのような手段を使ってもその皇子を春宮に立てようとしたはずである。朱雀帝が朧月夜の皇子を春宮にと望む可能性も否定できない。そうなれば、桐壺院の遺言の持つ意味も違ったものになった。朱雀帝は自らの子を守る為の大義名分を得ることができ、桐壺院の遺言に対する考えも異なるものになったであろう。し

かし、現実には右大臣側に対して打つ手はなく、朱雀院が遺言を無効にできる事実も存在しなかったのである。

その年、朝廷に物のさとしきりて、もの騒がしきこと多かり。三月十三日、雷鳴りひらめき雨風騒がしき夜、帝の御夢に、院の帝、御前の御階の下に立たせたまひて、御気色いとあしうて睨みきこえさせたまふを、かしこまりておはします。聞こえさせたまふことども多かり。源氏の御事なりけんかし。いと恐ろしいとほしと思して、后に聞こえさせたまひければ、「雨など降り、空乱れたる夜は、思ひなしなることはさぞはべる。軽々しきやうに、思し驚くまじきこと」と聞こえたまふ。

睨みたまひしに見合はせたまふと見しけにや、御目にわづらひたまひてたへがたう悩みたまふ。御つつしみ、内裏にも宮にも限りなくせさせたまふ。

太政大臣亡せたまひぬ。ことわりの御齡なれど、次々におのづから騒がしきことあるに、大宮もそこはかとなうわづらひたまひて、ほど経れば弱りたまふやうなる、内裏に思し嘆くことさまざまなり。「なほこの源氏の君、まことに犯しなきにてかく沈むならば、かならずこの報いなんとなむおぼえはべる。いまはなほもとの位をも賜ひてむ」とたびたび思しのたまふを、「世のもどき軽々しきやうなるべし。罪に怖ちて都を去りし人

を、三年をだに過ぐさず赦されむことは、世の人もいかが言ひ
伝へはべらん」など、后かたく諫めたまふに、思し憚るほどに
月日重なりて、御なやみどもさまざまに重りまさらせたまふ。

(明石 ② 二五一―二五三頁)

朱雀帝が抱く不安がそのまま政治不安となつてゐる状況で、桐壺院
が朱雀帝の枕元に立ち彼を諫めた事が示される。朱雀帝も現在の状
況が桐壺院の望んだものではないことは十分に認識している。それ
に対する罪の意識が「睨みたまひしに見合はせたまふと見しけにや、
御目にわづらひたまひてたへがたう悩みたまふ。」という事態を引
き起こしたと考へていいだろう。^(註5) 続いて、右大臣が亡くなり、弘徽
殿女御も体調が悪くなる。こうした事態に対して「内裏に思し嘆く
ことさまざまなり」という気持ちから「なほこの源氏の君、まことに
犯しなきにてかく沈むならば、かならずこの報いありなるとなむ
おぼえはべる。いまはなほもとの位をも賜ひてむ」と朱雀帝は光源
氏の復帰を主張するが、弘徽殿女御は納得しない。桐壺院の諫めに
ついては「雨など降り、空乱れたる夜は、思ひなしなることはさぞ
はべる。軽々しきやうに、思し驚くまじきこと」といい、光源氏復
帰については「世のもどき軽々しきやうなるべし。罪に怖ぢて都を
去りし人を、三年をだに過ぐさず赦されむことは、世の人もいかが
言ひ伝へはべらん」と強行に反対した。朱雀帝が現在の状況を引き

起こした元凶が桐壺院の遺言の不履行にあると考へてゐる一方で、
弘徽殿女御はそれが彼の気持ちの弱さから出たものとして認めな
かつたのだ。

年かはりぬ。内裏に御薬のことありて、世の中さまざまにの
しる。

(明石 ② 二六一頁)

去年より、后も御物の怪なやみたまひ、さまざまの物のさとし
しきり騒がしきを、いみじき御つつしみどもをしたまふしるし
にや、よろしうおはしましける御目のなやみさへこのごろ重く
ならせたまひて、もの心細く思されければ

(明石 ② 二六二頁)

遂に朱雀帝は母・弘徽殿女御に背いて光源氏赦免の評定を行い、
七月二十日過ぎに光源氏に対して京へ帰還の宣旨を下した。帝自身
の病、物の怪に苦しむ弘徽殿女御、世の中の情勢が朱雀帝に決断さ
せたのである。また、朱雀帝が春宮に譲位することで次期春宮に自
分の皇子(承香殿女御腹)を立てることができると、その朝廷
を支える人物として光源氏が必要であつたことも決断を促す要因で
ある。

帝は、院の御遺言を思ひきこえたまふ、ものの報いありぬべく
思しけるを、なほし立てたまひて、御心地涼しくなむ思しける。
時々おこりなやませたまひし御目もさわやぎたまひぬれど、お

ほかた世にえ長くあるまじう、心細きこととのみ、久しからぬことを思しつつ、常に召しありて、源氏の君は参りたまふ。世の中のことも、隔てなくのたまはせつつ、御本意のやうなれば、おほかたの世の人もあいなくうれしきことに喜びこえける。

（濡標 ② 二七九～二八〇頁）

右の記述に見られるように、遺言を果たせないことに対して抱いていた罪の意識から解放された朱雀帝は、気分も回復し眼の病も快方に向かった。朱雀帝が光源氏と相談しながら政を進めることは、彼にとっても世の人々にとっても喜ばしいこととして示される。あの遺言は朱雀帝にとって重い枷であったのだ。右大臣が亡くなり弘徽殿女御が病を得たことで、朱雀帝はや々と彼らの呪縛から逃れることが出来たのである。「同じ月の二十余日、御国譲りのことにはかなれば、大后思しあわてたり。」（濡標 ② 二八二頁）とあるように、もはや弘徽殿女御の意向を伺うことなく朱雀帝は自らの意志で譲位を決行したのである。

五 帝位と朱雀帝

譲位の理由に、朱雀帝は「わが世残り少なき心地する」（濡標

② 二八〇頁）ことをあげているが、それは遺言の不履行という罪

の意識が生んだ己の病に起因している。しかし、それ以外にも次の春宮に立てるべき皇子が存在することも一因である。桐壺院と同様に、彼も次の春宮を指名したうえで譲位した。このことは、譲位後の政権に対する影響力を残したといえる。若菜巻以降、女三の宮の降嫁を受け入れた光源氏に対して、朱雀院とその皇子・春宮による皇家の力は陰に陽に働き、光源氏に彼らの身分と権力を認識させる。などか御子をだに持たまへるまじき。口惜しうもあるかな。契り深き人のためには、いま見出でたまひてむと思ふも口惜しや。限りあれば、ただ人にてぞ見たまはむかし

（濡標 ② 二八一頁）

譲位を決意した朱雀帝は朧月夜が自分の皇子を産まなかったことを嘆く一方で、彼女が光源氏の子を産む可能性に言及しつつ、その子は臣下でしかないと語る。この「限りあれば、ただ人にてぞ見たまはむ」という言葉は帝の地位にある者としてのいい分である。光源氏が決して手に入れることの出来なかった帝という地位。朧月夜に対し、彼は光源氏に勝るものとしてその地位を示したので。

帝としての彼を取り巻く政治状況が意のままにならなかったことは度々触れてきた。では彼はその地位にいる者としてどのように見られていたのだろうか。

御容貌もいときよらにねびまさらせたまへるを、うれしく頼も

しく見たてまつらせたまふ。

(賢木 ② 九六頁)

御容貌も、院にいとよう似たてまつりたまひて、いますこしなまめかしき氣添ひて、なつかしうなごやかにぞおはします。

(賢木 ② 一二三頁)

前者は桐壺院、後者は光源氏による朱雀帝評である。氣高く美しいと評される彼の容貌は帝たるに相応しいものであり、後を託すに足りる頼もしさが彼にはあると桐壺院は感じている。院に似た容貌は帝王に足ることを示し、優雅な美しさは高貴さを強調して帝としてふさわしいが、「なごやか」は彼の優しさや弱さを示しているといえまいか。朱雀帝は帝の地位に相応しい容貌を備えていたにもかかわらず、帝としての印象が稀薄である理由がそこにあると思われる。

やむごとくもてなして、人柄もいとよくおはすれば、あまた参り集まりたまふ中にもすぐれて時めきたまふ。后は、里がちにおはしまいて、参りたまふ時の御局には梅壺をしたれば、弘徽殿には尚侍の君住みたまふ。登花殿の埋れたりつるに、晴れ晴れしうなりて、女房なども数知らず集ひ参りて、いまめかしうはなやぎたまへど

(賢木 ② 一〇一頁)

朱雀帝が愛した女性は朧月夜しか思い浮かばないほどの他の女性について語られることはなかった。唯一、六条御息所の娘・斎宮に對

して心動かされたことが表されたが、それ以外の女性の名があがることはなかった。しかし、実際には彼の後宮には多くの女性が入内していたことがこの記述によって明らかである。「あまた参り集まりたまふ」中で、その存在が確認できるのは、承香殿女御(後の東宮母)、麗景殿女御、藤壺女御(女三の宮母)、一条御息所(落葉の宮母)の四名である。このうち三名は朱雀帝の御子を生んでいることが確認されている。御子の記載がない麗景殿女御については、彼女の兄が光源氏に向かつて「白虹日を貫けり。太子畏ぢたり」といったことが示されただけだったが、藤壺女御と一条御息所については若菜巻以降に皇女の母として登場している。

右大臣家が朧月夜の入内を望んだのは今握っている権力を維持するためであるが、他の女性たちも同様に次期政權をにらんでの入内であつたはずだ。実際、朱雀帝讓位の際には承香殿女御腹の皇子が立坊している。

春宮の御母女御のみぞ、とりたてて時めきたまふこともなく、尚侍の君の御おぼえにおし消たれたまへりしを、かくひきかへめでたき御幸ひにて、離れ出でて宮に添ひたてまつりたまへる。

(澤標 ② 三〇〇頁)

朱雀帝の在位中は朧月夜の陰で目立つこともなかった承香殿女御だったが、彼女の産んだ皇子が春宮に立つことで、政治的には朧月夜

を凌ぐ存在になったといえる。彼女の兄・鬚黒大將は春宮が即位した際閑白に就いたことでも明らかのように、彼女は皇子を産むことで権力を自分自身に引き寄せたわけである。

冷泉帝には在位中に皇子が産まれなかった。彼の後は、朱雀帝の皇子が帝位を継ぎ、そこに光源氏の娘・明石女御が入内して産んだ皇子が立坊し、更にそこには夕霧の娘が入内する。つまり、帝位は朱雀帝の血筋が継ぎ、それを光源氏の血筋が支えていく形が成立したことになる。朱雀帝の血筋は常に帝の地位にあったのだ。そう考えると、朱雀帝はその権力を確実に次代へ繋ぐことに成功したといえるのではなからうか。

六 朱雀帝にとっての帝位

朱雀帝の苦悩は、父・桐壺院の遺言と母・弘徽殿女御一派の政治方針が異なることから生じた。遺言を無視し、母方に押し切られる形で政が行われた状況は、朱雀帝の性格の弱さを強烈に印象付けた。彼の御代における政治の混乱は彼自身の言動にその原因があったわけではない。例えば、田中徳定氏は源氏の須磨退去について次の様に述べている。^(註6)

これはあくまで源氏の意志によるもので、朱雀帝の命によるも

ではなかった。それゆえ、朱雀帝には、政治的有能な人物に蟄居生活を余儀なくさせていることは責められたとしても、後醍醐天皇が菅原道真を罪無くして流したような、直接的失政を犯してはいなかったことになる。

強いていえば、一連の混乱の原因は彼の優しさが利用された事にあるといえるからだ。物語の記述に拠れば、むしろ彼は帝たるに相応しい容貌と風雅を持ち合わせている。

院はのどやかに思ひなりて、時々につけて、をかしき御遊びなど好ましげにておはします。女御、更衣みな例のごとさぶらひたまへど
(濡標 ② 三〇〇頁)

譲位後も在位中と変わらず女御・更衣たちが仕え、伸びやかで風流な生活を楽しんでいる様子には、王者の余裕すら感じられる。

桐壺院は、自分が譲位する際に春宮を指名し、亡くなるまで政治に影響を持ち続けた。朱雀帝も同様に、二歳になったばかりの自分の皇子を春宮に指名したうえで譲位することで、若菜巻以降その政治力を発揮している。

朱雀帝にとって帝位とはいかなるものだったのか。在位中の彼は政治的にも苦しい立場を強いられ、その評価は決して高いものではなかった。しかし、結果として彼は弘徽殿女御一派の干渉を退け、桐壺院の遺言通り光源氏を政治の中核に据えた。また、自分の皇子

を春宮に立てることで自分の血を皇統に残し、物語の展開の上でも大きな影響を与えた。この様に考えれば、朱雀帝は帝という地位において、見事に自己を貫いたといっているのではないか。更にいえば、出家によって変化したとされる朱雀帝の性格も、実は帝位にあるときに既に表出されていたと見る事が出来るのだ。

註

註1 今井久代氏はこの点について次のように述べている。

桐壺巻にとりあげられている「皇位」とは、王権うんぬんの前に優れて皇統の問題であり、権勢家と結び合うことでおのが皇統を保全しなければならない天皇家と皇統に独占的に結びつくことで権勢を子孫に継承させようとする権勢家の問題であった。ひとくちにいえば、子孫におのれの地位を継承させたいという家意識のもとで、凡庸であっても権勢家を後見にもつ第一皇子（朱雀帝）の即位こそが道理であるとする世論が形成されるのであり、その世論の欺瞞を暴くように、王の資質に光り輝く第二皇子が臣下に追いやられなければならない経緯が積み上げられていったので

あった。

「紫上物語の主題」二二四～二二五頁（『源氏物語研究集成 第一巻』所収 風間書房 平10・6）

註2 森一郎氏はこうした弘徽殿女御の行動について次のように述べている。

東宮を擁している右大臣側にとって、帝王たるべき相の光君は大いなる敵、危険人物でなければならない。弘徽殿大后が朧月夜との一件にかこつけて光源氏を政界から葬り去ろうとした真の理由は、この帝王たるべき相を怖れたことにあると見てよい。流謫の地から帰還させないことをねがったのも弘徽殿大后であつた。帝王たるべき光源氏を消したかったからである。都に召還したら、帝王たるべき相に怖れおののかなければならない。ここに「消す」というのは帝王たるべき相を封殺するということである。朱雀の側を圧倒する光源氏の脅威を防ごうとしたのである。

「光源氏の政治的生涯」二二九頁（『源氏物語の表現と人物造型』所収 和泉書院 平12・9）

註3 「朱雀院の生涯」二二九頁（『源氏物語の探究 第一輯』所収 風間書房 昭49・6）

註4 「朱雀院の役割」五頁（『國語國文 第三十巻 第五號』

昭 36・5)

註 5 この点について小田切文洋氏も次のように述べている。

朱雀院の苦悩は、やがて重い眼病にかたちをかねてゆく。

眼病の直接の原因は、遺言の実行を促すために現れた桐壺院の霊に叱責されたためであるが、院の内心の負い目が病悩という、より明確な形で捉えられたのである。

「源氏物語の方法」四五頁（「日本大学文理学部（三島）研究年報 第30集」 昭 57・2）

註 6 「「不幸」とその罪をめぐって」三二頁（「駒澤國文 第三二号」 平 7・2）

第二章 大臣家の姫君が担う役割

第一節 右大臣家の姫君

1 弘徽殿太后

一 はじめに

物語の中で〈源氏〉もしくは帝を支えているのは大臣家の姫君たちである。彼女たちは生家の期待を担い栄華をもたらし、それを存続させる責を負って生きているといい。この章では、桐壺帝に入内し朱雀帝の母となった右大臣家・弘徽殿太后、政治的に対立していた左大臣家の嫡男の正妻となった右大臣家・四の君、臣籍降下した〈源氏〉光源氏の正妻となった左大臣家・葵、以上三名を取り上げ、彼女たちが夫の政治権力にどのようにかわり影響を与えたのかについて述べていく。

まずは、桐壺帝に入内した弘徽殿太后を取り上げたい。彼女は右大臣家の期待を負って桐壺帝に入内し、念願通り一の宮を産んだ。しかし、桐壺更衣が産んだ二の宮を鍾愛する桐壺帝の態度によって一の宮の立場は危ういのではないかと噂される。無事に一の宮が春

宮となった後も、宮中の趨勢は弘徽殿太后の思うようにはならず、右大臣が亡くなった後は彼女自身が右大臣家を背負って孤軍奮闘している感がある。彼女は明らかに光源氏や藤壺中宮といった〈源氏〉と対立しており、彼女の言動は宮中に大きな影響を与えているのだ。弘徽殿太后は、「悪后」と評されることが多い。その一方で、彼女のことを政治力を持った女御であるとする指摘も多い。^(註1)例えば、今井源衛氏は次のように述べている。^(註2)

古来「悪后」と異名をとったいぢわる女の代表である。しかし、源氏に対する嫉視反感を、ただその個性にだけ帰するのはやや不当で、彼女の背後にある外戚右大臣一族の浮沈をかけた戦いの場として、彼女の後宮が存在していることも考慮に入れなければならぬ。しかしその悪玉ぶりも終りには緩和されている。悪玉ぶりが緩和されたととらえていいかどうかは疑問を感じるが、弘徽殿太后を語るうえで、右大臣一族の存在は重要な意味を持つ。なぜなら、彼女の言動の背景には右大臣家の人材不足が考えられるからである。例えば、藤壺中宮が出家し左大臣が致仕の表を出して蟄居した後は、「今はいとど一族のみ、かへすがへす栄えたまふ」と限りなし。^(註3)（賢木 ② 一三八頁）とあるように右大臣家の天下であった。しかし、「かへすがへす栄えたまふ」と表されてはいるが、具体的に人物及び官職が示されることはない。また朱雀帝の

退位後、弘徽殿太后と臘月夜は彼の庇護下にあり、右大臣家を継いで彼らの後見をはたしている人物については、何の記載もない。右大臣の生前であれ死後であれ、右大臣家を代表して朱雀帝の後ろ盾となっている人物は、右大臣と弘徽殿太后以外見受けられないのだ。左大臣家は息子・頭中将が順調に出世し光源氏と政権を争うが、右大臣家の後継男子についてはその存在が示されることはない。

例えば、絵合巻では光源氏の義兄にして左大臣家の現当主である中納言が娘・弘徽殿女御のために絵を集めるが、「院の御絵は、后の宮より伝はりて、あの女御の御方にも多く参るべし。」（絵合

② 三八五頁）とあるように、朱雀院の所有していた絵は弘徽殿太后を通して右大臣家に譲られ弘徽殿女御方に渡っている。弘徽殿女御の母は弘徽殿太后の妹であり、その関係から絵がこのように伝わることは不自然ではない。その一方で、右大臣家にはこうした絵を必要とする後継者がいないことを意味している。事実、右大臣の死後この家を代表して弘徽殿太后と共に戦う人物は登場しない。したがって、右大臣家を支えるただ一人の人物として弘徽殿太后が存在し、それが彼女により強い政治性を求めることになったのだ。

物語に登場しない右大臣家の男性と積極的に政治に関わる弘徽殿太后。物語に表出された弘徽殿太后の言動を周辺の人々との関係を中心に整理し、右大臣家における彼女の存在意義を明らかにするこ

とで、「悪后」とされる彼女の人物像が違った形で見えてくるだろう。

一 右大臣家と左大臣家

まずはじめに、右大臣一族と光源氏及び左大臣家との関係を整理しておく。

故姫君を、ひき避きてこの大将の君に聞こえつけたまひし御心を、后は思ひおきて、よろしうも思ひきこえたまはず。大臣の御仲ももとよりそばそばしうおはする、故院の御世にはわがままにおはせしを、時移りてしたり顔におはするをあぢきなしと思したる、ことわりなり。 （賢木 ② 一〇二頁）

朱雀帝の祖父・右大臣と光源氏の義父・左大臣の仲は、元々よそよそしいものであったことが示されている。桐壺院の死後は、朱雀帝の外戚である右大臣家が政治の中心を占めている。桐壺院の生前は思いのままに政治を取り仕切っていた左大臣が、今の世をおもしろく思わないのは当然である。一方で、右大臣が桐壺院崩御という転機を逃すことなく政権を握るのもまた、当然のことであった。そのために娘を入内させ、生まれた一の宮を立坊させ、その即位を待っていたのだ。にもかかわらず、朱雀帝即位後も桐壺院が強力な政治力を発揮し、期待したほどの権力を手に出来なかった右大臣が悔し

さに苛立ちを募らせたことは想像に難くない。それ故に、桐壺院亡き後の右大臣の言動は、権力を窺う者として当然のものであり、本来非難されるものではなかったはずである。左大臣の感情も右大臣の行動も、当時の宮中における権力争いの場では決して特別なものではなかった。

さらに、左大臣の姫君を春宮妃に望んだにもかかわらず、光源氏と娶せた件を弘徽殿太后は不快に思っていることが示される。この件が繰り返されることで、弘徽殿太后の恨みの深さが印象づけられている。

以上のように、左大臣と右大臣の政治的対立は明らかであった。そして、ようやく右大臣は左大臣に変わって政權を握ることができたのだ。

帝はいと若うおはします、祖父大臣、いと急にさがなくおはして、その御ままになりなん世を、いかならむと、上達部、殿上人みな思ひ嘆く。
(賢木 ② 九八頁)

朱雀帝が若いたため祖父である右大臣が政の中心になるのは既定の事だが、懸念材料として彼の性質があげられている。また、朧月夜と光源氏の密会の場を見た右大臣が怒りにまかせて弘徽殿太后に訴える場面で、彼本来の性質に年寄りのひがみまで加わったことも示されているのだ。また、彼については次のようにも述べられている。

大臣は、思ひのままに、籠めたるところおはせぬ本性に、いとど老の御ひがみさへ添ひたまひにたれば、何ごとにかはとどこほりたまはん、ゆくゆくと宮にも愁へきこえたまふ。

(賢木 ② 一四六頁)

見たこと思ったことを胸に秘めることが出来ず、すぐ口に出す性質は、政治家には不向きである。しかも彼は気短で意地が悪いのだ。とすれば、彼に重用される人と閑職に追いやられる人がどのような人物であつたのかは容易に推測できる。このような右大臣の政治が歓迎されることはなかったのだ。

右大臣家の勢いと彼らから被る嫌がらせを示すものとしては、次のような記述がある。

大宮の御兄弟の藤大納言の子の頭弁といふが、世にあひはなやかなる若人にて、思ふことなきなるべし、姉妹の麗景殿の御方に行くに、大将の御前駆を忍びやかに追へば、しばし立ちとまりて、「白虹日を貫けり。太子畏ぢたり」と、いとゆるるかにうち誦じたるを、大将いとまばゆしと聞きたまへど、咎むべきことかは。後の御気色はいと恐ろしうわづらはしげにのみ聞こゆるを、かう親しき人々も気色だち言ふべかめることどももあるに、わづらはしう思されけれど、つれなうのみもてなしたまへり。
(賢木 ② 一二五頁)

ここに登場する頭弁は、弘徽殿大后の甥であり右大臣の孫である。彼は右大臣家の威を借る生意気な若者だった。彼の「白虹日を買けり。太子畏ぢたり」という言葉は光源氏にとっても聞くに堪えないものであった。弘徽殿大后だけでなくその近親者からも数々の嫌がらせを受ける光源氏。政治の流れが右大臣家に移ったことが痛感され、弘徽殿大后の憎しみとその権力を見せつけられる日々を送っていたのだ。

また、左大臣も光源氏と同様に物憂い日々を送っている。第一部・第一章・第二節・四「遺言の機能」で述べたように、朱雀帝は桐壺院の遺言もあつて左大臣の「致仕の表」を受け取らないが、彼は自邸に籠もってしまう。左大臣が政治の世界から退けば、後は右大臣の思うがままである。まさに右大臣待望の世になったといえよう。

二 〈源氏〉と右大臣家の朱雀帝

次に、朱雀帝と弘徽殿大后及び右大臣、そして光源氏の関係を見てみたい。

先にも述べたように、右大臣と左大臣は政治的に対立している。光源氏もその出自と左大臣が後見についたことで右大臣とは対立した位置にいる。そして、弘徽殿大后は右大臣以上に光源氏に対して

恨みを抱いている。その理由は後述することにして、ここでは二人が光源氏と政治的に対立していること、特に弘徽殿大后が彼を宮中から排除しようとしていることを踏まえて朱雀帝の言動を見ていきたい。

改めていうまでもないが、朱雀帝は弘徽殿女御と桐壺院の一の宮であり、血縁的には右大臣側の人間である。しかし、朱雀帝は彼らの考えとは異なり、光源氏を排除したいとは思っていなかった。

帝は、院の御遺言たがへずあはれに思したれど、若うおはしますうちに、御心なよびたる方に過ぎて、強きところおはしまさぬなるべし、母后、祖父大臣とりどりにしたまふことはえ背かせたまはず、世の政御心にはなぬやうなり。

(賢木 ② 一〇四頁)

ここには、桐壺院の遺言通り光源氏と協力して政を行いたい彼の願望と、弘徽殿大后や右大臣に背くことができずに自らの考える政治が行えない現実が示されている。この後も、朱雀帝は桐壺院の遺言の実現を望み、弘徽殿大后達がそれを阻む構図が続いている。

たとえば、弘徽殿大后をはじめとする右大臣一派の嫌がらせにより鬱々とした日々を送る光源氏が、内裏で朱雀帝と語り合う場面がある。第一部・第一章・第一節三「斎宮をめぐる二人」で指摘したように「まづ内裏の御方に参りたまへれば、のどやかにおはします

ほどにて、昔今の御物語聞こえたまふ。」（賢木 ② 一二三頁）で始まる場面では、朱雀帝がかの斎宮が伊勢へ下る際に参内した時の美しさを語り、光源氏は野々宮へ尋ねていった時のことを打ち明けている。そこには恨みや憎しみはなく、お互いの胸の内を語り合うことのできる存在であることが示されている。この時帝から頂いた衣を光源氏は須磨へ持参しており、一方の朱雀帝も遠く須磨にいる光源氏を思っているのだ。

その夜、上のいとなつかしう昔物語などしたまひし御さまの、院に似たてまつりたまへりしも恋しく思ひ出できこえたまひて、「恩賜の御衣は今此に在り」と誦じつつ入りたまひぬ。御衣はまことに身はなたず、かたはらに置きたまへり。

うしとのみひとへにものは思ほえてひだりみぎにもぬるる

袖かな
（須磨 ② 二〇三頁）

一方の朱雀帝も遠く須磨にいる光源氏を思っている。

世を御心のほかにまつりごちなしたまふ人のあるに、若き御心の強きところなきほどにて、いとほしと思したることも多かり。

（須磨 ② 一九八頁）

都には、月日過ぐるままに、帝をはじめたてまつりて、恋ひきこゆるをりふし多かり。
（須磨 ② 二〇六頁）

以上のように、朱雀帝と光源氏の間に政治的対立の様相は見受け

られない。むしろ、弘徽殿太后達が排除した光源氏をいとおしむ気持ちさえ表出されているのだ。

「三月十三日、雷鳴りひらめき雨風騒がしき夜」（明石 ② 五一頁）の顛末については第一部・第一章・第二節四「遺言の機能」で述べた。天変地異という現象、帝の夢に出た桐壺院の亡霊、朱雀帝の眼病、右大臣の死、弘徽殿太后の体調不良。光源氏の復帰を朱雀帝に決心させるための材料が次々と提示され、帝は彼を都に呼び戻そうとするのだが、ここでもまだ弘徽殿太后に阻まれている。

光源氏を復権させる理由の一つが帝の眼病にあることは、改めて指摘するまでもない。朱雀帝は夢で桐壺院の睨みに目を合わせたことを眼病の原因ととらえている。桐壺院の怒りは、遺言を違えて光源氏を政から外し右大臣一族の思いのままにさせているところにあるのは明らかである。また、この状況は朱雀帝の本意ではなく、彼がそのことに罪悪感を抱いていた事は容易に想像できる。右大臣が亡くなり、弘徽殿太后が体調を崩すに至って、朱雀帝はこれらが光源氏を須磨に蟄居せざるを得ない状況に追い込んだ報復であると確信する。彼のなかでは、自分たちに降りかかる様々な厄災がすべて光源氏を不遇に追いやった行為に対する報いとしか考えられないのだ。

にもかかわらず、朱雀帝の訴えは弘徽殿太后によって退けられる。

彼女には、それが朱雀帝の気持ちの弱さとししか映っていない。もし彼のいうことが事実だとしても、光源氏の復帰を望まない彼女がそれを認めることはない。また、右大臣が亡くなりその後継者の存在が明らかでない状況では、光源氏の復権は左大臣が政治の中枢に戻ることを意味する。つまり、右大臣方にとって手にした権力を再び奪われることになるために、彼女はどうしても朱雀帝の意見を受け入れることは出来ないのだ。

また、光源氏を三年もたらずに許すことで世間から軽いと誹りを受けることを彼女は危惧している。それは朱雀帝の帝としての権威を損なうことにもなるために、彼女が赦すはずはない。しかし、朱雀帝は光源氏を呼び戻したのだ。

光源氏復帰は、帝を日々感じていた罪の意識から解き放ち、結果として眼病まで治癒させたといえる。また、宮中から弘徽殿太后の権力を排除したことで、朱雀帝の御代に対する世間の評価もあがった。政は朱雀帝の意見も尊重されるようになったが、それは故桐壺院、朱雀帝、光源氏、三人が望んだ政治世界の実現でもあった。

その一方で、彼女が光源氏に対する悪役を引き受けたことで、朱雀帝と光源氏の関係が悪化することがなかったことは注目すべきである。彼女の存在がなければ、右大臣方の望む政を行うために朱雀帝は直接光源氏を排除するように動かざるを得なかったのではない

か。それは、二人が兄弟でありながら反目し合う立場に立っていた可能性もあるだろう。しかし、光源氏を排除するために働きかけていたのは弘徽殿太后であり、朱雀帝が直接関与することはなかったと推測できる。弘徽殿太后が政治に関与したことで、朱雀帝と光源氏の関係が大きく拗れることがなかったために、帰郷した光源氏の政権への復帰がスムーズに行われたのだ。

院はのどやかに思ひなりて、時々につけて、をかしき御遊びなど好ましげにておはします。
(濤標 ② 三〇〇頁)

世の中の事、ただなかばを分けて、太政大臣、この大臣の御ままなり。
(濤標 ② 三〇一頁)

譲位の後、朱雀帝は穏やかな生活を送っている。宮中では光源氏が政の中心でその手腕を発揮している。そこには右大臣の一族の姿はない。光源氏と同じく復帰した左大臣が、彼とともに政治の中心にいるのだ。

のどやかならで還らせたまふ響きにも、后は、なほ胸うち騒ぎて、いかに思し出づらむ、世をたまちたまふべき御宿世は消たれぬものにこそ、といにしへを悔い思す。(少女 ③ 七五頁)

時を経て冷泉帝が光源氏を伴って朱雀院に行幸した後弘徽殿太后の所にたち寄る。自らが追い落とそうとした二人の威勢を目の当たりにした弘徽殿太后は光源氏の胸の内を推し量りつつ、昔の自分の言

動を悔やんでいる。彼らの宿世を消すほどに、彼女や右大臣家の勢力は大きくなり得なかった現実が、ここにあるのだ。

三 宮中における弘徽殿太后

以上のように、弘徽殿太后・右大臣家と光源氏・左大臣家の政治的対立のなかで、朱雀帝は自らを後見する勢力よりも、父・桐壺院が重用した人々の方に共感している。しかし、母・弘徽殿太后が常に彼の側にあり、右大臣家の意向を反映した政治を行うことに心を砕いていた。彼女は右大臣家に対しても光源氏に対してもその対応する姿勢は一貫しており、光源氏たちに対しては強い憎しみを抱いていることが見受けられる。

院のおはしましたる世こそ憚りたまひつれ、後の御心いちはやくて、かたがた思しつめたることどもの報いせむと思すべからめり。事にふれてはしたなきことのみ出で来れば、かかるべきこととは思ししかど、見知りたまはぬ世のうさに、立ちまふべくも思されず。

(賢木 ② 一〇一〜一〇二頁)

桐壺院の死によって、弘徽殿太后の復讐がはじまった。ここに見られる「かたがた思しつめたること」が彼女の恨みの根源であろう。それが具体的に示されるのは、朧月夜と光源氏の密会を右大臣から

聞かされた場面である。

帝と聞こゆれど、昔より皆人思ひおとしきこえて、致仕の大臣も、またなくかしづくひとつ女を、兄の坊にておはするには奉らで。弟の源氏にていときなきが元服の添臥にとりわき、またこの君をも宮仕にと心ざしてはべりしに、をこがましかりしありさまなりしを、誰も誰もあやしとやは思したりし。みなかの御方にこそ御心寄せはべるめりしを、その本意違ふさまにてこそは、かくてもさぶらひたまふめれど、いとほしさに、いかでさる方にても、人に劣らぬさまにもてなしきこえん、さばかりねたげなりし人の見るところもありなどこそは思ひはべりつれど、忍びてわが心の入る方になびきたまふにこそははべらめ。齋院の御事はましてさもあらん。何ごとにつけても、朝廷の御方にうしろやすからず見ゆるは、春宮の御世心寄せことなる人なればことわりになむあめる

(賢木 ② 一四八頁)

太后が語る光源氏への恨みは次の三点である。

a 我が子・朱雀帝は帝であるにもかかわらず人々から軽んじられていた。

b 左大臣には、朱雀帝が春宮のころ葵の入内を申し入れていたのに、彼女を年少の光源氏の添臥とした。

c 入内させる予定の朧月夜は光源氏とのことが原因で女御にな

れなかったにもかかわらず、誰も彼を非難しなかった。

こうした事実をあげたうえで、帝の寵愛を受ける臘月夜と密会するならば朝顔斎院との噂も事実だろうと憶測し、斎院と関係を持つことは朝廷を軽視することであると光源氏を非難している。彼女の恨みはなんといってもaに拠るところが大きい。bとcについても、それを招いた要因はaにあると考えている。朱雀帝が軽んじられ、光源氏の言動が非難されないのは、桐壺院の二人に対する対応の違いにあった。

一の皇子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなきまうけの君と、世にもてかしづきこゆれど、この御にほひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、私物に思ほしかしづきたまふこと限りなし。

(桐壺 ① 一八〜一九頁)

一の宮であつた朱雀帝は将来の春宮として大切にされていたが、桐壺院が愛したのは二の宮・光源氏であつた。この桐壺院の言動が、弘徽殿太后に光源氏に対して恨みを持つ状況を招いたことは間違いない。そして、それは桐壺院の後宮において彼女が取る立場にも少なからず影響していたはずである。

では、弘徽殿太后はいかなる女性として描かれていたのだろうか。弘徽殿太后の性格は「さがなし」という言葉で示されている。

母后、「あな恐ろしや、春宮の女御のいとさがなくて、桐壺更衣のあらはにはかなくもてなされにし例もゆゆしう」と思しつづみて

(桐壺 ① 四二頁)

老いもおはするままに、さがなさもまさりて、院もくらべ苦しうたへがたくぞ思ひきこえたまひける。(少女 ③ 七五頁)

先帝の四宮・藤壺の母后は、宮の入内を躊躇する理由に弘徽殿太后の「いとさがなし」性格とその言動に対する恐れをあげ、太后が老いて後はその性質がひどくなり実子である朱雀院すら彼女のことに持て余し気味になっていることが示される。この「さがなし」という言葉は、彼女の父である右大臣にも使用されており、いわゆる右大臣家を示すキーワードであつた。

また、寵愛した桐壺更衣の死を悼み「ほど経るままに、せむ方なう悲しう思さるるに、御方々の御宿直なども絶えてしたまはず、ただ涙にひちて明かし暮らさせたま」ふ桐壺帝に対して「亡きあとまで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」(桐壺 ① 二六頁)といい放ち、悲しみに暮れる桐壺帝を尻目に、月の美しさを愛でて管弦の遊びに興じるのである。

風の音、虫の音につけて、もののみ悲しう思さるるに、弘徽殿には、久しく上の御局にも参上りたまはず、月のおもしろきに、夜更くるまで遊びをぞしたまふなる。いとすさまじうものしと

聞こしめす。このごろの御気色を見たてまつる上人、女房などは、かたはらいと聞きけり。いとおし立ちかどかどしきところものしたまふ御方にて、事にもあらず思し消ちてもてなしたまふなるべし。

(桐壺 ① 三五～三六頁)

帝を不愉快にさせ、殿上人や女房たちをはらはらせる「いとおし立ちかどかどしきところものしたまふ御方」が弘徽殿太后であった。このように、桐壺巻より弘徽殿太后は「さがな」く「かどかどしきところ」のある人物として描かれている。さらにそれは桐壺更衣の死を悲しむ帝の姿と対照的に描かれることで、彼女を「悪后」として印象づける結果となっている。しかし、桐壺更衣に対する彼女の言動は、本当に「さがな」いものだったのだろうか。たとえば、物語冒頭は次のように書かれている。

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。はじめより我はと思ひあがりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちはましてやすからず。朝夕の宮仕につけても、人の心のみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけん、いとあつくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかずあはれるものに思ほして、人の譏りをもえ憚らせたまはず、世の例に

もなりぬべき御もてなしなり。

(桐壺 ① 一七頁)

光源氏の母・桐壺更衣は帝から寵愛を受けるが、それ故に他の女御・更衣達の妬みを買っている。彼女に対する嫌がらせは、特定の人物が中心になって行ったとも、「誰」が行ったとも述べられてはいない。示されるのは、桐壺更衣が他者の嫉みや恨みを受けて病がちなのであるということだけである。しかも、女御・更衣たち以外にも桐壺更衣への寵愛を快く思わない人々がいたことは、この後に続く「上達部、上人などもあいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。」(桐壺 ① 一七頁)という記述からも明らかである。さらにこの記述と対応するものとして、次の一節がある。

「さるべき契りこそはおはししけめ。そこらの人の譏り、恨みをも憚らせたまはず、この御事にふれたることをば、道理をも失はせたまひ、今、はた、かく世の中のことも思ほし棄てたるやうになりゆくは、いとたいだいしきわざなり」と他の朝廷の例までひき出で、ささめき嘆きけり。(桐壺 ① 三七頁)

桐壺帝に同情している人もいるが、そうでない人々もまた存在したのである。増田繁夫氏は、こうした状況から彼女の行為を「帝の耳にもとどくほどに夜更けまで管弦に過ごしているというのも、いわば帝が寵愛の更衣の死に心をとられて、他の女御たちの存在を無視し、博愛であるべき帝の立場を忘れていくことへの非難であろう。」

と述べるとともに、「特に弘徽殿ひとりが心ない態度をとっているわけではない。ただ、弘徽殿は『かどかどしきところ（情の剛い性格）』のある人であり、帝に対しても管弦で非難できるほどに宮廷で強い立場にある人だ、ということなのである。」と述べている^{（註3）}。確かに、桐壺帝の後宮における弘徽殿太后の位置付けは次のようなものであった。

人よりさきに参りたまひて、やむごとなき御思ひなべてならず、皇女たちなどもおはしませば、この御方の御諫めをのみぞなほわづらはしう心苦しう思ひきこえさせたまひける。

（桐壺 ① 一九頁）

彼女は右大臣家の娘であり、誰よりも先に入内して一の宮を生んだだけでなく他にも姫宮が生まれるなど帝も彼女を尊重せざるを得ない状況にあった。彼女の立場を考慮すれば、増田氏の指摘にあるように、弘徽殿太后の言動は嫌がらせでも何でもなく、帝にあるべき姿を取るようにながした行動だと考えるべきではないのか。彼女が憎んだのは、更衣の死後も帝が彼女の思い出に捕らわれているという事実であり、彼女の催す管弦の遊びは美しい月を愛でるためのものであった。ここに、桐壺帝には得ることのできない未来を見るのではなく、生きていく今を見るべきであることに気づいて欲しいという弘徽殿太后の想いを読み取ることはできないだろうか。彼女

は現実を見ている。だから美しい月を愛でて遊ぶのだ。

桐壺帝の在位中、弘徽殿太后がその存在感を増すのは一の宮の地位が脅かされる時である。桐壺更衣の死後、帝の愛は光源氏にのみ向けられていた。右大臣家が後見する一の宮が春宮になると人々から思われていたが、帝の寵愛は二の宮を春宮にするのではないかという憶測を呼んだ。そのことを、彼女は恐れたのだ。しかし、この場面ではまだ弘徽殿太后が何らかの行動を取ったのかどうかについての言及はない。そして、春宮が一の宮に決まった後の後宮は、安定していたと思われる。なぜなら光源氏が弘徽殿太后をはじめ、後宮の女性達に可愛いがられていることが示されるからだ。

今は内裏にのみさぶらひたまふ。七つになりたまへば読書始などせさせたまひて、世に知らず聴うかしこくおはすれば、あまり恐ろしきまで御覧ず。「今は、誰も誰もえ憎みたまはじ。母君なくてだにらうたうしたまへ」とて、弘徽殿などにも渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れたてまつりたまふ。いみじき武士、仇敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず。女御子たち二ところ、この御腹におはしませど、なずらひたまふべきだにぞなかりける。御方々も隠れたまはず、今よりなまめかしう恥づかしげにおはすれば、いとをかしううちとけぬ遊びぐさに誰も誰も思ひきこ

えたまへり。
(桐壺 ① 三八〜三九頁)

ここに見られる弘徽殿太后には、「悪后」を感じさせるものがない。物語は、母を亡くした光源氏がいかに後宮の女御達に愛されていたかを語るのだが、弘徽殿太后ですら彼を遠ざけることが出来ない。少なくとも、彼女が彼を憎んだり貶めたりするような記述は見受けられない。むしろ、高麗人の相人に光源氏の相を見させたことで「春宮の祖父大臣など、いかなることにかと思し疑ひてなんありける」(桐壺 ① 四〇頁)とあるように、右大臣の方が光源氏と桐壺帝の言動に目を光らせている様子がうかがえる。

弘徽殿太后の「さがな」い性質が表出されるのが、先帝の四宮である藤壺の入内後である。彼女の入内は、その容貌が亡き桐壺更衣に似ていることから、かつて政治の乱れが危惧された時代の再現を予想させるものであったからだ。実際、帝は彼女に夢中になり、光源氏もまた母にうり二つといわれる藤壺を慕っている。

こよなう心寄せきこえたまへれば、弘徽殿女御、また、この宮とも御仲そばそばしきゆゑ、うち添へて、もとよりの憎さも立ち出でてものしと思したり。
(桐壺 ① 四四頁)

光源氏は藤壺女御の元を訪れることが多くなったことで、弘徽殿太后や他の女御達とは疎遠になったであろうことが推測できる。藤壺女御とともに桐壺帝と光源氏がいることは、弘徽殿太后に桐壺更衣

が生きていた頃のことを思い出させる。それは、一の宮の立場が不安定になった頃のことを思い出すことになり、彼女は光源氏に対する憎しみを思い出し、それをここで強めていったのではないか。

そして、桐壺帝は皇子を産んだ藤壺女御を中宮にした。それは、本来ならば春宮の母である弘徽殿太后が着くはずの地位であった。藤壺女御を中宮にしたのは、産まれた皇子を春宮にするための布石である。しかし、弘徽殿太后を飛び越してのこの行為は、世間の人々からも疑念を呈されるものであったのだ。こうした桐壺院の言動が、弘徽殿太后が抱く恨みを増幅させたことは間違いないだろう。

以上のように、弘徽殿太后を復讐に走らせた要因は、朱雀帝を思う母の立場だけでなく、自らの待遇に対する屈辱感から生じたものでもあったのだ。

四 宮中で生きる弘徽殿太后

さて、弘徽殿太后が右大臣家主導の政治を実現させるために入内し行動したことは、当時の大臣家の娘としては当然のことであった。娘を入内させ、皇子をもうけ、その子を帝にした後、外戚となることが政治権力を手にする確実な方法だったからだ。しかし、同じように権力を目指していながら彼女と右大臣の間には微妙なずれが生

じていた。それが明示されたのは、朧月夜への対応であった。たとえば、光源氏の正妻・葵の死後、次の正妻に誰がつくかが注目されていた。当時、御匣殿として後宮入りしていた朧月夜は、相変わらず光源氏に心を寄せており、右大臣も「げに、はた、かくやむことなかりつる方も亡せたまひぬめるを、さてもあらむになどか口惜しからむ」（葵 ② 七五頁）と彼女の気持ちを尊重して光源氏との結婚もよしとしている。また、尚侍となった彼女と光源氏の密会が発覚した際も、激怒する弘徽殿太后に対し、当初は怒っていた右大臣も「さはれ、しばしこのこと漏らしはべらじ。内裏にも奏せさせたまふな。かくのごと罪はべりとも、思し棄つまじきを頼みにて、あまえてはべるなるべし。内々に制しのたまはむに、聞きはべらずは、その罪に、ただみづから当たりはべらむ」（賢木 ② 一四九頁）と朧月夜の行爲を取りなしている。この二つの事例を見れば、右大臣は終始朧月夜の気持ちを尊重し、出来る限り彼女の身が立つよう考え行動していることがわかる。

一方の弘徽殿太后は、朧月夜の気持ちは無視してまずはなんとか入内させることを画策し、密会が発覚すると今度は光源氏追放を企てる。密会の発覚が「尚侍の君は、人笑へにいみじう思しくづほる」（須磨 ② 一九六頁）状況を招くことは十分に予想できたにもかかわらず、彼女は朧月夜の恥よりも光源氏追放を優先したので

ある。そこに、彼女なりの思いや考えがあったことは否定しない。彼女の考える朧月夜の幸せは、朱雀帝のもとに入内し皇子を産み次代の帝の母になることである。さらにいえば、自分が着くことの出来なかった中宮という地位に彼女を据えたかったのではないか。しかし、肝心の朧月夜は女御として入内する前に光源氏と関係を持ち、それが為に御匣殿として宮中にあがるしかなく、弘徽殿太后の力で尚侍となった。幸いにも帝の寵愛を受けることが出来て、ここで帝の皇子を産めばさらなる地位へもつけようかという時に、光源氏に心惹かれ密会を繰り返す彼女に対する弘徽殿太后の怒りは当然である。彼女がよかれと考え尽力したことを、ことごとく朧月夜は無にするのである。しかも、そんな彼女を父・右大臣はかばい、あろう事か光源氏の妻でもいいとさえるのである。弘徽殿太后が苛立ち、強引な行動に出るのも致し方ないのではないか。彼女は、父・右大臣よりも厳しい態度で物事に対処している。それは、彼女の孤軍奮闘という感じさえ受ける。彼女一人が、右大臣家の行く末を案じ、将来が安泰であるよう布石を打っているのだ。

五 おわりに

若き光源氏の前に立ちはだかったのは、なんといっても弘徽殿大

后であつた。彼女は、光源氏を阻むことに關して父・右大臣よりも強烈な印象を与えている。ただ、單なる悪役だけでは此処まで強い印象を与えることはない。彼女は、父・右大臣や妹・朧月夜に対しても批判もすれば意見もする。憎い光源氏にだけでなく、身内に対しても同様に厳しい彼女の強さがそのまま読み手に与える印象の強さに繋がっているのだ。

彼女の性質は「さがなし」と評される。事実、彼女の意地の悪さは否めない。しかし、彼女は春宮の母でありながら中宮になれず、「太后」という地位で誤魔化された。我が子は帝でありながら人々から軽んじられている。自分の後を嗣ぐことを期待した朧月夜は、彼女の意に反する行動を繰り返す。一族の男性の中にも、右大臣家の得た権力を維持する力を持った人物が見受けられない。そこで弘徽殿太后は我が子と一族を守るために強力な政治力を發揮した。しかし、彼女の目指した政のあり方は朱雀帝の望んだものではなかった。さらに、右大臣家の期待を担って入内した弘徽殿太后であつたが、彼女をサポートし、手にした権力を維持し続けるだけの力が右大臣一族にはなかった。そう考えると、彼女の意地悪さ・強さの裏には孤独で悲壯感を抱えた姿が見え隠れするのである。彼女の「悪后」という評価は、彼女の本質であるとともに、そうあらねばならなかつた彼女の立場が生み出したものなのだ。

註

註1

林田孝和氏は弘徽殿太后について「悪を描かないのに悪の印象を醗酵する人物」と評している。（『弘徽殿女御私論』『源氏物語の精神史研究』所収 桜楓社 平5・4）
清水好子氏は、弘徽殿太后の活躍が「色恋を超えた政権争いの場」にあるとして、「弘徽殿の太后はかかる世界に君臨し、物語の主人公と覇を競うのである。」と述べている。

（『人物像の変形』『源氏物語の文体と方法』所収 東京大学出版会 昭55・6）

田坂憲二氏は次のように述べている。

一旦、視点を右大臣側に移してみれば、太后の思惟・行動は、善か悪かといった基準で裁断できる筋合いのものではなく、自派の権勢の維持・拡大に邁進すると言うこととで一貫していることがわかる。

（『弘徽殿太后試論』『源氏物語の人物と構想』所収 和泉書院 平5・10）

註2

「源氏物語登場人物の性格と役割 弘徽殿太后」（『源氏物

註
3

『語の思念』所収 笠間書院 昭62・9)

「弘徽殿女御 ―母親というもの―」(『源氏物語作中人物

論集』所収 勉誠社 平5・1)

2 四の君

一 はじめに

『源氏物語』は、権力争いが多く描かれている。桐壺帝の時代は、左大臣家と右大臣家が政権を争っていた。左大臣は桐壺帝の同母妹を正妻に迎え、娘・葵と光源氏を結婚させることで優位に立った。

一方の右大臣家は、娘・弘徽殿女御が産んだ一の宮の即位を待っていた。外戚として政権を握ることと現在の地位が逆転出来るからだ。

結果的に、次の朱雀帝の時代は、桐壺帝が亡くなった後ではあったが右大臣家が権力を欲しいままにすることができた。その結果、光源氏は須磨へ蟄居せざるを得なくなり、左大臣は致仕の表を出して引きこもった。しかし朱雀帝の時代は長く続かず、次の冷泉帝の時代になると右大臣の勢力は消え、新たな対立が生まれる。光源氏とかつて彼を後見してくれた左大臣家との争いであった。

彼と相對するのは、かつて共に遊び学んだ頭中将である。政治家としての光源氏像を鮮明に描き出すためにも彼の存在は重要であり、彼は光源氏に対抗できるだけの力を持つ必要があった。その力を与えるための人物が、彼の正妻となる四の君である。彼女は右大臣家の娘であり、政敵である彼女の実家は左大臣家とは異なる人脈

や品物を所有している。彼女を通じてそれらを得ることは、左大臣家が権力を握るために必要であった。四の君の登場回数は決して多くない。また彼女の姉・弘徽殿女御や妹・朧月夜のように、強烈な印象を与える人物でもない。しかし、彼女は右大臣家の娘であることで頭中将の権力争いを支えている。彼女が左大臣家にもたらしたものの、その政治的意味は何だったのかを考えてみたい。

二 桐壺帝の時代

四の君は、まずその結婚について語られる。それは、左大臣家と右大臣家の権力争いが行われるなかで執り行われており、当然政治的意味合いを含んだものであった。

この大臣の御おぼえいとやむごとなきに、母宮、内裏のひとつ后腹になむおはしければ、いづ方につけてもいとはなやかなるに、この君さへかくおはし添ひぬれば、春宮の御祖父にて、つひに世の中を知りたまふべき右大臣の御勢ひは、ものにもあらざおされたまへり。御子どもあまた腹々にものしたまふ。宮の御腹は、藏人少将にていと若うをかしきを、右大臣の、御仲はいとよからねど、え見過ぐしたまはで、かしづきたまふ四の君にあはせたまへり、劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき

御あはひどもになん。

(桐壺 ① 四八頁)

当時、右大臣家は左大臣家の娘を春宮の女御に望んでいた。皇女を母に持つ左大臣家の娘の入内は、春宮にとって身分・血筋・財力において最良の選択である。しかし、それでは右大臣家が執り行う政治を左大臣家が支える事になり、左大臣はそれを良しとはしなかった。彼は、むしろ春宮よりも帝が寵愛する光源氏と娘を娶せたのである。それは桐壺帝との関係をより強化することであり、結果として現在の政権での左大臣家優位を決定づけた。一方、こうした左大臣家の態度は、春宮を擁する右大臣家に対する宣戦布告ととらえることができる。左大臣家は春宮より臣下の光源氏を選んだのであり、袖にされた右大臣一族、なかでも弘徽殿女御が後々まで光源氏及び左大臣家に恨みを抱き復讐に燃える要因となった。ただ、この時点では先にも述べたように左大臣家が政権を握っており、右大臣家としてはそれに対抗出来る手段を持たない。宮中で帝を支えるのは左大臣家であり、右大臣家はまだ充分に権力を握る立場にはなかったのだ。

その一方で、右大臣は左大臣家の嫡男・頭中将に目をとめる。左大臣は複数の妻に多くの子どもをもうけているが、その中で桐壺帝と同腹の皇女を母に持つのは娘・葵と頭中将の二人だけであり、左大臣家にとっても特別な存在であった。そして、客観的に見て彼は

血筋といい家柄といい他家の婿としてしまうには惜しい存在だったのだ。そこで右大臣は「かしづきたまふ」四の君の婿に彼を迎えた。この右大臣の判断は間違いではない。例えば、上野英子氏は次のように述べている。^(註1)

右大臣としては、この結婚によって左大臣側と協力関係を結びたい、あわよくば左大臣家の嫡男を自分たち一族の傘下に吸収することが出来るかもしれないと考えていたのだろう。

権力争いで左大臣に負けている右大臣の状況を鑑みれば、彼は上野氏の指摘するような考えを持っていたかもしれない。しかし、入内を断られた彼が、それでもなお協力を求めたであろうか。頭中将を取り込むことは考えただろう。彼の有能さは、権力を得てそれを維持するために必要である。しかし、それは春宮が即位して自分たちが左大臣よりも上に立った後のことである。それまでに彼を徐々に右大臣家に引き込むために「かしづきたまふ」四の君と結婚させたのだ。彼女は重要な役割を与えられた存在だったのである。

をかしかりつる人のさまかな、女御の御妹たちにこそはあらめ、まだ世に馴れぬは五六の君ならんかし、帥宮の北の方、頭中将のすさめぬ四の君などこそよしと聞きしか、なかなかそれならましかば、いますこしをかしからまし、六は春宮に奉らんと心ざしたまへるを、いとほしうもあるべいかな

（花宴 ① 三五八―三五九頁）

右大臣の娘は六名。弘徽殿女御と春宮に入内予定の六の君は宮中で生きるために最高の女性となるように教育されていたはずである。そして、美人と評判が高いのが帥宮の北の方と四の君であった。六名の娘達のうち物語に描かれるのがこの四名であることを考えれば、四の君が右大臣家にとって重要な役割を担っていると考えることに異論はないだろう。

ここにおいて、葵と光源氏、四の君と頭中将の二組の夫婦が誕生した。どちらも妻の実家の「劣らずもてかしづきたる」様子が示されている。政権を争ううえで必要なのは、自分自身の力だけでなく妻の実家の力が大きな意味を持つ。それは帝の皇子の処遇を見ても明らかである。桐壺帝の皇子でも、右大臣家の娘を母に持つ一の宮は春宮に立ち、後見人のいない更衣腹の光源氏は臣下に下った。政権争いにおいて、妻の実家は大きな意味を持つのだ。何を望み、その達成のために何が利用できるのか。後に起こる権力闘争の下地は既に整えられつつあったわけである。

ただ、若い二人にとって婚家のもてなしは心地よいものではなかった。

宮腹の中将は、中に親しく馴れきこえたまひて、遊び戯れをも人よりは心やすく馴れ馴れしくふるまひたり。右大臣のいたは

りかしづきたまふ住み処は、この君もいともうくして、すきがましきあだ人なり。

（帚木 ① 五四頁）

彼らは、まだ直接権力争いに関わっていない。二人はともに遊び戯れることが多い。光源氏と対等に振る舞えるのは、頭中将のみであることが示されている。そして、右大臣が大切にしている正妻のもとには寄りつかない。実家と婚家は宮中において対立関係にあり、現在頼るべきは婚家の力ではなく自身の父親が有する権力であった。桐壺帝と左大臣。政治的にはどちらも婚家より上位にある。したがって、結婚相手の家の力に頼る必要もなければ、機嫌をとる必要もない。むしろ、下にも置かぬもてなしはこうした関係から生じたものなのかもしれない。敵対する右大臣家からは足が遠のくのも無理はない。しかし、疎遠ではあるが別れることなく四の君は彼の正妻であり続けるのだ。

三 朱雀帝の時代

さて、桐壺帝と左大臣に権力を握られている右大臣は、春宮の即位を待ち形勢の逆転をねらうしかない。そしてその次の布石として、六の君・朧月夜の入内を進める。彼女が春宮の皇子を産むことができれば右大臣家が権力を握り続けることが可能となるからだ。弘徽

殿女御と共に彼はこの計画を進めていく。しかし、六の君は光源氏と関係を持ったことで女御として入内することができなかった。この一件は、弘徽殿女御の光源氏に対する恨みをさらに深める要因となる。

朱雀帝が即位し、その後桐壺院が崩御してようやく右大臣は宮中での権力を握ることができた。

三位中将なども、世を思ひ沈めるさまこよなし。かの四の君をも、なほ離れ離れにうち通ひつつ、めざましうもてなされたれば、心とけたる御婿の中にも入れたまはず。思ひ知れとにや、このたびの司召にも漏れぬれど、いとしも思ひ入れず。

(賢木 ② 一三九頁)

かねてより四の君に対する頭中将の態度を快く思っていなかった右大臣は、自らが差配する司召で彼を昇進させなかった。しかし、彼がそのことを気にする様子はない。権力が右大臣側に移ったことによる政情の変動を残念に思うことはあっても、右大臣におもねてまです保身を図るつもりはないからである。

さて、権力が逆転することで、頭中将と四の君の関係はどうなったのか。「なほ離れ離れにうち通ひつつ、めざましうもてなされたれば」とあるように、それまでと同じく通いは途絶えがちで、彼女に対する扱いも右大臣が期待するようなものではない。四の君は権

力につながる娘であり、それなりに遇されるべきだと右大臣が考えていたのは当然である。しかし、頭中将は右大臣の望む通りの行動はとらなかった。その結果、彼の昇進を見送ったことは親として当然のことだったのではないか。

しかし物語を見ていけば、彼らはそれなりの夫婦関係を築いていたようでもある。例えば、この頃光源氏との遊びの場に彼は四の君との子どもを連れて来ている。

中将の御子の、今年はじめに殿上する、八つ九つばかりにて、声いとおもしろく、笙の笛吹きなどするをうつくしびもてあそびたまふ。四の君腹の二郎なりけり。世の人の思へる寄せ重くて、おぼえことにかしづけり。心ばへもかどしう容貌もをかしくて、御遊びのすこし乱れゆくほどに、高砂を出だしてうたふいとうつくし。

(賢木 ② 一四一―一四二頁)

この高砂の君が二郎君であるという記述から、四の君との間に少なくとも二人の男の子を儲けていることがわかる。さらに、この二郎君は正妻腹ということで世間の扱いも、頭中将の扱いも特別であることが示されている。いくら「めざましうもてなされ」ても子どもは別なのだ。二郎君と同様に四の君腹の子どもは特別に扱われている。

ほのぼのとをかしき朝ぼらけに、いたく酔ひ乱れたるさまし

て、竹河うたひけるほどを見れば、内の大殿の君達は四五人ばかり、殿上人の中に声すぐれ、容貌きよげにてうちつづきたまへる、いとめでたし。童なる八郎君はむかひ腹にて、いみじうかしづきたまふが、いとうつくしうて

(真木柱 ③ 三八二〜三八三頁)

彼の子どもは、その声、その容貌共に殿上人の中でも際立っている。中でも八郎君は正妻腹でかわいらしいうえに父大臣もたいそう大切にしている様子が示されている。この場面は、すでに権力争いにおいて彼が光源氏より劣勢に立たされている時期である。彼が光源氏に勝つためには、子ども達の将来を含めた戦略が必要になっている。

内大臣は、御子ども腹々いと多かるに、その生ひ出でたるおぼえ、人柄に従ひつつ、心にまかせたるやうなるおぼえ、勢ひにて、みななし立てたまふ。

(螢 ③ 二二八頁)

光源氏の子どもが夕霧と明石姫君だけであるのに比べ、彼にはたくさんの子どもがいる。その子ども達も、母親の身分や本人の人柄によつて将来への処遇が決められている。したがって、正妻である四の君腹の子ども達が大家勢の子ども達の中で特別に扱われるのは当然であった。そして、それぞれの子ども達への対応は頭中将が政治家として将来を見据えていることを示している。夫婦関係が希薄であっても、自分の実家と対立していても、朱雀帝につながる右大臣一

族は自らが権力を握るためには必要であり、利用すべきものなのである。それが、二人の子ども達の処遇に明確に投影されているといえるのだ。

一方、四の君及び右大臣家は、彼の女性関係に注意を払っていたようである。その実例として、かつて頭中将の通い先であった夕顔に対して嫌がらせを行うことで夕顔が頭中将と別れるように仕向けたことが示される。

親もなく、いと心細げにて、さらばこの人こそはと事にふれて思へるさまもろうたげなりき。かうのどけきにおだしくて、久しくまからざりしころ、この見たまふるわたりより、情けなくうたてあることをなむさるたよりありてかすめ言はせたりける、後にこそ聞きはべりしか。

(帚木 ① 八一〜八二頁)

頭中将なん、まだ少将にものしたまひし時見そめたてまつらせたまひて、三年ばかりは心ざしあるさまに通ひたまひしを、去年の秋ごろ、かの右の大殿よりいと恐ろしきことの聞こえ参で来しに、もの怖ぢをわりなくしたまひし御心に、せん方なく思し怖ぢて、西の京に御乳母住みはべる所になん這ひ隠れたまへりし。

(夕顔 ① 一八五〜一八六頁)

頭中将が語る「痴者の物語」(帚木 ① 八一頁)は、夕顔の事であった。それは後に右近が光源氏に語った内容と一致する。夕顔に

対して嫌がらせを行った四の君たちの行為は、彼女の嫉妬から生まれたものなのか、それとも右大臣家の娘である自分をないがしろにして別の女の元に通うことが許せなかったのか。頭中将の彼女に対する扱いが、右大臣の期待したものではなかったことは、度々指摘してきたが、下にも置かぬもてなしをしている嬪君に別の通い先があるという事実が我慢できず、プライドが許さなかったことはあるだろう。しかし、当時は幾人もの通い先を持つことはタブーではなかった。むしろ、高い地位にある人物は複数の妻を持っていた。頭中将に複数の通い先があったとしても、それは非難の対象にはならなかったはずだ。にもかかわらず、行われた嫌がらせは、桐壺帝後宮において弘徽殿女御が桐壺更衣や藤壺中宮に行ったそれを思い出させる。四の君もまた右大臣家の気性を受け継いでいることを示すものであり、頭中将の「離れ離れにうち通ひつ」る行為を納得させるエピソードであったといえる。

朱雀帝の時代、右大臣の権力下でも頭中将は四の君に対して素っ気ない態度しかとらなかった。まだ彼は自身の父親の庇護下にあり、右大臣家を重んじる気もなかったのだろう。しかし、問題は彼女自身にもあったというべきではないか。右大臣の気性、見え隠れする彼女の性質、いわゆる右大臣家らしさが彼の足を遠ざけた要因であるといえないだろうか。その一方で彼は四の君腹の子どもを大切に

する。頭中将にとって、彼女との結婚は彼が望んだものではなく、右大臣との関係も好転することはなかった。しかし、彼が政治家として権力をねらう時、右大臣家という存在が重要になってくるのだ。

四 冷泉帝の後宮

光源氏が須磨へ蟄居した後、「その年、朝廷に物のさとししきりて、もの騒がしきこと多かり。」（明石 ② 二五一頁）という状況が訪れる。「三月十三日、雷鳴りひらめき雨風騒がしき夜」（明石 ② 二五一頁）以降、正確には亡き桐壺院が朱雀帝の夢枕に立った後に右大臣家には凶事が続く。帝が眼を患い、右大臣が亡くなり、弘徽殿太后も体調を崩した。この状況を打開するために、朱雀帝は光源氏に帰京の宣旨を下す。彼は光源氏の帰京の後、春宮の元服を行い、時を置かずには譲位した。時代は、冷泉帝の時代に移ったのである。

冷泉帝は、光源氏と藤壺中宮との子どもではあるが、それは明らかにされることのない事実である。父とされる桐壺院は既に亡く、母・藤壺中宮は宮家の出身ですでに出家している。つまり、彼の母方は政治権力の中樞に座ることはない。また元服から即位までの期間が短かったため、新帝の後宮には未だ女御がいない。宮中で彼を

支える人物は、亡き桐壺院から後見を託された光源氏一人なのである。それは、娘を入内させ皇子を産みその子が春宮から帝となれば外戚として政権を握ることが可能であることを意味する。権力を望む者は絶好の機会ととらえたことだろう。

一方、冷泉帝の後見である光源氏は内大臣となった。そのまま摂政として政を行うと思われたが、彼は舅である前左大臣にその役割を譲った。前左大臣は太政大臣として政を行うが、その権力の後継をめぐって、太政大臣の後継者・頭中将と光源氏は対立関係に進んだと考えてよい。

とりわきて宰相中将、権中納言になりたまふ。かの四の君の御腹の姫君十二になりたまふを、内裏に参らせむとかしづきたまふ。
(濡標 ② 二八三頁)

かつての頭中将も今では権中納言になり、四の君腹の娘を入内させるために教育している。光源氏が後見を務めてはいるが、先に示したように冷泉帝には宮中で支えになる者が少ない。権中納言が娘を一番に入内させ、権力固めを行おうと考えるのは当然である。彼はこの入内が後の立后に結びつくように手だてを講じる。

権中納言の御むすめ、その年の八月に参らせたまふ。祖父殿
ゐたちて、儀式などいとあらまほし。
(濡標 ② 三〇一頁)

彼女の入内は、太政大臣が采配を振った。彼の養女となり身分を高

くしての入内だったことは後に示される。ここには、この入内にかける旧左大臣家の意気込みが感じられる。事実、彼の娘は帝と年も近く寵愛を受ける。娘が立后することを期待していた権中納言は現況を鑑みて、娘が中宮の地位を得ることをほぼ確信したのではない。ライバル光源氏には入内できる娘はおらず、彼を除けば権中納言と争うだけの財力・権力を持つ臣下は誰もいない。つまり、自分の娘と競い合うことができるような娘が入内する可能性が考えられなかったからだ。

さらに注意すべきは、彼女が弘徽殿女御と呼ばれていることである。

権中納言の御むすめは、弘徽殿女御と聞こゆ。大殿の御子にて、いとよそほしうもてかしづきたまふ。
(濡標 ② 三二一頁)

物語のなかで、弘徽殿は亡き右大臣の長姫弘徽殿女御から朧月夜へと譲られた局である。それを、今度は権中納言の娘が引き継いだ。右大臣家が持ち続けた宮中で繋がりも継承したととらえるべきだろう。右大臣家が擁したのは朱雀帝であり、譲位後も宮中で影響力を有していたはずである。そのうえ、今も彼の寵姫は右大臣の娘・朧月夜尚侍である。弘徽殿という局は右大臣家が有していた権力の象徴とも言える場所であり、それを今度は四の君を通して彼女の娘に伝えられた。弘徽殿女御は祖父・太政大臣のバックアップを受

けるだけでなく、朱雀院の庇護をも期待できる立場にあったと言える。旧左大臣家、旧右大臣家双方の持てる力を結集したのが弘徽殿女御の入内であり、政権を確実に得るための布石であったのだ。

一方の光源氏は、前斎宮を養女として入内させる。斎宮女御は冷泉帝より九歳も年上であったため、権中納言は彼女の入内を脅威とは感じなかった。しかし、彼女は絵を描くことが上手く、絵に興味を持つ冷泉帝の訪れが多くなるに至って、彼も対策を講じなければならなくなった。

権中納言聞きたまひて、あくまでかどかどしくいまめきたまへる御心にて、我人に劣りなむやと思しはげみて、すぐれたる上手どもを召し取りて、いみじくいましめて、またなきさまなる絵どもを、二なき紙どもに描き集めさせたまふ。「物語絵こそ心ばへ見えて見どころあるものなれ」とて、おもしろく心ばへあるかぎりを選びつつ描かせたまふ。例の月次の絵も、見馴れぬさまに、言の葉を書きつづけて御覧ぜさせたまふ。わざとをかしたれば、またこなたにてもこれを御覧ずるに、心やすくも取り出でたまはず、いといたく秘めて、この御方へ持て渡らせたまふを惜しみ領じたまへば

(絵合 ② 三七六～三七七頁)

権中納言は名人を集めて見事な絵を描かせ、帝を弘徽殿女御のもと

にとどまらせようと画策する。そして、絵を斎宮女御に見せたいという帝の希望には応じない。それは光源氏に対する対抗意識の現れであり、二人が若かった頃の戯れを思い出させるエピソードでもある。しかし、これがきっかけとなって、弘徽殿女御と斎宮女御の絵合が行われることになり、それぞれの後見である権中納言と光源氏の争いを象徴する行事に発展したのだ。

絵合に向けた絵の収集は、互いの持つ力を十分に反映したものと なった。斎宮女御方の絵は彼女所有の絵の他に、光源氏が自身の持つ絵を献上している。一方の弘徽殿女御方には旧右大臣家のつながりから得たものが含まれている。

院の御絵は、後の宮より伝はりて、あの女御の御方にも多く参るべし。尚侍の君も、かやうの御好ましさは人にすぐれて、をかしきさまにとりなしつつ集めたまふ。

(絵合 ② 三八五頁)

朱雀院所有の絵は弘徽殿太后を通じて弘徽殿女御に渡っている。また、朧月夜も絵については優れた趣味を持ち収集している事が示されており、そうして集められた絵も弘徽殿女御方に渡ることは容易に推測できる。つまり、旧右大臣家の女君達がこぞって弘徽殿女御のために協力しているのだ。田坂憲二氏はそのことについて「権中納言が冷泉朝下では旧右大臣家を吸収し、その支援を受けているこ

とを示しているのである。」と述べている。^(註²)先に示したように、入内に際して右大臣家の遺産ともいえる弘徽殿を使用したことで、彼女の今後に旧右大臣家が協力することは明らかであり、その後の右大臣一族の活躍が描かれないう事を見れば、田坂氏のいう「旧右大臣家を吸収」ということもまた事実だったといえよう。弘徽殿女御の母が四の君であることから、彼女が後宮における旧右大臣家の遺産を引き継ぐことに違和感はない。

このように、弘徽殿女御は冷泉帝の後宮において右大臣家ゆかりの局を受け継いだ。坂本共展氏が「権中納言の女は、弘徽殿太后と朧月夜から、後宮に於ける自分達の後継者と看做された。」と述べているように、^(註³)彼女が旧右大臣家の女性達が担った役割を引き継いだことは明らかである。それは、彼女の父である権中納言が旧右大臣家の勢力を引き継いだことにもなるのではないか。そのためには四の君の存在が不可欠だったのだ。

絵合は、須磨で光源氏が描いた絵が出されたことで齋宮女御方が勝利する。そして齋宮女御は中宮となった。絵合という優雅な遊びに置き換えられて進められた二人の権力闘争は、権中納言の負けで勝負を終えた。弘徽殿を受け継いだ娘は、先の弘徽殿女御と同じく中宮にはなれなかったのだ。その後、次の春宮のもとへは光源氏の娘が入内して寵愛を得ただけでなく、皇子も誕生した。一方、権中

納言が入内させようと考えた雲井雁は夕霧との一件もあって入内がかなわなかった。つまり、政権は光源氏の一族が担っていくことが明らかになったのだ。

五 藤原の家

その秋、太上天皇になずらふ御位得たまうて、御封加はり、年官、年爵などみな添ひたまふ。かからでも、世の御心にかなぬことなけれど

(藤裏葉 ③ 四五四頁)

娘・明石姫君を入内させ、夕霧も順調に出世し「世の御心にかなぬことなけれ」という光源氏は、准太上天皇の位についた。実はそれ以前、齋宮女御の立後の後に彼は権中納言に政権を譲っている。

大臣、太政大臣にあがりたまひて、大将、内大臣になりたまひぬ。世の中のこともまつりごちたまふべく、譲りきこえたまふ。

(少女 ③ 三一頁)

光源氏が太政大臣に、右大将(権中納言)が内大臣に昇進した。この機会に、光源氏は新内大臣が政を行えるように取りはからう。これは「譲りきこえたまふ」という言葉が示すように、光源氏から内大臣に「譲った」のである。彼は自らが勝ち取ったのではなく、譲られる事で権力を手にできたのだ。また「世の御心にかなぬこと

なければ」という状況であったことを考えれば、内大臣は権力を握ったとはいっても、光源氏を意識せざるを得ない事は明らかである。彼は、冷泉朝において光源氏が思うままの政治を行うための実務担当者でしかなかったのだ。

光源氏が准太上天皇の位につくと同時に、内大臣は太政大臣に昇進する。権力争いで勝てなかった光源氏に身分の上でも大きな差が生じ、彼が光源氏に勝つ事は不可能となった。そのうえ彼自身も太政大臣に昇進したことで、政権を次の世代にゆだねなければならぬ時期に來たのである。旧左大臣家の長として光源氏と権力争いを続けた彼の人生は、決して勝つことのない敗者としての人生であった。その争いに幕を引く時期に、柏木の物語が描かれるのである。そこには、権力者ではなく子の将来に対して奮闘し、嘆く親としての姿があつた。かつて光源氏が「頭中将のすさめぬ四の君」といわしめた妻との関係は、ここでは二人で同じものを求め行動する関係に変わっているのだ。

さて、柏木は、四の君腹の嫡男であり、幼少の頃より朱雀院の覚えめでたい人物であつた。

童なりしより、朱雀院のとりわきて思し使はせたまひしかば、御山住みに後れきこえては、またこの宮にも親しう参り、心寄せきこえたり。

(若菜下 ④ 一五七頁)

右大臣家の縁で、柏木が早くから朱雀院のもとに童殿上し、重用されていたであろう事は想像に難くない。その縁で、春宮とも親しかつた。次の世で権力を握るためには、春宮との関係は重要である。親しくつきあつていくことで、その懐に入り権力を握るのは政治家として当然であり、その意味で彼は順調に歩みを進めていたといえるだろう。だがその柏木は、なぜ弟の二郎君より遅れて登場するのだろうか。今井久子氏は、そこに右大臣家及び母・四の君との強力なつながりを指摘している^{註4}。

母の愛子として右大臣家の懐深く成長したのであれば、右大臣家に敵対する光源氏や左大臣家に即した韻塞ぎの負態の場面(賢木巻)には、むしろ登場しなくて当然である。また、濡標巻に、冷泉帝の即位と連動して夕霧の童殿上や弟紅梅の元服の記述があるのに、柏木の言及がないのも、すでにそれ以前、朱雀帝の治世時に柏木だけは童殿上も元服もすませていたと解し得る。濡標巻までの叙述に登場してこない柏木は、だからこそ父頭中将とともに行動し、冷泉帝の治世に元服した「高砂うたひし君」紅梅よりも、母と右大臣家にさらに近く、またより長く朱雀帝に近侍していた人物と読むことができるのである。冷泉帝の御代にはじめて童殿上した夕霧と比べると、柏木は朱雀帝の外戚である右大臣家の縁を強く身にまとい、朱雀帝に實際

に近侍し愛顧を受けていた時期を有していたのである

彼が、なぜ春宮と親しいのか。なぜ、二郎君のように父親と共に光源氏との遊びの場面で登場しないのか。夕霧とのライバル関係が語られる一方で、彼は単独もしくは父と一緒に光源氏と関わることはない。その理由は、この今井氏の指摘で説明できる。彼は、旧左大臣家の嫡男というより、旧右大臣家の後継者であったという意味づけがなされていたと解釈するのが妥当であろう。

その柏木は、朱雀院の鍾愛の宮・女三の宮の降嫁を望んだ。柏木の望みは、太政大臣によって院に伝えられただけでなく、旧右大臣家の縁を使つて四の君から朧月夜を通して働きかけた。寵妃である彼女から伝えることで朱雀院の心を柏木に向けさせようと考えたのである。また、先に示したように、彼は幼少より朱雀院の覚えもめでたかった。こうした状況から、柏木は女三の宮降嫁に手応えを感じていたのではないか。しかし、彼女の降嫁先は光源氏に決まる。旧右大臣家の縁も役には立たなかった。そして、ここでも太政大臣は光源氏に負けるのである。

結果として柏木の想いは密通という形で成就するが、それは柏木を死へと誘うものとなった。それは、太政大臣と四の君から時の権力者という威厳を取り除き、子を案ずる親としての姿のみを晒すことにもなったのだ。

大臣、母北の方思し騒ぎて、よそよそにていとおぼつかなしとて、殿に渡したてまつりたまふを、女宮の思したるさま、またいと心苦し。

(若菜下 ④ 二八一頁)

などか、まづ見えむとは思ひたまふまじき。我は、心地もすこし例ならず心細き時は、あまたの中にまづとりわきて、ゆかしくも頼もしくもこそおぼえたまへ。かく、いとおぼつかなきこと

(若菜下 ④ 二八二―二八三頁)

病みついた柏木を心配するあまり父母は彼を自邸に引き取る。彼には正妻・落葉の宮がいるので、そこで静養するのが筋である。しかも、彼女は更衣腹とはいえ朱雀院の皇女である。本来、彼女の体面をつぶすような行為は決して行ふべきではない。にもかかわらず、四の君は柏木の病に取り乱し自らの感情のみで行動する。そこには、権力者の正妻たる矜持はない。

政治的立場から考えれば、弘徽殿女御の立后が果たせなかった今、柏木への女三の宮降嫁は絶対に必要なものであった。春宮には源氏の娘が入内し皇子を儲けており、将来外戚として夕霧が政權を握る事は明白である。一方、太政大臣家には入内させる娘がない。したがって残る道は、前の左大臣が桐壺帝の同母妹の皇女を正妻に迎えたのと同様に、皇女の降嫁を願うその縁で政權を握る道しかなかったのである。幸いにも朱雀院の寵姫・朧月夜は四の君の妹であつ

たため彼女を通じて朱雀院に降嫁を働きかけることは当然のことである。しかし、四の君と朧月夜の努力も及ばず、女三の宮のことも思うに任せなかった。

先に述べたように、柏木に女三の宮が降嫁すれば、それを縁に春宮との新たな関係を築くことで権力を握ることができるようであった。実際、春宮は即位後に女三の宮を氣遣って位を上げ、御封を増やしている。その女三の宮の降嫁を柏木が望んだのは、政治的戦略として彼に残された唯一無二の手段だった。しかし、この柏木の求婚譚には政治的な意味が感じられない。彼が女三の宮の本質に気づくことなく彼女を求め続け死に至ることで、この話は男女の恋愛話にしかならなかった。彼の子どもを身籠もった後も、彼女が気にするのとは夫である光源氏の言動だけだった事を考えれば、恋愛話にもならなかったといえる。むしろ、彼女の本質に気づいた夕霧との差を見せつけただけでも知れない。と同時に、彼の両親である太政大臣と四の君からも権力者としての姿を消し去ってしまった。権力争いに敗れた太政大臣家は、最後の巻き返しのチャンスすら掴めなかった。四の君を通して得ていた右大臣家の力が費えたとき、彼らは普通の夫婦になったといえるのではないか。

六 おわりに

光源氏がまだ政治力を持たない時は、左大臣が後見につき左大臣家と右大臣家の対立という形で物語は進められた。しかし、右大臣が亡くなり光源氏が政治の中心に座ったとき、光源氏に対するのは右大臣家ではなく左大臣家であった。例えば、夕霧と雲井雁の結婚を許さない内大臣（権中納言）を光源氏は非難する。

中将を厭ひたまふこそ、大臣は本意なけれ。まじりものなく、きらきらしかめる中に、大君だつ筋にて、かたくななりとにや

（常夏 ③ 二二八頁）

他氏を交えず一族だけで栄えているから王孫である夕霧を嫌うのかと皮肉を述べることで、他氏を交えないという藤原氏のあり方が明示されている。藤原氏との対立関係を際立たせるために、右大臣家は左大臣家に飲み込まれたのではないか。それを、合理的かつ違和感なく進めるために四の君の存在が物語には必要だったのだ。

四の君は、左大臣家の嫡男の正妻として子を産み育てた。頭中将が光源氏と権力を争うために、彼女の実家の力は頭中将に必要なものであった。彼女は、子どもの母として長く政権に関与した。しかし、弘徽殿女御は皇子に恵まれず立后も出来ず、期待の嫡男柏木は後継者を残さず他界する。

女御の御ありさまなどよりも、はなやかにめでたくあらまほし

ければ、北の方、さぶらふ人々などは、心よからず思ひ言ふもあれど、何の苦しきことかはあらむ。

（藤裏葉 ③ 四四五頁）

四の君とは異なる女性を母に持つ雲井雁は、光源氏の嫡男・夕霧と結婚した。弘徽殿女御よりも華やいで見える彼女の様子を四の君たちは快く思わない。四の君の力が及ばぬところで内大臣家の将来は動き始める。結果として、四の君が担った役割を、今度は雲井雁が夕霧のために果たしていくのである。

註

註1 上野英子「右大臣家の姫君たち」九八頁（『源氏物語の探究 第十五輯』所収 風間書房 平2・10）

註2 田坂憲二「頭中将の後半生——源氏物語の政治と人間——」八一頁（『源氏物語の人物と構想』所収 和泉書院 平5・10）

註3 坂本共展「五つの大臣家と明石入道」二一六頁（『源氏物語 構成論』所収 笠間書院 平7・10）

註4 今井久代「柏木物語の「身」と「心」——柏木と「家」のなかの自己認識」三二〇頁（『源氏物語の構造論——作中人物の動

態をめぐって』所収 風間書房 平13・6）

第二節 左大臣家の姫君

一 はじめに

光源氏の正妻とされる女性とは、この長い物語の中で二人。添臥として立った葵、そして朱雀院皇女・女三の宮である。最初の正妻・葵の人物像について多く語られることはない。嫡男・夕霧を産んですぐに亡くなったことで、彼女が登場する巻自体が少ないからである。ただ、彼女の出産と死が描かれた巻は葵と命名されている。そして彼女が亡くなった後、女三の宮が降嫁するまで光源氏の正妻は存在しない。とすれば、葵という存在は希薄な様でいて彼の人生に大きな影響を与えていたといえるのではないか。

この二人の結婚が双方の父親の意思で決められたことは改めて指摘するまでもない。

引入れの大臣の、皇女腹にただ一人かしづきたまふ御むすめ、春宮よりも御気色あるを、思しわづらふことありけるは、この君に奉らむの御心なりけり。内裏にも、御気色賜らせたまへりければ、「さらば、このをりの後見なかめるを、添臥にも」ともよほさせたまひければ、さ思したり。（桐壺 ① 四六頁）

彼女については、まずその出自が語られる。父は左大臣、母は皇女。

それは将来中宮に立てる出自である。しかし、春宮からの意向に対して、左大臣は色よい返事をしない。その理由が「この君に奉らむの御心なりけり」というものであった。左大臣の意向は桐壺帝に伝えられ、了承を得る。光源氏元服に際して、左大臣は加冠役を務め、その娘・葵が添臥になることが決まったのである。光源氏の元服は、彼が桐壺帝の庇護を離れ、左大臣家の庇護下に入ることを（公）にする儀式でもあったのだ。

春宮からの意向もあつた娘をその弟であり臣下に降った光源氏と娶せた彼らの思惑は、明らかに政治的なものであった。正妻腹の娘は葵ただ一人であり、そのため彼女を語る上で左大臣家の影響力を抜きにすることはできない。むしろ左大臣家を表するのが、葵という人物だといえるのではないか。それならば、光源氏の人生に大きく関わった葵という人物を読み解くことは、女性が男性の政治権力に影響を与えていたことを明らかにするのではないか。そこで、宮中での政治権力の推移と、光源氏と葵の二人の関係の関連性を示しながら女性が支える権力について考えてみたい。

二 光源氏の立場

物語冒頭、桐壺巻で光源氏はその誕生から元服と結婚までが描か

れる。父は帝であり政の中心にいる。後宮には女御・更衣が幾人も存在しているが、中でも右大臣の娘・弘徽殿女御は一の宮を産んでおり世間的にも重んじられる立場にあった。そうした状況の下、桐壺更衣が懷妊、光源氏が生まれたのである。

後見人のいない更衣が生んだ皇子は、母と祖母を亡くした後宮中で育てられた。親族は帝だけであつたため、彼の教育方針については帝がすべて差配した。彼の成長を見守るのは帝であり、何ごとにも優れた才能を示す彼を帝が寵愛したのは当然であつただろう。桐壺帝には他にも皇子・皇女がいたが、彼のように帝の近くで成長した子どもはいない。

その一方で、物語は彼がいかに優れているかを示すと同時に、彼を後見する人物がいないことを繰り返して述べている。

月日経て若宮参りたまひぬ。いとどこの世のものならずきよらにおよすけたまへれば、いとゆゆしう思したり。

明くる年の春、坊定まりたまふにも、いとひき越さまほしう思せど、御後見すべき人もなく、また、世のうけひくまじきことなりければ、なかなかあやふく思し憚りて、色にも出ださせたまはずなりぬるを、「さばかり思したれど限りこそありけれ」と世人も聞こえ、女御も御心落ちゐたまひぬ。

(桐壺 ① 三七頁)

桐壺帝は「この世のものならずきよら」に成長した光源氏を春宮に望んではいたが、弘徽殿女御の産んだ一の宮を春宮に据えざるを得ない。その理由として、光源氏には後見人がいないこと、彼の立場は世間の人々も納得しない事が予想されることが示されている。後見人のしつかりした皇子が春宮に立つことが道理と世間の人は考えているのだ。「さばかり思したれど限りこそありけれ」というこの言葉は、宮中における光源氏と桐壺帝の置かれた現実を表している。光源氏がいかに優れた才を持っていたても、母の身分が更衣でしかなく、しかもその実家を支える人物が存在しないとすれば、親王として生きていくことも難しいのが現実であつたはずだ。

今は内裏にのみさぶらひたまふ。七つになりたまへば読書始などせさせたまひて、世に知らず聴うかしこくおはすれば、あまり恐ろしきまで御覽ず。

(桐壺 ① 三八頁)

わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲居をひびかし、すべて言ひつづけば、ことごとしうたてぞなりぬべき人の御さまなりける。

(桐壺 ① 三九頁)

宮中以外に暮らす場所のない光源氏は、当時としてはまれな存在であつた。帝の子どもは本来母親の実家で養育されるため、彼らの教養を窺い知る機会はあまりない。しかし、宮中で暮らす光源氏が成長する様を、人々は容易に知ることが出来た。読書始めをさせれば

その聡明さを示し、学問はいうに及ばず琴や笛といった音楽も人々が驚く程の才を示す。それは大げさとも感じられる言葉で語られているのだ。

その一方で、光源氏のたぐいまれなる聡明さ、賢さには帝は恐怖すら覚えている。将来を期待させるそれらは、後見人を持たぬ不安定な立場の彼にとっては諸刃の剣であつたのだ。桐壺帝が高麗人の相人に光源氏の相を見させたのは、彼の将来に対する不安の大きさ故であつたといえる。

国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷のかためとなりて、天の下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし

(桐壺 ① 三九〇四〇頁)

帝王の相ではあるが、そうなると世が乱れるかもしれない。しかし政治を輔佐するという相でもない。この不思議な高麗の相人の見立ては、その後の光源氏の人生に対する予言と受け止められている。そして、これより前に倭相を試みて同様の見立てを得ていたことも示され、桐壺帝に父として何をなすべきかを決心させることになった。

帝、かしこき御心に、倭相を仰せて思しよりにける筋なれば、今までこの君を親王にもなさせたまはざりけるを、相人はまこ

とにかしこかりけりと思して、無品親王の外戚の寄せなきにては漂はさじ、わが御世もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見をするなむ行く先も頼もしげなめることと思し定めて、いよいよ道々の才を習はさせたまふ。際ことにかしこくて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王となりたまひなば世の疑ひ負ひたまひぬべくものしたまへば、宿曜のかしこき道の人に勘へさせたまふにも同じさまに申せば、源氏になしたてまつるべく思しおきてたり。

(桐壺 ① 四〇〇四一頁)

倭相と高麗の相人の見立てから光源氏を親王とはしなかった。なぜなら親王は皇位に着くことができる。皇位に着けば国が乱れる相といわれた彼を、親王にはできない。高麗の相人、倭相、宿曜道。どれも同じ見立てとなったことで、帝は彼を臣下に降ろすことにしたのだ。彼の人生を閉ざさないためには、彼の不安定な立場を払拭し、臣下として身を立てる方が安全だからだ。まずは諸学を学ばせ、その一方で彼に強力な後見をつけるべく動いたのは当然のことである。その後見役に選ばれたのが左大臣であつた。

当時、宮中では左大臣と右大臣がその権力を巡って対立していた。本来春宮の後見である右大臣の政治的立場は強固な物であるはずだ。しかし、左大臣は桐壺帝の信頼が厚いばかりでなく、彼と同母腹の皇女を正妻に迎えた姻戚関係にあつた。そこに帝鍾愛の光源氏

が加われば、左大臣家の勢いが右大臣家を凌ぐものとなるのは間違いないだろう。

桐壺帝が彼を親王ではなく臣籍降下したことは、後継争いから外すだけでなく、無品の親王として頼りない生涯を送らせないという帝の配慮に拠るものであった。そして、光源氏の添臥に葵を選ぶことで、その父・左大臣を彼の後見に定めたのだ。光源氏の元服は、帝の采配により宮中で行われた。春宮のそれよりも盛大に行われたともいわれた儀式は、臣籍降下する光源氏に対する帝の愛情を示すものであったはずだ。彼が政治の世界で生きていくための道筋を父・桐壺帝が整えたといえるだろう。

その一方で、左大臣が娘を春宮ではなく光源氏と結婚させたことは、左大臣家としての戦略として意味のあることであつた。春宮の後見たる右大臣と手を結ぶのではなく、彼と対立する道を取ることで、左大臣家として今手にしている優位性を維持することを選んだからである。

御前より、内侍、宣旨うけたまはり伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。御祿の物、上の命婦取りて賜ふ。白き大桂に御衣一領、例のことなり。御盃のついでに、

いときなきはつもとゆひに長き世をちぎる心は結びこめつや

御心ばへありておどろかさせたまふ。

結びつる心も深きもとゆひに濃きむらさきの色しあせずはと奏して、長橋より下りて舞踏したまふ。

（桐壺 ① 四六～四七頁）

右の記述は、二人の結婚が桐壺帝と左大臣の意志に因るものであることを示すものである。桐壺帝は「はつもとゆひ」に二人の結婚が末永く続くことを願い、左大臣は光源氏が心変わりすることなく葵と添い遂げることを願う。加冠役に対する慣例通りの下賜の品とそれに対する御礼の拝舞。二人は、元服の祝いの場で和歌に互いの意思を託し、確認し合った。桐壺帝は左大臣に念を押し、左大臣は受諾と誓いを述べる。二人の盟約はここに成立し、左大臣家を後見人とした臣下としての光源氏の生活が始まったのである。

しかし、この結婚生活は双方の父が期待した通りにはならなかった。その理由の一つには藤壺女御の存在があげられる。幼い時に母を亡くした光源氏が、母に生き写しといわれる藤壺女御に対して特別な想いを抱いたとしても不思議はないだろう。

源氏の君は、上の常に召しまつはせば、心やすく里住みもえしたまはず。心の中には、ただ、藤壺の御ありさまをたぐひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな、大殿の君、いとをかしげにかしづかれたる人

とは見ゆれど、心にもつかずおぼえたまひて、幼きほどの心ひとつにかかりて、いと苦しまでぞおはしける。

(桐壺 ① 四九頁)

宮中で暮らす光源氏の心の中には理想の女性として藤壺が存在している。葵が大切に育てられたことも、その容姿の美しさもわかつているが、愛情を抱くには至らない。帝の信任篤い左大臣と帝の同母腹の皇女の間に生まれた彼女は、春宮妃に望まれる身分と容姿から当然最上位の女性と考えて良いだろう。しかし、藤壺女御もまた先帝の四の宮であり最上位に属する女性である。葵にとって不幸だったのは、彼女と結婚する前にすでに理想の女性として彼の心の中に藤壺女御が存在していたことだ。父・桐壺帝の寵妃・藤壺女御。彼は葵と藤壺女御を比較し、結果として葵になじめずその反動で藤壺女御への思慕を募らせていく。

さらに、もう一つの理由は、葵の側にあった。

いときびはにておはしたるを、ゆゆしうつくしと思ひきこえたまへり。女君は、すこし過ぎたまへるほどに、いと若うおはすれば、似げなく恥づかしと思いたり。

(桐壺 ① 四八頁)

十二歳で元服した光源氏は「ゆゆしうつくし」と表されており、子どもの様なそのかわいらしさは恐ろしいほどであると左大臣家の

人々は感じている。一方の葵は、光源氏より四歳年上であった。そのことで、葵が自分は光源氏にふさわしくなく恥づかしいと感じていたからだ。この「似げなく恥づかしと思いたり」という考えが、その後の葵の言動の源となっていると考えられる。葵が一向に光源氏になじまない理由がここにあったのだ。

結婚によって、光源氏は有力な後見を得ることはできたが、妻と心通わせるまでには至らなかった。桐壺巻では光源氏の優れた才能と政治基盤の弱さを明らかにし、それを補うものとして葵を彼の添臥に選び左大臣を後見人とした。帝である父ができる最善の処置であったことは、物語上明らかである。しかし、光源氏の心は藤壺女御にあり、それが葵が感じたコンプレックスと合わさって結婚生活に対する不安定要素となっているのだ。臣下としての光源氏の歩みはこうした状況から始まっていくのである。

三 心通わぬ二人

父親同士の政治的意図によって結婚した二人の関係は、良好とはいえないものであったが、破綻することはなかった。父親同士の関係にも変化はなく、互いが政の中心にいて、その政治基盤に揺るぎはない。この二人の関係が安定していることが、光源氏と葵の関係

の維持に繋がっているといえる。それぞれの父親の庇護があるために、二人の関係が不安定であるにもかかわらず結婚生活が維持されているのだ。

光源氏はあまり左大臣家に通わず、物語の上でも空蟬、夕顔、六条御息所、末摘花、朧月夜といったように次々とその女性関係が明らかになっている。その一方で、左大臣家では葵が光源氏に対して冷めた態度をとり続ける。二人の冷えた関係は、葵巻で葵の懷妊が明らかになるまでの間繰り返して語られるのだ。

殿にも、おはしますらむと心づかひしたまひて、久しう見たまはぬほど、いとど玉の台に磨きしつらひ、よろづをととのへたまへり。女君、例の、這ひ隠れてとみにも出でたまはぬを、大臣切に聞こえたまひて、からうじて渡りたまへり。ただ、絵に描きたるものの姫君のやうにしゑられて、うちみじろきたまふこともかたく、うるはしうてもしたまへば、思ふこともうちかすめ、山路の物語をも聞こえむ、言ふかひありてをかしううち答へたまはばこそあはれならめ、世には心もとけず、うとく恥づかしきものに思して、年の重なるに添へて、御心の隔てもまさるを、いと苦しく思はずに、「時々世の常なる御気色を見ばや。たへがたうわづらひはべりしをも、いかがとだに問ひたまはぬこそ、めづらしからぬことなれど、なほ恨めしう」

と聞こえたまふ。からうじて、「問はぬはつらきものにやあらん」と、後目に見おこせたまへるまみ、いと恥づかしげに、気高ううつくしげなる御容貌なり。「まれまればあさましの御言や。問はぬなどいふ際は異にこそはべるなれ。心憂くものたまひなすかな。世とともににはしたなき御もてなしを、もし思しなほるをりもやと、とぎまかうざまにこころみきこゆるほど、いと思しうとむなめりかし。よしや。命だに」とて、夜の御座に入りたまひぬ。女君、ふとも入りたまはず、聞こえわづらひたまひて、うち嘆きて臥したまへるも、なま心づきなきにやあらむ、ねぶたげにもてなして、とかう世を思し乱ること多かり。

（若紫 ① 二二六～二二七頁）

長い引用になったが、ここは左大臣家における光源氏と葵の夫婦関係をよく表した場面である。美々しく飾り立てられた部屋は、左大臣家の財力・権力の象徴といつていい。その美しい部屋に居るのが光源氏と左大臣であり、葵が左大臣に促されてようやく姿を表すことは、この結婚が左大臣主導のものであることを示している。

また、ここでは葵の人物像が示される。「絵に描きたるものの姫君のやう」「気高ううつくしげなる御容貌」とその美しさを称えられてはいるが、身じろぎもせず行儀よく座っているような女性であった。「世には心もとけず、うとく恥づかしきものに思して、年の

重なるに添へて、御心の隔てもまさる」とあるように、語りかける光源氏に対して葵の心は寄り添うことはない。かみ合わない二人の会話。寝所に入る光源氏にすぐについて入るでもなく、入ってきてもため息をついて横になる葵に対して、彼が不快感を抱くのは当然であり、左大臣家から足が遠のく理由とされている。

左大臣家の力で飾られた姫君の行為は、この結婚が政治的な物ではないことを露骨に示したものだといえよう。葵は人形のような女性と評されるが、その人間性のなさ、権力を示す道具として、また左大臣家を表す入れ物として、彼女が造型されたからだと考えられる。

おほかたの気色、人のけはひも、けざやかに気高く、乱れたるところまじらず、なほこれこそは、かの人々の棄てがたくと出でしめ人には頼まれぬべれと思すものから、あまりうらはしき御ありさまの、とけがたく恥づかしげに思ひしづまりたまへるを
(帚木 ① 九一頁)

「雨夜の品定」で人々がいつていた信頼の置ける妻として棄てがたい女性とは、葵のような女性のことだろうと光源氏は思う。その一方で、彼女の打ち解けにくく取り澄ました様子は気詰まりにしか感じられず、彼にとっては物足りない妻でしかない。

内裏より、大殿にまでたまへれば、例の、うるはしうよそ

ほしき御さまにて、心うつくしき御気色もなく苦しければ、「今年よりだに、すこし世づきてあらためたまふ御心見えば、いかにうれしからむ」など聞こえたまへど、わざと人すゑてかしづきたまふと聞きたまひしよりは、やむごとく思ひ定めたることにこそはと心のみおかれて、いと疎く恥づかしく思さるべし、しひて見知らぬやうにもてなして、乱れたる御けはひにはえしも心強からず、御答へなどうち聞こえたまへるは、なほ人よりはいとことなり。四年ばかりがこのかみにおはすれば、うちすぐし恥づかしげに、盛りにととのほりて見えたまふ。何ごとかはこの人の飽かぬところはものしたまふ、わが心のあまりけしからぬさびにかく恨みられたまつるぞかし、と思ひ知らる。同じ大臣と聞こゆる中にも、おぼえやむごとくおはするが、宮腹にひとりいつきかしづきたまふ御心おごりいこよなくて、すこしもおろかなるをばめざましと思ひきこえたまへるを、男君は、などかいとさしもと馴らはいたまふ、御心の隔てどもなるべし。
(紅葉賀 ① 三二二―三二三頁)

宮中から左大臣家に退出した光源氏を待っていたのは、「例のうるはしうよそほしき御さまにて、心うつくしき御気色もなく」居る葵であった。「例の」とあることから葵のこうした態度が常のことであることが解る。美しいがよそよそしく、心優しく素直な様子

見られない。そんな葵の態度が光源氏には辛く苦しいのだ。彼は「すこし世づきてあらためたまふ御心見えば、いかにうれしからむ」とその関係を改めようと提案する。しかし、二条院に迎えた紫のことを聞き及んでいる葵は、彼の言葉を素直に聞き入れることはできない。四つ年上の葵は、今を盛りと美しい。大臣の中でも人望篤い左大臣が、将来の後として大切に育てたため、気位も高い。それ故、彼女はおろそかに扱われることを心外に思うのだが、彼としては「などかいとさしもと馴らはいたまふ」のだ。これが心の溝を作り出していると言われる。

その一方で「なほ人よりはいとことなり」「何ごとかはこの人の飽かぬところはものしたまふ」とあるように、彼は葵のことを認めており、「わが心のあまりけしからぬすさびにかく恨みられたてまつるぞかし」と自らの反省も述べている。

うちうちのありさまは知りたまはず、さも思さむはことわりなれど、心うつくしく例の人のやうに恨みのたまはば、我もうらなくうち語りて慰めきこえてんものを、思はずにのみとりないたまふ心づきなさに、さもあるまじきすさびごととも出で来るぞかし、人の御ありさまの、かたほに、そのことの飽かぬとおぼゆる疵もなし、人よりさきに見たてまつりそめてしかば、あはれにやむごとなく思ひきこゆる心をも知りたまはぬほどこそあ

らめ、つひには思しなほされなむと、おだしく軽々しからぬ御心のほどもおのづからと、頼まるる方はことなりけり。

（紅葉賀 ① 三一六頁）

葵が素直に恨みごとをいつてくれれば、こちらも事情を説明して誤解を解くことができるが、邪推をされるのもおもしろくない。彼女に不足・不満・欠点があるわけでもない。最初に逢った女性であり、大切に思っている。彼女の落ち着いた分別のある性質を頼りにしている点は、ほかの女性とは異なる大きな要因である。ただ、現実的には心情が互いにかみ合うことがない。二人の結婚生活は、すれ違ふ心のままに月日が過ぎていくのだ。

一方、左大臣の光源氏に対する心遣いには、彼も十分に感謝していた。

長雨晴れ間なきころ、内裏の御物忌さしつづきて、いとど長居さぶらひたまふを、大殿にはおぼつかなく恨めしく思したれど、よろづの御よそひ何くれとめづらしきさまに調じ出でたまひつつ、御むすこの君たち、ただこの御宿直所の宮仕をつとめたまふ。

（帚木 ① 五四頁）

左大臣は光源氏が寄りつかないことを恨みに思いつつも、彼のために衣装をはじめとして様々に身の回りのものを整え、子息達を仕えさせている。後見人として、左大臣は桐壺帝との約束を違えること

はなかったのだ。左大臣がいかに光源氏を婿として大切に世話をしているのか、彼もそれは理解している。生活面及び政の場における後見という意味では、左大臣家は大いに寄与しているが、当の二人の間に夫婦としての愛情やいたわりが存在しないことは不幸であつたといえるだろう。

しかし、いつまでも二人の不仲が続くことは、桐壺帝・左大臣双方にとって好ましいことではない。帝は光源氏の将来を考えて左大臣を後見につけたのだ。したがって光源氏とその後見人・左大臣の不和を招くことは避ける必要がある。彼の将来を考えての布石は盤石でなければならぬからだ。にもかかわらず、光源氏が二条院に紫を迎えたことが人々に取り沙汰され、帝も知るところとなった。現状を危惧した帝は、光源氏を叱責する。

いとほしく大臣の思ひ嘆かるなることも、げに。ものげなかりしほどを、おほなおほなかくものしたる心を、さばかりのことたどらぬほどにはあらじを、などか情けなくはもてなすなるらん

(紅葉賀 ① 三三四～三三五頁)

帝のいう「ものげなかりしほどを、おほなおほなかくものしたる心」は、光源氏も十分理解していることは繰り返し示されている。彼はただ恐縮するばかりで、返事ができなかった。この叱責の後、光源氏と葵の関係は葵巻まで描かれることはない。ただ、光源氏と源典

侍、朧月夜との関係が語られていくのである。

四 葵の懷妊

葵巻では、二人の關係に決定的な変化が訪れる。それは葵の懷妊であつた。彼女の懷妊及び出産は桐壺帝と左大臣家が待ち望んだことである。光源氏と葵、二人を強く結びつける絆として、子どもが大きな役割を果たすと考えられていたのだ。そして、この一連の出来事がそれが桐壺帝の讓位という政治的变化と共に表出するところにこの結婚のもつ意味が示されている。

實際、葵の懷妊は二人の關係に変化をもたらせる兆しでもあつた。

大殿には、かくのみ定めなき御心を心づきなしと思せど、あまりつつまぬ御氣色の言ふかひなければにやあらむ、深うも怨じきこえたまはず。心苦しきさまの御心地になやみたまひてもの心細げに思いたり。めづらしくあはれと思ひきこえたまふ。

誰も誰もうれしきものからゆゆしう思して、さまさまの御つつしみせさせたてまつりたまふ。(葵 ② 一九～二〇頁)

六条御息所との噂は葵を不愉快にさせたが、深く恨むことにならなかったのは、彼女が光源氏の子どもを身ごもったからだろう。また、気分がすぐれず心細そうにしている葵を、光源氏は愛しく思う。彼

女の懷妊は、周囲の喜びを招いただけでなく、二人がお互いを再認識するきっかけとなったといえるのではないか。

一方で、懷妊した葵は物の怪に悩まされる。この物の怪は、車争いで屈辱を受けた六条御息所であつた。物の怪は葵を苦しめ、光源氏や左大臣家の人々を心配させる。光源氏の子を身ごもつたことで、彼を取り巻く人々の関心を一身に集める葵と、彼女に嫉妬して物の怪として祟る六条御息所を対比させながら物語は進んでいく。ついには、葵が危篤になり、光源氏は彼女と向き合つた。

御几帳の帷子ひき上げて見たてまつりたまへば、いとをかしげにて、御腹はいみじう高うて臥したまへるさま、よそ人だに見たてまつらむに心乱れぬべし。まして惜しう悲しう思ふことわりなり。白き御衣に、色あひいと華やかにて、御髪のいと長うちちたきをひき結ひてうち添へたるも、かうてこそらうたげになまめきたる方添ひてをかしかりけれと見ゆ。御手をとらへて、「あないみじ。心憂きめを見せたまふかな」とて、ものも聞こえたまはず泣きたまへば、例はいとわづらはしう恥づかしげなる御まみを、いとたゆげに見上げてうちまもりきこえたまふに、涙のこぼるるさまを見たまふは、いかがあはれの浅からむ。

(葵 ② 三八―三九頁)

死を意識した対面は、光源氏の葵に対する感情を揺さぶることにな

つた。白い衣で横たわる葵の美しい姿に彼は動揺する。苦しむ彼女からは平素の気位の高さや取り付きにくさが消え、涙を流す姿に光源氏は深い愛情を感じている。ここでようやく二人が夫婦として互いを認めたといえる。この後も葵の美しさは繰り返し述べられ、彼女をいたわる光源氏の姿が示される。

若君のいとゆゆしきまで見えたまふ御ありさまを、今からいとさまことにもてかしづききこえたまふさまおろかならず、事あひたる心地して、大臣もうれしいみじと思ひきこえたまへる

(葵 ② 四三頁)

葵の産んだ男児はまことに美しく、光源氏はその子を大切する。左大臣はすべての望みが叶つたと喜ぶ。彼女の出産は、危うくなつていた左大臣家と光源氏の関係を改めて強固に結びつける結果になつたのである。

五 葵の死と左大臣家

しかし、葵は夕霧を出産した後亡くなつてしまふ。左大臣家と光源氏を繋ぐ絆であつた葵の消失は、この関係を危うくさせる可能性があつた。しかし新たに関係をつなぐ絆としての嫡男・夕霧が存在した。葵の死後、夕霧の養育は左大臣家にゆだねられ、父である光

源氏も左大臣家から離れることはなく、引き続き関係が築かれていた。
った。

ここで、物語は桐壺院の死を迎える。譲位して後も強い政治力を有した桐壺院の死は、左大臣家と光源氏の政治的基盤を大きく揺るがすことになった。朱雀帝が桐壺院の遺言を守ろうとしても、彼を支える右大臣や母・弘徽殿女御がそれを許さず、権力は一気に右大臣家に移ることとなり、左大臣家及び光源氏の不遇が描き出されていく。

大將は、ありしに変わらず渡り通ひたまひて、さぶらひし人々をも、なかなかこまかに思しおきて、若君をかしづき思ひきこえたまへること限りなければ、あはれにありがたき御心と、いとどいたつききこえたまふことも同じさまなり。限りなき御おぼえの、あまりもの騒がしきまで暇なげに見えたまひしを、通ひたまひし所どころもかたがたに絶えたまふこともあり、軽々しき御忍び歩きも、あいなう思しなりてことにしたまはねば、いとのだやかに、今しもあらまほしき御ありさまなり。

（賢木 ② 一〇二―一〇三頁）

桐壺院が亡くなって後も、光源氏は昔と変わりなく左大臣邸に通う。葵に仕えていた女房達を気遣い、左大臣家で養育されている若君を大切にしている。こうした彼の態度が、左大臣家にはうれしく感じ

られ、前にも増して彼を大切に後見している。時世が変化したことで、彼はあちこちにあつた通い先と疎遠になり、忍び歩きが減った。以前より落ち着いた理想的な日々を送っているのだ。

一方、葵の死で光源氏の正妻の座が空位になった。世間では、彼の正妻候補として六条御息所や朧月夜が取りざたされる。このときばかりは、政敵・右大臣も娘・朧月夜を彼の正妻にしてもよいと考えていた。しかし、光源氏はどちらも正妻としない。彼は紫を妻にするが、彼女との結婚は正式な手順を踏んだものではなかった。そのため、彼女は終生正妻格ではあっても、正妻ではなかった。あくまでも彼の正妻は亡き葵であり、彼の後見は左大臣家だったのだ。

朔日は、例の、院に参りたまひてぞ、内裏、春宮などにも参りたまふ。それより大殿にまかだたまへり。大臣、新しき年とも言はず、昔の御事ども聞こえ出でたまひて、さうざうしく悲しと思すに、いとど、かくさへ渡りたまへるにつけて、念じ返したまへどたへがたう思したり。御年の加はるけにや、もののしき気さへ添ひたまひて、ありしよりけにきよらに見えたまふ。立ち出でて御方に入りたまへれば、人々もめづらしう見たてまつりて忍びあへず。若君見たてまつりたまへば、こよなうおよすけて、笑ひがちにおはするもあはれなり。まみ、口つき、ただ春宮の御同じさまなれば、人もこそ見たてまつりとがむれ

と見たまふ。御しつらひなども変らず、御衣掛の御装束など、例のやうにし懸けられたるに、女のが並ばぬこそはえなくさうざうしけれ。

(葵 ② 七七―七八頁)

葵亡き後の正月、光源氏はいつもの様に宮中に参内した後左大臣家を訪れた。今までと部屋の様子は変わらないのに、準備された正月の衣装に女君の装束がない。彼は左大臣家が用意した衣装に着替える。ここにも、葵亡き後も変わらぬ左大臣家との関係が示されている。

その後の物語の中で光源氏と左大臣家の関係はどのように変化していくのか、簡単にまとめておきたい。朱雀帝の御代になって、左大臣は致仕の表を出して引きこもり、光源氏は朧月夜との密会が発覚して須磨に蟄居させられることになった。須磨・明石での蟄居の間、彼の嫡男・夕霧は左大臣家で養育されており、折々の便りを交わすなどその関係に変化はなかった。やがて、光源氏は朱雀帝によって京に召喚される。その後は朱雀帝の譲位、冷泉帝即位と時勢は変化し、世の政は太政大臣と光源氏の思いのままとなった。

しかし、明石から帰還した光源氏は以前とは異なり、自ら政を動かすだけの力を蓄えていた。光源氏を冷泉帝の後見とした桐壺院の遺言は守られ、彼は後見される人から後見する人へと立場を変化させた。朱雀院も彼を頼りにして春宮（朱雀院皇子）の後見を依頼し

た。彼が皇家と血縁関係であることは、宮中での立場をより高いものに押し上げているといえるのではないか。

濡標巻で、左大臣家は頭中将の娘を入内させる。六条御息所は娘を光源氏に託して亡くなる。かつて葵を苦しめた六条御息所の娘が彼に託され、左大臣家との権力争いに利用されることになるのだ。薄雲巻で太政大臣と藤壺中宮が亡くなり、政の場では光源氏と頭中将が直接対立することになった。ここに於いて光源氏は左大臣家の庇護を離れ自らの足で立つことになったといえる。この後、物語は絵合巻で光源氏が後見を務める斎宮女御が入内し、先に入内した頭中将の娘・弘徽殿女御と冷泉帝後宮に於いて寵を争う。そして少女巻で夕霧が元服し斎宮女御が立后することで光源氏と頭中将の対立が明らかになっていくのである。

六 おわりに

光源氏と葵の結婚は、政治的な思惑から始まった^(註1)。後見のない光源氏に有力な後見人をつけた桐壺帝と、右大臣家に対する優位性を保ち続けた左大臣との政治的な判断が一致した結果が、この結婚であった。吉井美弥子氏は、葵が登場の場だけでなくその死の場面が「秋の司召」であることから「葵の上がその登場の際ばかりか、

死においてさえなお左大臣側対右大臣側の政治的な対立と切り離せない位置にある人物である」と指摘したうえで、光源氏と葵の関係を次のように捉えている。^(註2)

光源氏が、左大臣家の姫君たる葵の上と親密になりえたとすれば、それは光源氏にとって、一人の女との愛情関係が生じることを意味する以上に、左大臣側と内実ともに深く結びつくこと、極端ないいかたをすれば、左大臣側に組み込まれてしまうことを意味することになる。とすれば、光源氏が葵の上と結婚したものの、親密になれない、しかも左大臣に優越した立場にあるという状況こそ、葵の上と結婚することによって左大臣側と結び付き現実的な後見を得ながら、左大臣側に組み込まれることなく、現実的な政治的対立とは異なるところにある、超越した主人公としての光源氏像を浮かび上がらせるものであると考えられるのではないか。

吉井氏はこれを「葵の上の実体的な生のありかたや性格を論じるという作中人物論ではない角度からの、葵の上論」と断っているが、光源氏と葵、左大臣の関係性のとらえ方は注目すべきである。しかし、私は桐壺帝が権力を有する間は、むしろ左大臣の庇護下に入っていたと考える。臣下としての生き方は、左大臣から学ぶべきである。また、弘徽殿女御を含む右大臣家から疎まれる立場としては、

彼らと対立する左大臣家に与する方が理にかなっている。左大臣の庇護下で力を蓄える事が、光源氏の将来に向けての糧になったはずである。そして、彼と左大臣家を繋ぐ絆として葵が存在したのだ。

桐壺帝が権力を有する間、光源氏と葵の関係が不安定であってもそれが大きな問題ではなかった。左大臣家を繋ぐ絆としての葵うまく関係を結べなくても、彼の政治的立場は帝の庇護もあり安泰であつた。しかし桐壺帝には譲位による政治権力の喪失はなかったが、やはり朱雀帝を後見する右大臣が力を強めることにはなつたはずだ。こうした状況の変化に対応して、光源氏と葵の関係も変化する。葵の懷妊は、双方の親が待ちかねたものであり、彼と左大臣家の関係を強固なものにした。葵は出産に際して命を落とすが、誕生した嫡男・夕霧は、左大臣家と光源氏を新たに結ぶ絆となった。桐壺院崩御後の政権変化の中で、光源氏と左大臣家は葵の生前と変わらぬ関係を維持していたのだ。

その後の物語の中で、左大臣の嫡男・頭中将は正妻の実家右大臣家との関係を強めていき、光源氏は夕霧を絆として左大臣家、特に大宮とかかわりを維持し続けた。後に夕霧がその居として左大臣邸を引き継ぐことになる。彼の正妻が頭中将の娘・雲井雁であり、その関係から左大臣邸を引き継ぐことに違和感はなかったかもしれない。しかし、左大臣の正妻・大宮が最後に頼りにしたのは夕霧であ

り光源氏であつたことを考えれば、葵の繋いだ絆は、彼女の死後も存在し続けたといえる。つまり、左大臣家と光源氏を繋いだ葵という存在は、物語に多大な影響を及ぼしたのだ。

註

註1 この結婚に政治性を指摘する論は多い。森一郎「光源氏の政治的生涯―光源氏とその周囲―」（『源氏物語の表現と人物造形』 和泉書院 平12・9）、吉海直人「左大臣の暗躍」（『源氏物語の新考察―人物と表現の虚実―』 おうふう

平15・10）、石原昭平「英明なる重鎮・左大臣―賜姓源氏の

「帝になり給ひ」「ぬべき君」に賭ける―」（森一郎編『源氏物語作中人物論集』 勉誠社 平5・1）などがある。

註2 吉井美弥子 「葵の上の『政治性』とその意義」（『読む源氏物語 読まれる源氏物語』所収 森話社 平20・9） 一

二四頁・一三一頁・一三二頁

第三章 六条院という空間―疑似後宮で生きる〈源氏〉

第一節 光源氏の創った世界―六条院

一 はじめに

さまざま集ひたまへりし御方々、泣く泣くつひにおはすべき
住み処どもに、みなおのおの移ろひたまひしに、花散里と聞こ
えしは、東の院をぞ、御処分所にて渡りたまひにける。入道の
宮は、三条宮におはします。今後は内裏にのみさぶらひたまへ
ば、院の内さびしく人少なになりけるを、右大臣、「人の上
にて、いにしへの例を見聞くにも、生ける限りの世に、心をと
どめて造り占めたる人の家居のなごりなくうち棄てられて、世
のならひも常なく見ゆるは、いとあはれに、はかなさ知らるる
を、わが世にあらん限りだに、この院荒らさず、ほとりの大路
など人影離れはつまじう」と思しのたまはせて、丑寅の町に、
か的一条宮を渡したてまつりたまひてなむ、三条殿と、夜ごと
に十五日づつ、うるはしう通ひ住みたまひける。

（匂兵部卿 ⑤ 一九〇二頁）

匂兵部卿巻では、光源氏亡き後の六条院の寂しさが示される。そ

もそも正妻・女三の宮は出家後三条宮で暮らしていたが、夏の御殿の主であつた花散里が二条東院へ移ると、明石中宮は内裏で過ごすことが多く、六条院南の町・東の対に女一の宮が住み、東の町の寝殿を二の宮が宮中からの下がり所として利用している以外、この六条院に住む者はいない。この寂しい現状を変えるために、夕霧は落葉の宮を一条からこの六条院に移し、月の半分を通うことにした。後に藤典侍腹の六の君を落葉の宮の養女として匂宮を婿に迎える等六条院は物語の舞台として機能しているが、あくまでも「わが世にあらん限りだに、この邸荒らさず」という範囲でしかない。「生ける限りの世に、心をとどめて造り占めたる人の家居」としてこの六条院が注目を浴びたのは、少女巻から藤裏葉巻に至る七年間である。日向一雅氏が「六条院は源氏物語の貴族生活の美学の集大成であり、その雅の暮らしというものがどういうものかを具体的に語っているのだと思われる。」と述べるように、この七年は六条院を舞台として、権力者・光源氏の雅な私生活を四季の巡りとともに描き出したものである。この七年が華やかであり美しくあるほど、若菜巻以降に描かれる物語世界の持つ重さ・暗さが際だってくる。宇治十帖では光源氏を超えることのできないものとして彼の子孫が描かれている。

六条院という大きな舞台の設定。華やかな絵巻物の様に展開する

季節と暮らし。いわゆる第一部の最後に描き出された六条院世界の七年間が物語のなかでどのような位置づけなのかを考えてみたい。

二 六条院を流れる時間

まず、少女巻から藤裏葉巻に至る七年間という時間の流れを分析する。この十三帖はいわゆる玉鬘十帖を含んでおり、少女巻で三年、玉鬘十帖で四年、梅枝・藤裏葉巻で一年。このうち少女巻の後一年は玉鬘巻の一年と重なっている。

少女巻三年の内、最初の一年で光源氏は太政大臣に昇進する。この昇進を機に、彼は政治の実権を新内大臣（かつての頭中将）に譲る。これより前、後宮で繰り広げられた光源氏と新内大臣による立后争いは、斎宮女御が立后したことで光源氏の勝利に終わっている。宮中における政治権力は光源氏によって掌握されており、新内大臣へその権力を委譲することは、政の世界から距離を置くことを意味するだろう。しかし、光源氏が新内大臣より上席にあることには変わりなく、彼の政治的影響力が失われるわけでもなかった。

一方、藤裏葉巻で光源氏は自らの将来について思いをはせる。

大臣も、長からずのみ思さるる御世のこなたにと思しつる御参り、かひあるさまに見たてまつりなしたまひて、心からなれ

ど、世に浮きたるやうにて見苦しかりつる宰相の君も、思ひなくめやすきさまに静まりたまひぬれば、御心落ちぬはてたまひて、今は本意も遂げなんと思しなる。対の上の御ありさまの見棄てがたきにも、中宮おはしませば、おろかならぬ御心寄せなり。この御方にも、世に知られたる親ざまには、まづ思ひきこえたまふべければ、さりとともと思しゆづりけり。夏の御方の、時々にはなやぎたまふまじきも、宰相のものしたまへばと、みなどりどりにうしろめたからず思しなりゆく。

（藤裏葉 ③ 四五三頁）

子ども達の行く末が定まり、紫の上と花散里のことも後顧の憂いになくなった時、彼が考えたのは自らの出家についてであった。彼が自身の出家を考えるのはこれが初めてではない。しかし「みなとりどりにうしろめたからず思しなりゆく」ことができたのは、今回が初めてではないか。少女巻で太政大臣となって政治の世界から一歩退いた光源氏にとって、この七年間が〈私〉の人生に区切りをつけるための時間となったと考えられないだろうか。つまり、この六条院世界は、光源氏の〈私〉を描いたものなのだ。

これらを踏まえて、この七年間のなかで玉鬘十帖を除く少女・梅枝・藤裏葉巻まずを見ていくことにしたい。この三帖は、光源氏の子ども―夕霧と明石姫君の行く末が定まる物語である。少女巻で夕

霧は元服し、大学寮で学ぶ。と同時に、初恋の相手・雲井雁とは引き離されてしまう。その後夕霧は順調に出世し、藤裏葉巻で雲井雁と結婚し、二人が幼い頃を過ごした三条邸で暮らすことになる。先に示した光源氏の心情「心からなれど、世に浮きたるやうにて見苦しかりつる宰相の君も、思ひなくめやすきさまに静まりたまひぬれば」を表したものであり、三条邸へ移り住むことは夕霧が光源氏の庇護を離れて独立したことを示すものである。一方、明石姫君については梅枝巻で彼女の裳着の儀と入内の準備が語られ、藤裏葉巻で入内する。光源氏が「長からずのみ思さるる御世のこなたにと思しつる御参り、かひあるさまに見たてまつりなしたまひて」と思うように、彼女の入内はその昔の高麗人の予言の実現に向かうものである。彼女が生まれたときから定められた人生だった。それを滞りなく実現させる場としても六条院は存在したのだといえる。

それでは、玉鬘十帖における六条院はどのような役割を果たしたのか。この十帖は、玉鬘が上京し光源氏に引き取られ黒髭の大将の妻となるまでを描いている。彼女は六条院に迎えられ、そこから内侍として宮中に上がり髭黒邸へと移り住む。その際六条院の華やかさを彩る物語の一つとして玉鬘への求婚譚が加えられているのだ。本来、ここでは光源氏の実娘を巡る恋の駆け引きが描かれるべき場面である。しかし、彼には子どもが少なく、唯一の娘・明石姫君は

既に入内することが決まっている。そこで選ばれたのが、かつて愛した夕顔の忘れ形見であったのだ。彼女を巡る恋のさや当ては、光源氏自身をも巻き込んで六条院夏の御殿を舞台に繰り広げられる。

しかし、ここでは玉鬘の求婚譚に注目するのではなく、六条院における季節の移ろいと行事に注目しておきたい。特に玉鬘巻から野分巻にかけては、六条院に訪れる一年という年月を描いており、新邸において様々な行事が催される。中島尚氏が「この院では、季節のことほぎが、そのまま六条の院のことほぎでもあった。」と指摘する^(註2)ように、六条院の完成と光源氏の〈私〉にかかる人々を言祝ぐ一年であったと考えた方がいだろう。

三 六条院の春と秋

それでは、六条院とはどのような世界であったのか。その邸宅の様子から見ていこう。

大殿、静かなる御住まひを、同じくは広く見どころありて、ここかしこにておぼつかなき山里人などをも集へ住ませんの御心にて、六条京極のわたりに、中宮の御旧き宮のほとりを、四町を占めて造らせたまふ。
(少女 ③ 七六頁)

太政大臣に昇進したことをきっかけに政治の舞台から降りた光源氏

は、自身の生活空間の設計に着手する。閑静な住まいを広く立派に造り、別々に住んでいる女性達を一同に集めて住まわせるという光源氏の考えを実現したのが、秋好中宮が所有する旧宮を含む四町の広さをもつ六条院である。さらに、この四町に光源氏は四季に準えた庭を造営した。

八月にぞ、六条院造りはてて渡りたまふ。未申の町は、中宮の御旧宮なれば、やがておはしますべし。辰巳は、殿のおはすべき町なり。丑寅は、東の院に住みたまふ対の御方、戌亥の町は、明石の御方と思しおきてさせたまへり。もとありける池山をも、便なき所なるをば崩しかへて、水のおもむき、山のおきてをあらためて、さまざまに、御方々の御願ひの心ばへを造らせたまへり。

(少女 ③ 七八頁)

四つの町は秋好中宮、源氏と紫の上、花散里、明石の君の住まいとし、秋、春、夏、冬といったそれぞれの季節に見どころが訪れるよう設えている。また、この四つの町は、互いに行き来できるように造られていたのだ。

この町々の中の隔てには、塀ども廊などを、とかく行き通はして、け近くをかしき間にしなしたまへり。(少女 ③ 八一頁)

これは互いに親しく付き合えるようにという光源氏の配慮であり、六条院を一つの理想郷として創造したいという彼の思惑が現れている。

る。

この六条院における季節の巡りは、秋からはじまる。八月に完成した六条院に移ったのは彼岸の頃、秋に美しいのは秋好中宮の住まいである。彼女所有の旧宮は元々秋の季節が最も美しい庭を有しており、このたびの造営でもそれを生かしたものとなっている。

中宮の御町をば、もとの山に、紅葉の色濃かるべき植木どもを植ゑ、泉の水遠くすまし、遣水の音まさるべき巖たて加へ、滝落として、秋の野を遙かに作りたる、そのころにあひて、盛りに咲き乱れたり。嵯峨の大堰のわたりの野山むとくにけおされたる秋なり。

(少女 ③ 七九頁)

中宮の御前に、秋の花を植ゑさせたまへること、常の年よりも見どころ多く、色種を尽くして、よしある黒木、赤木の籬を結ひまぜつつ、同じき花の枝ざし、姿、朝夕露の光も世の常ならず、玉とかかやきて、造りわたせる野辺の色を見るに、はた春の山も忘れられて、涼しうおもしろく、心もあくがるるやうなり。

(野分 ③ 二六三頁)

山の紅葉いづ方も劣らねど、西の御前は心ことなるを、中の廊の壁をくづし、中門を開きて、霧の隔てなくて御覽ぜさせたまふ。

(藤裏葉 ③ 四五九頁)

秋の庭への言及は三回行われる。六条院完成直後の九月、色づく紅

葉の見事さに中宮は紫の上に便りを送り、いわゆる春秋の争いを導き出している。翌年の秋は、野分に襲われる前、例年になく見事に咲き誇る秋の花々とそれを愛でる秋好中宮が描かれる。最後にこの庭が描かれるのは、六条院に冷泉帝・朱雀院が行幸されるという晴れの日である。こうしてみると、秋は六条院世界においてそれぞれのターニングポイントとなっている。六条院の始まり、ほころび、栄華。この三つを表す季節が秋なのである。

一方、春秋争いの相手方、春の御殿の美しさはどのようなものであったのか。

春の御しつらひは、このころにあはねどいと心ことなり。

(少女 ③ 八〇頁)

春の殿の御前、とりわきて、梅の香も御簾の内の匂ひに吹き紛ひて、生ける仏の御国とおぼゆ。(初音 ③ 一四三頁)

六条院へ移ったのは秋であつたので、当然春の御殿の季節には合わなかつたがその美しさは格別であつた。更に初めて迎えた新年、春の御殿には「生ける仏の御国」と思わせる設えが設けられる。しかし、春の御殿で注目すべきはその年の春の舟樂であろう。

三月の二十日あまりのころほひ、春の御前のありさま、常よりことに尽くしてはふ花の色、鳥の声、他の里には、まだ古りぬにやとめづらいう見え聞こゆ。山の木立、中島のわたり、

色まさる苔のけしきなど、若き人々のはつかに心もとなく思ふべかめるに、唐めいたる舟造らせたまひける、急ぎさうぞかせたまひておろし始めさせたまふ日は (胡蝶 ③ 一六五頁)

中島の入江の岩蔭にさし寄せて見れば、はかなき石のたたずまひも、ただ絵に描いたらむやうなり。こなたかなた霞みあひたる梢ども、錦を引きわたせるに、御前の方ははるばると見やられて、色を増したる柳枝を垂れたる、花もえもいはぬ匂ひを散らしたり。他所には盛り過ぎたる桜も、今盛りにほほ笑み、廊を繞れる藤の色もこまやかにひらけゆきにけり。まして池の水に影をうつしたる山吹、岸よりこぼれていみじき盛りなり。水鳥どもの、つがひを離れず遊びつつ、細き枝どもをくひて飛びちがふ、鴛鴦の波の綾に文をまじへたるなど、物の絵様にも描き取らまほしきに、まことに斧の柄も朽いつべう思ひつつ日を暮らす。(胡蝶 ③ 一六六―一六七頁)

春の庭の見事さに光源氏は池に唐風の舟を浮かべて舟樂を催す。折しも中宮が宿下がりをしており、先の秋自慢に対して春のすばらしさを見せつけようとの考えもあつた、光源氏は中宮方の女房達を舟に乗せて、春の庭を見物させて彼女たちの心を奪う。この秋好中宮への返礼でもあつた舟樂は庭の美しさとともにこの六条院世界を彩るものとして強烈な印象を与える。六条院は四季の移ろいを四つ

の町で表現しているが、その中で紫の上が好む春の御殿がクローズアップされるのは、彼女が光源氏の最愛の女性であることを示すものでもある。つまるところ、六条院世界において最も優れた季節は春、それを体現したのが紫の上、そして物語のターニングポイントが秋なのだ。

四 六条院の行事

次に、玉鬘十帖では六条院における行事や催しがどのように行われたのかを見ることにする。光源氏が行う遊びと宮中の行事との関連性については、既に少女巻に一例示されている。

朔日にも、大殿は御歩きしなければ、のどやかにておはします。良房の大臣と聞こえける、いにしへの例になずらへて、白馬ひき、節会の日々、内裏の儀式をうつして、昔の例よりもこと添へていつかしき御ありさまなり。(少女 ③ 七〇頁)

太政大臣は小朝拝や元旦の節会に参賀する義務がないので、ゆつたりとくつろいだ新年を迎えている。ここで注目すべきは、二条院において白馬の節会を催していることである。宮中の儀式を模した行事を行っただけでなく、そこに新たな試みを加えることで厳かな催しにしている。宮中の行事に工夫を加えることは、太政大臣として

の〈私〉、そして皇孫である源氏としての〈私〉が意識されているのではないか。宮中の節会に工夫を加える行為は、光源氏だからこそ可能であつたのだ。

胡蝶巻冒頭に描かれる春の舟楽は、雅楽寮の楽人を招いて行われた。この舟楽は、秋が自慢の秋好中宮に対する紫の上からの返答でもあり、その春の庭の見事さは先に示したとおりである。

暮れかかるほどに、皇璽といふ楽いとおもしろく聞こゆるに、心にもあらず、釣殿にさし寄せられておりぬ。ここのしつらひ、いと事そぎたるさまに、なまめかしきに、御方々の若き人どもの、我劣らじと尽くしたる装束、容貌、花をこきまぜたる錦に劣らず見えわたる。世に目馴れずめづらかなる楽ども仕うまつる。舞人など、心ことに選ばせたまひて、人の御心ゆくべき手の限りを尽くさせたまふ。

夜に入りぬれば、いと飽かぬ心地して、御前の庭に篝火ともして、御階のものと苔の上に、楽人召して、上達部、親王たちも、みなおのおの弾物、吹物とりどりにしたまふ。物の師ども、ことにすぐれたるかぎり、双調吹きて、上に待ちとる御琴どもの調べ、いとはなやかに掻きたてて、安名尊遊びたまふほど、生けるかひありと、何のあやめも知らぬ賤の男も、御門のわたり隙なき馬、車の立処にまじりて、笑みさかえ聞きけり。空の

色、物の音も、春の調べ、響きはいとことにまさりけるけぢめを、人々思しわくらむかし。夜もすがら遊び明かしたまふ。

（胡蝶 ③ 一六八―一六九頁）

長い引用になったが、ここには六条院で催された宴の華やかさが余すところなく描かれている場面である。日暮れ時の釣殿。中宮と紫の上双方の女房達の美しさ。美しい楽の音と舞。夜になり篝火をともしての管弦の遊び。これらは六条院という空間における雅な世界を描き出すとともに、その華やかで質の高い遊びは宮中もかくやと思わせるものであった。源氏が個人として有する様々な力を見せつけるものとしてこの宴は意味のあるものであった。

一方、翌日は六条院において中宮の季の御読経が行われる。

やがてまかでたまはで、休み所とりつつ、日の御装ひにかへたまふ人々も多かり。障りあるはまかでなもしたまふ。午の刻ばかりに、みなあなたに参りたまふ。大臣の君をはじめたてまつりて、みな着きわたりたまふ。殿上人なども残るなく参る。多くは大臣の御勢ひにもてなされたまひて、やむごとなくいくしき御ありさまなり。

（胡蝶 ③ 一七一頁）

束帯に着替えて出席するこの御読経は、中宮によって催される公式のものである。先日の華やかな遊びと対照的に重々しい雰囲気をもたらすこの行事は、中宮の里邸としての六条院の有り様を示すもの

でもあった。

五月五日の競射もまた、六条院における遊びの華やかさを示している。

対の御方よりも、童べなど物見に渡り来て、廊の戸口に御簾青やかに懸けわたして、いまめきたる裾濃の御几帳ども立てわたし、童、下仕などさまよふ。菖蒲襲の袂、二藍の羅の汗衫着たる童べぞ、西の対のなめる、好ましく馴れたるかぎり四人、下仕は棟の裾濃の裳、撫子の若葉の色したる唐衣、今日の装ひどもなり。こなたのは濃き一襲に、撫子襲の汗衫などおほかにて、おのおのいどみ顔なるもてなし、見どころあり。若やかなる殿上人などは、目をたてつつ気色ばむ。未の刻に、馬場殿に出でたまひて、げに親王たちおはし集ひたり。手結の、公事にはさま変りて、次将たちかき連れ参りて、さまことにいまめかくしく遊び暮らしたまふ。女は、何のあやめも知らぬことなれど、舎人どもさへ艶なる装束を尽くして、身を投げたる手まどはしなどを見るぞをかしかりける。南の町も通してはるばるとあれば、あなたにもかやうの若き人どもは見けり。打毬楽、落蹲など遊びて勝負の乱声どものしるも、夜に入りはてて、何ごとも見えずなりはてぬ。舎人どもの禄品々賜る。いたく更けて、人々みなあかれたまひぬ。

（蛭 ③ 二〇六―二〇七頁）

六条院での競射は「公事にはさま変りて、次將たちかき連れ参りて、さまことにいまめかしく遊び暮らしたまふ」ものであった。宮中ほど格式張った物ではなく、若い人々も参加して賑やかに催される。見物する女房・女童達の装いも五月にふさわしく、互いに張り合う様は華やかである。

以上のように、玉鬘十帖に見られる六条院は四季の自然と華やかな催しによって形作られている。その催しは宮中で行われるものは少々異なり、独自のセンスが加味されたものであった。光源氏の〈私〉は、六条院世界において宮中に似ていながらそれ以上に華やかな世界を紡ぎ出しているのである。

五 娘の入内

六条院の四季の巡りに見られる雅を描き続けた物語は、梅枝巻・藤裏葉巻において明石姫君の入内道具に視線を移した。

正月のつごもりなれば、公私のどやかなところほひに、薫物合はせたまふ。大弐の奉れる香ども御覧するに、なほいにしへには劣りてやあらむと思して、二条院の御倉開けさせたまひて、唐の物ども取り渡させたまひて、御覧じくらぶるに、「錦、綾なども、なほ古き物こそなつかしうこまやかにはありません」

とて、近き御しつらひのものの覆ひ、敷物、褥などの端どもに、故院の御世のはじめつ方、高麗人の奉れりける綾、緋金錦どもなど、今の世の物に似ず、なほさまざま御覧じ当てつつせさせたまひて、このたびの綾、羅などは人々に賜す。香どもは、昔今の取り並べさせたまひて、御方々に配りたてまつらせたまふ。

「二種づつ合はせさせたまへ」と聞こえさせたまへり。

（梅枝 ③ 四〇三〜四〇四頁）

太宰の大弐が献上した品も当代の名品であろうが、二条院の倉にあった品物の方が光源氏には勝って見える。他の品々についても故桐壺院の御代に高麗人が献上した物の方が勝っているのをそれを姫君の支度に使用している。これらは、光源氏の財力を示すとともに、彼が故桐壺院の鍾愛の君であったことを思い出させる。さらに、この香配りから薫物合わせへと物語は展開していく。

この香あわせに際して光源氏は「承和の御いましめの二つの方」

（梅枝 ③ 四〇四頁）、紫の上は「八条の式部卿の御方」（梅枝

③ 四〇四頁）と互いに競い合って調査している。朝顔姫君、花散里、明石の君が調査した香も取り寄せ、螢兵部卿宮に判定を依頼する。どの香もそれぞれの特色が出たすばらしい物であり、光源氏と彼を取り巻く女性がこうした雅な方面に優れていることを示すものである。この様な優雅な競い合いを通して六条院世界は強く印象

づけられていく。

さて、明石姫君の入内は光源氏にとつてもつとも重要である。彼女の支度に対する彼の気配りは並々ならぬ物がある。

御調度どもも、もとあるよりもとのへて、御みづからも、物の下形、絵様などをも御覧じ入れつつ、すぐれたる道々の上手どもを召し集めて、こまかに磨きととのへさせたまふ。草子の箱に入るべき草子どもの、やがて本にもしたまふべきを選らせたまふ。いにしへの上なき際の御手どもの、世に名を残したまへるたぐひのも、いと多くさぶらふ。

(梅枝 ③ 四一四〜四一五頁)

入内が延期されたことで、姫君のための調度類は光源氏によってより念入りに整えられる。彼自身が差配できるのは、宮中で育つ中で最上のものを目にしていたことによるものである。彼の物に対する見方、こだわりはこの入内道具に対して大いに發揮されている。その中で、光源氏は紫の上を相手に当代の女手について批評を展開している。ただ、女手で草子を作ることはできないため兵部卿の宮達に依頼する。

まだ書かぬ草子ども作り加へて、表紙、紐などいみじうせさせたまふ。「兵部卿宮、左衛門督などにものせん。みづから一具は書くべし。気色ばみいますがりとも、え書きならべじや」と、

我ぼめをしたまふ。

墨、筆ならびなく選り出でて、例の所どころに、ただならぬ御消息あれば、人々難きことに思ひて、返さひ申したまふもあれば、まめやかに聞こえたまふ。高麗の紙の薄様だちたるが、せめてなまめかしきを、「このもの好みする若き人々試みん」とて、宰相中将、式部卿宮の兵衛督、内の大殿の頭中将などに、「葦手、歌絵を、思ひ思ひに書け」とのたまへば、みな心々にいどむべかめり。

(梅枝 ③ 四一七頁)

兵部卿宮、左衛門督は当代の能筆家であろう。その二名に依頼しつつ自分も彼らと同程度の物が書けると自画自賛している。彼は自ら書けるからこそ、他者の筆法を批判できたともいえる。さらに、夕霧を始めとした若手に好きに書かせたる試みも行っている。

この御箱には、立ち下れるをばませたまはず、わざと人のほど、品分かせたまひつつ、草子、巻物みな書かせたてまつりたまふ。よろづにめづらかなる御宝物ども、他の朝廷までありがたげなる中に、この本どもなん、ゆかしと心動きたまふ若人世に多かりける。

(梅枝 ③ 四二二頁)

特に筆跡については繰り返し注意を促しており、それが書き手の人となり来判断するものであることが語られる。その一方で、世の能書家に身分の上下を問わず書かせるにもかかわらず、姫君に持たせ

る物の中には身分の低い者の書いた物はいれないといった一面も描かれる。

梅枝巻は、光源氏が明石姫君の入内のための支度に関心を配る様が繰り返して語られている。彼が吟味するのは薫物や数々の身の回りの道具、書の手本に至るまで十分に検分している。そこには、娘のこゝとを愛しく思う父親としての光源氏の姿を見ることができ、その一方で彼の財力と分野を問わない美意識が強烈に印象づけられるところでもある。

明石姫君が入内し、後顧の憂いがなくなった光源氏は自身の出家を考えはじめ。しかし、物語は彼に更なる地位を与えた。親王に生まれながら後見人の不在から臣下に下った光源氏は、「太上天皇にならずに御位」(藤裏葉 ③ 四五四頁)についた。准太上天皇という地位は彼の生活に少なからぬ変化をもたらした。それまでは臣下として、あくまで〈私〉としての生活の場であった六条院が、帝や院に准じた半公人としての〈私〉を生きていく場所に変わることになるのだ。

少女巻から始まった六条院を舞台とした物語は、冷泉帝、朱雀院揃った六条院への行幸をもって頂点を極める。

巳の刻に行幸ありて、まづ馬場殿に、左右の寮の御馬牽き並べて、左右の近衛立ち添ひたる作法、五月の節にあやめわかれ

ず通ひたり。未下るほどに、南の寝殿に移りおはします。道のほどの反橋、渡殿には錦を敷き、あらはなるべき所には軟障をひき、いくしうしなさせたまへり。

(藤裏葉 ③ 四五八～四五九頁)

秋に始まった六条院世界は、秋の紅葉の美しさを繰り返し描くことで、その華やかな場を演出し物語は幕を閉じる。それは光源氏の〈私〉の終焉でもあった。半公人としての〈私〉を生きる光源氏の六条院世界が、今までと異なる様相を呈するであろうことは指摘するまでもないであろう。

註

- 註1 日向一雅「源氏物語の貴族生活の美学・理念——光源氏の生活を中心として——」二五頁(『源氏物語研究集成 第十二巻』所収 風間書房 平12・10)
- 註2 中島尚「初音・胡蝶」二三四頁(『源氏物語講座 第三巻 各巻と人物I』所収 有精堂出版株式会社 昭46・7)

第二節 政治家としての夕霧

一 はじめに

『源氏物語』を〈源氏〉の物語であるということは、第一部、第二部を関する限りにおいては可能であるといえよう。しかし、第三部になると、光源氏は物語の表層から姿を消し、薫と匂宮を主人公として物語は展開している。その中で注目されるのが、第一部から第三部まで登場している夕霧の存在である。周知のごとく、光源氏と葵との間に生まれた彼は、「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」（濤標

② 二八五頁）と、臣下としての出世を運命付けられている。いわば、〈源氏〉として臣下に降りた光源氏の後継者としてのあり方が求められていたのである。その意味で、夕霧が物語の主人公にはならなかったのは当然であった。たとえば、夕霧について桑原博史氏は「葵の巻で誕生し、最終巻夢の浮橋においても五十余歳で健在である夕霧は、いつもフットライトをあびぬ主役である」と述べている。^{（註¹）}実際に『源氏物語』全体を見てみると、巻によつては彼が中心的役割を果たすものもあるが、そうではない巻も多く、彼を主人公に準ずるものと認めるには無理がある。その一方で彼は物語に断

続的に登場しているのであり、その存在を無視することは到底不可能である。つまり〈源氏〉の後継者たる夕霧は、物語を読み解く上で欠かせない人物なのだ。

とくに、第一部においては光源氏の政治家としての側面に支配されることが多いように思われる。なかでも、光源氏と頭中将との権力争いにおける夕霧の存在は、なかなか興味深いものがある。そこでまず夕霧について光源氏と頭中将（後に内大臣）の関係からその人物造型について考えてみたい。

一 元服前の夕霧を取り巻く世界

まず、光源氏と頭中将の関係であるが、彼らは政治的な面だけでなく音楽等の遊びの面も含めて良きライバル関係にあったことが知られている。光源氏は桐壺帝の御子であるが、頭中将もまた左大臣家の後継者であり、母は桐壺帝の同腹の妹でもある。

宮腹の中将は、中に親しく馴れきこえたまひて、遊び戯れをも人よりは心やすく馴れ馴れしくふるまひたり。

（帚木 ① 五四頁）

頭中将は身分も血筋も光源氏に対抗できる人物として造型されている。そのうえ、光源氏の正妻は左大臣家の娘・葵であり、彼女が

頭中將と同腹の妹であることを考えると、二人は対等に近い関係にあるといえるだろう。光源氏と葵の結婚については第一部・第二章・第二節で述べたように政治的な意図から発したものだ。繰り返しになるが、この結婚は彼にしっかりとした後見をつけたい桐壺帝と最愛の皇子を婿に迎えることで春宮を擁する右大臣家に対抗するという左大臣の政治的戦略に基づいている。つまり、双方の父親の思惑で決められたものであり、最初から当事者二人の存在はないがしろになっていたのだ。その結果、二人の夫婦仲は決して好ましいものにはならなかったが、そのことによる不都合を光源氏は感じていない。なぜなら、この時期は桐壺帝が政治権力を持ち、光源氏はその庇護を受けて安定した地位と権力を手にしていたため、左大臣家の後ろ盾の必要性を感じていなかったのだ。頭中將も父・左大臣の権力下であり妻の実家である右大臣家の庇護を必要としなかった。桐壺帝と左大臣という協力関係にある二人の庇護下にいることで、お互いが自らの力を競うこともなかった。

しかし、朱雀帝が即位したことで、政治の権力が桐壺院・左大臣グループから朱雀帝・右大臣グループへと移行することになった。そのことは、頭中將が右大臣家の婿であるため影響が少なかった反面、光源氏は政治の舞台から遠ざけられてしまうことになる。左大臣と光源氏の不遇の時代の始まりであった。それは右大臣が亡くなり朱

雀帝が光源氏を呼び戻すまで続く。その間も、頭中將は須磨の光源氏を尋ねるなど、二人の友情は続いてはいた。

ところが、光源氏が明石より京に戻り以前の地位に戻ると、頭中將との権力争いが始まる。左大臣が亡くなり藤原氏の長となった頭中將と源家の長である光源氏は、お互いに地位と権力を得るために競い合うようになるのだ。葵と後見人であった左大臣が亡くなり、夕霧が元服すると、光源氏は左大臣家と距離を置くようになり、お互いが新しい関係に入ったと考えてよい。島内景二氏は、光源氏と頭中將の対立は左大臣の力によって回避されており、後に左大臣の役割は夕霧の使命の一つとなったと述べている。^(註2)その意味で、夕霧がその役割を果たせるほど成長していない今、彼ら二人の対立は避けられるはずもなかった。

一例を挙げれば、冷泉帝の中宮は、光源氏の後見する梅壺女御と頭中將の娘・弘徽殿女御との間で争われた。この争いは、冷泉帝が光源氏と自身の関係を知っていたために、戦わずして結果は決まっていたのだ。もっとも、冷泉帝の出自については伏せられているので表向きは二人の一騎打ちとなり、その結果光源氏は勝者としてその権力と地位が揺るぎないものとなった。この件については、さすがに大宮も「この家にさる筋の人出でものしたまはでやむやうあらじと故大臣の思ひたまひて、女御の御事をも、あたちいそぎたまひ

しものを、おはせましかば、かくもてひがむることなからまし」
（少女 ③ 三六頁）と光源氏を恨んでいる。光源氏が左大臣家を
押さえ政治的優位に立ったことは明らかである。

この梅壺立后にともない、光源氏は太政大臣に、頭中将は内大臣
に昇進した。昇進をきっかけに、光源氏は政治の実権を内大臣に譲
ったが、それは見かけほど単純なものではなかった。なぜなら光源
氏は太政大臣として睨みの利く存在であり、明石姫君を入内させる
ために必要な教育をするなど、次の政権に対しても地位と権力を維
持するための準備を怠らなかつたからである。

二 夕霧の元服

前述したように、光源氏と頭中将は友人から権力争いの当事者へ
と関係が変わった。光源氏と頭中将の妹・葵との間に生まれた夕霧
が、その影響を受けるのは必然であつた。

彼の誕生は、「事あひたる心地して」（葵 ② 四三頁）と左大
臣にいわせるほど、待ちこがれた出来事であつた。しかし、現実
は暗転し、左大臣にとつても光源氏にとつても不本意としかいいよう
のない状況が続く。葵の死、桐壺院の死、宮中からの締め出し。暗
澹たる状況の中で、夕霧の成長だけが二人の希望であり、葵を亡く

した大宮にとつても、その愛情を注ぐ唯一の存在となつた。夕霧に
とつても彼女の存在は母親不在を埋めるために欠かせないものであ
つたはずだ。ここで培われた二人の関係は、光源氏が左大臣家と対
立している時も変わることはなかつた。程なく光源氏は須磨へ蟄居
したため、元服までを夕霧は左大臣家の庇護のもとで送っている。
三条邸は、生まれ育つた場所として六条院よりも身近であつたのと
同様に、左大臣家の人々に対しても父親より親しみがあつたのでは
ないか。

元服を境に、夕霧は左大臣家から遠ざけられる。六条院に部屋を
与えられ、彼の後見には花散里があたることになった。そこには、
大宮の甘さが夕霧の教育の妨げになるという光源氏の判断があつた
のだ。

大宮の御もとにも、をさをさ参でたまはず。夜昼うつくしみて、
なほ児のやうにのみもてなしきこえたまへれば、かしこにては
えもの習ひたまはじとて、静かなる所に籠めたてまつりたまへ
るなりけり。一月に三たびばかりを、参りたまへとぞ、許しき
こえたまひける。
（少女 ③ 二七頁）

大宮の甘さは、葵が亡くなっている現状が招いたものである。肉
親とのかわりが薄く育つた夕霧を、大宮が不憫に思うのは当然で
あろう。目加田さくを氏は、大宮に「源氏の教育方針を理解する見

識」と「孫の稚い心をおしむ慈愛」を見、作者が「子供の、人間の教育に、理性と慈愛が両輪の輪であることを提示しているのである」と指摘している^(註3)。つまり、夕霧の成長過程において大宮に与えられたのは彼を慈しむ役割であり、政治の場で発揮されるべき力は光源氏によって育成されていると見るべきだろう。あくまでも権力を得るための教育方針は光源氏側の論理によるものであり、後継者としての立場を明確にすることであつた。それは左大臣側からの脱却を意味したといえるだろう。

三 夕霧への教育方針

光源氏が夕霧を厳しく教育する背景に、内大臣の存在を無視することはできない。「人柄いとすくよかに、きらきらしくて、心用ゐなどもかしこくものしたまふ。学問をたててしたまひければ、韻塞には負けたまひしかど、公事にかしこくなむ。腹々に御子ども十余人、おとなびつつものしたまふも、次々になり出でつつ、劣らず栄えたる御家の内なり。」(少女 ③ 三二―三三頁)と、彼は子どもも多く一族として繁栄していく可能性が示されている。一方源家の後継者は夕霧ただ一人である。数の論理から考えれば、夕霧の劣勢は明らかである。この点について、高橋和夫氏は次のように述べ

ている。^(註4)

光源氏は内大臣を押さえるのに苦労した。子息夕霧は年上の更に多くの競争者に包囲されている。光源氏は、実子今上天皇と源家の将来を語り合つたろうが、それがうまくゆくのも自分が権力の座にあり、今上天皇が天皇である限りである。その次に明石姫が入内・立后して、皇子が東宮・天皇となるのは、夕霧の実力にかかっている。光源氏にとって「教育」がクローズアップされて来た。

確かに、現在は光源氏側が優位に立っているとはいえ、夕霧の前途は厳しい。光源氏が有する特別有利な条件である皇家との関わりも、そのまま彼に譲れるものではない。不利な条件を凌ぐ実力を付けさせるために彼が決めたのは、大学に入学させることであつた。はかなき親に、かしこき子のまさる例は、いと難きことになむはべれば、まして次々伝はりつつ、隔たりゆかむほどの行く先、いとうしろめたなきによりなむ、思ひたまへおきてはべる。高き家の子として、官爵心になひ、世の中さかりにおごりならひぬれば、学問などに身を苦しめむことは、いと遠くなむおぼゆべかめる。戯れ遊びを好みて、心のままなる官爵にのぼりぬれば、時に従ふ世人の、下には鼻まじろきをしつつ、追従し、気色とりつつ従ふほどは、おのづから人とおぼえてやむことな

きやうなれど、時移り、さるべき人に立ちおくれて、世おとろふる末には、人に軽め侮らるるに、かかりどころなきことになむはべる。なほ、才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらる方も強うはべらめ。さし当たりては心もとなきやうにはべれども、つひの世の重しとなるべき心おきてをならひなば、はべらずなりなむ後もうしろやすかるべきによりなむ。

(少女 ③ 二一―二二頁)

大宮に教育方針を語ること、それが朱雀帝の時代に彼が味わった政治的屈辱から生じたものであることが明らかになっている。一方、それが左大臣家の教育方針と異なることは、大宮の言葉「この大将なども、あまりひき違へたる御事なりとかたぶきはべるめるを、この幼心地にもいと口惜しく、大将、左衛門督の子どもなどを、我よりは下臈と思ひおとしたりしに、みなおのおの加階しのぼりつつ、およすけあへるに、浅葱をいとからしと思はれたるが、心苦しうはべるなり」(少女 ③ 二三頁)に表れている。どちらの方針が正しかったのかは、第三部で夕霧とその子どもたちが内大臣家の一族を押さえて政治の中核を占めていることで証明されている。

では、大学入学は夕霧に何をもたらしたであろうか。例えば、高橋和夫氏は次のように述べている。^(註5)

夕霧大学入学の前後に、光源氏がこれらの人々を招き、教育を

依頼したのはただその学才を師として活用するだけではなかった。その恩義を感じさせること、これが一つ。そしておそらく、権力者光源氏はその努力に報いるがために昇進を図つたに違いない。それはやがて夕霧のサポーターになろう。これが二つ。そしてまた、文を愛し学を尊ぶ夕霧が成長の暁には、彼は学問、文章の宴をしばしば催すに違いない。それは彼らを更に昇進させる良い口実になる。これが三つ。かような風潮ができれば、大学は陸続と学者文人グループを生み出す。それは源氏権力の永続化を保証する。これが四つ。これが権力の力学でなくて何があるうか。

野口元大氏もまた次のように述べている。^(註6)

源氏の本当の狙いはその後にあるので、それはこうして恩恵を蒙った官僚グループは弁官・内記・外記など行政実務の中核機構を握るわけであるが、同じ大学寮出身という身内意識もあつて、次代には彼らは夕霧の下に結集することになるだろう。政治の大綱は仗議の決するところであるが、そこでは夕霧は藤家の多数に包囲されることになる。しかし、夕霧が太政大臣としてその首座にあり(潋標の宿曜師の勘申は信じられてよい)、政策の実行にあたる官僚の中核も夕霧の抑えるところとなれば、優に藤氏の勢力に対抗しうるであろうという見通しである。

氏によれば、源氏の大学尊重は「天下の人材があげて源氏の陣営に集まってくる」ことが条件と述べた上で、子どもの少ない源氏には「自分の死後も源家は夕霧の下で盤石の礎が据えられ、永遠の繁栄が約束される」唯一の方法であったと指摘している。

大学入学は、先に述べた数の論理上の不利を払拭し、夕霧を支えるブレインの供給システムの構築を意味していたのである。学問をすることで実力をつけただけでなく、内大臣家より優位に立つための条件を整える意味がそこにはあったのだ。さらに高橋和夫氏は「明石姫が入内・立后して、皇子が東宮・天皇となるのは、夕霧の実力にかかっている」と指摘していたが、そのための条件はこのことで整ったといえよう。夕霧が明石姫君を支え、立后させることで政治権力を確立するであろうことは疑う余地がない。事実、六位からスタートした夕霧は、いとも簡単に内大臣家の子息を越えて昇進していくのである。

四 内大臣を視る夕霧

ところで、野分巻における夕霧の六条院に対する批判の眼に関しては、すでに論じられて久しい。野分の後という非日常の場で、夕霧は紫の上を視てその美しさに心を奪われる。また、覗き視た玉鬘

と光源氏の様子は彼に驚きを与えた。広瀬唯二氏が

夕霧が抱いている疑問は、決定的はずれなものではなく、源氏と玉鬘の関係の核心に迫るものである。このあたりでの夕霧の役割は、単に外面的な様相を見るという観察から一步進んで、とりつくろわれた表面の下にある事実の追究、即ち六条院の真実を見ようとするところにある。

と指摘する^(註7)ように、彼は、六条院を第三者の視線で眺め、光源氏を持つ危うさを映し出す役割を担っている。親子の関係がそれを容易にし、かつ子に批判させることは世代の移り変わりを感ぜさせるものでもある。

一方、野分以降の左大臣家を見てみると、内大臣の大宮に対する行為と夕霧のそれが度々比較されているのである。そのことで、夕霧は光源氏だけでなく、内大臣の内なる姿も露わにしているように感じられるのである。例えば、野分の日、三条邸を訪れるのは夕霧だけである。

道すがらいりもみする風なれど、うるはしくものしたまふ君にて、三条宮と六条院とに参りて、御覽ぜられたまはぬ日なし、内裏の御物忌などにえ避らず籠りたまふべき日よりかは、いそがしき公事、節会などの暇いるべく事繁きにあはせても、まづこの院に参り、宮よりぞ出でたまひければ、まして今日、か

かる空のけしきにより、風のさきにあくがれ歩きたまふもあはれに見ゆ。

宮いとうれしう頼もしと待ちうけたまひて、「ここらの齡に、まだかく騒がしき野分にこそあはざりつれ」と、ただわななきにわななきたまふ。(中略) そこらところせかりし御勢ひのしづまりて、この君を頼もし人に思したる、常なき世なり。今もおほかたのおぼえの薄らぎたまふことはなけれど、内の大殿の御けはひは、なかなかすこし疎くぞありける。

(野分 ③ 二六八〜二六九頁)

ここでは、夕霧が六条院と三条邸を等しく訪問しており、大宮は彼のみを頼りにしていることが示されている。そして内大臣の態度を「なかなか少し疎くぞありける」と述べるのは、夕霧の行為を踏まえてのことである。その後内大臣は大宮を見舞うが、雲居雁の件が原因で「なほ心解けず思ひおきたる気色してのたまへば」(③ 野分 二八六頁)という態度を取る。雲井雁は、彼が次の後宮で光源氏に対抗する為の唯一の駒であった。それを大宮によって台無しにされたと考える彼は、当然彼女を氣遣うこともなく、訪れも間遠なのである。しかし、大宮は「もとよりいたう思ひつきたまふことなくて、かくまでかしづかんともしたらざりしを、わがかくもてなしそめたればこそ、春宮の御事をも思しかけためれ」(少女 ③

四六頁)と考えており、お互いに不信感を抱いていることは明らかである。

さらに、彼女は昔から夕霧最良であった。

とりはづして、ただ人の宿世あらば、この君より外にまざるべき人や、容貌ありさまよりはじめて、等しき人のあるべきかは、これより及びなからん際にもとこそ思へ

(少女 ③ 四六頁)

彼女にとって夕霧は誰よりも美しく、臣下では最も優れた若者である。先に述べたように、これには彼女が夕霧を育てたことも影響しているだろう。彼女は夕霧を側近くに呼ぶことはあっても、内大臣の子どもたちを御簾の中に入れることはない。

内の大殿の君たち、左少将、少納言、兵衛佐、侍従、大夫などいふも、皆ここには参り集ひたれど、御簾の内はゆるしたまはず。左衛門督、権中納言なども、異御腹なれど、故殿の御もてなしのままに、今も参り仕うまつりたまふことねむごろなれば、その御子どももさまざま参りたまへど、この君に似るにほひなく見ゆ。大宮の御心ざしも、なずらひなく思したる

(少女 ③ 五二〜五三頁)

この様に、大宮と内大臣は雲居雁の件をきっかけに互いの関係を疎遠なものとした。大宮は夕霧の心遣いを含めて彼女は彼を信頼した

のである。

大宮が病を得た際も、夕霧については「中将の君も、夜昼三条にぞさぶらひたまひて、心のひまなくものしたまう」(行幸 ③ 二九六頁)と看病に専念する様子が語られる。一方の内大臣については、大宮が「公事の繁きにや、私の心ざしの深からぬにや、さしもとぶらひものしはべらず。」(行幸 ③ 二九九頁)と、見舞いに訪れた光源氏に語っている。しかも、光源氏の意向を汲んだ彼女の訪問要請で三条邸を訪れた彼の様子は「君たちいとあまた引き連れて入りたまふさま、ものものしう頼もしげなり。」(行幸 ③ 三四四頁)というものであった。内大臣という地位に相応しい様ではあるが、三条邸に詰めている夕霧と比べれば、彼の親に対する情の薄さは明らかであっただろう。

内大臣はこまかにしもあるまじうこそ、愁へたまひしか。人柄あやしうはなやかに、男々しき方によりて、親などの御孝をも、いかめしきさまをばたてて、人にも見おどろかさむの心あり、まことにしみて深きところはなき人になむものせられける。さるは、心の隈多く、いと賢き人の、末の世にあまるまで才たぐひなく、うるさながら、人としてかく難なきことは難かりける

(野分 ③ 二七二頁)

この様に、光源氏は彼の学問の深さを認めつつも、見た目の華や

かさに気を取られ、人情味に欠ける彼の性格を指摘している。そして、彼の欠点の対局にいるのが夕霧であることは間違いない。相反するものであるが為に、彼の内面が夕霧の行為によって表出されることになるのである。

五 おわりに

夕霧はその出自と父・光源氏の蟄居により、左大臣家で養育された。光源氏と内大臣の関係の始まりは、義兄弟であり、遊びも含めた良きライバルであり、友人でもあった。しかし、時の流れは彼らをそれぞれの一族の長とし、権力争いを繰り広げた。結果は、内大臣の敗北であった。

父と伯父の権力争いは、夕霧の人生に大きな影響を与えた。大学入学は、権力を握るに足る実力をつけるとともに、数の論理の上でも内大臣一族に勝てるようなブレーンを作るためのものであった。

夕霧の恋もまた、彼らの対立から一度つぶされてしまう。冷泉帝の御代の立后争いに敗れた内大臣にとって、次期春宮女御を光源氏の娘・明石姫君と争うことができるのは雲居雁(註)しかいなかった。これを高橋亨氏は内大臣の「光源氏との対抗心」と述べ、日向一雅氏は「源氏と内大臣との権勢をめぐる対抗関係のしわよせ」と述べて

(註⁹) いる。子息に比べて娘の少ない内大臣が、雲居雁を春宮女御にと考えるのは当然の事であり、この段階で、夕霧と雲居雁が結婚できる可能性はなかったのである。しかし、彼女を春宮女御にはできなかった。

光源氏の教育によって若き実力者に成長した夕霧は、藤裏葉巻で雲居雁と結婚する。両者のおかれた立場を考えれば、この結婚をもつて両家の和解が成立したと見るべきであろう。

のぞきて見たまへ。いと警策にねびまさる人なり。用意などいとしづかにものものしや。あざやかにぬけ出でおよすけたる方は、父大臣にもまさりざまにこそあめれ。かれはただいと切になまめかしう愛敬づきて、見るに笑ましく、世の中忘るる心地ぞしたまふ。公さまは、すこしたはれて、あざれたる方なりし、ことわりぞかし。これは才の際もまさり、心用ゐ男々しく、すくよかに、足らひたりと世におぼえたためり

(藤裏葉 ③ 四三六～四三七頁)

かつては、娘の件で遠ざけた夕霧を内大臣は手放しで褒めている。自身のライバルであった光源氏を引き合いにして、夕霧を褒める彼の姿には、父親としての安堵感と、時代を担う人物としての夕霧への高い評価が認められる。

光源氏もまた、この結婚を喜んだ一人である。

今朝はいかに。文などものしつや。さかしき人も、女の筋には乱るる例あるを、人わろくかかづらひ、心いられせで過ぐされたるなん、すこし人に抜けたりける御心とおぼえける。大臣の御おきてのあまりすくみて、なごりなくくづほれたまひぬるを、世人も言ひ出づることあらんや。さりとても、わが方たけう思ひ顔に、心おごりして、すきずきしき心ばへなど漏らしたまふな。さこそおいらかに大きな心おきてと見ゆれど、下の心ばへ男々しからず癖ありて、人見えにくきところつきたまへる人なり

(藤裏葉 ③ 四四三～四四四頁)

ただ、彼は内大臣とは異なり、息子の人柄を褒めつつも舅の扱いを注意するのを忘れない。勝者だからこそその配慮や気遣いが、結局は自分の身を守ることを夕霧に伝えたかったに違いない。

内大臣は夕霧の実力を評価して娘を託し、光源氏は勝者であり続けるための心持ちを伝えた。結婚によって、夕霧は彼ら二人の関係から解き放たれたのではないか。結局二人の争いは彼の成長を促し、実力者としての彼を周囲に認識させた。彼が生まれ育った三条邸を修理し、そこに雲居雁とともに一家を構えたことは、名実共に次の時代を担う者であり、〈源氏〉の後継者であることを示したのだ。

註

註1 桑原博史「夕霧」(『源氏物語講座』第四卷所収 有精堂

昭46・8) 一八九頁

註2 島内景二「夕霧の人生とその人物像 ―光源氏の子供達―」

(『電気通信大学紀要』 第3巻 第1号所収 平2・6)

二〇三頁

註3 目加田さくを「源氏物語論 ―夕霧造型―(一)」(『日本文

学研究』第19号所収 梅光女学院大学日本文学会 昭58・11)

一八頁

註4 高橋和夫「乙女 ―その構造的把握―」(『源氏物語講座』

第三卷所収 有精堂 昭46・7) 二二一頁

註5 註4に同じ 二二三頁

註6 野口元大「夕霧元服と光源氏の教育観」(『講座 源氏物語

の世界』第五集所収 有斐閣 昭56・8) 五〇六頁

註7 広瀬唯二「源氏物語正篇における夕霧像 ―夕霧の役割―」

(『国文学研究ノート』第13号所収 神戸大学「研究ノート」

の会 昭56・4) 二五頁

註8 高橋亨「可能態の物語構造―六条院物語の反世界―」(『源氏

物語の対位法』所収 東京大学出版会 昭57・5) 六〇頁

註9 日向一雅「夕霧の役割と人物像 ―第一部を中心に―」(『研

究と報告』第3号所収 山梨大学国文学談話会 昭42・8)

三二頁

第三節 観察者としての夕霧

一 はじめに

かを見つるさきざきの、桜、山吹といはば、これは藤の花と
やいふべからむ (野分 ③ 二八四頁)

野分の後、六条院に住む三人の女性を垣間見た夕霧は、彼女たちの美しさを花にたとえた。紫の上は桜、玉鬘は山吹、明石姫君は藤の花である。雛遊びの相手を務めた頃の明石姫君を見知っている夕霧は、取り立てて彼女の容貌に関心があったとは思えない。事実「例はものゆかしからぬ心地」だがあえて「妻戸の御簾をひき着て、几帳の結びより」視たのである。「髪はまだ丈にははづれたる末のひき広げたるやうにて、いと細く小さき様体らうたげに心苦し」(野分 ③ 二八四頁)という彼女の姿は、花でいえばまだ蕾。夕霧の彼女に対する興味関心は、近い将来春宮に入内し女御、出来うるならば中宮に立てる容姿であるかどうかではなかったか。自らを含め源家の将来は彼女に託される。その彼女の容貌は、「一昨年ばかりは、たまさかにもほの見たてまつりしに、またこよなく生ひまさりたまふなめりかし、まして盛りいかならむ」(野分 ③ 二八四頁)と、生い先が楽しみであったことは、夕霧に十分に期待させるもの

であつただろう。

とりたてて、今その容姿を確認したいとは考えていない明石姫君をあえて夕霧が垣間見た理由は、偶然視た紫の上の美しさであつた。

見通しあらはなる廂の御座にゐたまへる人、ものに紛るべくもあらず、気高くきよらに、さとにほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す。あぢきなく、見たてまつるわが顔にも移り来るやうに、愛敬はにほひ散りて、またなくめづらしき人の御さまなり。

(野分 ③ 二六五頁)

紫の上は、「妻戸の開きたる隙を何心もなく見入れたまへる」夕霧の心を捕らえてしまった。そして、この出来事が夕霧に平素とは異なる垣間見という行為を起こさせたのである。つまり、この垣間見ははじめと評される夕霧の色好みの部分を刺激し、常々玉鬘に対して感じていた「いかでこの御容貌見てしがなと思ひわたる心」(野分 ③ 二七八〜二七九頁)を満たすために次の垣間見へと彼を駆り立てたのだ。

この野分巻における夕霧の視線がその後の物語に大きな影響を与えていることは改めて述べるまでもない。伊藤博氏は、野分巻で夕霧に対する敬語が消えることから彼を視点人物であると指摘し、「この「視点」は断続しつつも次第に定着し、のみならず物語世界内部

に連鎖反応をひき起こしていく」と述べている^(註1)。視点人物夕霧が、六条院世界の内面を映し出していることは、すでに数多くの指摘がある。しかし、視点者夕霧の存在理由やその行為に対する評価についてはいささか異なる様である。日向一雅氏は、「夕霧の反乱」は、「六条院内部の暴露―その人間関係の構図を提示する役割」であったとし、「それを完了すれば、当然収束されてしかるべき」であると述べている^(註2)。森一郎氏は、「夕霧は危機を増殖するていの人物ではなく、抑制する人物。視点者ということに意味はあるにせよ脇役に過ぎない。」と述べている^(註3)。広瀬唯二氏は、「夕霧の心を占めたのが、他の女君ではなく、紫の上であったということは六条院秩序への反乱とか挑戦とかといったような可能性が、夕霧から剥奪されたことを意味し、また、夕霧に全く実現不可能な紫の上への思慕が常に存在するがゆえに、他の女君の、ひいては六条院世界の冷静な観察者としての立場が一貫して守られるのである。」と述べている^(註4)。ここで視点人物としての夕霧をどのようにとらえるべきか一度検討する必要がある。個人の私的空間でありながら疑似後宮のような体をなす六条院。〈源氏〉の後継者たる夕霧の眼を通して明らかにされたものについて考えてみたい。

二 夕霧の見た女性

そもそも、夕霧が幼少より視てきたのはどのような女性だったのか。彼を育ててくれた大宮は、皇女という血筋の上の品の女性であり、その容貌も「大宮の容貌ことにおはしませど、まだいときらにおはし」(少女 ③ 六八頁)とあるように、尼姿になっても美しい女性であった。光源氏が結婚した際の左大臣家が時の権力者であったことを考えれば、葵に仕える女房達の容貌も一定の水準以上でかつこにも、人は容貌よきものとの目馴れたまへる」(少女 ③ 六八頁)状況にあったことが示されている。初恋の雲井雁についても、「人柄、容貌などいとうつくしくぞおはしける」(少女 ③ 三二頁)とあるように、夕霧は一般的な観点から美しいといわれる女性達に囲まれた環境で成長していた。つまり、夕霧は常に美しい女性を視ることのできる環境で育ったために、女性の容姿に対する彼の基準は高かったと思われる。

夕霧の元服の際、光源氏は世話役に花散里を選んだ。彼の目に映る花散里は「容貌のまほならずもおはしける」女性であり、「向かひて見るかひなからんもいとほしげなり」(少女 ③ 六七頁)とさえ思わせる女性であった。事実、花散里は一貫して心ばえの美しさが強調されており、その容貌は末摘花ほど醜さについて描写され

ることではないが、美しいといわれることもない。「もとよりすぐれざりける御容貌の、ややさだ過ぎたる心地して、痩せ瘦せに御髪少なる」(少女 ③ 六八頁)と指摘される。さらには、紫の上を垣間見た夕霧に「かかる御仲らひに、いかで東の御方、さるものの数にて立ち並びたまへらむ、たとしへなかりけりや、あないとほし」

(野分 ③ 二六九頁)とさえ思われている。

その一方で、花散里の存在は夕霧に父への尊敬の念を抱かせるものでもあった。

ほのかになど見たてまつるにも、容貌のまほならずもおはしけるかな、かかる人をも人は思ひ棄てたまはざりけりなど、わがあながちにつらき人の御容貌を心にかけて恋しと思ふもあぢきなしや、心ばへのかやうにやはらかならむ人をこそあひ思はめと思ふ。(中略)かくて年経たまひにけれど、殿の、さやうなる御容貌、御心と見たまうて、浜木綿ばかりの隔てさし隠しつつ、何くれともてなし紛らはしたまふめるもむべなりけり

(少女 ③ 六七〜六八頁)

大臣の御心ばへをありがたしと思ひ知りたまふ。

(野分 ③ 二六九頁)

夕霧は、容貌ではなく人柄を慈しむ父の行為に感動する。そして、その思いは紫の上の美しさを視て後、なお一層強くなった。それほ

ど二人の容貌には歴然とした差が認められたのだ。

島内景二氏は、「夕霧は花散里を見て、花散里の人柄に感動すると共に、花散里を大切にする光源氏の心深さをも痛感する。この点には、光源氏的世界の観察者としての夕霧像が内在している」として、彼が「(観察者)から更に上昇して光源氏の世界を内部から破壊する(獅子身中の虫)たりうるかは、まだ不明である。」とする一方で夕霧には、光源氏のような人生は用意されていなかったと述べている。^(註5)森一郎氏は、「父源氏の心深さに感動する夕霧の心のありようは、日常の礼儀正しく孝心のあつい真面目な人間像」であり「語り手が客観的に定位する夕霧像」の範疇であるとしている。^(註6)夕霧は、紫の上に心を奪われつつも彼女に対して何か行動を起こすこととはない。強いていえば、その気配を常を感じていたいと思ひ彼女を意識するのみである。まさにそれは、まじめな彼の性質を示すものといえるだろう。

そもそも、母親が亡くなったこともあり元服まで夕霧と光源氏が接する事は少なかった。夕霧が物心つかないうちに光源氏は須磨・明石に蟄居し、京に戻って後は政治基盤を固めるために内大臣としてのぎを削る日々を送る彼からは、父親としての姿が浮かび上がってこない。夕霧と光源氏の親子関係は、希薄な印象しかないのだ。そのために親子でありながら他者の視線で父を視る夕霧に、違和感は

ない。彼は光源氏を客観的に視る人なのである。物語に表出される光源氏は、恋多き男であると同時に政治家である。夕霧の教育に関しては父親としての顔を見せるが、それは〈源氏〉を存続させるための後継者に対するものであった。

もの隔てぬ親におはすれど、いとけしうさし放ちて思いたれば、おはしますあたりに、たやすくも参り馴れはべらず。東の院にてのみなん、御前近くはべる。対の御方こそあはれにものしたまへ、親いま一ところおはしまさしかば、何ごとを思ひはべらまし
(少女 ③ 六九頁)

六位の浅葱の袍を着せられて、夕霧は父親を恨む。そこには父親の愛情を感じたことのない孤独な彼の姿が表出している。左大臣家の庇護のもと祖父母の愛情を受けて育ったが、生まれてすぐ母を亡くし父と親しむことなく彼は成長した。その夕霧が恋したのはともに育った雲井雁であった。同じような境遇にある二人が、互いを慈しむに至るのは必然であったといえるだろう。同様に、自分の父親に対して、彼が客観的に視る人となったことも必然であったのだ。さらにいえば、彼は肉親であるが故に光源氏の周囲に最も近づける人物であり、その内面に踏み込むことができるのである。

高橋亨氏が指摘する^(註)ように、物語の中心は光源氏であり、「〈父〉の絶対性を超越できない〈子〉の物語」である。夕霧は恨みながら

も、父の敷いたレールの上で勉学に励み五位の侍従に昇進した。また、雲井雁との恋を引き裂かれても、彼女を忘れて他に妻を求めることはなかった。唯一関係を持った藤典侍も「ただかの人の御ほどと見え」「暗ければこまかには見えねど、ほどのいとよく思ひ出でらるるさま」(少女 ③ 六一頁)といった理由で心惹かれていたのである。そして、花散里を視たことで、女性は容貌だけではなく心ばえの美しさを尊ぶべきであり、雲井雁を思い切ることのできない自分の心を反省する一面を見せている。そして、まじめと評される夕霧の成長が描かれるこの巻の終わりに、光源氏の理想郷・六条院の造成が完成するのである。

三 紫の上を視た夕霧

第三章第一節で述べたように、六条院は四つの町に分かれた壮大な屋敷である。春の町は紫の上、夏の町は花散里、秋の町は秋好中宮、冬の町は明石の上とそれぞれの女性を主として風雅に雅に暮らす空間として創造されている。その六条院で春夏秋冬が一巡し、屋敷の持つ四季折々の風情を内外に示した後に「野分」を迎える。

野分の後という非日常的空間は、夕霧に思いもよらぬ出来事を経験させた。決して視ることがなかったであろう人の姿を、彼は視た

のである。先に示したように、偶然眼にした紫の上の美しさは、夕霧の心をとらえて放さなかった。そして光源氏が自分を彼女に近づけなかった理由がそこにあることを知り、自分の行為を「恐ろしい」感じて彼は立ち去ろうとする。しかし、彼女に話しかける光源氏の声を聞き視たいという欲望が恐れという感情をしのいで再び視る行為へと彼を誘うのである。

もの聞こえて、大臣もほほ笑みて、見たてまつりたまふ。親ともおぼえず、若くきよげになまめきて、いみじき御容貌の盛りなり。女もねびととのひ、飽かぬことなき御さまどもなるを身にしむばかりおぼゆ
(野分 ③ 二六六頁)

そこで視た光源氏は父親ではなく、一人の男性であった。そして、紫の上との睦まじい姿に対して「身にしむ」思いを抱きつつ、自分の視るという行為を再び「恐ろしい」感じるのである。森一郎氏は、紫の上と玉鬘、それぞれの女性と一緒にいる光源氏を「男」とはとらず、夕霧から視た彼女たちの「女」の部分重視している。^(註5)しかし、「親ともおぼえず、若くきよげになまめき」たる光源氏は、やはり親ではなく一人の男としてとらえるべきであろう。ここでの光源氏は、紫の上の美しさにふさわしい存在でなければならない。そこには、大臣という地位も父親という立場も必要としない。必要なのは男性としての魅力なのである。今井源衛氏はこの夕霧の視線

について「子が父親を自分の親とも思えないほど若々しく美しく見えると思うこと自体、父は子にとって他者となりつつあるわけで、そこに、思春期にある夕霧の成長ぶりを思わせられるのである。」と述べている。^(註6)夕霧にとって花散里は母親代わりであり、光源氏と彼女の関係についても、彼らからなまなましい男女の関係を感じることはなかった。しかし、紫の上と共にいる光源氏は、若く美しい一人の男性であり、互いが同じ空間を共有するにふさわしい美男美女であった。夕霧の視線がとらえた光源氏は、対する女性によって変化している。そして、夕霧がその変化を正確に視ることができたのは、彼が成長したことを示しているのではないか。

その夜三条宮で過ごす夕霧は、いつもと異なり雲井雁ではなく紫の上の姿ばかりが思い出される。それ程に彼の心は彼女にとらえられているのであった。「あやしくあくがれたる心地」の夕霧は、再び光源氏と紫の上が住む南の御殿に挨拶に参上した。当然ながら、先の野分の後のような偶然は望めなかった。紫の上は再び遠い人になったが、一度眼にした彼女の姿を忘れることは出来ない。あきらめきれない夕霧は、その気配でも感じようとする。

語らひきこえたまふけはひどいときをかし。女の御答へは聞こえねど、ほのぼの、かやうに聞こえ戯れたまふ言の葉のおもむきに、ゆるびなき御仲らひかなと聞きゐたまへり。

(野分 ③ 二七一～二七二頁)

「禁じられた情念に憑かれ^(註③)」た夕霧ではあつたが、観察者としてはあくまでも冷静に視ている。それ故に六条院のはらむ危うさを視ることができたのだ。

四 玉鬘を視る夕霧

紫の上の魅力に取り憑かれた夕霧は、野分の後という非日常の間の中で常の彼とは異なる行動を起こす。その一つは玉鬘に対して抱いていた「いかでこの御容貌見てしがなと思ひわたる心」を押さえきれずに、実行に移したことである。しかも、偶然を待つのではなく「やをら引き上げて見」たのである。

女の御さま、げにはらからといふとも、すこし立ち退きて、異腹ぞかしなど思はむは、などか心あやまりもせざらむとおぼゆ。昨日見し御けはひには、け劣りたれど、見るに笑まるるさまは、立ちも並びぬべく見ゆる。八重山吹の咲き乱れたる盛りに露かかれる夕映えぞ、ふと思ひ出でらるる。

(野分 ③ 二七九～二八〇頁)

紫の上には及ばないが笑みを誘われるような玉鬘の様子は、夕霧もその美しさを認めざるを得ない。しかし、夕霧がここで視たものは、

彼女の容貌だけではなかった。娘であるはずの玉鬘に恋人のように戯れる父・光源氏の姿がそこにあつたのだ。

かく戯れたまふけしきのしるきを、あやしのわざや、親子と聞こえながら、かく懷離れず、もの近かきほどかはと目とまりぬ。見やつけたまはむと恐ろしけれど、あやしき心もおどろきて

(野分 ③ 二七九頁)

光源氏と玉鬘の戯れは、夕霧にとって衝撃的であつた。二人に血のつながりがないことを彼は知らない。辻和良氏は、「夕霧は、光源氏とともにいる玉鬘の姿を見るやいなや、紫の上を思い浮かべる。夕霧は「禁忌の犯し」を予感するがゆえに、玉鬘と光源氏との戯れに興味を掻き立てられているのである。」と述べている^(註④)。玉鬘と光源氏が寄り添う姿を視た夕霧が紫の上のことを思い浮かべたのは当然のことであろう。光源氏の玉鬘への行為は紫の上に対する裏切りであり、夕霧にとって赦すことの出来ないものだったのではないか。思ひよらぬ限なくおはしける御心にて、もとより見馴れ生ほしたてたまはぬは、かかる御思ひ添ひたまへるなめり、むべなりけりや、あな疎ましと思ふ心も恥づかし(野分 ③ 二七九頁)

光源氏の行為を無理もないことと納得しようとしながらも、嫌悪する夕霧は「憎きもののをかしけれ」とさえ感じている。そして「あやしのわざ」「憎きもの」と感じながら、なおも視つづけているの

だ。今井源衛氏は、この夕霧が光源氏に抱く嫌悪の情について「他人ごとのように突き放され、相手が自分の親であることから発する苦悶は乏しい」として「源氏と夕霧とは心理的に親子というよりはむしろ大人どうしである」と指摘している。^(註10) 紫の上の時と同様に、ここでも彼は父ではなく男性なのである。事実二人は親子の關係になく、夕霧の眼がとらえた男としての光源氏の姿が真実なのだ。しかし、二人を親子と信じている夕霧が、光源氏の行為を納得するには理由が必要であった。日向一雅氏は「この夕霧の納得のしかたは、常識を逸脱した源氏の行為を、自己の了解可能な範囲内に押しとどめようとする傾向が著しい」として「現実在即応密着した夕霧の判断力の貧しさを示すもの」であるとしている。^(註10) まじめな性格を付与された夕霧にとって、光源氏の行為は理解しがたいものである。にもかかわらず理由を探して納得するところに、彼が六条院世界を犯す人物になり得ない要因があるのだ。

後に光源氏から玉鬘が内大臣の娘であることを告げられた夕霧は、玉鬘に対して求愛の和歌を詠みかける。「かたはらいたければ書かぬなり」(藤袴 ③ 三三三頁)とまで書かれた彼の言動を伊藤博氏は、「『まめ人』としては目を見張るような大胆さ」として「かの野分の日の惑乱は深く潜行して、かれの言動を突き動かしている」と述べている。^(註11) 玉鬘に対する夕霧の行動が、野分の後に

視たことに影響を受けているのは明らかだろう。「昨日見し御けはひには、け劣りたれど、見るに笑まるるさまは、立ちも並びぬべく見ゆる。」とされた玉鬘に対して、血のつながりが無いことを知った夕霧が、恋を語りかけても不思議ではない。

しかし、この夕霧の思いを玉鬘は受け入れない。一方の夕霧も「なかなかにもうち出でてけるかなと口惜しきにつけても、かのいますこし身にしてみておぼえし御けはひを、かばかりの物越しにても、ほのかに御声をだに、いかならむついでにか聞かむと安からず思ひつつ」(藤袴 ③ 三三四頁)と、自らの玉鬘への言動を悔やむと同時に、紫の上へと想いをはせる始末である。「安からず思ひつつ」は「玉鬘に言い寄った感情の波紋に禁断の対象紫上への狂おしい情念を取り重ね、それらを領有する父光源氏」に対したものであると伊藤博氏は指摘している。^(註12) 夕霧が真実想いを寄せたのは紫の上に対してだけであった。しかし、彼の想いは犯しには発展しない。彼には、紫の上を視ていたいという欲望はあっても、光源氏から彼女を奪い取る激しさはないのである。それ故に彼の視線は、彼女を苦しめる光源氏の行為に対して敏感であり、危うさを的確にとらえていたといえるのではないか。

玉鬘の出仕が決まった時、夕霧は自らの疑問を父に投げかけて反応を視る。

年ごろかくてはぐくみきこえたまひける御心ざしを、ひがざまにこそ人は申すなれ。かの大臣もさやうになむおもぶけて、大將のあなたさまのたよりに気色ばみたりけるにも、答へたまひける

(藤袴 ③ 三三六頁)

内々にも、やむごとなきこれかれ年ごろを経てもものしたまへば、えその筋の人数にはものしたまはで、棄てがてらにかく譲りつけ、おほぞうの宮仕の筋に領ぜんと思しおきつる、いと賢くかどあることなりとなんよろこび申されけると、たしかに人の語り申しはべりしなり

(藤袴 ③ 三三六～三三七頁)

夕霧が指摘したのは、光源氏が隠しておきたかった己の欲であった。彼は、玉鬘を手放したくはなかったのである。その一方で、そうした己の欲望を世間に明らかにするつもりもなかった。そこで考えたのが宮仕えである。しかし、彼の企みは夕霧によって明らかにされた。夕霧は自らの疑問を漏れ聞いた内大臣の考えとして光源氏に投げかける。光源氏は「げに宮仕の筋にて、けざやかなるまじく紛れたるおぼえを、かしこくも思ひよいたまひけるかなとむくつけく思さる」(藤袴 ③ 三三七頁)と内大臣が自分の考えを推測したことに気持ち悪さを感じているが、夕霧の憶測であることには気づいていない。夕霧の視線がとらえているものに気がつかない光源氏は、この後も彼の視線に自らをさらしている。夕霧が六条院世界の危う

さを視続けることができた理由がそこにあるのだ。

五 おわりに

元服後の夕霧は、(源氏)の後継者として教育され成長していく。その過程の中で、彼は常に客観的に視る人である。そして夕霧は視ることで成長していく。擬似後宮ともいえる六条院は光源氏が創りだした世界であり、外からはその華やかで雅な様子しか伺うことができない。しかし、夕霧は肉親であり唯一人の後継者という立場から、その世界を内部から視ることができる人物なのである。

野分という非日常が、彼に光源氏を取り巻く女性達を垣間見る偶然を与えた。花散里の存在は、光源氏に対する尊敬の念を抱かせ、紫の上は、その魅力的な容貌で彼の心を捕らえた。

一方、玉鬘の存在は違った。彼女を視ることで、彼は光源氏の男性としての欲を知った。夕霧は自ら視て考えたことを光源氏に投げかけて、彼の反応を視ている。冷静な観察者としての夕霧の姿がそこに示されているのだ。夕霧の視線は、女性から光源氏へと移りながら六条院世界の内部を映し出していく。それはやがて、柏木を視ることで、六条院世界の崩壊ともいえる女三の宮密通の真実を視るのである。

註

国文学研究室 平4・2)

註9 「親と子」一五九頁(『源氏物語の思念』所収 笠間書院 昭62・9)

註1 「『野分』の後―源氏物語第二部への胎動二四五頁(『源氏

物語の原点』所収 明治書院 昭55・11)

註2 「夕霧の役割と人物像 ―第一部を中心に―」三六頁(『研

究と報告』所収 山梨大学国文学談話会 昭42・8)

註3 「源氏物語の人物造型と人物呼称の連関(その二)」二八六

頁(『源氏物語の主題と表現世界』所収 勉誠社 平6・7)

註4 「源氏物語正篇における夕霧像 ―夕霧の役割―」二四頁

(『国文学研究ノート』所収 神戸大学「研究ノート」の
会 昭56・4)

註5 「夕霧の人生とその人物像 ―光源氏の子供達―」二〇六頁

(『電気通信大学紀要 第3巻 第1号』所収 平2・6)

註6 「源氏物語の人物造型と地の文の表現機構」一八二頁(『源

氏物語の表現と人物造型』所収 和泉書院 平12・9)

註7 「可能態の物語の構造―六条院物語の反世界―」五八頁(『源

氏物語の対位法』所収 東京大学出版会 昭57・5)

註8 「源氏物語の表現方法 ―視点・文体・人物呼称・敬語法―」

一〇五頁(『学大国文 第三五号』所収 大阪教育大学国語

註10 註1に同じ 二四六頁

註11 「夕霧 ―〈等身大〉の男君―」一九五頁(『源氏物語講座

第二巻 物語を織りなす人々』所収 勉誠社 平3・9)

註12 註9に同じ 一六〇頁

註13 註2に同じ 三六頁

註14 註1に同じ 二五〇頁

註15 註1に同じ 二五〇頁

第四節 後継者としての柏木

一 はじめに

柏木と女三の宮の密通は、光源氏の私的空間である六条院を崩壊させると共に、第三部の中心的役割をなす薫を生み出した点で大きな意味を持つものである。当事者の一人柏木は、光源氏のライバルであった内大臣の嫡男であり、光源氏の嫡男夕霧との関係は彼らの父親たちのそれに通じるものがある。しかし、夕霧や柏木の弟・左大弁と比べると第一部において柏木の登場する場面は少ない。

中将の御子の、今年はじめて殿上する、八つ九つばかりにて、声いとおもしろく、笙の笛吹きなどするをうつくしびもてあそびたまふ。四の君腹の二郎なりけり。世の人の思へる寄せ重くて、おぼえことにかしづけり。心ばへもかどかどしう容貌もをかしくて、御遊びのすこし乱れゆくほどに、高砂を出だしてうたふいとうつくし。

（賢木 ② 一四一〜一四二頁）

まず登場するのは二郎君。彼の声の美しさは後にも繰り返し彼の美点として紹介されるが、ここではその出自を明らかにすることで彼の将来に対する期待を示している。一方、柏木の登場は雲井雁と夕霧の関係を知った内大臣が彼女を迎えに来た場面で「内の大殿の君

たち、左少将、少納言、兵衛佐、侍従、大夫などいふも、皆ここには参り集ひたれど」（少女 ③ 五二頁）とあるだけで、彼の性質、出自や容貌に触れることはない。初音巻においても内大臣の子息達の一人として示されるのみである。したがって、柏木と夕霧及び光源氏との接点はこの時点では明確に浮かびあがってこない。

その彼が積極的に物語に関わってくるのは、玉鬘の求婚者の一人としてである。内大臣家の嫡男に相応しい若者として登場する柏木は、自信に満ちている。しかし、後の女三の宮に対しては彼女が光源氏に降嫁した後も未練を持ち続け、遂には密通という形で想いを遂げる。その行為は柏木自身に苦悩を与え、それ故に病を得て彼を死へと導くのである。玉鬘と女三の宮。この二人に対する柏木の言動は、同じ人物であることに疑問を抱くほど印象が異なっている。玉鬘が実は彼の姉であったという事実を除いても、この二つの求婚譚における彼の変貌に疑問は残る。しかし、このような柏木の言動が物語を押し進める一つの歯車となっているのも事実である。柏木にとって結婚は何を意味するものだったのか。玉鬘及び女三の宮に求婚する柏木について考えることは、彼の一族が（源氏）の後継者たる夕霧に負けた原因を知ることにもなるのではないか。

一 柏木の出自

論を進めるにあたって、まず柏木の血筋を確認しておきたい。父はかつての頭中将、母は右大臣の四の君。二人の嫡男として柏木は生まれている。父・頭中将は左大臣家の嫡男であり、彼の母は桐壺帝の同腹の妹であった。母・四の君は、朱雀院の母・弘徽殿太后の妹であり、朧月夜の姉である。ただ、柏木の幼少の頃は、父の左大臣家と母の右大臣家が政治的に対立しており、頭中将があまり右大臣家を訪れていないことも明らかにされている。今井久代氏は、両家の対立から柏木は右大臣家から遠ざかりがちな父方よりも母方の影響を受け「母の愛子であり、右大臣家の懐深く成長した」と述べている。^(註1) 当時子どもは母方で養育されることから、柏木をはじめとする四の君腹の子ども達は右大臣家で養育されていたはずである。その一方で柏木は左大臣家の嫡男であり、将来左大臣家を継ぐ者であるという認識は双方にあっただろう。

童なりしより、朱雀院のとりわきて思し使はせたまひしかば、御山住みに後れきこえては、またこの宮にも親しう参り、心寄せきこえたり。
(若菜下 ④ 一五七頁)

ここに示された柏木と朱雀院や春宮との繋がりは、彼と右大臣家の関係を背景としたものである。幼い頃から朱雀院に特別に目をかけられ、その皇子・春宮とも親しくしている柏木は、自らの血筋を生

かしそれにふさわしい位置を確保しているといえる。まさしく左大臣家の後継者として、順調に人生を歩んでいるといえよう。

また、このような環境は柏木の自負心に影響を与えていると考えられる。自分の血筋、周囲の期待、皇家との繋がりなどが柏木に自分が特別であるという意識を植え付けたとしても不思議ではない。彼は死を前に「いはけなかりしほどより、思ふ心ことにて、何ごとをも人にいま一際まさらむと、公私のことにふれて、なのめならず思ひのぼりしかど」(柏木 ④ 二八九)と自らを回想している。このような柏木の自負心は、彼を取り巻く環境が作り上げたものであり、彼自身も自らの置かれた立場を充分に認識した上でのものといえる。しかし、こうした自負心は柏木のみならず、政治を司る者やその後継者なら誰もが多かれ少なかれ持っているものだ。ただ一点、柏木が他者と異なる点は皇家との係わりの深さである。朱雀院や春宮といった宮中で最高位に位置する人々との関係の深さは「何ごとをも人にいま一際まさらむ」という彼の意気込みを裏付けけるものである。

さらに、柏木と光源氏の嫡男である夕霧との関係は、かつての頭中将と光源氏の間を彷彿させた。政治の場において、それぞれの出自にふさわしい道を歩む二人は、良き友人、良きライバルであり、夕霧の正妻・雲井雁が柏木の妹である点も父親達と共通している。

かつての二人と異なるのは、柏木が独身である点であろう。柏木は、自分にふさわしい妻を求めている。人より勝りたいと思う柏木にとって、自分の妻となる人物に身分や財力を求めることは何ら不思議ではない。

こうした事情を踏まえて胡蝶巻以降、彼の求婚譚が語られるのである。

二 玉鬘への求婚

胡蝶巻において、玉鬘に想いを寄せる男達の一人として柏木は登場する。

わが身さばかりと思ひあがりたまふ際の人こそ、たよりにつつ気色ばみ、言出で聞こえたまふもありけれ、えしもうち出でぬ中の思ひに燃えぬべき、若君達などもあるべし。その中に、事の心を知らで、内の大殿の中將などはすきぬべかめり。

（胡蝶 ③ 一六九〜一七〇頁）

玉鬘は、内大臣の実の娘でありながら光源氏が引き取り自分の娘として世話をしている。六条院で大切に守られる彼女は、その美しさが、世間の噂となつて身分ある人々の心を騒がせているのである。美しい女性を妻に迎えたいと思うのは当然であるが、ここで注意し

たいのは「わが身さばかりと思ひあがりたまふ際の人こそ」という言葉である。相手は六条院の主・光源氏の娘として公表されている。つまり玉鬘に求婚しようとする人物には、光源氏の娘に求婚しても恥ずかしくない身分と地位が求められているのだ。また、春宮に入内する娘を持つ光源氏と縁戚関係を結ぶことは、彼らにとつても皇家との繋がりをするということでもある。こういった理由から、柏木が求婚者に名乗りを上げるのは当然のことであつた。

しかし、玉鬘は光源氏の娘ではなく内大臣の実娘である。その事実を知らずに柏木は玉鬘に心を奪われているのだ。ここで、求婚者の一人として柏木を登場させることは、世間や光源氏から見た柏木像というものを表出することになった。

公卿といへど、この人のおぼえに、かならずしも並ぶまじきこそ多かれ。さる中にもいと静まりたる人なり。おのづから思ひあはする世もこそあれ。（略）見どころある文書きかな

（胡蝶 ③ 一八〇頁）

右の中將は、ましてすこししづまりて、心恥づかし気まさりたり。

（常夏 ③ 二二八頁）

前者は玉鬘に來た柏木の手紙を見て、後者は庭に立つ弁少將達を見ながら玉鬘に語りかける光源氏の言葉である。他の公卿達と比べても見劣りのしない柏木の評判と筆跡の見事さ、そして彼の思慮深さ

は二度に渡って繰り返され、その人柄の良さも併せて語られている。

光源氏による柏木評は、いわば光源氏の属する上流社会もしくは政治を司る人々の彼に対する評価と考えて良い。柏木が己の人生に高い望を掲げていることは先に示したが、こうした高い評価を得ている点では、まず目標通りの人生を歩んでいると見ていいだろう。

その玉鬘が内大臣の娘、つまりは自分の異母姉と解り内侍としての入内が決まった後の柏木の行動はどのようなものであったのだろうか。

実の御兄弟の君たちはえ寄り来ず。宮仕のほどの御後見をと、おのおの心もとなくぞ思ひける。頭中将、心を尽くしわびしことはかき絶えにたるを、うちつけなりける御心かなと人々はをかしがるに、殿の御使にておはしたり。

（藤袴 ③ 三三八〜三三九頁）

求婚した相手が実は姉だった事への衝撃があつたにしても、女房達の失笑を買うほど豹変する柏木からは、先に示した人柄の良さや思慮深い様子をうかがうことはできない。若さといってしまえばそれまでだが、そこには逆に柏木の思慮のなさ、先を見る能力のなさといったものが見受けられる。さらにいえば、柏木は玉鬘が光源氏の娘であることにしか興味が無かったと見ることも可能であるのだ。結婚を出世の一つの手段と考える柏木の生き方がかいま見えるので

ある。

こうした姿勢は、玉鬘の出産の際にも表出している。

頭中将も、この尚侍の君をいとなつかしきはらからにて、睦びきこえたまふものから、さすがなる気色うちまぜつつ、宮仕にかひありてものしたまはましものと、この若君のうつくしきにつけても、「今まで皇子たちのおはせぬ嘆きを見たてまつるに、いかに面目あらまし」とあまり事をぞ思ひてのたまふ。公事はあるべきさまに知りなごしつ、参りたまふことぞ、やがてかくてやみぬべかめる。さてもありぬべきことなりかし。

（真木柱 ③ 三九七〜三九八）

玉鬘が髭黒大将の子供を出産した際、男の子を産むのなら入内すれば良かったのにと柏木は考えている。当時の帝には皇子がなく、玉鬘が皇子を生めばその子を次期春宮にたて、外戚として権力を手にすることが出来る。皇子誕生を願って入内した弘徽殿女御が望みを果たせなかったことから、自らの権力を確実にするためにも柏木がそう考えても不思議ではなく、内大臣家の嫡男としては当然のことである。光源氏が娘・明石姫君の春宮入内を準備している今、内大臣家側の劣性は否めず、自らの政治的地位を確保しようとする柏木にとっては玉鬘が帝に入内していればという仮定が実は切実な願望であつたといえる。

柏木の玉鬘への求婚譚は、二人が姉弟である故にはじめから成立するはずのないものであった。玉鬘が姉と解った後、態度が豹変する柏木には人間の機微とか情緒のようなものは感じられない。彼にとっては、権力者の娘であることに意味があったのだと思われる。仕方がない部分である。実るはずのない求婚譚は、世間での彼の評判を示すと共に、政治の世界を生きる者としての打算的な一面を垣間見せるものであったと考えられる。

三 女三の宮への求婚

若菜巻では、朱雀院による女三の宮の婿選びが語られる。そもそもこの女三の宮の婿選びは、当事者である女三の宮自身の言動が示されることはなく、彼女を取り巻く人々、主に朱雀院と乳母達によって進められている。女三の宮の人となりを知らずに、なぜ求婚者が集まるのか。それは彼女が朱雀院の鍾愛の姫宮だからである。出家を前にした朱雀院が女三の宮の行く末だけをあれこれ悩んでいることは、世間にも広く知られていることであり、彼女に求婚者達が集まる理由がそこにあることは「かうやうにも思しよらぬ姉宮たちをば、かけても聞こえ悩ましたまふ人もなし。」（若菜上 ④ 三六頁）と、他の姫宮達に求婚する者がいないことから明らかであ

る。この件について秋山虔氏は「まさに皇女を配偶者とするこの意義は、その皇女当人の人柄如何にあるのではなく、後見としての父院の精神的物質的肩入れに対応して、天皇家との身内関係をいかに深めるかにあるだろう。」述べている。^(註3) 女三の宮だけでなく他の皇女と結婚しても、それは春宮（朱雀院の皇子）と姻戚関係を結ぶことになり、次期政権への足がかりにもなりうるものである。しかし、彼らが望むのは女三の宮だけであり、その理由は秋山氏の指摘通りである。朱雀院がなぜ女三の宮の降嫁を考えるのか、その真の理由を知らずに求婚者達は彼女の降嫁を望むのであった。

そうした求婚者の一人が、柏木である。この求婚譚は後に密通事件に発展し六条院に様々な波紋を投げかけるが、その発端である婿選びの場面で柏木自身から発せられる言葉はない。彼が女三の宮の降嫁を望んでいることが示されるのは二カ所、朱雀院と太政大臣（先の内大臣）それぞれの発言である。

太政大臣も、「この衛門督の、今まで独りのみありて、皇女たちならずは得じ、と思へるを、かかる御定めども出で来たなるをりに、さやうにもおもむけたてまつりて、召し寄せられたらん時、いかばかりわがためにも面目ありてうれしからむ」と思しのためひて、尚侍の君には、かの姉北の方して、伝え申したまふなりけり。よろづ限りなき言の葉を尽くして奏せさせ、御

気色賜らせたまふ。

(若菜上 ④ 三七頁)

ここに示される「皇女たちならずは得じ」という柏木の姿は玉鬘の時に見られた政治的側面をより強固にしたものといえる。また、母から尚侍の君(朧月夜)を通して朱雀院へ奏上している点も、柏木と旧右大臣家の関係を利用したものであり、太政大臣家が総力をあげて働きかけていることは、ここに明らかである。太政大臣家にとって後継者たる柏木が女三の宮を妻に迎えれば、今まで以上に朱雀院との関係が強固になり、ひいては宮中における一族の地位の安定を得ることができる。春宮との姻戚関係において、光源氏に先んじられている太政大臣にとっては、大きな意味を持つのだ。しかも仲介者・朧月夜は朱雀院の寵愛を受けており、柏木は女三の宮と年齢的な釣り合いもとれている。後に柏木が「かく異ざまになりたまへるは、いと口惜しく胸いたき心地すれ」と述懐するが、この時点で彼と周囲の人々は彼が候補からはずされるとは考えてもいなかったに違いない。

しかし、朱雀院はいとも簡単に柏木を候補からはずしている。

右衛門督の下にわぶなるよし、尚侍のものせられし、その人ばかりなむ、位などいますこしものめかしきほどになりなば、などかはとも思ひよりぬべきを、まだ年いと若くて、むげに軽びたるほどなり。高き心ざし深くて、やもめにて過ぐしつつ、い

たくしづまり思ひあがれる気色人には抜けて、才などもことなく、つひには世のかためとなるべき人なれば、行く末も頼もしけれど、なほまたこのためにと思ひはてむには限りぞあるや

(若菜上 ④ 三六頁)

院は柏木を「つひには世のかためとなるべき人なれば、行く末も頼もしけれ」と評価しつつも彼の位の低さ、年の若さ、身分の軽さを理由として婿候補からはずしている。位の低さは別として、年齢や身分を問題とするのは、柏木の側に見れば心外であつただろう。先に示したように、彼の血筋は臣下としては申し分のないものである。年齢も朱雀院が最初に婿候補にあげた夕霧よりも年長であり、若いことの理由にはならない。この朱雀院と柏木の認識の違いが、後の悲劇を生むことになるのである。

衛門督の君も、院に常に参り、親しくさぶらひ馴れたまひし人なれば、この宮を父帝のかしづきあがめたてまつりたまひし御心おきてなどくはしく見たてまつりおきて、さまさまの御定めありしころほひより聞こえ寄り、院にもめざましとは思ひのたまはせずと聞きしを、かく異ざまになりたまへるは、いと口惜しく胸いたき心地すれば、なほえ思ひ離れず。そのをりより語らひつきにける女房のたよりに、御ありさまなども聞き伝ふるを慰めに思ふぞ、はかなかりける。「対の上の御けはひには、

なほ圧されたまひてなむ」と、世人もまねび伝ふるを聞きては、かたじけなくとも、さるものは思はせてまつらざらまし、げにたぐひなき御身にこそあたらざらめ、と常にこの小侍従といふ御乳主をも、言ひはげまして、世の中定めなきを、大殿の君もとより本意ありて思しおきてたる方におもむきたまはばとたゆみなく思ひ歩きけり。 (若菜上 ④ 一三五―一三六頁)

これが柏木から見た今回の状況である。柏木が常々朱雀院の元に参上して親しくしていたこと、朱雀院が女三の宮をいかに大切にしているか知り得ていたことを示すとともに、柏木自身は朱雀院がなぜ自分を婿候補からはずしたのか解らないことが示されている。実際は、先に示したように朱雀院は彼を早い時点で候補からはずしているのだが、朱雀院との繋がりを大切にしていた柏木にとっては、この朱雀院の決定は「いと口惜しく胸いたき心地す」るものであり納得しがたいものであったのである。

つまり、ここには朱雀院の柏木に対する評価と、柏木が想像していた朱雀院の自分への評価のずれが示されており、この錯覚が柏木の挫折感を大きくしているのである。先に示した様々な状況から、柏木が降嫁に対して期待を抱いていたのは明らかであり、女三の宮の降嫁先が六条院に決まったという現実は、柏木にとって納得できるものではなかった。旧右大臣家を核にした血の繋がりも効果がな

く、今まで培ってきたものも報われなかった。しかも春宮に入内させた明石姫君とこの女三の宮を有することで源氏一族は宮中において強大な力を有することになる。その後継者はライバル・夕霧である。理想高く突き進んでいた柏木にとって、この挫折は将来の政権闘争において大きな不利を被ったことになるのだ。篠原昭二氏は、この部分を次のように解釈している。^(註3)

この時、柏木にはまだ女三宮の具体像は、歌の贈答を通じてさえないはずで、光源氏の正室になってしまった女三宮へのこの思いは、彼の野心の挫折と、その無念からいまだ立ち直れないでいることを、伝えていると解される。

篠原氏が指摘するように、柏木は女三の宮の人間性を全く知らない。そして、降嫁相手に選ばれなかった理由が納得できるものでなかったことが女三の宮への未練となっているのだ。光源氏と女三の宮の様子を女房から聞き、自分ならばという自尊心をかき立て、「大殿の君もとより本意ありて思しおきてたる方におもむきたまはば」とさえ考える。それは己の挫折という事実から目を背けた自信家柏木の姿を表したものと考えられよう。女三の宮に対する未練は、実は失った将来への希望に対する未練であると私は考える。

では、柏木はいつから女三の宮自身を求めるようになったのか。柏木は小侍従を通して自らの想いを女三の宮に伝え続け、密通後は

逢瀬のままならぬ事を嘆き、さらには光源氏の訪れに対して逆恨みの手紙をよこすようにさへなる。それまでの理想高き自信家・柏木の姿はそこにはない。女三の宮への未練を彼女自身への恋に変化させたのは、蹴鞠の日のハプニングである。見ることが出来るはずのないものを見た。その驚きや感動と相まって、女三の宮が気高く可憐であると柏木の心に深く焼き付いてしまったことは、繰り返しかれる彼の姿から読みとることが出来る。

ましてさばかり心をしめたる衛門督は、胸ふとふたがりて、誰ばかりにかはあらむ、ここらの中にしるき桂姿よりも人に紛るべくもあらざりつる御けはひなど、心にかかりておぼゆ。

（若菜上 ④ 一四二頁）

衛門督は、いといたく思ひしめりて、ややもすれば、花の木に目をつけてながめやる。

（若菜上 ④ 一四三頁）

柏木は女三の宮に心奪われてしまう。一方、同じように女三の宮の姿を目にした夕霧は、彼女の容貌に心惹かれつつも姿を露わにした配慮のなさを批判している。ただ、この件に関しては女三の宮だけでなく、彼女に仕える女房達にも責任の一端はある。女三の宮の至らなさが明らかにならないよう、こうした事態が起こらないよう配慮するのが仕える女房達の役割である。しかし、宮の女房達がこうした配慮を持ち得ないことはすでに示されていた。

女房なども、おとなおとなしきは少なく、若やかなる容貌人のひたぶるにうちはなやぎさればめるはいと多く、数知らぬまで集ひさびらひつつ

（若菜上 ④ 一三三頁）

夕霧は降嫁してきた女三の宮と紫の上を比較しながら、女三の宮の女房が若く器量よしで派手好きが多く、分別のあるしつかりした人物がいないことを感じていた。つまり、女房達は自身が蹴鞠に興じる夕霧達を見ることにかまけて、主である女三の宮に気を配らなかつたことは想像に難くない。このハプニングは、起こるべくして起こったものであった。

しかし、皇女であり准太上天皇の正妻たる人物が他者に姿を見られるなど本来あつてはならないことである。^(註4)ここに女三の宮の幼さ、いたらなさが現れているのだが、柏木はそれに気付かない。彼女の行為は批判の対象であり、正妻としては不適格といえる。にもかかわらず、彼女の姿に心を奪われてしまった柏木は未練もあつて女三の宮の行為に対して冷静な判断力を失っている。ここにおいて、太政大臣家の嫡子たる柏木は、ただのつまらない男となってしまうのだ。

こうした柏木の変化は、彼の結婚からもうかがえる。

衛門督は中納言になりにきかし。今の御世にはいと親しく思されて、いと時の人なり。身のおぼえまさるにつけても、思ふこ

とのかはぬ愁はしさを思ひわびて、この宮の御姉の二の宮をなむ得たてまつりてける。下臈の更衣腹におはしましければ、心やすき方まじりて思ひきこえたまへり。人柄も、なべての人に思ひなずらふれば、けはひこよなくおはすれど、もとよりしみにし方こそなほ深かりけれ、慰めがたき嫉捨にて、人目に咎めらるまじきばかりにもてなしきこえたまへり。

(若菜下 ④ 二一七頁)

彼は中納言に昇進し、帝からの信頼も篤く宮中では時の人である。それは、今まで彼が培ってきた人間関係がもたらしたものであり、旧右大臣家の繋がりが大いに生きてきている成果といえる。そして、彼は更衣腹の女二の宮を正室に迎えた。彼女は「人柄も、なべての人に思ひなずらふれば、けはひこよなくおはす」のだが、女三の宮を忘れられない柏木は彼女を軽んじており人から咎められぬ程度の扱いしかない。秋山虔氏が「女二の宮がいかに下臈の更衣腹とはいえ今上の姉宮であるというその素性は否定すべくもなく、その限りで彼女を正室としてもてなすことは『時の人』としての体面(註5)を持つるうえで無益ではなかったはず」と述べているように、皇女という点においては女二の宮も条件を満たしている。女三の宮の降嫁がかなえられなかった現状では、女二の宮は彼が求めた皇家とのつながりをもたらず存在であった。将来のことを考えれば、女二の宮を

大切に扱うことによって、朱雀院及び今上帝の信頼を得ると同時に、光源氏もしくは夕霧に対抗すべく宮中における己の地位の確保を考えるはずである。しかし、柏木にその発想はない。ただ、女三の宮を想うだけなのである。政治家として、また嫡男としての思慮や野心を持たなくなった柏木は、その地位を追われるほかないのだ。あの蹴鞠の日に見た女三の宮の姿は、柏木の権力争いの場における挫折を恋愛での挫折にすり替え、その結果、柏木は女三の宮への満たされぬ想いを密通事件に発展させる。それはやがて光源氏の知るところとなり、事の露見を知った柏木は苦悩の末死に至るのだ。

内大臣家の嫡男としてその出自に相応しい地位を歩んできた彼の人生を変えたのは、女三の宮への求婚であった。女三の宮の降嫁先が光源氏しかなかったことは別に述べる(註6)。降嫁に至る朱雀院の苦悩や思考を柏木は理解していなかった。女三の宮降嫁に対する彼の希望は実現の可能性に期待を持たせるものだが、降嫁の決定権を握る朱雀院の考えとは異なるものであった。このずれは彼に大きな挫折を与え、女三の宮を得ることで彼にもたらされたであろう地位や財産等に対する未練が、女三の宮への未練という形を取ったと私は考える。しかし、そうした未練に密通の理由を求めることは難しいだろう。あの蹴鞠の日を境に柏木が男として女三の宮を求めたことで政治家としての柏木の将来は潰えたのである。

註

註1 今井久代「柏木物語の方法と表現——こころとかたちと——」

（『國語と國文学』 平3・11）九九頁

註2 秋山虔「柏木の生と死」（『講座 源氏物語の世界 第七集』

有斐閣 昭57・5）六頁

註3 篠原昭二「柏木的情念」（『源氏物語講座 第四卷』 有精

堂 昭46・8）一八六頁

註4 柏木からの文で蹴鞠の日のことを知った女三の宮が、光源氏が夕霧に姿を見られてはいけけないと諫めていたことを思い出す記述がある。

大殿の、さばかり言のついでごとに、「大將に見えたまふな。いはけなき御ありさまなめれば、おのづからとりはづして、見たてまつるやうもありなむ」と、いましめきこえたまふ

（若菜上 ④ 一四九頁）

註5 註1に同じ 七頁

註6 第二部 第一章 第一節 「1結婚―父・朱雀院の立場から」

参照

第二部 〈源氏〉の女性たち

第一章 皇女の生き方

第一節 女三の宮が暴き出すもの

1 結婚―父・朱雀院の立場から

一 はじめに

『源氏物語』は〈源氏〉の物語であり、女の宿世を描いた物語でもある。なかでも第二部における女三の宮の降嫁は様々な問題を引き起こし、紫の上をはじめとする女性たちの苦悩を描き出している。朱雀院によって繰り返される女三の宮の将来に対する不安は、当時の女性たちの置かれた状況を的確に踏まえたうえで女の生き難さへの憂いから生じたものである。また未亡人となった女二の宮のもとに通う夕霧の噂を聞いた紫の上の「女ばかり、身をもてなすさまるところせう、あはれなるべきものはなし」（夕霧 ④ 四五六頁）という思いが、第二部における女たちの宿世を象徴的に表しているのだ。たとえば、柏木に先立たれた女二の宮は、夕霧に押し切られ

るかたちで再婚した。女三の宮に対する柏木の一方的な恋は想いをとげたかに見えたが、光源氏に知られたことで破綻するだけでなく、女三の宮を追いつめて出家を選択させる原因となった。この様に、古代貴族社会における女たちの宿世は、彼女達をとりまく男達によって左右されていたといえる。

第二部の軸となる女三の宮は、父である朱雀院と乳母達によって結婚という人生の大事が決められている。そこに女三の宮の意志や考えが示されることはない。最終的に決定したのは朱雀院であるが、その後の女三の宮の結婚生活は、朱雀院と光源氏二人の思惑や行動に左右され続けた。

一方、女三の宮の降嫁は周囲に様々な波紋を投げかける。特に、光源氏が創りあげた理想郷・六条院は、彼女の参入によって崩壊が始まったといえる。その点で、女三の宮の存在は物語を押し進めるための原動力なのだ。第二部に描かれる様々な女たちの宿世を考察するためには、女三の宮に対する朱雀院と光源氏の影響を分析する必要がある。そこで、まずはじめに朱雀院に着目し彼女が女三の宮の降嫁に対してどのような影響を与えたかについて考えていきたい。

一 朱雀院の子どもたち―春宮と女三の宮

第二部冒頭において提示されるのは、朱雀院の病がはかばかしくないこと、それに伴い長年の望みであった出家のための準備を進めていること、この二点である。朱雀院が出家を考えるにあたり、俗世に残される彼の妻たちや子どもたちの行く末が考慮すべき対象として浮かびあがってくる。

子どもたちの中でまず注目されるのは、若菜下巻において即位する春宮の存在である。彼については、その人物について多く語られることはないが、ここでは彼の宮中における立場が重要である。春宮や帝といった地位にある者の言葉は、他者に対して大きな影響を与える。特に帝となつてからの彼の言動は、その地位故に相手に対する圧力にもなり得るものであった。

朱雀院もまた、かつて帝の地位にあり、位を退いて後も政治的影響を与えることのできる地位にいる。さらに、春宮が彼の実子であることで、宮中における朱雀院の存在がより大きなものとなる。春宮は、父である朱雀院を敬うとともに彼の意見を尊重する。当たり前のことではあるが、それは朱雀院の意向が政治に反映される可能性を持ち続けることでもある。その意味で、春宮の言動には常に注意を払わなければいけない。

そして、子どもたちの中で朱雀院が最も気にかけているのが女三の宮であった。物語は、彼女の降嫁について逡巡する朱雀院を軸に

展開していく。では、女三の宮はどのように造型されているだろうか。彼女は降嫁するまで、自らの考えや感情を述べることはない。彼女の性質は、朱雀院や乳母といった周囲の人々の言葉の中から推察されるのみである。

たとえば、女三の宮の後見を考える際に、乳母は「姫宮は、あさましくおぼつかなく心もとなくのみ見えさせたまふに」（若菜上④ 三二頁）と述べ、朱雀院は「あやしくものはかなき心ざまにやと見ゆめる御さまなるを」（若菜上④ 三四頁）と述べている。

二人のあいだで強調される女三の宮の頼りなさは、降嫁させざるを得ない大きな要因の一つとなっている。しかし、朱雀院の庇護の許にあるうちは、女三の宮自身について多く語られることはない。

女三の宮という人物について、明らかにするのは降嫁後である。

紅梅にやあらむ、濃き薄きすぎすぎにあまた重なりたるけぢめはなやかに、草子のつまのやうに見えて、桜の織物の細長なるべし。御髪の裾までけざやかに見ゆるは、糸をよりかけたるやうになびきて、裾のふさやかにそがれたる、いとうつくしげにて、七八寸ばかりぞあまりたまへる。御衣の裾がちに、いと細くささやかにて、姿つき、髪のかかりたまへるそばめ、いひ知らずあてにらうたげなり。（若菜上④ 一四一頁）

猫が御簾を引き上げたために女三の宮の姿が見えてしまう。小柄で

かわいい感じだが気高さも備えた彼女の容姿は、光源氏の妻として見劣りするものではなかったことがうかがえる。

その一方で、女三の宮の幼さが繰り返して述べられている。

姫宮は、げにまだいと小さく片なりにおはする中にも、いといはけなき気色して、ひたみちに若びたまへり。かの紫のゆかり尋ねとりたまへりしをり思し出づるに、かれはされて言ふかひありしを、これは、いといはけなくのみ見えたまへば

(若菜上 ④ 六三頁)

御手、げにいと若く幼げなり。さばかりのほどになりぬる人はいとかくはおはせぬものを

(若菜上 ④ 七二頁)

前者は、光源氏が初めて対面した女三の宮に対して抱く感想であり、後者は女三の宮の筆跡を見た紫の上の感想である。源氏に引き取られた当時十歳であった紫の上よりも、現在十四歳の女三の宮が幼く見えるだけでなく、筆跡も子どもじみているのである。こうした女三の宮の幼さは、この後も明石の上や夕霧によって指摘される。それは朱雀院たちが包み隠してきたものであった。先に指摘した頼りなさや降嫁後に表出する幼さが、朱雀院を悩ませていた要因だったのだ。

また、女三の宮についてはその血筋も重要な意味を持っている。

藤壺と聞こえしは、先帝の源氏にぞおはしましける、まだ坊と

聞こえさせしとき参りたまひて、高き位にも定まりたまふべかりし人の、とりたてたる御後見もおはせず、母方もその筋となくものはかなき更衣腹にてもしたまひければ、御まじらひのほども心細げにて、(中略)その御腹の女三の宮を、あまたの御中にすぐれてかなしきものに思ひかしづきこえたまふ。そのほど御年十三四ばかりにおはす。

(若菜上 ④ 一七―一八頁)

女三の宮は、源氏として臣籍降下したとはいえ先帝の皇女が母である。池田節子氏は、朱雀朝が中宮不在のために三人の皇女の中で女三の宮が最も高貴であると指摘している。^(註1)この高貴な血筋が求婚者たちにとっては大きな魅力であり、彼女の降嫁先を難しくさせてもいるのだ。そして、あの藤壺中宮の血筋である点が光源氏の好き心を刺激したことは、いうまでもない。

この様に、女三の宮があは藤壺中宮の姪であり、かつ皇女の中でも尊い血筋であることは、広く世間の人に認識されている。逆に、年齢より幼く頼りない性格は、身近なごく一部の人々にしか知られていない。こうした事実を踏まえて彼女の人生を方向付けなければならない朱雀院は苦悩するのである。

二 朱雀院の不安

出家を決意した朱雀院を深く悩ませるのは、女三の宮のことだけである。先に示したように、彼女の幼く頼りない性質は、その行く末に不安を抱かせる。父親の庇護下にあれば娘の負の側面は他者に知られることはない。つまり彼女を庇護することができる人物が必要なのだ。候補としてまず考えられるのは、女三の宮の母女御の実家だったはずだが話題に登ることはない。そして、朱雀院以外に彼女の後見する人物がいなかったことが示されるのである。つまりここでは後見人として朱雀院の代わりを務めることのできる人物を選定することが肝要なのである。

「この世に恨み遺ることもはべらず、女宮たちのあまた残り
とどまる行く先を思ひやるなむ、さらぬ別れにも絆なりぬべかりける。さきざき人の上に見聞きしにも、女は心より外に、あはあはしく人におとしめらるる宿世あるなん、いと口惜しく悲しき。いづれをも、思ふやうならん御世には、さまざまにつけて、御心とどめて思し尋ねよ。その中に、後見などあるは、さる方にも思ひゆづりはべり、三の宮なん、いはけなき齡にて、ただ一人を頼もしきものとならひて、うち棄ててん後の世に漂ひさすらへむこと、いとうしろめたく悲しくはべる」と、
御目おし拭ひつつ聞こえ知らせさせたまふ。

見舞いに訪れた春宮に対して、院としては政のことを、父としては姫宮たちの事を託すのだが、彼が気にするのは女三の宮だけである。その理由として後見人の不在を指摘する一方で、女の運命が自分の心のままにならぬことをあげている。一般論として述べられるこの宿世観は、具体的な例を挙げながら繰り返し取り上げられる。

皇女たちの世づきたるありさまは、うたてあはあはしきやうにもあり、また高き際といへども、女は男に見ゆるにつけてこそ、悔しげなることも、めざましき思ひもおのづからうちまじるわざなめれと、かつは心苦しく思ひ乱るるを、またさるべき人に立ち後れて、頼む蔭どもに別れぬる後、心を立てて世の中に過ぐさむことも、昔は人の心たひらかにて、世にゆるさるまじきほどのことをば、思ひ及ばぬものとならひたりけむ、今の世には、すきずきしく乱りがはしきことも、類にふれて聞こゆめりかし。昨日まで高き親の家にあがめられかしづかれし人のむすめの、今日はなほなほしく下れる際のすき者どもに名を立ちあざむかれて、亡き親の面を伏せ、影を辱むるたぐひ多く聞こゆる、言ひもてゆけば、みな同じことなり。ほどほどにつけて、宿世などいふなることは知りがたきわざなれば、よろづにうしろめたくなん。すべてあしくもよくも、さるべき人の心にゆる

しおきたるままにて世の中を過ぐすは、宿世宿世にて、後の世に衰へある時も、みづからの過ちにはならず。あり経てこよなき幸ひあり、めやすきことになるをりは、かくてもあしからざりけりと見ゆれど、なほたちまちふとうち聞きつけたるほどは、親に知られず、さるべき人もゆるさぬに、心づからの忍びわざし出でたるなむ、女の身にはますことなき疵とおぼゆるわざなる。なほなほしきただ人の仲らひにてだに、あはつけく心づきなきことなり。みづからの心より離れてあるべきにもあらぬを、思ふ心より外に人にも見え、宿世のほど定められむなむ、いと軽々しく、身のもてなしありさま推しはからるることなるを。

(若菜上 ④ 三二―三四頁)

長い引用になったが、朱雀院の抱く不安は実は女三の宮に対してだけのものではない。今の世に生きる皇女や身分の高い女性すべてが直面する悲しい宿世でもあるのだ。

朱雀院は、結婚した皇女たちに対して良い感情を持っていない。男と結婚することで後悔や腹立たしいことが起こっていることをあげて後見を決めた場合の不安点を指摘している。つまり、朱雀院は皇女の結婚には批判的なのだ。当時の皇女の結婚と社会のつながりについては、今井源衛氏の詳しい考察がある。^(注2) 当時の慣習として皇女は独身を通すものであり、結婚する場合の相手は皇族に限られて

いた。こうした慣習を朱雀院が十分認識していたことは、「内裏には中宮さぶらひたまふ、(中略)はかばかしき後見なくて、さやうのまじらひいとなかなかならむ。」(若菜上 ④ 二七頁)と、まづ冷泉帝の後宮を考えた点から明らかではなからうか。

その後述べられる身分ある女性が後盾の無いばかりに身を持ち崩し人の噂になる事例は、朱雀院の考えに大きな影響を与えた。彼は慣習を破ってでも女三の宮のために後見人を選ぶことを決意するのだ。ここで注意したいのは、女性の宿世を嘆く一方で体面や世間体を気にする朱雀院の姿である。昔は身分というものが尊重されていたが、今の「すきずきしく乱りがはしき」世では身分は女性を守るものではなくむしろ貶めるものとなっている。このような皇女が生きがたい世の中と女三の宮の幼い性質は、朱雀院にとって不安でしかない。彼は、このまま自分が出家しては女三の宮が世間体の悪いことになるのではないかと危惧している。彼女が悪い噂の類になりかねない危うさを持ち合わせていることを朱雀院は知っているのだ。父親として、皇家の長として、朱雀院は最悪の事態を予想してそれを回避しなければならぬ。朱雀院は彼女の後見人を選ばざるを得ないのである。

三 朱雀院の望む後見人

では、朱雀院の望む後見人とはいったいどういうものであったのか。

見はやしたてまつり、かつはまた片生ひならんことをば見隠し教へきこえつべからむ人のうしろやすからむに、預けきこえばや
(若菜上 ④ 二七頁)

女三の宮を引き立て至らぬところを庇い教えてくれる人。これが朱雀院の求める後見人である。光源氏が幼い紫の上を引き取って理想の女性に育て上げたことは、朱雀院の記憶に新しい。彼はその光源氏の手腕を女三の宮の後見人に求めたのだ。

かの六条の大殿は、げに、さりともものの心得て、うしろやすき方はこよなかりなむを、方々にあまたものせらるべき人々を知るべきにもあらずかし。とてもかくても人の心からなり。のどかに落ちゐて、おほかたの世の例とも、うしろやすき方は並びなくものせらるる人なり。さらに、よろしかるべき人、誰ばかりかはあらむ。
(若菜 上 ④ 三五頁)

朱雀院は光源氏を女三の宮の後見人として検討してみる。まず、光源氏はものの道理がわかっていて、その将来に不安を感じることがない。ゆつたりと落ち着いており、世間の模範ともいえる。行く末が安心という点では他と比べようがない。しかも、准太上天皇の地

位にある。唯一気になるのは、現在の光源氏の妻たちである。紫の上をはじめとして、六条院や二条院で生活する女性たちの存在は、広く知られている。これは、女三の宮の性質を考えるとかなり重要な問題になるはずであるが、朱雀院はその問題を夫となる人物の手柄が解決するものであり、気にすることはないと述べている。続いて、兵部卿をはじめとする女三の宮の婿候補について検討するが、人柄、身分、地位といった点で除外される。つまり、皇女の夫としての資格があるかどうかという点に絞って検討されており、彼らはその資格を有さないことが具体的に語られているに過ぎない。結局のところ、朱雀院は実績のある光源氏以外に候補を持たないのであった。

四 降嫁における朱雀院の〈公〉

次に朱雀院の政治的立場と、そのもたらす女三の宮への影響について考えてみたい。

後見人選びの中で、朱雀院が相手の身分にこだわっていたことは既に述べた。女三の宮自身が尊い血筋であることは何度も指摘しているが、その女三の宮を降嫁させるか否かは、政治的にも重要なことなのである。

さし当たりたるただ今のことよりも、後の世の例ともなるべきことなるを、よく思しめしめぐらすべきことなり。人柄よろしとても、ただ人は限りあるを、なほ、しか思し立つことならば、かの六条院にこそ、親ざまに譲りきこえさせたまはめ

(若菜上 ④ 三八〜三九頁)

女三の宮の婿選びに関する噂を聞き及んだ春宮は、光源氏に決めるよう意向を示す。これは、次期帝たる春宮の政治的立場が強く表出されたものといえる。女三の宮の扱いは、後の世に対する先例となることを指摘しており、朱雀院に対して皇家の中でも高い地位にいる者としての責任の重さを改めて認識させている。先に示した今井氏の指摘にあるように皇女は独身を通すことが多かった。それを降嫁させるならば、相手の選び方がひとつの方針として後の世に伝えられることになる。朱雀院が決断を下すのに時間がかかった理由もそこにある。朱雀院としても、父親という私的立場に立ちながらも、院という政治的な立場での決断が求められるのだ。それによって、身分が一番重要な問題となり、極端に言えば人柄より身分という選定基準を導き出すのである。そして、朱雀院の弟であり准上天皇の地位にある光源氏に決定したのだ。

では、この降嫁は朱雀院の望んだようになったのだろうか。

いと若くおほどきたまへる一筋にて、上の儀式はいかめしく、

世の例にしつばかりもてかしづきたてまつりたまへれど、をさをさけざやかにもの深くは見えず (若菜上 ④ 一三三頁)

夕霧による降嫁後の女三の宮評である。光源氏は、女三の宮を後の世の例になるように大切に扱っているが、女三の宮自身はそうした扱いを受けるほど奥ゆかしい人ではなさそうだと述べている。女三の宮の性質はさておき、ここに述べられた光源氏による「世の例にしつばかりもてかしづきたてまつりたまへ」る様子は、先に春宮の述べた「後の世の例ともなるべきこと」に対応したものと考えられる。内実についてはここでは言及しないが、少なくとも皇女としての体面を保つことは実行されている。つまり、その一面において朱雀院の希望は叶えられていると見るべきである。

また、朱雀院は女三の宮を守るために、己の院という立場を活用していたように見受けられる。彼の依頼がたとえ私的なものであっても、それは臣下にとつて皇家の圧力として作用したことが往々にして考えられるのではないか。

例として、先に引用した朱雀院の春宮に対する依頼が上げられる。見舞いに訪れた春宮への依頼は、春宮を女三の宮の後盾とする事であり、皇女としての女三の宮の地位を確実なものにしている。実際に、春宮は後に帝になってから、女三の宮の位を上げ御封を加えることで女三の宮の皇女という地位を高めている。

それに加えて、朱雀院は物質的な面でも女三の宮を優遇している。

院の内にやむごとく思す御宝物、御調度どもをばさらにもいはず、はかなき遊び物まで、すこしゆゑあるかぎりをば、ただこの御方にと渡したてまつらせたまひて、その次々をなむ、他御子たちには、御処分どもありける。

（若菜上 ④ 一八―一九頁）

朱雀院は、院の御所内の品々の中でこれと思うものはすべて女三の宮に譲り、その残りを他の御子たちに分け与えた。つまり、彼女は院によって財政面でも優遇されているのである。こうした朱雀院による春宮への依頼と財産分与は、女三の宮が皇女の中でも特に重要視されていることを世間の人々に認識させることとなった。

そして、彼女は准太上天皇の正妻である。彼女に与えられた地位の高さは、薫誕生の際の御産屋の儀式を見れば明らかである。准太上天皇と皇女の間に生まれたとされる若宮の御産屋の儀式は、盛大なものであった。五日の夜は中宮から、七日の夜は帝から、それぞれ宮中における祝いに准じた儀式として行われた。光源氏と女三の宮の身分を考えれば、当然の事である。ただ真実を知る者にとって、あくまで表面的でそれぞれの立場を守るための儀式でしかなかった。

五 降嫁のもたらす政

ところで、朱雀院の持つ政治的な力は、女三の宮の裳着と降嫁という一連の儀式についてどの様に作用しただろうか。

女三の宮の裳着については「御裳着のこと思しいそぐさま、来し方行く先ありがたげなるまでいくしくのしる」（若菜上 ④ 四一―四二頁）と、今までに例のない様な盛大な儀式であることが示される。朱雀院が、女三の宮のために思い豪華に華やかに催した儀式は、彼女の皇女としての地位の高さを改めて知らしめるものでもあった。さらに、「院の御事、このたびこそとぢめなれと、帝、春宮をはじめたてまつりて、心苦しく聞こしめしつつ、蔵人所、納殿の唐物ども多く奉らせたまへり」（若菜上 ④ 四二頁）とあるように、この裳着は、朱雀院の催す最後の儀式として位置づけられている。それは儀式に対する注目度を高め、より盛大なものへと発展させている。それによって、女三の宮の背景にある皇家の力を、より大きくより強く周囲に認識させることとなっている。

そしてこの裳着の後、六条院において婚儀が催される。

この院にも、御心まうけ世の常ならず。若菜まゐりし西の放出に、御帳立てて、そなたの一二の対、渡殿かけて、女房の局々まで、こまかにしつらひ磨かせたまへり。内裏に参りたまふ人

の作法をまねびて、かの院よりも御調度など運ばる。渡りたまふ儀式いへばさらなり。

（若菜上 ④ 六一〜六二頁）

こうした光源氏側の準備は、先に行われた女三の宮の裳着の儀式を受けたものと考えられる。光源氏の准太上天皇という身分だけでなく、どちらかといえば女三の宮の身分の高さや背後にいる朱雀院や春宮といった皇家の人々に対して配慮したものといえるのではないか。朱雀院と光源氏の間には、やはり皇族と臣下という身分の違いが存在する。さらに朱雀院の側には、春宮がいる。彼等を後ろ盾とした女三の宮という存在は、光源氏にとっては皇家そのものである。女三の宮は六条院という光源氏の〈私〉の場に宮中を持ち込んだのだ。

女宮は、いとらうたげに幼きさまにて、御しつらひなどのことごとしく、よだけく、うるはしきに、みづからは何心もなくものはかなき御ほどにて、いと御衣がちに、身もなくあえかなり。ことに恥ぢなどもしたまはず、ただ児の面嫌ひせぬ心地して、心やすくうつくしきしましたまへり。

（若菜上 ④ 七三頁）

女三の宮は、准太上天皇・光源氏の正妻にふさわしい待遇を受けている。部屋の調度ひとつをとっても、その堂々として格式ばった様子が見て取れる。六条院における女三の宮は、格式と地位だけは最

高位にあり、周囲の人々はそれを認識せざるを得ない。しかし、彼女はただ無邪気で頼りなげな様子でしかない。彼女の幼い性質と与えられた地位の高さは、六条院に不安定な情況を作り出している。

六条院という光源氏の〈私〉的な場に、朱雀院は皇家の力を付与した女三の宮をおくことで、〈私〉でもない疑似後宮を創り出した。そして、次々に持ち込まれる皇家の力が紫の上の命を縮めることになったと考えられるのではなからうか。それについて、ここではこれ以上考察しないが、朱雀院が光源氏に及ぼした影響が大きいことは明らかであろう。

六 六条院における女三の宮の権力

この様に、女三の宮は強力な皇家の力を背景に光源氏のもとに降嫁する。そのことで、長年培ってきた光源氏と紫の上の関係がすぐに変化することはなかった。

帝を兄に持つ女三の宮は、広く世間から敬われている。しかし、それは女三の宮という人物に対するものではなく、兄である帝、父である朱雀院、そして夫である光源氏への尊敬である。一方、後ろ盾も持たず正式な結婚の形を踏襲しなかった紫の上が今の地位にいるのは、彼女の人間性によるところが大きい。個人的魅力によって

培われたものに対抗するだけの資質が女三の宮にはない。朱雀院も、六条院にいる女性の中で紫の上を特別な女性であると認識しており、それは紫の上に宛てた手紙に示されている。

幼き人の、心地なきさまにて移ろひものすらんを、罪なく思しゆるして、後見たまへ。尋ねたまふべきゆゑもやあらむとぞ。

背きにしこの世にのこる心こそ入る山道のほだしなりけれ
闇をはるけで聞こゆるも、をこがましくや

（若菜上 ④ 七五頁）

朱雀院は、幼い女三の宮を世話して欲しいと紫の上に依頼している。この彼女に宛てた手紙は、純粹に娘を思う親心から発したものである。しかし、紫の上にはこの手紙がどのような意味を持ったのか。

朱雀院ほどの身分の者が、彼女に直接手紙を書き送ることはまずない。それだけこの手紙は特別なものであり、受け取った紫の上は恐縮すると同時に女三の宮の存在を強く意識せざるを得ない。六条院に今までとは異なる序列が生まれ、それが彼女の心に大きな負担となったことは明らかである。

一方、朱雀院は女三の宮を降嫁させた後も彼女に対する不安が消えることがない。

入道の帝は、御行ひをいみじくしたまひて、内裏の御事をも聞き入れたまはず。（中略）姫宮の御事をのみぞ、なほえ思し放

たで、この院をば、なほおほかたの御後見に思ひきこえたまひて、内々の御心寄せあるべく奏せさせたまふ。二品になりたまひて、御封などまさる、いよいよはなやかに御勢ひ添ふ。

（若菜下 ④ 一七六―一七七頁）

朱雀院は、宮中における政治に対する興味関心はあまりないように見受けられる。出家した朱雀院が唯一気にかける俗世が女三の宮なのだ。ここには、子を思う心に迷う朱雀院の姿がある。その朱雀院が頼りにする人物が、光源氏であり帝だった。帝に女三の宮に対する支援を依頼した結果、彼女は二品の位に進み御封も増えた。皇家の力を背景に、六条院において女三の宮が占める地位はますます高く強固なものになっていく。朱雀院の〈私〉として娘を思う気持ち、帝を経由することで皇家の意向に変化したのである。それは光源氏にとっては皇家からの圧力と感じられたのだ。事実、光源氏は女三の宮の件に関しては、院や帝の意向を気にしている。

内裏の帝さへ、御心寄せことに聞こえたまへば、おろかに聞かれたてまつらんもいとほしくて、渡りたまふこと、やうやう等しきやうになりゆく
（若菜下 ④ 一七七頁）

朱雀院が紫の上に宛てた手紙の中で述べた心の闇は、彼が病がちであるという状況のもとますます深刻化している。朱雀院の願いは、女三の宮の夫たる光源氏に向けて発せられる。出家したとはいえ、

身分的にも年齢的にも上の朱雀院からの願いを光源氏は退けることが出来ない。

例えば、朱雀院の五十の賀の關係にそれは表れているといえよう。もともとこれは、女三の宮に会いたいという朱雀院の願いを叶えるために光源氏が考えたことである。管弦の遊びを好む朱雀院のために、光源氏は樂や舞の準備に余念がない。そこに、皇家の意向が伝えられる。

宮は、もとより琴の御琴をなん習ひたまひけるを、いと若くて院にもひきわかれたてまつりたまひにしかば、おぼつかなく思ひして、「参りたまはむついでに、かの御琴の音なむ聞かまほしき。さりとて琴ばかりは弾きとりたまひつらん」と、後言に聞こえたまひけるを、内裏にも聞こしめして、「げに、さりとて、けはひことならむかし。院の御前にて、手尽くしたまはむついでに、参り来て聞かばや」などのたまはせけるを、大殿の君は伝へ聞きたまひて、年ごろさりぬべきついでごとには、教へきこゆることもあるを、そのけはひはげにまさりたまひにたれど、まだ聞こしめしどころあるもの深き手には及ばぬを

(若菜下 ④ 一八〇〜一八一頁)

まず朱雀院は、女三の宮が琴を修得しているだろうから聴いてみたいと希望する。この希望は「後言に聞こえたまひける」ことであつた。

た。それは帝の耳に達し、光源氏の指導なればさぞかし上達したであらうから自分も聴きたいという帝の意向を引き出す。この二人の言葉を、光源氏は人伝に聞くのである。帝の言葉は、光源氏にとつて朱雀院の意向を皇家からのものとし、彼は女三の宮の琴を演目に加えることになる。しかし光源氏にしてみれば、降嫁してきてから折に触れ教えてはいても、彼女の琴は彼らが喜ぶほど上達はしていない。そのために光源氏は朱雀院五十の賀に間に合わせるため、連日女三の宮の許へ琴を教えに行くことになった。しかし急遽生じたこの状況が、六条院にほころびをつくる。紫の上が病に倒れ、心配のあまり光源氏が紫の上から離れることができないために、女三の宮のもとを訪れることができない。この混乱に乗じて、柏木は女三の宮と關係を結ぶのだ。朱雀院の五十の賀は、これらの影響を受けて年も押し詰まった二十五日に催されるが、それが光源氏の思惑と異なつたものになつたことは、催しが物語中に記載されていないことから明らかであろう。

幼い性質の女三の宮を守るために地位を上げるとは、六条院という〈私〉的な場で皇家の力が使われることであり、邸内のバランスを崩しほころびを生じさせてしまった。これは朱雀院による意図的なものではなく、女三の宮への過剰な愛情が生み出したものであつた。しかし、彼女を思つての言動は、次第に六条院世界とそこに

住む人々を不幸へと導くことになったのだ。

七 女三の宮の出家

光源氏は、女三の宮と柏木の密通が人に知られぬように取り繕うが、若宮を慈しむことはない。女三の宮は、光源氏のそうした態度から彼が自分を許さないと感じる。柏木とのことは自らが望んだことではなかったが、そのことで光源氏が自分を疎ましく思うことに對して、女三の宮は弁解する言葉がない。この様な状況で女三の宮が出家を望むことは、女三の宮と光源氏の双方にとって不自然なことではなかった。

一方、朱雀院は女三の宮と柏木の密通を知らない。彼が耳にしたのは、光源氏が女三の宮のもとを訪れることがほとんどないということだけだった。

月ごろかくほかほかにて、渡りたまふことをさなきやうに人の奏しければ、いかなるにかと御胸つぶれて、世の中も今さらに恨めしく思ひて、對の方のわづらひけるころは、なほ、そのあつかひにと聞こしめしてだに、なま安からざりしを、その後なほりがたくものしたまふらむは、そのころほひ便なきことや出で来たりけむ、みづから知りたまふことならねど、よか

らぬ御後見どもの心にて、いかなることかありけむ

(若菜下 ④ 二六七頁)

光源氏の疎遠の理由を紫の上の病氣だと考えても、朱雀院の心配は消えない。そのうえ、紫の上の容態が安定した後も疎遠であることに変わりはない。朱雀院は、その原因が女三の宮の不都合にあるのではないかと考える。光源氏が朱雀院と帝の目を気にして女三の宮と紫の上の所に等分に通っていたことは周知のことであつた。ところが、何日も女三の宮のもとを訪れないことが続いているのである。朱雀院は、夫婦という繋がり脆さを恨めしく思う一方で、女三の宮の不始末という疑いを捨てることができない。ただ、この様な状況で芽生えた光源氏に対する不信感、女三の宮の出家を朱雀院に納得させることになった。

女三の宮から出家したい旨を聞いた朱雀院は、降嫁を決めたときとは異なる対応を見せる。女三の宮の出家に対する彼の決断は早い。降嫁のときとは異なり、光源氏をはじめとする周囲の分析的射たものである。朱雀院は、光源氏が自分が期待したほど女三の宮を慈しんではくれなかったことを恨みに思っている。また、このような二人について世間が噂することも不本意なうえに、この状態が好転する気配が感じられないのだ。彼はここで女三の宮を出家させても、彼女の病は周知のことであり、夫婦仲を恨んでの出家とは噂さ

れないだろうと考える。また、朱雀院は光源氏が女三の宮に対して彼女の地位や体面をけがさぬような配慮を行うことを確信している。夫としての光源氏には不満であるが後見人としては評価しているのだ。降嫁の際にはあれこれ悩んだ朱雀院だが、今回は発想の転換が早い。女三の宮がこれ以上苦しまず、朱雀院、光源氏双方の面目をつぶさぬ方便として、彼女の出家は最適の手段であったといえるだろう。今なら、朱雀院も彼女が尼として生活できる基盤を作ることは可能であるし、光源氏が彼女を見捨てることが出来ないことも見通している。こうした計算の元に、朱雀院は女三の宮の出家を決めるのである。

光源氏が出家後の女三の宮をどう扱うか。それに対する朱雀院の分析は正しかったといえる。たとえば、鈴虫巻冒頭に女三の宮の持仏開眼供養の様子が描かれているが、それは光源氏によつて念入りに準備される。数々の仏具は、細やかな配慮の元、皇女にふさわしいものが整えられる。さらに「宮にも、ものの心知りたまふべき下形を聞こえ知らせたまふ」（鈴虫 ④ 三七六頁）とある様に、女三の宮自身に対しても十分に配慮している。

よそよそにてはおぼつかなかるべし。明け暮れ見たてまつり聞こえうけたまはらむこと怠らむに、本意違ひぬべし。げに、ありはてぬ世いくばくあるまじけれど、なほ生けるかぎりの心ざ

しをだに失ひはてじ

（鈴虫 ④ 三七八〜三七九頁）

世間体も良さそうだからと、この機会に三条宮に移ることを朱雀院は勧めるが、光源氏は女三の宮を六条院内に留める。これは、その理由として光源氏が述べたことであるが、これこそ朱雀院が最初に彼に望んだことではなかったか。さらに、光源氏は三条宮に手を入れ、蔵を建てて女三の宮所有の品々を納め、彼女の収入等も後のために厳重に処置していく。女三の宮の財産を守り維持する一方で、普段の女三の宮の生活全般は光源氏が負担する。光源氏は、自分亡き後の女三の宮のために彼女の経済的基盤を整備したのである

こうしてみると、朱雀院が女三の宮に対して望んだ生活は、彼女の出家によつてもたらされたといえる。そして、彼女を守り、導き、その生活を将来に渡って経済的に保証する光源氏は、朱雀院の指摘したように「おほかたの世の例とも、うしろやすき方は並びなくものせらるる」人であったのだ。

八 おわりに

ここでは、女三の宮の降嫁から出家にいたる過程における朱雀院の影響について考えてみた。なかでも朱雀院の持つ皇家の力に着目し、それがどの様に影響したのかを本文の中から具体例を挙げて分

析したつもりである。極端に言えば、帝をバックにした朱雀院が女三の宮を使って光源氏の理想郷ともいえる六条院を崩壊させる、その要因が皇家という大きな力であると考えたのだ。結果的に朱雀院の内面を無視した形になったが、朱雀院の立場では〈私〉事と〈公〉の区別が付きがたい状況にあるため、特に院である彼が持ち得た権力にこだわった。

女三の宮の降嫁に関しては、今井源衛氏と石田穰二氏の間の論争がよく知られている。今井氏は、平安朝初頭から一条朝以前までの皇女数と有配偶者数等を調査した上で、

朱雀院の結婚観および婿選びの際の言動を通じて、彼の性格や考え方を細かく分析し、かつ、それを背景をなす歴史的地盤と照し合せることによって、作者が院を錯誤の人として造型していることを明らかにしたかったのである。

と述べ、女三の宮と柏木の一件は「こうした社会的な拡張における院の錯誤の上に用意され」たものであるとしている。^(註₃) 石田氏は、朱雀院が光源氏を選んだ条件として、院の出家、光源氏の理想的人格と血筋・地位、女三の宮の人柄の三つをあげ、

総合的にこれらの諸条件がみたされ得るといふ判断を院は持った。この院の判断を、わたくしは、双方の諸条件を本文によって以上の如く考へるので、院の判断として妥当であつた、と考

へる。錯誤とは考へない。したがってわたくしは、この発端においては、周到的な考慮と判断のすみかさねによつて、光源氏への降嫁の必然性が語られてゐるのだと判断する。^(註₄)と述べている。

皇女の身分・体面・財産を守るといふ点から見れば、光源氏を女三の宮の後見人としたことで、その目的は達せられたといえるだろう。柏木と密通し若くして出家したとはいえ、世間的には彼女の体面も地位も維持されている。それは、光源氏の心配りによるところが大きい。一方、朱雀院や光源氏を含めた女三の宮に関わった人たちの心の内を見れば、この結婚がもたらした負の側面を見過ごすことは出来ない。紫の上の病、密通事件に関わった光源氏・柏木・女三の宮等、第二部で描かれる人々の苦悩は、この結婚が直接、間接にもたらしたものだといえるだろう。

光源氏は女三の宮の体面を守ることができたが、六条院という己の〈私〉的な場が崩壊してしまった。朱雀院が依頼したこの降嫁を光源氏はどのようにとらえていたのか。それは次項で述べることにする。

註

註 1 池田節子「女三の宮」(『物語を織りなす人々』 源氏物語

講座 第二卷 勉誠社 平3・9) 二五九頁

註 2 今井源衛「女三宮の降嫁」(『改訂版 源氏物語の研究』
未来社 昭56・8)

註 3 注2に同じ 一四三～一四四頁

註 4 石田穰二「若菜巻について」(『源氏物語論集』 桜楓社
昭46・11) 四五頁

2 結婚―准太政天皇正妻として

一 はじめに

『源氏物語』第二部における女三の宮の降嫁は、その後の物語の展開を考える上で重要な位置にある。そこに女三の宮自身の言動が示されることはなく、朱雀院と光源氏の思惑が彼女の人生を方向付けている。朱雀院が与えた影響については、先に述べた。女三の宮の背景には、常に朱雀院という皇家の権力が存在し、それによって庇護されている。

一方、光源氏の〈私〉的空間であった六条院世界は、女三の宮の降嫁を境に崩壊に向かう。その原因が女三の宮の持ち込んだ皇家の力にあると考える。ここでは光源氏自身の言動に着目し、降嫁が彼に与えた影響を考えてみる。

一 紫のゆかり

女三の宮降嫁決定の際に光源氏自身がかかわるのは、二度である。一度目は左中弁によって朱雀院の意向が伝えられた時、二度目は朱雀院の見舞いに参上した時である。

まず、左中弁に対する光源氏について見てみたい。ここには、辞退から承諾へ傾く光源氏の心の動きが表出されている。

この宮の御事、かく思しわづらふさまは、さきさきもみな聞きおきたまへれば、「心苦しき御事にもあなるかな。さはありとも、院の御代の残り少なしとて、ここにはまたいくばく立ち後れたてまつるべしとてか、その御後見のことをば承けとりきこえむ。げに次第をあやまたぬにて、いましばしのほども残りともる限りあらば、おほかたにつけては、いづれの皇女たちをも、よそに聞き放ちたてまつるべきにもあらねど、またかくとりわきて聞きおきたてまつりてむをば、ことにこそは後見きこえめと思ふを、それだにいと不定なる世の定めなさなりや」とのたまひて、「ましてひとへに頼まれたてまつるべき筋に睦び馴れきこえむことは、いとかなかに、うちつづき世を去らんきさみ心苦しく、みづからのためにも浅からぬ絆になむあるべき、中納言などは、年若く軽々しきやうなれど、行く先遠くて、人柄も、つひに朝廷の御後見ともなりぬべき生ひ先なめれば、さも思しよらむに、なかこよなからむ。されど、いといたくまめだちて、思ふ人定まりにてぞあめれば、それに憚らせたまふにやあらむ」などのたまひて、みづからは思し離れたるさまなるを、弁は、おぼろけの御定めにもあらぬを、かくのたまへ

ば、いとほしくも口惜しくも思ひて、内々に思し立ちにたるさまなどくはしく聞こゆれば、さすがにうち笑みつつ、「いとかなしくしたてまつりたまふ皇女なめれば、あながちにかく来し方行く先のたどりも深きなめりかしな。ただ内裏にこそ奉りたまはめ。やむごとなきまづの人々おはすといふことは、よしなきことなり。それにさはるべきことにもあらず。かならず、さりとて、末の人おろかなるやうもなし。故院の御時に、大后の坊のはじめの女御にていきまきたまひしかど、むげの末に参りたまへりし入道の宮に、しばしは庄されたまひにきかし。この皇女の御母女御こそは、かの宮の御はらからにものしたまひけめ、容貌も、さしつぎには、いとよしと言はれたまひし人なりしかば、いづ方につけても、この姫宮おしなべての際にはよもおはせじを」など、いぶかしくは思ひきこえたまふべし。

（若菜上 ④ 三九〇四一頁 傍線・筆者）

光源氏は、傍線Aで自らの年齢を理由に女三の宮の後見を断り、傍線Bで夕霧を勧め、さらに傍線Cでは入内を勧めている。光源氏と朱雀院の年齢差は三歳。「院の御代の残り少なしとて、ここにはまたいくばく立ち後れたてまつる」という光源氏の言葉はもつともな理由であり、反論の余地はない。さらに夕霧を勧める理由にも「年若く軽々しきやうなれど、行く先遠く」と彼の若さをあげている。

光源氏と女三の宮の年齢差は、この降嫁の不自然さを客観的に示しているのだ。

しかし、年齢差という問題は朱雀院側も承知のことである。それをあえて押し進める理由を提示しておかねばならない。女三の宮の婿選びに対する春宮の意見は「かの六条院にこそ、親ざまに譲りきこえさせたまはめ」（若菜上 ④ 三九頁）であつた。春宮のこの言葉は、朱雀院にとって女三の宮の処遇の決め手となつた。その意味で、朱雀院の迷いを断ち切り光源氏を候補と決定する理由が簡潔に述べられているといえる。これを受ける形の光源氏の言葉傍線Aから傍線Cは、先に述べたように常識的なものであり、彼の辞退を覆す理由を探すことはできない。では、どこに光源氏を承諾させる理由があるのか。それは「人柄よろしとて、ただ人は限りある」（若菜上 ④ 三九頁）という点である。それに対して光源氏は入内を勧めるが、朱雀院側は光源氏の正妻不在に女三の宮降嫁の意味を見いだす。確かに、光源氏には准太上天皇の地位に釣り合う正妻がない。降嫁した女三の宮はその地位を得ることができる。女三の宮との結婚は、光源氏にとって地位に見合う正妻を手に入れることになるが、先に挙げた傍線Aから傍線Cのなかに正妻に対する言及を見つけることは出来ない。

光源氏の意向を自ら変化させるものとして提示されたのが、紫の

ゆかりであった。傍線Dで表出された女三の宮の血筋は「いぶかしくは思ひきこえたまふ」という光源氏の好き心を刺激し、女三の宮降嫁の可能性を示している。つまり、最後の段階で彼女の血筋とそれに反応する光源氏の好き心を明示したのである。

若菜上巻、その冒頭で女三の宮があつた藤壺の姪であることは示されていた。女三の宮の尊い血筋は、朱雀院の迷いを深めるものとしてとらえられるが、傍線Cにおける光源氏の「この皇女の御母女御こそは、かの宮の御腹からにものしたまひけめ」という言葉をも引きだしていた。彼が、紫のゆかりとして女三の宮の存在を認識することは、女三の宮との結婚を承諾する可能性を示唆するものであつた。朱雀院が「六条の大殿の、式部卿の親王のむすめ生ほしたてけむやうに、この宮を預かりてはぐくまむ人もがな。」(若菜上 ④ 二七頁)と望んだように、光源氏自身もかつての紫の上の再現を想像したのではないか。

光源氏が北山で紫の上を垣間見た時、彼女は十歳であつた。

つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざしいみじうつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまりたまふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。(若紫 ① 二〇七頁)

光源氏は実際に彼女を見て、そこに藤壺の面影を認め涙している。「かの人の御かはりに、明け暮れの慰めにも見ばや、と思ふ心深うつきぬ」(若紫 ① 二〇九頁)と藤壺に対する想いは、彼に彼女の形代として紫の上を求めさせた。後に光源氏は紫の上を彼女の父親にも知らせずに略奪のような形で二条院に連れ去り、自分の理想の女性に育て上げたのである。

ここで注意したいのは、紫の上の場合は光源氏が彼女の容貌や様子を見たうえで、自ら彼女を望んだ点にある。

親王の御筋にて、かの人にも通ひきこえたるにやと、いとどあはれに見まほし。人のほどもあてにをかしう、なかなかのさかしら心なく、うち語らひて心のままに教へ生ほし立てて見ばやと思す。(若紫 ① 一二三頁)

光源氏にとって、紫の上はまさに「かの人の御かはり」になる少女であつた。しかし、長じて光源氏最愛の女性となり、六条院における一人の人として周囲に認められる存在となつたのは彼女の人間性に拠るところが大きい。彼女の容姿だけでなくその資質があつたからこそ、光源氏の目論見は成功したのである。

女三の宮も紫の上と同じ紫のゆかりである。しかし、光源氏は彼女を六条院に迎えるまで垣間見ることすらない。藤壺の血筋であること以外は、朱雀院鐘愛の姫宮ということしか知らない。紫の上の

時は、彼自身が彼女の容貌や言動に将来性を見いだした。さらに二条院に迎える際の略奪ともいえる行為は、光源氏の強い意志が現れている。一方の女三の宮の場合は、辞退するはずの結婚を承諾する理由として彼女が紫のゆかりであることが明らかにされているのだ。女三の宮の降嫁が決まっていく中で人となりを確認する機会はなかった。しかし、光源氏がこの違いに気がついている様子は見られない。そこにこの結婚の孕む危うさが見て取れる。

二 朱雀院と光源氏

二度目の光源氏の登場は、年の暮れ女三の宮の装着を済ませ出家した朱雀院を光源氏が見舞う場面である。この二人の会見は女三の宮の降嫁を光源氏が承認する過程を示すものとして重要である。長くなるが、引用したうえで考察したい。

院にはいみじく待ちよろこびきこえさせたまひて、苦^pしき御心地を思し強りて御対面あり。(略) 変りたまへる御ありさま見たてまつりたまふに、来^fし方行く先くれて、悲しくとめがたく思さるれば、とみにもえたためらひたまはず。「故院に後れたてまつりしころほひより、世の常なく思うたまへられしかば、この方の本意深くすみはべりにしを、心弱く思うたまへたゆた

ふことのみはべりつつ、つひにかく見たてまつりなしはべるまで、後れたてまつりはべりぬる心のぬるさを、恥づかしく思うたまへらるるかな。身にとりては、事にもあるまじく思うたまへ立ちはべるをりをりあるを、さらにいと忍びがたきこと多かりぬべきわざにこそはべりけれ」と、慰^pめがたく思したり。

院^hももの心細く思さるるに、え心強からず、うちしほれたまひつつ、昔今の御物語、いと弱げに聞こえさせたまひて、(略) 思しておきてたるさまなど、くはしくのたまはするついでに、「皇女¹たちを、あまたうち棄てはべるなむ心苦しき。中にも、また思ひゆづる人なきをば、とりわきてうしろめたく見わづらひはべる」とて、まほにはあらぬ御気色を、心苦しく見たてまつりたまふ。御心^pの中にも、さすがにゆかしき御ありさまなれば、思し過^kぐしがたくて、「げにただ人よりも、かかる筋は、私さまの御後見なきは、口惜しげなるわざになむはべりける。春宮かくておはしませば、いとかしき末の世のまうけの君と、天の下の頼みどころに仰ぎきこえさするを、ましてこのことと聞こえおかせたまはんことは、一事としておろそかに輕め申したまふべきにはべらねば、さらに行く先のこと思し悩むべきにもはべらねど、げに事限りあれば、おほやけとなりたまひ、世の政御心^pにかなふべしとはいひながら、女の御ために、

何ばかりのけざやかなる御心寄せあるべきにもはべらざりけり。すべて女の御ためには、さまざまことの御後見とすべきものは、なほさるべき筋に契りをかはし、え避らぬことにはぐくみきこゆる御まもりめはべるなむ、うしろやすかるべきことにはべるを、なほ、強ひて後の世の御疑ひ残るべくは、よろしきに思し選びて、忍びてさるべき御あづかりを定めおかせたまふべきになむはべなる。」と奏したまふ。「さやうに思ひよることはべれど、それも難きことになむありける。いにしへの例を聞きはべるにも、世をたもつ盛りの皇女にだに、人を選びて、さるさまのことをしたまへるたぐひ多かりけり。ましてかく、今はとこの世を離るる際にて、ことごとしく思ふべきにもあらねど、またしか棄つる中にも、棄てがたきことありて、さまざまに思ひわづらひはべるほどに、病は重りゆく、またとり返すべきにもあらぬ月日の過ぎゆけば、心あわたたしくなむ。かはらいたき譲りなれど、このいはけなき内親王ひとり、とりわきてはぐくみ思して、さるべきやすがをも、御心に思し定めて預けたまへと聞こえまほしきを。権中納言などの独りものしつるほどに、進み寄るべくこそありけれ、大臣に先ぜられて、ねたくおぼえはべる」と聞こえたまふ。「中納言の朝臣、まめやかなる方は、いとよく仕うまつりぬべくはべるを、何ごともま

だ浅くて、たどり少なくこそはべらめ。かたじけなくとも、深き心にて後見きこえさせはべらんに、おはします御蔭にかはりては思されじを、ただ行く先短くて、仕うまつりさすことやべらむと疑はしき方のみなむ、心苦しくはべるべき」とうけひき申したまひつ。（若菜上 ④ 四五〇四九頁 傍線・筆者）

まず、光源氏の感情の高まりに注目したい。朱雀院は光源氏の兄である。傍線Dに見られるように、朱雀院は病を押して対面しており、彼の出家姿が光源氏の感情を刺激している。それは、傍線Fに語られているように、光源氏自身出家を望んでいるが果たせないことに起因している。そのような自分を「心弱く思うたまへたゆたふことのみはべりつ」「心のぬるさを、恥ずかしく思うたまへらるる」と述べる光源氏が、兄の出家姿にある種の感慨を得てそれが心を満たしたとしても不思議はない（傍線E及びG）。そもそも出家は、俗世間を捨て仏道修行に入ることである。その意味で、朱雀院の女三の宮に対する言葉（I及びNのような）は、本来発せられるべきものではない。それをあえて語ることで、女三の宮が朱雀院の出家の妨げであることを示す（傍線M）と共に、院の苦悩の深さを表している。光源氏はそこに「さらにいと忍びがたきこと多かりぬべきわぎにこそはべりけれ」という自分の感情を重ねることで、院の苦悩を取り除く手助けをしたいという感情を抱いたのだろう。それは、

紫の上に降嫁承認の理由を語る光源氏の言葉にも示されている。

院の頼もしげなくなりましたまひにたる、御とぶらひに参りて、あはれることどものありつるかな。女三の宮の御事を、いと棄てがたげに思して、しかじかなむのたまはせつけしかば、心苦しくて、え聞こえ辞びずなりにしを、ことごとしくぞ人は言ひなさむかし。今はさやうのこともうひうひしく、すさまじく思ひなりにたれば、人づてに気色ばませたまひしには、とかくのがれきこえしを、対面のついでに、心深きさまなることどもをのたまひつづけしには、えすくすくしくも返さひ申さでなむ。

（若菜上 ④ 五一〜五二頁）

ここには彼女に対するいい訳めいた言葉も見受けられるが、会見で光源氏が朱雀院に対して抱いた感情は、傍線E及びGにも見ることが出来る。さらに、光源氏自身の感情として先に示した傍線Cで明らかにされた紫のゆかりに対する好き心が傍線Jに見られる。院に對する憐憫の情と自らの好き心。女三の宮との結婚を承諾する方向へ光源氏の気持ち傾くにつれて、この降嫁を正当化するための手段が会談の中で講じられていく。

会見の後半は、女三の宮を光源氏に託すことをいい出しかねている朱雀院の気持ちを光源氏が代弁し、院の依頼を引き出してそれを引き受けるという形で進んでいった。さらに傍線Kにおける光源氏

の言葉は、婿選びの際に示された朱雀院の悩みを整理し、女三の宮を結婚させることの正当性を示した。朱雀院には自らの考えが間違いでなかったという自信を持たせ、光源氏に対する依頼の言葉（傍線M）を引き出している。さらに、光源氏は婚姻関係を結んだ男性が後見人となることを勧めている（傍線L）。それまで、後見人候補としての光源氏は「親ざまに」という言葉で語られていた。その光源氏自身が後見するにあたって結婚という形の必要性を主張している。

こうした会話を経て、朱雀院は「さるべきよすがをも、御心に思し定めて預けたまへ」と語り、光源氏は「かたじけなくとも、深き心にて後見きこえさせはべらんにおはします御蔭にかはりては思されじ」と語る。この二人のあいだで結婚という言葉は使われないが、傍線Lで後見人Ⅱ夫という図式がはつきりと示されたことから、朱雀院の依頼に対して光源氏は女三の宮との婚姻によつて後見人となることを選んだと考えていい。ここに女三の宮の降嫁は確定した。

このような女三の宮降嫁のいきさつを、吉岡曠氏は「登場人物たちのそれぞれの立場を忠実に反映する思惑と、その思惑のからみあいの結果として、ある必然的な成り行きとして描き出されている」と述べている^(註1)。また、深沢三千男氏はこうした女三の宮降嫁決定の過程を次のように分析している^(註2)。

源氏は〈論理〉によって選び出され、女三宮を受け入れる源氏の側にも単に押付けられではない自己納得の道——〈論理〉が用意されていた事になるのだ。源氏の側にも〈論理〉による受け入れ態勢が備えられて初めて女三宮は源氏の手に渡される事になる。諸〈論理〉——諸〈文脈〉の期せざる一致が女三宮の六条院への降嫁がいかに必然であつたかを示すのだ。

吉岡・深沢両氏が指摘するようにこの会見は、朱雀院と光源氏双方の思惑が露呈されている。光源氏を選ぶ論理は、朱雀院の苦悩で示され、光源氏側の論理は傍線Jに見られたように紫のゆかりへの好き心だけである。院は処遇の難しい女三の宮を光源氏に降嫁させることでその後見を依頼し、光源氏は紫のゆかりに対する好き心から女三の宮を引き受ける。政治的な立場で考えれば、朱雀院側は女三の宮に准太上天皇の正妻という地位を得ることができ、光源氏も身分にふさわしい正妻を得ることが出来る。それぞれの利害が一致するものとして女三の宮の降嫁は位置づけられる。こうした「論理」に朱雀院及び光源氏の間味が加味されたのが、この会見であつたと見るべきであろう。

しかし、結果的に女三の宮の降嫁は光源氏にとって〈私〉的空間・六条院を崩壊させることになった。光源氏から会見の内容を聞いた紫の上は、この結婚に示された皇家の力を知る。それをきっかけ

に、微妙な不協和音が醸し出されるようになるのだ。

かく空より出で来にたるやうなることにて、のがれたまひがたきを、憎げにも聞こえなさじ、わが心に憚りたまひ、諫むることに従ひたまふべき、おのがどちの心より起これる懸想にもあらず、堰かるべき方なきものから、をこがましく思ひむすぼるるさま世人に漏りきこえじ

(若菜上 ④ 五三頁)

光源氏から女三の宮の件を聞いた紫の上の胸中である。斉藤暁子氏は、この「空」を上皇御所とし、「自らがそれを受容するしか対応の方法がないという意味で、それは正に空である」とし、彼女の心中を次のように分析している。^(註3)

① 社会的権勢というものを持っている人間が個人の心情というものを顧みとりあげるのは、その個人が何らかの社会的に有力な存在の場合であつて、無力な個人に対してはいかにその心情を無視しても痛みはしない。そういう権勢というものをもった人間の相貌を、この時初めて紫上は光源氏の中に見たのではなかったか。尊貴な正室を必要とした男、その程度に十分尊貴であつた男、准太上天皇が光源氏であつたのだ。

② 光源氏は自分をではなく朱雀院を選んだ——という所に、紫上の「憎げに言いなしたい」万感の恨みがあるのであり、同時にその万感の恨みを引込めさせ封印させているものがあるのだと思

う。この朱雀院^{（註4）}という所を女三の宮に置き換えては紫上の心に則さないと思う。もし女三宮を選んだのだと思うことができたならば、紫上の傷はもつと浅く単純であつたらう。

①において准太上天皇としての光源氏と彼の政治的打算と冷たさを指摘し、それが紫の上にどう理解されたかを②で示している。①に指摘された光源氏の姿は、少々飛躍している感があるが政治家としての光源氏の一面といえるだろう。六条院は光源氏の〈私〉的な場であつた。その六条院という空間に突然宮中の論理を持ち込まれた紫の上は、愕然としたはずである。さらに、准太上天皇の自邸という場における紫上の地位の不安定さをも明らかにした。彼女が六条院の女主人であることは周知のことであつたが、彼女は結婚の経緯から正妻とはいいたい立場であつた。准太上天皇の地位にふさわしい正妻の必要性を説かれれば、紫の上に反論の余地はなかつた。この結婚には実は光源氏の紫のゆかりに対する好き心が大きな影響を与えているのだが、それを知り得ない紫の上はこの結婚の理由を皇家の力と政治論理に見るほかない。従つて、②のような分析が可能になるのである。光源氏以外に頼る者がいない紫の上にとつて、彼の選択は女三の宮が持ち込んだ皇家の力から彼女を守る者が誰もいなかったことを如実に示している。とくに、斎藤氏はこの会見で紫の上の存在が省みられなかったことを指摘し、「今日まで彼女を

在らしめてき、生きさせてきた六条院の秩序そのものへの背信である」と述べているが、まさにそれが紫の上の不安を増大させていつたのだ。降嫁によつて紫の上は六条院の女主人の座から退いた。しかし、女三の宮に紫の上の代わりができるような力量がないことは明らかである。その結果、不安と孤独を抱える紫の上には六条院の秩序を維持するために今まで以上の配慮が求められることになり、それが彼女の命を縮めたのだ。

三 二人の紫のゆかり

この女三の宮の降嫁は、朱雀院が紫の上を育てた光源氏の手腕を期待したように、光源氏もまたかつての紫の上の再現を期待していた。しかし、盛大な儀式で降嫁してきた女三の宮は、光源氏にとつて幼いだけで「いとあまりもののはえなき御さま」という期待はずれの女性だった。幼い紫の上に見られた将来性が女三の宮には見受けられなかったことに光源氏は失望している。期待したような過去の再現は果たされそうになかつた。

などで、よろづのことありとも、また人をば並べて見るべきぞ、あだあだしく心弱くなりおきにけるわが怠りに、かかることも出で来るぞかし、若けれど中納言をばえ思しかけずなりぬめり

しを、と我ながらつらく思いつづけらるる

(若菜上 ④ 六三〜六四頁)

結婚三日目にして、すでに光源氏の後悔が表出されている。この降嫁が紫のゆかりから発したものに、彼の中で女三の宮と紫の上の二人は常に比較される。女三の宮が直接藤壺の宮に結びつくのではなく、紫の上の再現として女三の宮が紫のゆかりの意味を持つと大朝雄二氏は指摘^(註5)している。

女宮は、いとらうたげに幼きさまにて、御しつらひなどのことごとしく、よだけく、うるはしきに、みづからは何心もなくものはかなき御ほどにて、いと御衣がちに、身もなくあえかなり。ことに恥ぢなどもしたまはず、ただ児の面嫌ひせぬ心地して、心やすくうつくしきしましたまへり。院の帝は、男々しくすくよかなる方の御才などこそ、心もとなくおはしますと世人思ひためれ、をかしき筋、なまめきゆゑゆゑしき方は人にまさりたまへるを、などでかくおいらかに生ほしたてたまひけむ、さるは、いと御心とどめたまへる皇女と聞きしを、と思ふも、なま口惜しけれど、憎からず見たてまつりたまふ。ただ聞こえたまふまに、なよなよとなびきたまひて、御答へなども、おぼえたまひけることは、いはけなくうちのたまひ出でて、え見放たず見えたまふ。昔の心ならましかば、うたて心劣りせま

しを、今は、世の中を、みなさまさまに思ひなだらめて、とあるもかかるも、際離るることは難きものなりけり、とりどりにこそ多うはありけれ、よその思ひはいとあらまほしきほどなりかし、と思すに、さし並び目離れず見たてまつりたまへる年ごろよりも、対の上の御ありさまぞなほありがたく、我ながらも生ほしたてけりと思す。一夜のほど、朝の間も恋しくおぼつかなく、いとどしき御心ざしのまさるを、などかくおぼゆらんとゆゆしきまでなむ。

(若菜上 ④ 七三〜七四頁)

女三の宮に対する光源氏の感情は複雑である。昼間見る女三の宮も幼いことに変わりはなく、それは宮を育てた朱雀院への批判を生み(傍線O)、逆に紫の上を育てた自分の手腕を自賛することになる(傍線S)。女三の宮の幼さは彼に紫の上が素晴らしい女性であることを思い知らせるとともに、傍線R及びTに示されるように彼は紫の上に対してさらに深い愛情抱くようになった。一方、女三の宮が他者から見れば申し分のない妻であることも彼は認めており(傍線Q)、傍線Pにあるように彼女を見捨てることは出来ない。

女三の宮の降嫁は、六条院世界に二つの紫のゆかりを存在させた。一人は身分的に申し分のない正妻であり、もう一人は最も愛する妻である。必然的に光源氏は紫の上のもとで過ごすことが多くなるのだが、「姫宮は何とも思したらぬ」(若菜上 ④ 八六頁)と示さ

れるように幼い宮はそれを容認している。大朝氏は紫の上が女三の宮より優位に立つ理由として、宮との対面時に示される紫の上の「親めきたるさま」を引いて血縁関係の上で親めいて振る舞うことのできる年齢の違いを指摘している。^(註6)しかし、二人の年齢差は大朝氏のいうように紫の上を優位に立たせるかも知れないが、逆に今まで生きてきた自身の人生を振り返り将来への不安を感じさせるものではないか。

姫宮の御事は、帝、御心とどめて思ひきこえたまふ。おほかたの世にも、あまねくもてかしづかれたまふを、対の上の御勢ひにはえまさりたまはず。年月経るままに、御仲いとうるはしく睦びきこえかはしたまひて、いささか飽かぬことなく、隔ても見えたまはぬ
(若菜下 ④ 一六六―一六七頁)

女三の宮は新帝の後ろ盾もあり世間からも敬われているが、女性としての魅力では紫の上になわなない。光源氏にとって宮は政治的立場、紫の上は私的な立場における最上の人である。その位置づけが、辛うじて六条院世界のバランスを保っていたといえよう。

一方、胡潔氏は薄雲巻で紫の上が明石の姫君を引き取りその養母となったことを踏まえて、「后がねの明石姫君は無事入内することになり、紫の上は今や女御の母親として帝からも女御と異ならぬ礼遇を受けたことによって、公的な社会地位を得たのである」として、

彼女の政治面における地位の高さを指摘し若菜巻以降の正妻並立を指摘している。^(註7)確かに明石姫君が入内する際に紫の上が付き添い、彼女の退出に関しては「出でたまふ儀式のいよことによそほしく、御輦車などゆるされたまひて、女御の御ありさまに異ならぬ」(藤裏葉 ③ 四五一頁)と示されることから、世間から見ても明石女御

の養母として、光源氏の妻としての地位は確立されていたと考えてよいだろう。実際、六条院においては春の御殿の主として光源氏の正妻と変わらぬ役割を果たしており、花散里をはじめとした光源氏の妻たちも紫の上を正妻として認識していたであろうことは否定できない。こうした公的に認められた立場が彼女に安定をもたらし「おのがどちの心より起これる懸想にもあらず」(若菜上 ④ 五三頁)と光源氏の立場を理解しようとする余裕に繋がっていると胡氏は述べている。^(註8)確かに、女三の宮の降嫁までは光源氏の妻として紫の上は揺るぎない地位にあったのは間違いない。しかし、降嫁してきた女三の宮の皇女という身分は、いやがうえにも彼女の後ろに朱雀院や帝といった皇家を意識させる。実質的には紫の上が優位にあったとしても、表面的には皇女である女三の宮を正妻として遇せざるを得ない。それは光源氏だけでなく、世の人々が直視する現実である。女三の宮のもつ皇家の後ろ盾は、次第に彼女自身に関係ないところで影響力を強めていた。

内裏の帝さへ、御心寄せことに聞こえたまへば、おろかに聞かれたてまつらんもいとほしくて、渡りたまふこと、やうやう等しきやうになりゆく、さるべきこと、ことわりとは思ひながら、さればよとのみやすからず思されけれど、なほつれなく同じさまにて過ぐしたまふ。

（若菜下 ④ 一七七頁）

結局、光源氏は朱雀院や帝を意識して女三の宮と紫の上を同等に扱わざるを得なくなる。そこを、石田穰二氏は「紫の上と女三の宮の位置は、此処でほぼ均衡の状態に達した。均衡といってもかなり微妙な均衡である。」と指摘し、「紫の上は女性として、年齢の点から、この均衡が早晚破れはせぬか、といふ不安を抱いたのである。」と述べている。^{（註9）}ところが、紫の上は六条院の女主人の座が形だけでも女三の宮に移ったことに不安を感じている。この点は、どのようにとらえるべきであろうか。

年ごろ、さもやあらむと思ひしことも、今はとのみもて離れたまひつつ、さらばかくにこそはと、うちとけゆく末に、ありありて、かく世の聞き耳もなのめならぬこの出で来ぬるよ、思ひ定むべき世のありさまにもあらざりければ、今より後もうしろめたくぞ思しなりぬる。

（若菜上 ④ 六五〇六六頁）

秋山虔氏は、このような紫の上の思いに「光源氏―紫上―女三宮、という矛盾葛藤の関係」が示されているとして次のように述

べている。^{（註10）}

登場人物の言動や心理情動の交渉、相関が、とりもなおさず新しい文学的現実をつむぎ出してゆくのであり、また逆にその現実の論理のなかから、これに規定されつつ、なおこれを強化すべく、明確化すべく、人物の言動心理情動が継起してゆく。

（略）かれらの言動も心理も情動も、必ず前後関係と緊密に呼応し、それじたいとしての単独の意味をもつことはゆるされない。

秋山氏が指摘するように、六条院における紫の上の内面は、光源氏と女三の宮の言動に左右されている。いくら光源氏の心情を理解していても、女三の宮の存在は紫の上に自らの立場の不安定さを認識させる。彼女には女三の宮と異なり後ろ盾となるものがない。光源氏の愛情以外頼るものがないのである。したがって、朱雀院や春宮（後に即位する）といった皇家を後ろ盾に持つ女三の宮の降嫁は、紫の上の自らの立場を再認識させることで彼女を不安にしているのだ。ただ、そのような心の内を彼女は表に出さないよう気を配っていたのである。しかし、光源氏の「渡りたまふこと、やうやう等しきやうになりゆく」という行為は、紫の上に女三の宮と皇家の力を強く意識させ、彼女は自らの立場の弱さを痛感したのではないか。これ以降、紫の上は今まで以上に自らを抑圧するようになったので

ある。

石田氏は、「事態の推移のキャスティング・ヴオートを握つてゐる」のは、紫の上であると指摘してゐる。^(註11)六条院のバランスは光源氏によって保たれているのではなく紫の上によって維持され、彼女が自らの不安や不満を抑えることで六条院の主としての光源氏が救われている。斉藤氏は、次のように述べている。^(註12)

この三角関係において愛情の問題に苦しむのは、光源氏と紫上なのである。女三宮はその極端な幼児性から、愛情の問題に参加する資格が与えられていない人物なのである。それにも拘らず宮はこれまでのどんな女性よりも強力な三角関係を創り出している。問題の在り処は愛情ではなく、階級の問題、秩序の問題、世俗の問題だからだ。

斉藤氏の指摘にあるように、女三の宮の幼さは男女間の愛情を意識しない。降嫁当初、光源氏の訪れが間遠でも気にしていない彼女の姿からもそれは明らかである。光源氏の愛情に対して思い悩むのは紫の上だけであり、女三の宮は愛情を与えられることにも奪われることにも関心がなかったのではないか。六条院において、紫の上の立場は光源氏の愛情に支えられ、女三の宮の立場は皇家の力に支えられている。斉藤氏が指摘する三人の間に横たわる問題は、紫の上の努力で解決できるものではない。むしろ彼女の努力が及ばないこ

とで、彼女の不安を増幅させていくのだ。こうした状況が彼女の病を引き起こしたといつていい。紫の上は彼女自身の力ではどうにも出来ないものに翻弄され続けたのだ。

かく、世のたとひに言ひ集めたる昔語どもにも、あだなる男、色好み、二心ある人にかかづらひたる女、かやうなることを言ひ集めたるにも、つひによる方ありてこそあめれ、あやしく浮きても過ぐしつるありさまかな、げに、のたまひつるやうに、人よりことなる宿世もありける身ながら、人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてややみなむとすらん、あぢきなくもあるかな

(若菜下 ④ 二一二頁)

発病直前に紫の上は自らの人生を振り返っている。そこには、自らの立場へのむなしさすら感じられる。彼女は自分の心の内を押さえ、女三の宮や光源氏に対して理想の女性であろうとした。今井源衛氏はその様子を「そのくるしみを人目からかくそうとする必死の営みは、彼女をいつそう疲れさせ、死への足どりを早めさせた。」と述べている。^(註13)紫の上の心情や努力を光源氏が気付かないことが、さらに彼女を孤独にしたのだ。女三の宮の降嫁は紫の上には不安と孤独をもたらし、それを解消する策がなかったことで、病を得て死に至るのであった。

また、紫の上が病に臥すことで彼女がもたらしていた安定した秩

序が消え、六条院世界に綻びが生じる。その隙間が柏木に女三の宮との密通を起こさせたといえるが、これについては後述する。そして、この密通は女三の宮に出家を選択させることになった。光源氏は、奇しくも、二人の紫のゆかりを同時に失う結果になったのである。

四 おわりに

女三の宮の降嫁によって、光源氏は二つ目の紫のゆかりを手に入れた。この結婚は、准太上天皇の正妻欠如という政治的側面と彼の内面に存在する紫のゆかりへの好き心がもたらしたものである。しかし、女三の宮は彼の紫のゆかりに対する期待を満足させることはなかった。彼女の存在は、紫の上の女性としての素晴らしさを光源氏に再認識させるとともに、彼女への愛情を深めることとなる。しかし、彼女の立場と背景にある朱雀院や帝といった皇家の力が、光源氏の紫の上に対する愛情表現に制約を与えるようになり、光源氏は自らの意思に反して女三の宮を遇せざるを得ない。

一方、彼が抱く好き心を知らない紫の上は、この結婚に対する光源氏の言動に不信感を覚える。女三の宮の降嫁は、六条院における紫の上の存在を脅かすものとなり、彼女の女主人としての立場を取

り上げることになった。紫の上は自分の置かれている不安定な立場を再認識させられるが、そこから生じる不安や不満を光源氏にぶつけることが出来ない。そのうえ、光源氏はこうした紫の上の心の内に気がつくことはなかったのである。

吉岡氏は、若菜巻において光源氏は二つの罰を科せられているとして、一つは「女三宮を失う前に、また、死が紫上の肉体を奪う以前に、紫上の心を見失ってしまった」こと、二つ目は「女三宮を失うこと」であると述べている^(註七)。女三の宮の降嫁に関して、最初から紫のゆかりが光源氏と紫の上の間を隔てていたことは繰り返し述べた。紫の上はそれを知らなかったために降嫁を受け入れた光源氏を理解することができなかった。一方の光源氏は女三の宮の体面を維持するのに精一杯で紫の上を省みることができなかった。このような光源氏の言動に、紫の上は失望し期待することをやめたことで、発病し死に至ったと考えられる。もう一つの「女三宮を失うこと」については、柏木の存在を抜きに語ることができないので後述する。

降嫁後の六条院世界は、紫の上の配慮と忍耐によって維持されていた。したがって、紫の上が病に倒れることで綻びが生じ、柏木が女三の宮と逢瀬を持つことができるほどの隙間が生じた。第二の紫のゆかりは、光源氏から最愛の妻を奪い六条院世界を崩壊へと導くことになったのである。

註

東京大学出版会 昭39・12 一七九頁

註11 註7に同じ 「若菜の巻の発端について」 一七三頁

註12 註3に同じ 二五二頁

註13 今井源衛「女三宮の降嫁」(『改訂版 源氏物語の研究』
未来社 昭56・8) 一四四頁

註14 註1に同じ 三二五頁

註1 吉岡曠「女三宮物語」(『源氏物語論』 笠間書院 昭47・
12) 三一二頁

註2 深沢三千男「若菜巻の方法 序説」(『源氏物語の形成』
桜楓社 昭47・9) 一四五頁

註3 斉藤暁子「紫上の挨拶」(『源氏物語の研究』 教育出版セ
ンター 昭54・12) 二四六〜二五〇頁

註4 註3に同じ

註5 大朝雄二「女三宮の降嫁」(『源氏物語正篇の研究』 桜楓
社 昭50・10) 四七二〜四七三頁

註6 註5に同じ 四七七頁

註7 胡 潔「若菜以降の紫の上の妻の座」(『平安貴族の婚姻慣
習と源氏物語』 風間書房 平13・8) 三九七頁・四〇〇
頁

註8 註7に同じ 三九七頁・三九九頁

註9 石田穰二「若菜の巻について」(『源氏物語論集』 桜楓社
昭46・11) 四八頁

註10 秋山虔「『若菜』巻の始発をめぐって」(『源氏物語の世界』

3 出家がもたらしたもの

一 はじめに

女三の宮は幸せな人生を送れたのだろうか。皇女という最高の身分に生まれ、それにふさわしい准太上天皇の正妻という立場を得た。しかし、彼女は夫以外の子どもを産んだ。その事実は当事者と一部の人間しか知らないことではあったが、そのことで夫に疎まれ出家する道を選んだ。妊娠・出産は彼女が望んだものではない。無理矢理の関係から生じた結果であり、この点で彼女は不幸であったといえるだろう。

しかし、夫・光源氏は自分の死後彼女が生活に困らないように彼女の経済基盤を整えていた。彼の配慮を受けて、彼女は息子・薫を頼りながら三条宮で暮らしている。それは彼女にとって穏やかなものであったといっている。

母宮は、今はただ御行ひを静かにしたまひて、月ごとの御念仏、年に二たびの御八講、をりをりの尊き御営みばかりをしたまひて、つれづれにおはしませば、この君の出で入りたまふを、かへりては親のやうに頼もしき蔭に思したれば、いとあはれにて、院にも内裏にも召しまつはし、春宮も、次々の宮たちも、なつ

かしき御遊びがたきにてともなひたまへば、暇なく苦しく、いかで身を分けてしがなとおぼえたまひける。

(匂兵部卿 ⑤ 二三頁)

薫の目に映る女三の宮は、仏道の修行を静かに行いながらも薫が親であるかのように頼りつれづれの日々を送っている。一方の薫は、女三の宮を訪ねる暇がないほどに院や帝に重用されている。ここに示された女三の宮は、何かに煩わされることなく、頼るべき相手もいる。穏やかに人生を送っている女三の宮は幸せだといえるのではないか。

第二部以降は様々な女たちの生き方が描かれる。その中で「片なり」の皇女・女三の宮の人生を眺めたとき、少なくとも宇治十帖に描かれる彼女の人生は幸せなものであったと私は考える。ここでは、女三の宮の出家をキーワードに彼女の人生をなぜ幸せと考えるのか示してみたい。

二 皇女の結婚

森一郎氏は女三の宮のことを「親のなげきとなる女君」と呼ぶ^(註)。

第二部冒頭における朱雀院の苦悩が女三の宮の性質に起因することは改めて指摘するまでもない。女三の宮の乳母は「皇女たちは、独

りおはしますこそは例のことなれど、さまさまにつけて心寄せたてまつり、何ごとにつけても御後見したまふ人あるは頼もしげなり。」と述べた上で「おのづから思ひの外のこともおはしまし、軽々しき聞こえもあらむ時には、いかさまにかはわづらはしからむ。」(若菜上 ④ 二九頁)と不安を抱いている。同様に、朱雀院も聞き及んだ例を上げて当世の女の生き難さを嘆きつつ「あやしくものはかなき心ざまにやと見ゆめる御さまなるを、これかれの心にまかせてもてなしきこゆる、さやうなることの世に漏り出でむこと、いとうきことなり」(若菜上 ④ 三四頁)と彼女の頼りない性質とそれが招くであろう将来の危うさを憂いている。

朱雀院が危惧した通り、女三の宮は柏木に迫られ不義を犯す。しかも、その結果妊娠し出産した。これが表沙汰にならなかったのは、ひとえに夫・光源氏の配慮による処が大きい。この点では、女三の宮の後見を光源氏に託したことは間違ひではなかった。その一方で、彼女の妊娠・出産に至る経緯を知らない朱雀院にとって彼女が出家を望んだことは予想外であり、彼を失望させた。

また、朱雀院のもう一人の娘・女二の宮は、柏木に降嫁する。この降嫁は柏木の父の懇願に答える形であったが、柏木は女三の宮への気持ちを断ち切れずに密通事件を起こしたあげく、光源氏に露見したことを気に病んで亡くなってしまう。降嫁後の女二の宮は、表

向き柏木の正妻として大切にされていたが、女性として愛されたこととはなく、幸せな日々を送っていたとはいいたくない。その上、柏木の死後夕霧が彼女のもとに通っていることが世間の噂になったことは、彼女や朱雀院にとって不本意なことであった。

世間には知らなかったとはいえ不義の子を出産し出家した女三の宮と、寡婦となった後に夕霧との関係が世間に取りざたされた女二の宮。朱雀院が降嫁前に苦慮したことが彼女たちの身の上に降りかかったことは明らかであり、女の生き難さを改めて問うことになったのだ。

皇女たちの世づきたるありさまは、うたてあはあはしきやうにもあり、また高き際といへども、女は男に見ゆるにつけてこそ、悔しげなることも、めざましき思ひもおのづからうちまじるわざなめれ (若菜上 ④ 三二―三三頁)

元々朱雀院は皇女の結婚をいいものとは思っておらず、結婚したからといってうまくいくわけではないことも理解していた。吉岡曠氏が「当時の結婚のありように対する強い不信感が、特に女性の側に存在したことも見逃してはなるまい」と指摘している^(註2)ように、一連の朱雀院の言葉が男女の関係における女性の不利を嘆くものであるのはいうまでもない。また、当時の皇女の結婚については、既に今井源衛氏によって詳しく調査されている^(註3)。氏は「貴族社会における

多妻制の習慣が、女性の側の自己抑制や忍従によつてのみ成立する」ことから、この朱雀院の「結婚が女性の屈辱の因たらざるを得ないという見解」が「そうした結婚制度一般が不可避免的に孕んでいる女性の犠牲に対する抗議ともいうべきものが含まれていたことも察せられるのであつて、この院の見解は作者のそれと相重なりとみてよいであろう」と述べている。^(註4) この皇女の結婚という命題は、宇治十帖においても様々な形で提示されている。例えば、八の宮の娘・大君は薫との結婚を拒み、同じく中の君は匂宮と結婚するが彼と夕霧の娘・六の君が結婚したことで己の立場の弱さを痛感する。帝の皇女も、女一の宮は伯父・夕霧の後見を得ることで優雅な独身生活を送るが、後見人のいない女二の宮は薫のもとに降嫁する。石田穰二氏は「女は、結婚することによって、堪へがたい屈辱や瞋恚の思ひにも身を灼かねばならぬことがある。それはまさに結婚が女に齎す宿命と言つてもいい。」としてそれが「以後の物語世界の一つの基調をなしてゐる」と述べているが、その「屈辱や瞋恚の思ひ」から逃れる手段の一つが出家であると考えている。

女ばかり、身をもてなすさまどころせう、あはれなるべきものはなし、もののあはれ、をりをかしきことも見知らぬさまにひき入り沈みなどすれば、何につけてか、世に経るはええしきも、常なき世のつれづれをも慰むべきぞは、おほかたもの

の心を知らず、言ふかひなき者にならひたらむも、生ほしたてけむ親も、いと口惜しかるべきものにはあらずや、心にもみ籠めて、無言太子とか、小法師ばらの悲しきことにする昔のたとひのやうに、あしき事よき事を思ひ知りながら埋もれなむも言ふかひなし

(夕霧 ④ 四五六〜四五七頁)

女二の宮と夕霧の噂は、光源氏に自分が死んだ後の紫の上のことを心配させ、紫の上は自分が育てている女一の宮(明石女御腹)の将来を心配する。心配する対象は異なるが、お互い女の生き難さを実感していることに変わりはない。紫の上に語らせるこの言葉が、作者の抱く女の宿世観を伝えていることは改めていうまでもない。光源氏によって養育され、世間の評判も高い紫の上ではあるが「わが心ながらも、よきほどにはいかでたもつべきぞ」と思うほどに女の身の処し方は難しい。

たとえば、女三の宮が出家しなかったとすれば、光源氏が死んだ後の彼女の人生はどうなっていただろうか。

二十一二ばかりになりましたまへど、なほいといみじく片なりにきびはなる心地して、細くあえかにうつくしくのみ見えたまふ。

(若菜下 ④ 一八四頁)

女樂の催しを前に琴の上達を光源氏に誉められた女三の宮は、年齢を重ねても相変わらず幼さが抜けていないことが示される。こうし

た幼さは、女三の宮に対してのみ繰り返し指摘されていることであり、彼女の性質を考えれば自らの人生を生きていくだけの才はなく、何らかの厄が降りかかってもそれを振り払うことができないだろうと推測できる。

その一方で、女三の宮が結婚前と変わらぬ幼さを残していることは、彼女は成長する必要のない状況——つまりは結婚前と変わらぬ生活を送っていたことを示しているのではないか。実際、降嫁先での女三の宮は「げにまだいと小さく片なりにおはする中にも、いといはけなき気色して、ひたみにちに若びたまへ」（若菜上 ④ 六三頁）

る有様で光源氏には物足りない。しかし、彼が自分のもとにこなくとも「何とも思したらぬ」様子であり、紫の上に対しても「げにいと若く心よげなる人かなと、幼き御心地にはうちとけたまへり」（若菜上 ④ 九二頁）といった心情で、彼らに負の感情を持つことはない。こうした彼女の生活を石田穰二氏は次のように評している。^(註6)

彼女は、紫の上といふ人の既に在る六条の院に興入れたといふ、自分の微妙な立場を自覚することもない。源氏の教へとしつけのままに、豪華な人形のやうに、花やかな雰囲気に包まれてその日々を送る。

周囲の華やかさは、彼女の裳着の支度が「来し方行く先ありがたげなるまでいつくしくののしる」（若菜上 ④ 四二頁）様であった

ことに始まり降嫁後も繰り返し語られるが、そこに彼女の意志や感情が語られることはほとんど無いといってよい。彼女自身が何かを望むとか行動することはなく、六条院では光源氏に教え諭され、乳母達だけでなく朱雀院や春宮といった皇家の力で守られている。准太上天皇の正妻に相応しい暮らしを送る女三の宮。六条院は疑似後宮の体を成しており、宮中に似た世界を形成している。こうした状況を考えると、六条院での生活は彼女にとって降嫁前に宮中で過ごしたことと変わらなかったのだろう。むしろ、六条院世界という場所により華やかさが増しているようにも見受けられる。「片なり」の皇女・女三の宮は、光源氏の愛情を紫の上と競うつもりもなく、石田氏のいう「豪華な人形のやう」な生活を送ることに、おそらく何の疑問も持っていなかったのだろう。

女三の宮のような異常な幼稚さをもった人物は、光源氏のような円熟した人柄と紫上のようなよくできた人柄とによって包まれる以外にどんな幸福な結婚があるといえよう。

森一郎氏の指摘にもあるように、彼女にとってこの結婚は不利益をもたらすものではなく、むしろ最良の選択であったといっているだ。

三 宇治十帖での女三の宮

さて、宇治十帖において今上帝は母を亡くし、しっかりとした後見を持たない女二の宮の処遇を考えている。ここで、彼はかつて朱雀院が女三の宮を光源氏に降嫁させたことを例に出す。

しばしは、いでや飽かずもあるかな、さらでもおはしなましと聞こゆることどもありしかど、源中納言の人よりことなるありさまにてかくよろづを後見たてまつるにこそ、その昔の御おぼえ衰へず、やんごとなきさまにてはながらへたまふめれ、さらずは、御心より外なることどもも出で来て、おのづから人に輕められたまふこともやあらまし(宿木 ⑤ 三七六～三七七頁)

今上帝は、女三の宮が現在も皇女にふさわしい生活を送っている理由に薫の存在をあげる一方で、なにか不都合なことに巻き込まれて人から輕んじられるようなことになった可能性も考えている。事実、薫が人並み以上に優れた人物であり、その彼が何くれとなく母宮を氣遣っているために彼女の生活は維持されているのだ。つまり女三の宮は息子という後見人を得ていたことになる。

更に、出家したことも彼女の平穩な生活を保障することになっている。例えば彼女が出家していなければ、光源氏の死後の彼女はその幼さから姉・女二の宮と同じ様な立場に立たされた可能性を否定できない。女三の宮は光源氏が存命中に出家したために、後見人と

して、彼が出家後の彼女の生活基盤を整え安定した生活を保証した。一方、女二の宮も柏木の死後出家を望むが、女三の宮に引き続き彼女までも出家することに朱雀院が難色を示したために望みを果たすことが出来なかった。もし女二の宮が出家していれば、夕霧はあのように強引に関係を結ばなかっただろうし、まず恋愛の対象としては考えなかったであろう。

女三の宮の出家の原因は柏木にあるが、出家によって柏木の思慕を断ち切り、光源氏からは親に等しい後見を受けることができた。さらに光源氏の死後も他者から恋愛対象として見られることもなく、俗世の煩わしさから逃れることができた。宇治十帖における女三の宮は、皇女で准太上天皇の正妻だった者としての体面を汚すことなく日々を送っている。それは彼女自身の考えで維持しているものではなく、薫をはじめ今上帝や夕霧の心遣いに拠るところが大きい。おそらく、薫が一人前になるまでは光源氏亡き後は夕霧が十分に気を配り生活を支えたであろうことは容易に想像できる。ただ、女三の宮の年齢を考えれば、夕霧にその気がなくても女二の宮の時と同様に世間の噂の的になる可能性は十分に考えられた。しかし女三の宮が出家していることで、そういった世間の煩わしさから逃れることができたのだ。

この様に考えると、女三の宮が宇治十帖で皇女としての体面を保

つたまま生活できたのは、彼女が出家したことで色恋を含めた俗世に煩わされることなく人々の援助を受けることができた結果であると考えられる。柏木との密通以降、特にそれが光源氏に知れてからの彼女は光源氏の怒りを恐れ苦しむことが多く、そこから逃れるために出家した。出家することで彼女の生活はリセットされ、密通前のように自分の世界だけで生きていける環境を得ることができたのだ。

四 女三の宮の役割

女三の宮にとって不幸ではなかった結婚生活を一変させたのは、柏木であった。彼は彼女を諦めきれず、密通という事態を引き起こした。女三の宮と柏木の関係を知った光源氏は、その一件を表沙汰にしないよう気を配りつつ、こうした事態に心の内で葛藤している。年を重ねたとはいっても光源氏は女三の宮の引き起こした事件を完全に許すことができず、裏切られた気持ちを抱えているのだ。

おほかたのことはありしに変わらず、なかなかいたはしくやむごとなくもてなしきこゆるさまを増したまふ。け近くうち語らひきこえたまふさまは、いとこよなく御心隔たりてかたはらいたければ、人目ばかりをめやすくもてなして、思しのみ乱るるに、

この御心の中しもぞ苦しかりける。

(若菜下 ④ 二五九～二六〇頁)

表面は今まで通り大切に扱っているが、二人になると以前とは異なるよそよそしさである。女三の宮は自分の身に起こったことを光源氏に対して取り繕うことができない。彼女はただ光源氏の怒りを恐れるだけしかできなかった。

光源氏の態度の変化に加え、出産に向かう自身の身体の変化は、女三の宮により苦痛を与えることになる。いずれも柏木とのことと端を発しているが、今まで自らの意志を示すことなく常に受け身であった彼女には、こうした事態に立ち向かう思慮もなく、相談できる相手もなく、しだいに彼女は追いつめられていく。

宮は、さばかりひはづなる御さまにて、いとむくつけう、ならはぬことの恐ろしい思されけるに、御湯なども聞こしめさず、身の心憂きことをかかるにつけても思し入れば、さはれ、このついでにも死なばやと思す。大殿は、いとよう人目を飾り思せど、まだむつかしげにおはするなどを、とりわけても見たてまつりたまはずなどあれば、(中略)、さのみこそは思し隔つることもまさらめと恨めしう、わが身つらくて、尼にもなりなばやの御心つきぬ。

(若菜下 ④ 三〇〇～三〇一頁)

おそらく彼女がはじめて欲したことが「尼にもなりばや」であった。

若宮に対する冷淡さがそのまま自分の身へと反映されると彼女は考える。彼女はこの現状から逃れたいと考えたのだろう。その手段として出家を望んだのだ。

かうぞあるよ。いとかしこう取り返しつと、一人をば思したりしが、いとねたかりしかば、このわたりにさりげなくてなむ日ごろさぶらひつる。今は帰りなむ。 (柏木 ④ 三一〇頁)

女三の宮が出家し朱雀院が山に帰った後に物の怪が現れ、彼女の言動は物の怪が起こせたものであり、出家は女三の宮の意志で行われたのではないと伝える。光源氏は彼女の出家を物の怪の仕業にしたかったのだろう。おそらく彼は彼女の心の内を理解していなかった。彼女は光源氏に対する恐れと将来への不安を抱いており、体調の不調と併せて考えれば出家を望むことに不思議はないのだ。彼女の出家願望に対して光源氏は「邪気などの人の心たぶろかして、かかる方にすすむるやうもはべなるをとて、聞きも入れはべらぬなり」と物の怪の仕業かも知れないと取り合わないが、朱雀院は「物の怪の教へにても、それに負けぬとて、あしかるべきことならばこそ憚らめ、弱りにたる人の、限りとてもしたまはむことを聞き過ぐさむは、後の悔心苦しうや」(柏木 ④ 三〇六頁)と、たとえ物の怪のせいであつても心の弱った彼女の望み通り出家させたいと考える。朱雀院が彼女の出家を認めるのは光源氏に対する恨みと皇

女としての体面を守るためである。

御心の中、限りなうしろやすく譲りおきし御事を承けとりたまひて、さしも心ざし深からず、わが思ふやうにはあらぬ御気色を、事にふれつつ、年ごろ聞こしめし思しつめけること、色に出でて恨みきこえたまふべきにもあらねば、世の人の思ひ言ふらむところも口惜しう思しわたるに、かかるをりにもて離れなむも、何かは、人笑へに世を恨みたるけしきならで、さもあらざらむ、おほかたの後見には、なほ頼まれぬべき御おきてなるを、ただ預けおきたてまつりしるしには思ひなして、憎げに背くさまにはあらずとも、御処分に、広くおもしろき宮賜りたまへるを繕ひて住ませたてまつらむ、わがおはします世に、さる方にてても、うしろめたからず聞きおき、また、かの大殿も、さ言ふとも、いとおろかにはよも思ひ放ちたまはじ、その心ばへをも見はてむ (柏木 ④ 三〇六、三〇七頁)

ここでの朱雀院は、非常に冷静な目で光源氏と女三の宮の関係を見ている。出家することで、世間が噂する愛情薄い結婚生活に終止符を打つことができるだけでなく、出家の理由を夫婦関係ではなく体調不良に求めることができると朱雀院は考えた。さらに、光源氏が尼になった彼女を見捨てないであろう事も計算している。朱雀院は、光源氏を信頼し女三の宮のためによかれと思つて決めたにもかかわ

らず、期待ほどではなかった結婚に自らの手で終止符を打ち、彼女の将来への新たな道筋を付けたのである。

一方、女三の宮の出家を受け入れられないように見えても、光源氏にとっても彼女の出家は都合がいいことも事実である。

御心の中には、まことに、さも思しよりてのたまはば、さやうにて見たてまつらむはあはれなりなむかし、かつ見つつも、事にふれて心おかれたまはむが心苦しう、我ながらもえ思ひなほすさまじう、うきことのうちまじりぬべきを、おのづからおろかに人の見咎むることもあらむが、いといとほしう、院などの聞こしめさむことも、わが怠りにのみこそはならめ、御なやみにことつけて、さもやなしたてまつりてまし、など思しよれど、また、いとあたらしう、あはれに、かばかり遠き御髪の生ひ先を、しかやつさむことも心苦しければ（柏木 ④ 三〇二頁）

若い彼女の先の人生を考えると、出家を躊躇する気持ちは確かに彼の中に存在する。朱雀院や春宮の意向であったとはいえ、彼女に琴を教え紫の上と変わらぬ扱いをとっていた光源氏にな女三の宮への愛情が全くなかったとはいえないだろう。ただ、光源氏にとっては病を得た紫の上に付き添うのは当然であった。そして、その間に女三の宮が柏木と密通したことは、彼にとっては彼女の裏切りでしかなかった。彼は彼女を正妻として大切にしていたと思っている。にも

かわらず、彼女は柏木と関係したのだ。光源氏は彼女をいたわしく思う気持ちと疎ましく思う気持ちで揺れる。さらにこの出来事は、自分と藤壺中宮の関係を思い出させるとともに、桐壺帝が自分たちの関係を知っていたのではないかという恐れを抱いたことも示されている。この密通は、光源氏にとっても自分の過去と現在について考えさせるものとなった。そして、ここで女三の宮が出家することは、彼女の皇女としての体面も彼の夫としての体面も守ることになることを彼は理解しているのだ。

女三の宮の出家は朱雀院主導で執り行われた。

いと盛りにきよらなる御髪をそぎ棄てて、忌むこと受けたまふ作法悲しう口惜しければ、大殿はえ忍びあへたまはず、いみじう泣いたまふ。院、はた、もとより、とりわきてやむごとなう、人よりもすぐれて見たてまつらむと思ししを、この世にはかひなきやうにないたてまつるも飽かず悲しければ

（柏木 ④ 三〇八頁）

二人の男にとって、女三の宮の出家は泣かずにはいられない「かひなき」出来事であり不幸な出来事であった。女三の宮にとっても、不義は自らが望んだことではなく、そのために出家を望むようになるとは考えていなかっただろう。彼女の出家は、二人の男たちが意図したように病を理由に自然に周囲に受け入れられた。三人の体面

は保たれたのである。朱雀院と光源氏それぞれに縁がある人々が、彼らの死後も忘れずに女三の宮のもとを訪れていることから出家が三人の関係を壊さなかったことがうかがえる。あるとき出家したことで、彼女の人生はこの男たちに支えられ、守られたのだ。

これかれ、ここに集まりたまひて、三条宮に参りたまふ。朱雀院の古き心ものしたまふ人々、六条院の方さまのも、方々につけて、なほかの入道の宮をばえ避き参りたまふなめり。

(竹河 ⑤ 六七頁)

五 おわりに

女三の宮は出家することで、柏木との密通から生じた苦悩を取り除いた。しかし、光源氏は尼姿になった女三への愛情を絶ちがたいことを示す事もあり、それを女三の宮は「ひとへにむつかしきこと」とおもっている。

人目にこそ変ることなくもてなしたまひしか、内にはうきを知りたまふ気色しるく、こよなう変りにし御心を、いかで見えたてまつらじの御心にて、多うは思ひなりたまひにし御世の背きなれば、今はもて離れて心やすきに、なほかやうになど聞こえたまふぞ苦し

(鈴虫 ④ 三八〇～三八一頁)

二人の気持ちは完全にすれ違っている。光源氏が未練を語るのは彼女が出家したからであり、俗世の姿なら疎ましさが先に立つことだろう。そうした光源氏の本心を女三の宮は感じているのである。「今はもて離れて心やすき」というのが女三の宮の本心であり、夫婦の繋がりを断ち切ることでそうした彼の好き心を拒否しているのである。

鈴虫巻で、女三の宮の持仏開眼供養が描かれる。それは光源氏によつて万端準備され、親王方も多く参列し朱雀院や今上帝から使者が使われる盛大なものであり、女三の宮の出家後も彼女に対する光源氏の庇護と今上帝の配慮に変わりがなく世間に知らしめるものでもあった。さらに、光源氏は朱雀院から彼女に送られた三条宮を手入れし、蔵を建て、彼女の財産を保管することで自分の死後彼女の生活が困らないように手配した。生活基盤を確保することで、彼女の今後の人生の安定を保証したのである。

宮は、仏の御前にて経をぞ読みたまひける。何ばかり深く思しとれる御道心にもあらざりしかど、この世に恨めしく御心乱ることもおはせず、のどやかなるままに紛れなく行ひたまひて、一つ方に思ひ離れたまへる

(幻 ④ 五三一頁)

第二部の終焉を前に語られる女三の宮の穏やかな日常の様子は、光源氏「いとうらやまし」と思わせている。彼女は出家によって、

結婚前の穏やかな日常を再び手に入れたのである。

註

註1 森一郎「女三の宮創造」(『源氏物語の方法』所収 桜楓社
昭44・6) 一六九頁

註2 吉岡曠「女三宮物語」(『源氏物語論』所収 笠間書院 昭
47・12) 二九五頁

註3 今井源衛「女三宮の降嫁」(『改訂版 源氏物語の研究』所
収 未来社 昭56・8)

註4 註3に同じ 一三三頁

註5 石田穰二「若菜の発端における朱雀院について」(『源氏物
語論集』所収 桜楓社 昭46・11) 一八四頁

註6 註5に同じ。二〇四頁

註7 森一郎「源氏物語における人物造型の方法と主題との連関」
(註1に同じ) 一九八頁

4 狂わされた男―柏木

一 はじめに

女三の宮の降嫁相手に選ばれなかった柏木は、大きな挫折を味わう。藤原の嫡男として順風満帆に歩んできた彼の人生。しかし、女三の宮を得られなかった事実を、彼は受け入れることができなかった。

なぜ柏木が女三の宮を求めたのか。それについては既に述べた。^(註1)

柏木は、女三の宮自身を求めたのではなく彼女のもたらす皇家とのつながりと政治権力を求めていた。それは藤原の家の嫡男としては当然のことであった。しかし、女三の宮の降嫁先は光源氏に決まった。朱雀院の決断は、柏木の誇り高いプライドを傷つけるとともに、手に入れられなかった人生に対する未練を生み出したのだ。

その未練を女三の宮への恋に変えさせたのは、あの蹴鞠の日に見た女三の宮の姿であった。彼女の美しさは、柏木の心を捕らえてしまった。冷静に考えれば、夕霧が指摘するように彼女のような身分の女性が端近くにいたことは軽率であり、彼女のいたらない一面が現れていたといえる。しかし、柏木はそれに気付かず彼女を追い求める。ここでは、女三の宮を求めることで破滅してゆく柏木につい

て考えていく。

二 ライバル光源氏

女三の宮に心を奪われるまでは、柏木のライバルは歳も近い光源氏の息子・夕霧であった。柏木は藤原家、夕霧は〈源氏〉の将来を担う者として宮中で鎬を削っている。例えば〈源氏〉側は明石姫君が春宮のもとに入内し次政権への布石を打ったが、一方の藤原家は朱雀院との関係から春宮と近いが姻戚関係はない。それ故に朱雀院鐘愛の女三の宮を得ることで皇家との関係を深めようと考えていたはずである。そして柏木は公私において「何ごとをも人にいま一際まさらむ」(柏木 ④ 二八九頁)という高い望みを持っていた。

また、柏木はすぐれた人物であると評されることが多いが、その比較対象は同年代の公達である。例えば、玉鬘に宛てた柏木の手紙を見た光源氏は「公卿といへど、この人のおぼえに、かならずしも並ぶまじきこそ多かれ。さる中にもいと静まりたる人なり。」(胡蝶 ③ 一八〇頁)と語り、朱雀院は女三の宮の婿候補としての柏木を「いたくしづまり思ひあがれる気色人には抜けて、才などもこともなく、つひには世のかためとなるべき人」(若菜上 ④ 三六頁)と評している。柏木の人となりの素晴らしさは何度か語られる

が、比較対象が同世代から変わることはない。

末の刻ばかりに楽人参る。万歳楽、皇輦など舞ひて、日暮れかかるほどに、高麗の乱声して、落蹲の舞ひ出でたるほど、なほ常の目馴れぬ舞のさまなれば、舞ひはつるほどに、権中納言、衛門督おりて、入り綾をほのかに舞ひて、紅葉の蔭に入りぬるなごり、飽かず興ありと人々思したり。いにしへの朱雀院の行幸に、青海波のいみじかりし夕、思ひ出でたまふ人々は、権中納言、衛門督のまた劣らずたちつづきたまひにける、世々のおぼえありさま、容貌、用意などもさをさ劣らず、官位はやや進みてさへこそなど、齢のほどをも数へて、なほさるべきにて昔よりかくたちつづきたる御仲らひなりけりとめでたく思ふ。

(若菜上 ④ 九五頁)

紫の上が主催する薬師仏供養の精進落としの祝宴で柏木と夕霧が舞う場面であるが、ここに両家及び二人に対する見方が示されている。繰り返しになるが、柏木と夕霧の関係は、二人の父同士のそれを彷彿させるものであり、政治的にも同世代の男性としても柏木のライバルは夕霧なのだ。朱雀院行幸の際の彼らの父たちと比較して柏木・夕霧は人望や地位、容姿や態度がひけをとることがなく、官位はむしろ高くなっていると評されている。

その一方で、例えば女三の宮の降嫁先として朱雀院は光源氏を選

ぶが、その際に柏木は「行く末も頼もしけれど、なほまたこのためにと思ひはてむには限りぞあるや」(若菜上 ④ 三六頁)という言葉で退けられる。

いと難き御事なりや。御宿世とかいふことはべなるを本にて、かの院の言に出でてねむごろに聞こえたまはんに、立ち並び妨げきこえさせたまふべき御身のおぼえと思されし。このごろこそ、すこしものものしく、御衣の色も深くなりたまへれ

(若菜下 ④ 二一九頁)

女三の宮を諦めきれない柏木と小侍従の会話にあるように、柏木は光源氏の比較対象にすらならなかったのである。しかし、柏木自身は女三の宮を求めることで彼女の夫である光源氏を自らのライバルと見るようになっていった。そこに柏木が追いつめられる理由の一つが考えられる。

ここで、柏木の女三の宮と光源氏に対する心情の変化を見てみたい。

かたじけなくとも、さるものは思はせてまつらざらまし、げにたぐひなき御身にこそあたらざらめ、と常にこの小侍従といふ御乳主をも、言ひはげまして、世の中定めなきを、大殿の君もとより本意ありて思しおきてたる方におもむきたまはばとたゆみなく思ひ歩きけり。

(若菜上 ④ 一三六頁)

女三の宮が光源氏のもとへ降嫁した後も柏木は彼女のことを諦めてはいない。野村精一氏は光源氏の出家後を狙う柏木を指して「異常な執心」といい、それが深まるきつかけがあの蹴鞠の日であったと述べている。^(註2)確かに、柏木だけが女三の宮降嫁後も彼女を諦めていないが、それは彼の政治的野心であって彼女自身に対するものではないと考える。光源氏が出家した後に自分が世話をする事ができればという柏木の考えは、実現の可能性があるので、女三の宮を得ることのできる手段であった。

ただし、女三の宮の姿を見てからの柏木は、彼女を想う度にその夫である光源氏を意識するようになる。彼女を自分に振り向かせたいと望み、彼女の夫より勝る自分を模索する。しかし、柏木には光源氏に対抗する自信などなく、逆に彼女に対するコンプレックスを認識させられるだけであった。

例えば蹴鞠の後、光源氏を囲んでの世間話の中で柏木は光源氏の「にほひやかにきよなる」様子を見て次のように感じている。

かかる人に並びて、いかばかりのことにか心を移す人はものしたまはむ、何ごとにつけてか、あはれと見ゆるしたまふばかりはなびかしきこゆべき、と思ひめぐらすに、いとどこよなく御あたりはるかなるべき身のほども思ひ知らるれば、胸のみふたがりてまかでたまひぬ。

(若菜上 ④ 一四五頁)

ここを指して石田穰二氏は「源氏の容貌、人格、社会的地位の優越を一種の威圧として感ずる、彼の深刻な恐れが、最初からこの恋を決定づけてゐた。」と述べている。^(註3)また、柏木にとっての光源氏の存在を、今井久代氏は「崇拜する理想人」と呼び、高橋亨氏は「現実を越えた非日常の幻想」と呼んでいる。^(註5)

確かに、光源氏は柏木の父のライバルであり、政治的に優位に立つことの出来なかった相手である。帝の皇子という血筋、〈源氏〉としての政治力、現在の准太上天皇という地位、音楽その他に対する造詣の深さ等、今の柏木が光源氏に勝るものを探しても見つけることができないのは当然である。柏木は自分のライバルとして光源氏を見つめることで自らの劣性を認識し、それ故にますます手の届かぬ存在として女三の宮をとらえる。柏木にとって光源氏は女三の宮を得るために蹴落とさなければならぬ相手となった。柏木は、当代の公達の中で人より抜きんでいるという自負はある。しかし、光源氏に目を向けると、柏木の自信は消えてしまう。にもかかわらず、女三の宮の姿を目にした柏木は彼女をあきらめることができない。柏木は、女三の宮に自分の気持ちを伝えたいという願望と、彼女を想うが故の光源氏への嫉妬、そして彼への尊敬と彼を越えられぬ挫折感、そういった様々な心の揺れの中を彷徨っていく。そこに彼の誇り高さが加わることで、彼女に対する執着心を強めていった

と考えられる。

女三の宮を求める柏木は、小侍従に手紙を託す。

一日はつれなし顔をなむ。めざましう、とゆるしきこえざりしを、見ずもあらぬやいかに。あなかけかけし（略）

いまさらに色にな出でそ山桜およばぬ枝に心かけきと

かひなきことを（若菜上 ④ 一四九―一五〇頁）

柏木が女三の宮の姿を見たことを知らない小侍従からの返事は、彼に光源氏への「なまゆがむ心」を抱かせることになる。恋は盲目という言葉もあるが、女三の宮に関しては柏木は一人の男として、光源氏を恋敵と見ている。しかし、光源氏の様子を目の当たりにすると、彼に対して抱いていたライバル心は萎んでしまう。光源氏を憎む気持ちと、そのような気持ちを抱くことに対する恐れが柏木を悩ませることになるのだ。

みづからも、大殿を見たてまつるに気恐ろしくまばゆく、かかる心はあるべきものか、なのめならんにてだに、けしからず人に点つかるべきふるまひはせじと思ふものを、ましておほけなきこと、と思ひわびては、かのありし猫をだに得てしがな、思ふこと語らふべくはあらねど、かたはらさびしき慰めにもなつけむ、と思ふに、もの狂ほしく、いかでかは盗み出でむと、それさへぞ難きことなりける。（若菜下 ④ 一五五頁）

女三の宮に対する想いが大それたものであると怯えながらも、その一方で自分の想いをわずかでも満たしたいと考え猫を欲する柏木は、哀れでもあり怪しくもある。白方勝氏は、この猫を欲する行為を「代償的行為」とし、「柏木は、叶わぬ悩みを内面化し、昇華する方向ではなく対物的に処理しようとしている。」と述べ、そうした行為によっても解消されないことから「精神的に昇華できない恋慕は妄執である。妄執にとらわれた柏木には、客観的に物を見、思考することはできなくなってしまうている。」と指摘している。^(註6)

ただ、この猫を得るための言動は白方氏も指摘しているように非常に計画的である。それは、春宮の猫好きの性格を利用したものであり、今まで彼が培ってきた皇家との繋がりをも有効にかつ私的に利用したものである。自らも愚かしいと思うこの言動によつて手に入れた猫を女三の宮と思つて抱く柏木には、かつての貴公子然とした華やかさはない。極端なことをいえば、光源氏という強力なライバルが有する女三の宮の形代としてかの猫を得ることは、柏木自身が光源氏に対して猫ほどの力しかないことを認めた事になるのではない。柏木にとって光源氏はライバルであったが、それが彼だけの思い込みであつただけでなく、彼自身が無意識にこの競争に対して後ろ向きであつたのだ。

あの蹴鞠の日以降、柏木の女三の宮に対する想いが募るほどに、

柏木は彼女の夫である光源氏とわが身を比べる。それは、政治家としてだけでなく人間的にも尊敬する光源氏に対して太刀打ちできない自分自身を改めて認識することになったのだ。光源氏を夫とする女三の宮が自分に目を向けるはずがないという考えに至るが、柏木は彼女を得たいという願望を押さえることが出来ない。光源氏に対する複雑な感情は彼を追いつめ、それに逆らうように女三の宮への想いを強くする。ついには密通に至る柏木の想いは、光源氏をライバル視したことで思いの外強いものになったといえる。

三 疑似後宮としての六条院

柏木が女三の宮の姿を目にし、更にあの折の猫を手に入れて後、次に柏木が登場するまでに冷泉帝と今上帝の御代替わりが語られる。続いて太政大臣の引退、左大将の右大臣昇進、明石女御腹の一の宮の立坊、夕霧の大納言昇進が語られる。その一方で、ここで柏木について語られることがない。父である太政大臣の引退が語られているにもかかわらず、後継者である彼の昇進は話題にならない。猫にうつつを抜かす柏木の姿が描かれるにもかかわらず政治家としての彼の姿を見つけないことができないのだ。

彼の昇進が語られるのは紫の上が発病した後、女二の宮との結婚

とあわせて紹介される。

衛門督は中納言になりにきかし。今の御世にはいと親しく思われて、いと時の人なり。身のおぼえまさるにつけても、思ふことのかなはぬ愁はしさを思ひわびて、この宮の御姉の二の宮をなむ得たてまつりてける。
(若菜下 ④ 二一七頁)

ここには、柏木が今上帝の信頼が厚く「時の人」であることが示されている。にもかかわらず、御代替わりの時に彼の昇進が語られることがなかったのはなぜか。それは、彼の興味を引く対象が政治の世界から女三の宮へと移っていただけでなく、女三の宮が暮らす六条院が疑似後宮の体をなしていることで彼が惑わされていたとは考えられないだろうか。

六条院は光源氏の私邸であり、四季を取り入れた「四つの町」から構成され、そこには彼と関係のある女性をそれぞれ住まわせている。春の町に紫の上、夏の町に花散里、秋の町に秋好中宮、冬の町に明石の上、寝殿に女三の宮を配し各自が趣のある生活を送っている。白方氏はこれを「好色的理想によって営為された殿堂」であり「平安貴族の享樂的理想がそこに現出されている」としていた。^(註8)これが光源氏が主であるからこそ営むことの出来た空間世界であることは、周囲の認めるところである。また、秋好中宮が宮中を退出する際の滞在先であり、明石の姫君(後に中宮)に対しても同様の役

割を持つ。二代続けて中宮を後見し、公人の里としての存在意義もある。准太上天皇という地位にあり、政治権力、財力ともに優れている光源氏は、世間からも重んじられている。

その秋、太上天皇になずらふ御位得たまうて、御封加はり、年官、年爵などみな添ひたまふ。かからでも、世の御心にはかなはぬことなけれど、なほめづらしかりける昔の例を改めで、院司どもなどなり、さまことにいつくしうなり添ひたまへば、内裏に参りたまふべきこと難かるべきをぞ、かつは思しける。

(藤裏葉 ③ 四五四頁)

彼が准太上天皇の地位に着くことは、冷泉帝との関係を抜きにしても、皇子という血筋とその政治手腕から違和感なく受け止められただろう。昔の例を引いて「院司」を制定したことも考えると、彼の住む六条院は帝の私的生活空間である後宮に准じた位置づけになつたといえるのではないか。皇女・女三の宮は光源氏の准太上天皇という身分に釣り合った正妻として存在し、皇家の力に支えられている。光源氏の〈私〉邸六条院は、准太上天皇の位と正妻が持ち込む皇家の力によつてその位置づけを宮中に近い空間へと変化したのではないか。元々六条院が疑似後宮の体をなしていたこともあり、六条院は〈私〉でもなく〈公〉でもない、不思議な空間として受け入れられたのである。

先に、柏木の昇進等が語られることのない理由として疑似後宮としての六条院の存在をあげた理由はここにある。今の柏木の関心が女三の宮を得ることにあるのは明らかであり、彼が挑む相手は光源氏である。光源氏と女三の宮が暮らすのが六条院であり、そこはかつての柏木が出世を目指した場所に近似した場所だったので。評価を得られなかったことでの挫折が女三の宮への執着に転化したことはすでに述べた^(註9)。柏木にとつてその執着心を満たそうと考えたことは、かつて政治の世界で人より抜きん出た存在であろうと考えていたことと同じ意味だったのであるまいか。柏木が見ているのは六条院という空間であり、彼の興味・関心はそこにしかない。そのために現実の政治世界での出世が語られることもなく、彼の存在が注目されないのだろう。

また、疑似後宮ともいえる六条院とその主・光源氏の存在は、密通後の柏木に重くのしかかっている。

I 帝の御妻をもとり過ちて、事の聞こえあらむにかばかりおぼえむことゆゑは、身のいたづらにならむ苦しくおぼゆまじ。しかしちじるき罪には当たらずとも、この院に目を側められたてまつらむことは、いと恐ろしく恥づかしくおぼゆ。

(若菜下 ④ 二三〇頁)

II さてもおほけなき心ありて、さるまじき過ちを引き出でて、人

の御名をも立て、身をもかへり見ぬたぐひ、昔の世にもなくや
はありけると思ひなほすに、なほけはひわづらはしう、かの御
心にかかる咎を知られたてまつりて、世にながらへむこともい
とまばゆくおぼゆるは、げにことなる御光なるべし。深き過ち
もなきに、見あはせてまつりし夕のほどより、やがてかき乱
り、まどひそめにし魂の、身にも還らずなりにし

（柏木 ④ 二九四～二九五頁）

Iは女三の宮との密通直後、IIは密通が発覚し死の床についた柏木
が、考え感じていたことである。いずれも、柏木は帝の妻と密通し
たわけではないので自分の行為は深い罪にはあたらないと考えてい
る。その一方で、柏木はIIにおいて生きていくのが苦しいほど気が
咎めている。Iでは自らの罪を深刻に考えなかったにもかかわらず、
IIではその行為を後悔し苦しむのは、六条院が疑似後宮として位置
づけられていたことも影響しているのではないか。

白方氏は柏木の行為を「私通の範囲に属すること」といい、野村
氏は「これは罪の問題でなく、むしろ罰の範疇に属する」といっ
ている。^{（註12）}客観的に見て柏木の行為はかつて光源氏が藤壺中宮と通じ
たような皇家の後継に影響を与えるものではない。光源氏の場合は
密通の結果生まれた皇子が冷泉帝として即位し、皇統に乱れが生じ
た。それに比べ、柏木の場合は薫が生まれるがあくまで臣下の話で

ある。したがって、柏木が冷静に政治家として自らの罪とその結果
を見つめていればこの様な結末にはならなかったはずだ。しかし、
彼は自らの行為を後悔し、光源氏を恐れ死に至る。六条院という宮
中に准じた場であり、柏木の求めた相手がそこに住まう女性として
は最高位の正妻であっただけに彼の政治嗅覚が鈍ったといえるので
はないか。それとも冷静な判断を下すことができないほど女三の宮
に捕らわれていたのだろう。

柏木の恋は女三の宮の姿に魅せられ、光源氏をライバルとして見
たことで狂ってくる。今まで政治家としての彼は有能な人物であり
出世欲のある人物であった。その彼が挑んだのは光源氏を頂点とす
る六条院である。光源氏の准太上天皇という位は彼の住む六条院を、
宮中における後宮に准じた空間として位置づけた。女三の宮は、准
太上天皇の正妻である。したがって、その女三の宮を得るためには、
柏木は六条院という疑似後宮を犯すしかなかった。彼の本来の望み
であった政治の場での出世を忘れてしまった原因の一つをそこに求
めることは可能であろう。

四 未熟な人・柏木

柏木は女三の宮を求めつつも得られず、その姉・女二の宮と結婚

した。女二の宮は身分の低い更衣腹の生まれであったため、彼女に對する柏木は「心やすき方まじりて思ひきこえたまへり」であり「人目に咎めらるまじきばかりにもてなしきこえたまへり」（若菜下

④ 二一七頁）という態度であつた。これは、光源氏の女三の宮に對するそれと同じであるが、そのことに柏木は気付いていない。しかし、彼は朱雀院が「女二の宮のなかなかうしろやすく、行く末長きさまにてもしたまふなること、とのたまはせけるを伝へ聞きし」（若菜下

④ 二一八〜二一九頁）ことを理由に小侍従に女三の宮への手引きを依頼する。自らの女二の宮に對する扱いを鑑みれば、

噂というものの不明瞭さに気がつくはずであるが、逆に柏木は朱雀院の言葉によつて自らの言動を正当化した。さらに篠原昭二氏が「女

三宮がどんなに不幸であろうと、柏木は救済者として失格している

ことは、彼が女二宮の夫であるかぎり自明のことである。」と指

摘する^{（註一七）}ように、現実問題として女二の宮と結婚した今、柏木が女三

の宮を得られる可能性はない。彼の言動には、自分なら女三の宮を不幸にはしないという根拠の無い自信だけしかない。彼の想いが成

就することが何を引き起こすのか、自らをどのような状況に立たせ

るのか、そういった客観的な判断力が柏木には欠けている。だからこそ彼は病床において自分の人生を振り返り、自らの過ちを悔いながらもなぜ発覺したのかと考へてしまうのだ。「などかく、ほども

なくしなしつる身ならん」（柏木 ④ 二九一頁）と自らに問いかけるこの言葉の答えが柏木には解らなかつた。

しかし、柏木と女三の宮の密通はいつかは発覺するものであつた。

その理由として、女三の宮の幼さがあげられるのは当然であるが、柏木の側にもこうした秘め事に對する配慮が欠けていたことが光源氏によつて指摘されている。

まず、手紙を見つけた光源氏は「あないはけな、かかる物を散らしたまひて、我ならぬ人も見つけたらましかば」（若菜下 ④ 二五〇〜二五一頁）と思う。この「あないはけな」という言葉に野村氏は「いうなれば女三宮——柏木を含めて、この事件そのものにおける技術的な稚拙さが指摘されている」として、「源氏の愛情論には、その中心にこの技術論がある」ことに注目している^{（註一八）}。光源氏のいう

「技術論」は、自分と相手の地位や名誉その他様々なことを含めて世間から守るための手段である。まして、柏木の相手は光源氏の正妻なのである。この密通が露見しないように細心の注意を払うのがいわゆる大人の男であろう。しかし柏木にはそうした配慮が少しも感じられない。

いとかくさやかに書くべしや、あたは、人の、文をこそ思ひやりなく書きけれ、落ち散ることもこそと思ひしかば、昔、かやうにこまかなるべきをりふしにも、言そぎつつこそ書き紛ら

はししか、人の深き用意は難きわざなりけり

(若菜下 ④ 二五三)

万が一、人の目に触れた場合を想定して手紙を書く。それは自らの立場を守るものであると同時に、相手の立場を守るのである。しかし、柏木の手紙は一見してそれと解るものであった。

言葉づかひきらきらと紛ふべくもあらぬことどもあり。年を経て思ひわたりけることの、たまさかに本意かなひて、心やすからぬ筋を書き尽くしたる言葉、いと見どころありてあはれなれど
(若菜下 ④ 二五三)

筆跡を変えることもなく自らの心情を綴った手紙は心を打つものではあったが、それを手にした光源氏には女三の宮の懐妊の相手が柏木である証拠になった。手紙の筆跡が誰のものか判別出来ない、もしくはその内容が女三の宮と柏木二人の関係を明らかにするものでなければ、光源氏は彼らに疑いを持つことはあつても二人への対し方は違つていただろう。しかも、この手紙は女三の宮のもとに光源氏が訪れた事を聞いた柏木が「おほけなく心あやまりして、いみじきことどもを書きつづけて」(若菜下 ④ 二四七) 寄越したものである。こうした状況を見れば、この密通発覚は女三の宮よりも柏木の方に原因があつたと考えるべきではないか。

そもそも柏木が女三の宮を求める言動は子どもがおもちゃを欲し

がるような印象を受ける。吉岡曠氏は、密通前の柏木を「夢想家」として「自分の恋を現実化すべき何の現実的な計算も持っていないか」と評している。^(註二七) 実際に彼が計画的に行動したことは、あの猫を手に入れたことだけである。柏木は女三の宮を得ることにのめり込み、密通を犯す。自分の感情を押さえられず、望むままに行動する柏木は人間的に未熟なのだ。この密通が世間に知れ渡らなかつたのは「我ならむ人も見つけたらましな」と光源氏がいうように、彼が最初に発見し他に露見しないように配慮したからである。そこには彼自身の立場を守る必要があつたが、柏木にしてみれば自らの運命をライバルに握られてしまったのだ。

かかることは、あり経れば、おのづからけしきにても漏り出づるやうもやと思ひしだにいとつつましく、空に目つきたるやうにおぼえしを、まして、さばかり違ふべくもあらざりしことどもを見たまひてけむ、恥づかしく、かたじけなく、かたはらいたきに、朝夕涼みもなきころなれど、身も凍むる心地して、言はむ方なくおぼゆ。年ごろ、まめ事にもあだ事にも召しまつし、参り馴れつるものを、人よりはこまやかに思しとどめたる御気色のあはれになつかしきを、あさましくおほけなきものに心おかれたてまつりては、いかでかは目をも見あはせたてまつらむ、さりとて、かき絶えほのめき参らざらむも人目あやしく、

かの御心にも思しあはせむことのいみじさ、などやすからず思ふに、心地もいとなやまして、内裏へも参らず。さして重き罪には当たるべきならねど、身のいたづらになりぬる心地すれば、さればよと、かつはわが心もいとつらくおぼゆ。

(若菜下 ④ 二五七〜二五八頁)

事が光源氏に露見したことを知った柏木の心の揺れである。密通という行為と光源氏への恐れと苦悩。その一方で、先に示したⅠ「しかいちじるき罪には当たらずとも」・Ⅱ「深き過ちもなきに」、とあるようにここでも「さして重き罪には当たるべきならねど」と自らの罪は重くないと考えている。それは「恥づかしく、かたじけなく、かたはらいたき」「身も凍むる心地」「身のいたづらになりぬる心地」と思い悩む彼の姿とは矛盾する。冷静に考えれば、密通に及んだ時点で、それ以前に女三の宮を我が物にと考えた時点でこうした状況は予測できたはずである。しかし、彼は自分と相手を守る手段を講じる様子もなく、ただ引きこもるだけであった。柏木は、やはり人間的に未熟であるといわざるを得ない。野村氏は柏木という人間を「事態の重さというものを、完全に我が内面で受け止めることができないのであった」と評している^(註19)。柏木は光源氏の怒りに対する恐怖しか浮かばず、光源氏への対応しか考えない。相手である女三の宮に気を配る余裕はなかった。

過失を謙虚に反省したり、勇気ある償いの行動を起こすことなく、徒にその責任の一端を他に転嫁して自己弁護しようとする自慰にも似た心理は、自意識の強い、プライドの高い人によく見られることで、柏木がまさにそれであった。

白方氏の指摘する^(註20)ように、彼は行為に対する打開策を何ら示していない。というよりは考えもつかないのである。自らの行為に責任をとることができない柏木は、その未熟さを露呈し、結果死を選ぶしかなかったのだ。

五 おわりに

この密通は当事者だけでなく周囲の人々も巻き込むことになった。女三の宮と柏木、光源氏だけでなく紫の上や夕霧もそれぞれの立場でこの事件の影響を受けている。石田氏は「注意すべきは柏木のこのやうな先入主的な恐れが、必ずしもさうでなくてはならぬ理由は何処にも在しないといふ点である。」と指摘し、その理由として、光源氏が二人の密通に対して敗者の意識を持っていたこと、柏木には光源氏にはない若さを利用する事で状況の異なった展開の可能性をあげている^(註21)。確かに柏木に対して光源氏が敗北感を抱いていたことに、彼は気が付いていない。だからこそ死に至ったといえる。

ここでは柏木という人物に着目し、女三の宮に対する願望がなぜ彼を死に至らしめたかを考えた。その理由として、柏木が自分よりも政治力・財力等において明らかに優れた光源氏をライバル視したことで、疑似後宮として位置づけられた六条院で准太上天皇の正妻を求めたこと、人間的に未熟であったこと、以上三点をあげた。女三の宮を求めたことで柏木の人生は狂ったが、その要因は柏木の内にあったのだ。

註

註1 第三章 第四節 参照

註2 野村精一「源氏物語の人間像 III 柏木」(『源氏物語の創造 増訂版』所収 桜楓社 昭50・10) 一一五頁

註3 石田穰二「女三の宮と柏木について」(『源氏物語論集』所収 桜楓社 昭46・11) 一六頁

註4 今井久代「柏木物語の方法と表現 ―こころとかたちと―」(『國語と國文學』平3・11) 一〇四頁

註5 高橋亨「源氏物語の〈ことば〉と〈思想〉」(『源氏物語の対位法』所収 東京大学出版会 昭53・5) 一二三頁

註6 白方勝「柏木の性格と心理構造」(『源氏物語の探究 第二輯』所収 風間書房 昭51・5) 二三〇～二三一頁

註7 白方氏は註7における一連の記述の中で次のように述べている。

柏木は猫を手に入れる計画を、冷静に立てており、自ら愚かと思う行為にのめり込んでいる。(二三一頁)

註8 註6に同じ 二四八頁

註9 註1に同じ

註10 註6に同じ 二三九頁

註11 註2に同じ 一二二頁

註12 篠原昭二「柏木の情念」(『源氏物語講座 第四巻』所収 有精堂 昭46・8) 一八四頁

註13 野村精一「若菜巻試論 ―人間関係の悲劇的構造について―」(『源氏物語の創造 増訂版』所収 桜楓社 昭50・10) 一九四頁

註14 吉岡曠「柏木の密通と発覚」(『講座 源氏物語の世界(第六集)』所収 有斐閣 昭56・12) 二六六頁

註15 註2に同じ 一二二頁

註16 註6に同じ 二四二頁

註17 註3に同じ 一六頁

第二節 落葉の宮が背負わされたもの

1 落葉の宮の出自

一 はじめに

あはれ何ごとかは人に劣りたまへる。いかなる御宿世にて、やすからずものを深く思すべき契り深かりけむ

(夕霧 ④ 四三六～四三七頁)

人に劣るところのない自慢の娘は、なぜこのような不幸な人生を送るのだろうか。思い通りにならない娘の生き様を、一条御息所は嘆くしかない。

なぜ落葉の宮には夫との死別そして再婚といった一般的に皇女が経験することがない命題が課せられたのか。結論からいえば、その理由は一条御息所自身にあったと考える。彼女の身分の低さとそれにとまなう実家の財力のなさ。そして、彼女が落葉の宮と共にいること。つまり彼女の存在が落葉の宮の不幸を招いたのである。この結論は、いささか乱暴な印象を与えるかもしれない。母親の存在が娘を不幸にしたといっているのだから。しかし母親の身分が低いことで落葉の宮が世間から軽んじられていたのは事実である。

また、物語に描き出された皇女たちの人生を比べてみても、落葉の宮の不幸は避けられないものであったことが解る。そこで、若菜巻以降に登場する五人の皇女についての記述を比較検討してみる。

降嫁した皇女二名は朱雀院女三の宮と今上帝女二の宮。皇女独身を貫く二名は冷泉院女一の宮と今上帝女一の宮。この二組は、ペア同士として共通点を持つが、二組の間に差異がある。そして、このいずれの組にも属さないのが落葉の宮であり、彼女だけが降嫁・死別・再婚という命題を課せられた要因がそこに存在するのではなからうか。

二 降嫁した皇女

まず最初に、朱雀院の女三の宮と今上帝の女二の宮、この二人について見ていきたい。

皇女の結婚という問題がクローズアップされたのが、若菜巻冒頭における朱雀院の苦悩にあることは指摘するまでもない。しかし、女三の宮に関しては彼女の性質に問題があり、そのために結婚による後見人を必要としたのである。

見はやしたてまつり、かつはまた片生ひならんことをば見隠し教へきこえつべからむ人のうしろやすからむに、預けきこえ

や (若菜上 ④ 二七頁)

朱雀院が憂い、降嫁先に苦慮したのは「片生ひ」な宮の不都合なところを表に見せず教え導いてくれる人物が必要だったからだ。「皇女たちの世づきたるありさまは、うたてあはあはしきやうにもあり」

(若菜上 ④ 三二頁)とあるように、朱雀院が基本的に皇女は独身が望ましいと考えていた事は明らかである。しかし、父親から見ても「いと軽々しく、身のもてなしありさま推しはからるる」(若菜上 ④ 三四頁)女三の宮には、しっかりとした後見が必要であることも事実であった。彼女の乳母も「皇女たちは、独りおはしますこそは例のことなれど、さまざまにつけて心寄せたてまつり、何ごとにつけても御後見したまふ人あるは頼もしげなり。」(若菜上 ④ 二九頁)と、皇女独身の慣例を示しながらも後見人の必要性を説いている。つまり、彼女は自分にふさわしい後見人の元に降嫁するしかなかったのである。

では、後見人・光源氏は彼女にとってどのような存在であったのだろうか。まず、彼は臣下に降ったとはいえ皇子であり、現在は准太上天皇という位にある。律令制のなかで皇女の有配偶者が15%、そのうち配偶者の半数が天皇であつたことを考えれば、皇女の結婚相手としての条件は満たしているといえよう。さらに二人の年齢差、そして彼が紫の上を育てたという実績は、「親ざまに」という女三

の宮側の希望を十分に満たしている。

「人の答へは、事に従ひてこそは思し出でめ。隔ておきてなもてなしたまひそ」と、こまかに教へきこえたまふ。

(若菜上 ④ 八八頁)

ただ明け暮れは、いはけたる遊び戯れに心いれたる童べのありさまなど、院はいと目につかず見たまふことどもあれど、ひとつさまに世の中を思しのたまはぬ御本性なれば、かかる方をもまかせて、さこそはあらまほしからめと御覧じゆるしつつ、いましめととのへさせたまはず。正身の御ありさまばかりをば、いとよく教へきこえたまふにすこしもてつけたまへり。

(若菜上 ④ 一三四頁)

ここにあげた例からも解るように、彼は、女三の宮に嗜みや心構えを教えている。そのうえ、柏木との密通も表沙汰にならないよう配慮し、生まれてきた薫を自分の子として育てた。まさに「片生ひならんことをば見隠し」続けたのである。これら一連の光源氏の言動は、女三の宮本人の皇女としての対面を保つという点においてほぼ完璧であつたといつて良い。

一方、経済力においても光源氏は皇女の後見人として最適であつた。

院の帝は、この御処分の宮に住み離れたまひなんも、つひのこ

とにためやすかりぬべく聞こえたまへど、「よそよそにてはおぼつかなかるべし。明け暮れ見たてまつり聞こえうけたまはらむこと怠らむに、本意違ひぬべし。げに、ありはてぬ世いくばくあるまじけれど、なほ生けるかぎりの心ざしをだに失ひはてじ」と聞こえたまひつつ、かの宮をもいとこまかにきよらに造らせたまひ、御封のものども、国々の御庄、御牧などより奉る物ども、はかばかしきさまのは、みなかの三条宮の御倉に収めさせたまふ。またも建て添へさせたまひて、さまざまの御宝物ども、院の御処分に数もなく賜りたまへるなど、あなたさまの物はみなかの宮に運びわたし、こまかにいかめしうしおかせたまふ。明け暮れの御かしづき、そこらの女房のことども、上下のはぐくみは、おしなべてわが御あつかひにてなむ急ぎ仕うまつらせたまひける。

（鈴虫 ④ 三七八〜三七九頁）

日常生活における様々な費用を光源氏が負担し、女三の宮の御封からの収入や朱雀院からの相続の品々はすべて倉に納めて保管している。彼女の財産をいっさい使わずすべてを蓄えたことで、後の彼女と薫の生活を保障するだけの財力を与えることができた。

女三の宮の降嫁は、彼女の将来にわたる生活基盤を盤石に整えたという点においては成功だったといえるだろう。経済的な後見もなく、相続する財産も少ないために夕霧と再婚することでの後の生

活の安定を得るしかなかった落葉の宮と比べれば、女三の宮の降嫁が成功例であることは明らかである。

次に、今上帝の女二の宮について見てみたい。女二の宮を降嫁させることに決めた帝は、かつて女三の宮の降嫁先を決める際にも次のような発言をしている。

さし当たりたるただ今のことよりも、後の世の例ともなるべきことなるを、よく思しめしめぐらすべきことなり。人柄よろしとても、ただ人は限りあるを、なほ、しか思し立つことならば、かの六条院にこそ、親ざまに譲りきこえさせたまはめ

（若菜上 ④ 三八〜三九頁）

この発言が、朱雀院の決断を促したことは事実である。帝は朱雀院の決断が「後の世の例ともなるべきこと」そして皇女の相手として臣下の者は望ましくないことを主張し、光源氏が適任であると述べたのだ。彼は現在の女三の宮の状況を鑑みて、あの時の自分の発言が間違いでなかったと確信している。

帝に降嫁を決意させたのは、女三の宮の「その昔の御おぼえ衰へず、やんごとなきさまにてはながらへたまふ」（宿木 ⑤ 三七六頁）様子である。「源中納言の人よりことなるありさまにてかくよろづを後見たてまつる」（宿木 ⑤ 三七六頁）事が前提ではあるが、人に軽んじられることになったかもしれない宮が、身分にふさ

わしい尊敬と待遇を受けている。その現実が、帝にとっては重要であつたのだ。後見をもたない皇女の生き方として、女三の宮のあり方を理想としたのである。さらに、降嫁先として考えている薫はすでに実質的に母宮の後見をしており、血筋においても准太上天皇と皇女の子として認識されている。こうした状況をふまえれば、帝が薫を女二の宮の降嫁先として選ぶ事は当然の結果であつたといえよう。女三の宮に比べ、女二の宮の降嫁先が問題なく決まつた印象があるのは、それぞれの父親の性格の違いもあるが、帝の目に女三の宮という成功例が見えていたからこそその決断だつたからに違いない。

三 降嫁する事情

さて、先述した二人の皇女の共通点であるが、一つは母親が女御であること。もう一つは、はかばかしい後見がないことである。

藤壺と聞こえしは、先帝の源氏にぞおはしましたける、まだ坊と聞こえさせしとき参りたまひて、高き位にも定まりたまふべかりし人の、とりたてたる御後見もおはせず、母方もその筋なくものはかなき更衣腹にてもしたまひければ、御まじらひのほども心細げにて、大后の、尚侍を参らせたまつりたまひて、

かたはらに並ぶ人なくもてなしきこえたまひなどせしほどに、気おされて、帝も御心の中にいとほしきものには思ひきこえさせたまひながら、おりさせたまひにしかば、かひなく口惜しくて、世の中を恨みたるやうにて亡せたまひにし

（若菜上 ④ 一七―一八頁）

そのころ、藤壺と聞こゆるは、故左大臣殿の女御になむおはしける、まだ春宮と聞こえさせし時、人よりさきに参りたまひにしかば、睦ましくあはれる方の御思ひはことにものしたまふれど、そのしるしと見ゆるふしもなくて年経たまふに、中宮には、宮たちさへあまたこらおとなびたまふめるに、さやうのことも少なくて、ただ女宮一ところをぞ持ちたてまつりたまへりける。わがいと口惜しく人に圧されたてまつりぬる宿世嘆かしくおぼゆるかはりに、この宮をだにいかで行く末の心も慰むばかりにて見たてまつらむと、かしづききこえたまふことおろかならず。御容貌もいとをかしくおはすれば、帝もらうたきものに思ひきこえさせたまへり。女一の宮を、世にたぐひなきものにかしづききこえさせたまふに、おほかたの世のおぼえこそ及ぶべうもあらね、内々の御ありさまはをさをさ劣らず、父大臣の御勢ひいかめしかりしなごりいたく衰へねば、ことに心もとなきことなどなくて、さぶらふ人々のなり、姿よりはじ

め、たゆみなく、時々につけつつ、ととのへ好み、いまめかし
くゆゑゆゑしきさまにもてなしたまへり。

十四になりたまふ年、御裳着せたまつりたまはんとて、春
よりうちはじめて、他事なく思しいそぎて、何ごともなべてな
らぬさまにと思しまうく。いにしへより伝はりたりける宝物ど
も、このをりにこそはと探し出でつつ、いみじく営みたまふに、
女御、夏ごろ、物の怪にわづらひたまひて、いとはかなく亡せ
たまひぬ。(略)まことには、御母方とても、後見と頼ませた
まふべき伯父などやうのはかばかしき人もなし。わづかに大蔵
卿、修理大夫などいふは、女御にも異腹なりける。

(宿木 ⑤ 三七三〜三七五頁)

先にあげたのは、女三の宮の母女御についての記述。後者は女二の
宮の母女御についての記述である。双方とも藤壺女御と呼ばれ春宮
時代に入内しているが、後宮での立后争いには敗れ、自らの身の不
遇を恨んだ末に亡くなっていることが解る。

もう少し詳しく見て見よう。女三の宮の母女御は源氏として臣籍
降下した皇女であったことから、立后してもおかしくない尊い血筋
であった。しかしその後見としてはかばかしい人物がいなかったこ
ともあり、女御自身は后になれず世の中を恨んだまま亡くなった。
一方、女二の宮の母女御についてはもう少し具体的に記載されてい

る。彼女は左大臣の娘であり、誰よりも早く入内したが、後から入
内した明石女御の勢いに押されてしまった。しかも、明石女御は皇
子も含め何人もの子どもに恵まれたが、彼女は皇女を一人授かった
だけであった。だが、彼女はその皇女を大切に育て、裳着のために
里方の宝物を探しては準備を怠らなかった。ところが、娘の裳着を
見ることなく亡くなってしまう。女御の父は左大臣であったが、父
親以外の一族があまりはかばかしくない様子であったことは「父大
臣の御勢ひいかめしかりしなごりいたく衰へねば」や「御母方とて
も、後見と頼ませたまふべき伯父などやうのはかばかしき人もな
し。」ということから明らかであろう。入内当初に比べ、落ちぶれ
ていく実家では女御としての彼女の体面を守ることも難しかったの
ではないか。おそらくは、女御が探し出した宝物以外、実家には財
産となるべき物がなかったのではないかと推察できる。そして彼女
の死は一族と帝のつながりを絶つことになり、衰退していった実家
に女二の宮の後見を行うだけの財力がなかったことは、想像に難く
ない。

以上のように、降嫁した二人の姫宮は、女御腹ではあったが後見
となるべき女御の一族の地位が低く、財力もないことが解る。つま
り、皇女の生活基盤を維持することができないのである。さらにい
えば、皇女を庇護する母女御も亡くなっており、父親以外に頼るべ

き人物がいない。こうした状況を踏まえて、父親たちが皇女の後見人を選び、降嫁の手はずを整えたのだ。しかし注意すべきは、彼女たちの降嫁相手は父親が主体的に選び決断している点である。朱雀院は逡巡の末、今上帝は明快な意志を持って皇女の相手を選んでいく。そのために、降嫁後も彼女たちに対する援助が途切れることはない。彼女たちは皇家の力を背景に、ふさわしい後見人を得ることで皇女としての体面を保ったまま生きていくことができたのだ。

四 独身を貫く皇女

次に、皇女独身を貫く二名、冷泉院の女一の宮と今上帝の女一の宮について見てみたい。

まず、冷泉院の女一の宮である。

故致仕の大殿の女御ときこえし御腹に、女宮ただ一ところおはしけるをなむ限りなくかしづきたまふ

(匂兵部卿 ⑤ 二二頁)

柏木の妹・弘徽殿女御を母に冷泉院のただ独りの皇女として大切に育てられている。弘徽殿女御の実家は大臣家であり、現在は紅梅大納言が後を継いでいて、さらに高い地位を狙える一族である。彼らは、かつて光源氏を婿に迎え傳くだけの財力と権力を持ち、後には

その光源氏と権力を争っている。したがって、弘徽殿女御とその皇女の生活を支えるだけの財力は十分備えていたはずである。

一方、今上帝の女一の宮は明石女御の娘であり「女一の宮を、世にたぐひなきものにかしづきこえさせたまふ」(宿木 ⑤ 三七三〜三七四頁)とあるように、帝の皇女にふさわしい待遇を受けている。明石女御の兄は夕霧であり、彼の財力と地位は改めてここで述べる必要もないだろう。帝と中宮を両親に持ち、当代一の権力者・夕霧を後見とする女一の宮の将来に不安は感じられない。

以上のように、この二名に共通するのは、母が女御で健在であること。そして、母方の一族が高い地位にあり財力があることがあげられる。皇女として独身を貫くことは、両親が健在であるだけでなく、後見してくれる一族の権力・財力に支えられてこそ実現できるのだ。

五 落葉の宮の立場

これまでは、二組の皇女について簡単に整理した。では、落葉の宮と彼女たちにはどのような差異があっただろうか。

まず、落葉の宮の降嫁は父・朱雀院が主体的に決めたものではなく、かつて光源氏を婿に迎え傳くだけの財力と権力を持ち、後には

はじめより、母御息所はをさをさ心ゆきたまはざりしを、この大臣のゐたちねむごろに聞こえたまひて、心ざし深かりしに負けたまひて、院にも、いかがはせむと思しゆるしける

(柏木 ④ 三十一頁)

はじめつ方より、をさをさうけひききこえざりし御事を、大臣の御心むけも心苦しう、院にもよろしきやうに思しゆるいたる御気色などはべしかば、さらばみづからの心おきての及ばぬなりけりと思ひたまへなしてなむ見たてまつりつる

(柏木 ④ 三三〇頁)

彼女の降嫁に関しては、

・ 一条御息所は反対だった。

・ 柏木の妻に皇女を賜ることを彼の父・致仕大臣が強く望んでいた。

・ 致仕大臣の要望を聞き入れる形で朱雀院はこの降嫁を決めた。

以上の三点が二度にわたって提示されている。つまり、この降嫁は致仕大臣家が望んだもので、落葉の宮の両親から提示されたものではないこと、さらに母・一条御息所が降嫁自体に反対していたことを強く印象づけるものである。

一条御息所がこの結婚に反対していたのは、彼女が「皇女たちは、おぼろけのことならで、あしくもよくも、かやうに世づきたまふこ

とは、心にくからぬことなり」(柏木 ④ 三三〇～三三一頁)という考えの持ち主であったからである。皇女は独身を通すもの。これが一条御息所の理想であり望みなのだ。皇女独身を通した二名については先に述べたが、独身を貫くためには母方の権力と財力が必要不可欠であった。では、一条御息所の実家はどうか。夕霧巻で彼女の葬儀の世話をしたのは甥の大和守だった。彼女の一族の代表者の地位が大和守であることは、彼女が「下臈の更衣」といわれる低い身分であったことを証明している。さらに、大和守も財力がなかったことは、次の言葉に明らかである。

心細く悲しき御ありさまを見たてまつり嘆き、このほどの宮仕は堪ふるに従ひて仕うまつりぬ。今は、国のこともはべり、まかり下りぬべし。宮の内のことも見たまへ譲るべき人もはべらず、いとたいだいしう、いかにと見たまふるを、かくよろづに

思し営む

(夕霧 ④ 四六二頁)

一条御息所亡き後帰郷を洩る落葉の宮に対して、大和守は任国のこともあり世話をすることは難しいと告げている。大和守以外に彼女の世話が出来る人物がいらないということは、一条御息所の実家に力がなかったことの何よりの証拠ではあるまいか。一条御息所の望みは、彼女の立場では実現不可能なものだったのだ。

さらに、朱雀院が皇女二人を降嫁させたことが落葉の宮に不利益

をもたらしている。彼は女三の宮の降嫁先については自ら決定を下したが、落葉の宮の場合は相手の一族に押し切られる形で認めている。降嫁先決定に至る経緯の差は、彼女達に対する援助の仕方にも明らかである。

女三の宮と落葉の宮の待遇には最初から大きな差が生じていたのだ。例えば、女三の宮に対しては、度々便りを送ることで光源氏に自分の存在を意識させている。帝は彼女を二品に昇進させることで御封を増やし、その地位と財力を支えている。女二の宮の場合も、降嫁前に帝は薫を昇進させ、その後も彼女を気遣う様子が散見される。しかし、落葉の宮に対しては、朱雀院や帝が配慮した様子は一向に読み取ることが出来ない。その理由として考えられるのが、一条御息所の存在である。落葉の宮、女三の宮、女二の宮。この三名が、はかばかしい後見を持たないことは先に述べた。ただ一つ異なるのが、落葉の宮には母親が健在であったということなのだ。

朱雀院が、他の皇女たちに比べ母の亡い女三の宮を不憫に思って気を使う様は、春宮への依頼内容にも見受けられる。降嫁後の彼女に対する様々な配慮も、母の亡い不憫さから生じたものであるうことは想像に難くない。女二の宮の場合も母を亡くし、はかばかしい後見人がいないことを憂えたからこそ、帝は降嫁を決めたのである。

以上のことから次のように考えることができるのではないか。た

とえば、一条御息所がすでに亡くなっていたとすれば、落葉の宮はどのような人生を送ったであろうか。少なくとも、父院からの援助や配慮を今以上に受けることができたとは考えられないだろうか。女三の宮の「片生ひ」な性質と尊い血筋が、彼女に対する朱雀院の配慮を引き出すことは変えられない事実である。しかし、更衣腹とはいえ、彼女と同じく後見を持たなければ、落葉の宮もまた何らかの配慮を得て降嫁することが出来たのではないか。女三の宮ほど幼くもない彼女ならば、今上の女二の宮に近い人生を送ることができたのではないか。このように考えれば、落葉の宮の不幸の要因が一条御息所の存在にあることは明らかである。

六 落葉の宮と柏木

以上、他の二組四人の皇女と落葉の宮の境遇を比べることで、彼女の不幸の要因を一条御息所の存在に求めた。では、一条御息所自身は、この結婚をどのように感じ、考えていたのだろうか。

彼女が「皇女は独身を通すもの」という考えの持ち主で、この結婚に反対していたことはすでに述べた。そして柏木亡き後、一条宮を訪れた夕霧に対して次のように述べている。

いとうれしう浅からぬ御とぶらひのたびたびになりはべるめる

を、ありがたうもと聞こえはべるも、さらばかの御契りありけるにこそはと、思ふやうにしも見えざりし御心ばへなれど

(柏木 ④ 三三一頁)

度々の見舞いを感謝するが、それが柏木との約束によるものであることを彼女は知っている。しかし、生前の柏木からは自分達にこのような配慮は感じられなかったといっている。

実際、柏木と落葉の宮の関係は次のようなものであった。

人目に咎めらるまじきばかりにもてなしきこえたまへり。

(若菜下 ④ 二二七頁)

女宮をば、かしこまりおきたるさまにもてなしきこえて、をさをさうちとけても見えたてまつりたまはず、わが方に離れゐて、いとつれづれに心細くながめゐたまへる

(若菜下 ④ 二二二頁)

彼は、彼女を表面上怪しまれない程度に正妻として扱い、実際はうちとけることはなかったようだ。当然のことながら、一条御息所はこのような扱いに不満を抱いていたのだろう。

故督の君の御心ざまの思はずなりし時、いとうしと思ひしかど、おほかたのもてなしは、また並ぶ人なかりしかば、こなたに力ある心地して慰めしだに世には心もゆかざりし

(夕霧 ④ 四二五頁)

おそらく、御息所の語るこの状況が柏木と落葉の宮の関係を表していると考えていいだろう。皇女として正妻として大切に扱ってはくられたが、そこに彼の心はなかった。一条御息所が心外に思うほど、柏木は落葉の宮に向き合っていないなかったのである。

こうしたすれ違いが、降嫁当初から芽生えていたことはすでに述べた。女三の宮の降嫁を望み、彼女をあきらめきれない柏木にとって、「下臈の更衣腹」の皇女は「心やすき方」であった。柏木の女三の宮に対する執着が、落葉の宮を遠ざけたことは事実であろう。その一方で、彼女が「人柄も、なべての人に思ひなずらふれば、けはひこよなくおはす」であるにもかかわらず、軽んじられていたのは、皇女腹の女三の宮と異なり「下臈の更衣腹」であることが大きく影響していたことは否めない。

さて、今まで見てきたところによると一条御息所は「皇女とはこあるべき」という考えを持った人物である。彼女は、娘が皇女であることを誇りに思うとともに、皇女らしく扱われることを強く望んでいた。皇女という身分に執着する彼女だからこそ、皇女らしくらぬ扱いに対して敏感だったのではないか。一条御息所は、柏木の死後から彼女自身の死に至るまでの間様々に嘆き悲しんでいるが、そこには彼女の皇女という身分に対するこだわりが強く感じられるのだ。

しかし、先に述べたように柏木は彼女が思うほど落葉の宮を皇女として敬うことはなかった。また、柏木の両親も彼女たちを軽く見ていたのである。

世の事として、親をばなほさるものにおきたてまつりて、かかる御仲らひは、とあるをりもかかるをりも、離れたまはぬこそ例のことなれ、かくひき別れて、たひらかにものしたまふまでも過ぐしたまはむが心づくしなるべきことを。しばしここに

かくて試みたまへ
(若菜下 ④ 二八二頁)

病の柏木を自分たちのもとに引き取るという彼の両親に対して、御息所は夫婦のつながりを説く。妻が皇女であることを差し引いても、彼女の主張は正当なものである。にもかかわらず、彼の両親は柏木を連れ帰ってしまう。この強引な態度は、落葉の宮を皇女として扱いつつもその実軽く見ていたことの証しといえよう。

結局、一条御息所には「下藤の更衣」という言葉が常についてまわる。そして、彼女の娘も皇女でありながら母親の身分の低さから軽んじられていたのだ。本人の力では何ともしがたい「下藤の更衣」という立場。一条御息所はそこから抜け出すことができない。そして、「下藤の更衣」である彼女が落葉の宮といることで、母親の立場が彼女の人生に影響を及ぼしたといえよう。

親子の御仲と聞こゆる中にも、つゆ隔てずぞ思ひかはしたまへ

る。よその人は漏り聞けども親に隠すたぐひこそは昔の物語にもあめれど、さはた思されず。
(夕霧 ④ 四一四頁)

落葉の宮と一条御息所の二人は、隔てることもなく秘密もなく暮らしていた。親密な関係にある親娘の不幸の原因が「下藤の更衣」という御息所自身の立場にあるという皮肉な運命もまた『源氏物語』に描かれる女性の悲しさの一面なのだろう。

註

註1 今井源衛氏は、「平安期初頭より一条朝以前までの皇女数と、その中の配偶者数一覧」の表を作成し、皇女降嫁と律令制の關係について詳細に調査し検討を加えている。「女三宮の降嫁」一三〇～一三二頁(『改訂版 源氏物語の研究』所収 未来社 昭56・8)

2 柏木との結婚

一 はじめに

女ばかり、身をもてなすさまところせう、あはれなるべきものはなし
(夕霧 ④ 四五六頁)

紫の上に女性の身の処し方の難しさを考えさせたのは、落葉の宮であった。皇女という身分ではあったが、彼女は柏木に降嫁し、夫に先立たれてしまう。その後、彼女のもとを頻繁に訪れる夕霧との関係を世間では様々に噂したのである。噂は、まめ人として知られていた夕霧に対してではなく、未亡人の彼女を非難するものが多かった。そこに紫の上は皇女の生きがたさを見て彼女が養育する女一の宮の将来を憂えたのであった。後に、その女一の宮は独身のままその身分にふさわしい生活を送り、異母妹である女二の宮は後見がないことを理由に父・帝によって薫への降嫁が決められた。

落葉の宮は、朱雀院の皇女である。朱雀院の皇女といえ、まず女三の宮を思い浮かべるだろう。若菜上巻における朱雀院の婿選びは、皇女独身を良しとしながらも、女三の宮の幼い性質を危惧した父親が後見人の役割を夫に託すことにしたこと起因している。その結果、女三の宮は光源氏に降嫁が決まり、彼女を妻に望んだ柏木

は、数年後彼女の姉・落葉の宮を妻に迎えるのである。その落葉の宮は夫亡き後に出家を望んだが、既に女三の宮が出家していることを理由に朱雀院に止められる。さらにいえば、女三の宮は密通という不義を犯したにもかかわらず、その罪が世間に露見することはないが、落葉の宮は実際に成立していない夕霧との婚姻関係を取りざたされてしまう。

後藤祥子氏は「皇女の結婚という題材は、女三宮と女二宮との組み合わせによって完結する。」と述べている^(註1)。同じ朱雀院の皇女でありながら、紫の上に皇女の生きがたさを痛感させる要因となった落葉の宮。彼女の人生は、柏木に降嫁したことから始まる。この結婚は、彼女にとってどういう意味があったのだろうか。

二 落葉の宮の事情

そもそも、朱雀院が皇女の結婚に消極的であった事は「皇女たちの世づきたるありさまは、うたてあははしきやうにもあり」(若菜上 ④ 三二頁)と語っていることから明らかである。それでも朱雀院が女三の宮を降嫁させようと考えたのは、引き続き語られる後見のない女性の生きがたさと、彼女の幼い性質を憂慮したからであった。彼が望んだのは、女三の宮を守り育ててくれるしつかりし

た後見だったのだ。

実は、朱雀院には「女宮たちなむ四ところおはしましける」事が、若菜上巻で初めて示されている。この四人の皇女のうち、その後も語られるのは女三の宮と落葉の宮であり、他の二皇女について語られることはない。そして、朱雀院が女三の宮ほど他の三皇女に対して関心を寄せない理由のひとつが、後見の有無であることは春宮への依頼からも見てとれる。女三の宮以外の皇女には後見があり、後見があれば皇女は結婚せずともよいというのが朱雀院の考えであった。しかし、この後見に対する朱雀院の認識が現実在即したものでなかったことは、その後の落葉の宮の人生を見れば明らかである。

落葉の宮の後見として示されるのは、母である御息所だけであった。その母が死んだ後、彼女の後見を頼める人物も母の甥・大和守だけだった。しかし大和守では、彼女の後見には成り得ない。つまり、母の死によって落葉の宮は後見を失ったのであり、女三の宮と変わらぬ境遇になった。朱雀院が出家を考えた時点での女三の宮と落葉の宮との違いは、母親が健在か否かという事だけで、皇女としての体面を保ちながら人生を送るために必要な後見が存在しないという点では二人の間に差異は見られない。落葉の宮も、柏木に降嫁することによって後見を得たことになるのだ。彼女が柏木に、女三の宮が光源氏にとその降嫁先が別れたのは、女三の宮が「先帝の源氏

にぞおはしましける」藤壺を母とし、落葉の宮が「下臈の更衣腹」であつたことも影響している。同じ皇女でありながら、その出自の違いが彼女達の人生を異なる方向に導いたのである。

三 柏木の事情

元来、朱雀院は皇女は独身を通すべきだと考えていたことから、女三の宮以外の皇女を結婚させるつもりはなく、母である御息所も元々この結婚には反対であつた。その落葉の宮が柏木のもとに降嫁した理由が、彼の父・太政大臣の懇願によるものであつたことはすでに述べた。

柏木は、「皇女たちならずは得じ」と独身を通し、女三の宮の婿選びの際には、父だけでなく叔母の朧月夜を通して彼女の降嫁を朱雀院に願い出ていた。柏木個人だけでなく、太政大臣家のためにこの降嫁実現に取り組んでいたといえる。しかし、柏木は「まだ、年いと若くて、むげに軽びたるほどなり」という理由で婿候補からはずされてしまう。その後柏木は独身が続けていたが、父・太政大臣が朱雀院に懇願して決まったのが落葉の宮の降嫁であつた。皇女を妻にという彼の望みはとりあえず叶ったのである。

しかし、柏木は落葉の宮では満足しなかった。

下臈の更衣腹におはししなければ、心やすき方まじりて思ひきこえたまへり。
(若菜下 ④ 二二七頁)

降嫁した落葉の宮は、その出自の低さから柏木に軽んじられていた。彼が望んだ女三の宮は、尊い血筋の女性であった。皇女といっても、母の身分によって序列化されるのは仕方がないことであり、「下臈の更衣腹」の落葉の宮は、本人に関係なく軽い扱いを受けるのである。森一郎氏は、「下臈の更衣腹」で始まる一文が「柏木の皇女願望が限らない高貴性」であることを示すものとし「皇女であるがゆえに一応満足しつつも女三の宮に比して高貴性に遜色のある女二の宮に心傾けえないのである。」と述べている。^(註2) また、宮川葉子氏は次のように指摘している。^(註3)

女三宮の姉であるが、「下臈の更衣」一条御息所を母とする宮の出自が、女御所生の三宮に劣ることは柏木の劣等感を増幅、女三宮への限らない幻影を創らせ満たされぬ思いに嘆息させる。

確かに、柏木は女三の宮降嫁に関してはその実現に向けて熱心に働きかけたが、降嫁先が光源氏に決まって後は、自らの結婚に関して何らかの行動を起こした様子はない。彼が求めたのは、尊い血筋の朱雀院鍾愛の皇女だけだった。そして、宮川氏のいうように女三の宮より血筋の劣る落葉の宮を妻とした柏木は、妻を見る度に女三

の宮の婿候補からはずされた自分を改めて意識したのだろう。

もろかづら落葉をなににひろひけむ名は睦ましきかざしなれども
(若菜下 ④ 二三三頁)

柏木は、彼女との結婚をこの様に詠んだ。ここには皇女を見下す柏木の姿が浮かび上がるとともに、この「落葉」が彼女をさして落葉の宮と呼ばせたのだ。つまり、女二の宮は落葉の宮と呼ばれることで、常に見下された皇女であることを表し続けることになり、それが彼女の人生を方向付けたと言えるだろう。彼は、落葉の宮を表向きは丁重に傳いながらもうち解けることはなかった。同じ家にいるも自分の部屋に閉じこもり、夫婦らしい会話もない。落葉の宮は、母の身分の低さのために彼女自身に目を向けてもらうことができずに淋しい結婚生活を送っているのだ。

一方、太政大臣は落葉の宮が行う朱雀院の御賀を取り仕切り「いかめしく、こまかに、もののきよら、儀式を尽くしたまへりけり」(若菜下 ④ 二六六頁)とすることで、自分たちの力を世間に見せつけた。嫡男の妻が皇女であることを最大限に活用したのだ。だからといって、彼女を皇女として敬っていたわけではない。それは、柏木が病に寝付いた際の彼らの行動に表れている。

柏木の病が重いことを心配して、両親は自邸に引き取ろうとする。「よそよそにていとおぼつかなし」(若菜下 ④ 二八一頁)とい

う彼らの心配は、裏をかえせば妻である彼女を信用していないということだ。

先に示したように、夫婦は離れるべきではないという、御息所のまっとうな意見も、柏木の母の恨み言の前に聞き入れられることはなかった。こうした太政大臣家の振る舞いについて、森一郎氏は夫婦関係を見捨てた自己中心的な「宮を軽んじた行為」だとし、白方勝氏は「落葉宮にとっては実質上の離婚」であると指摘している。^(註5)

彼らは「下臈の更衣腹」の宮を軽んじているためにこの様な態度がとれたのである。その結果、皇女という身分のために落葉の宮は太政大臣邸を訪ねることが出来ず、彼女は病の夫を看病することも、看取することも出来なかった。太政大臣は、自らが望んだ落葉の宮を権勢を誇るためには利用したが、彼女の妻としての心情は無視したのである。

四 一条御息所の事情

さて、先にも述べたように御息所はこの結婚に反対であった。彼女は、皇女はよほどのことがない限り結婚すべきではないと考えていたが、大臣と院の意向により決まったことなので無理矢理自分自身を納得させたのである。彼女が皇女独身主義を主張するのは、朱

雀院と同様の考えに基づいている。後藤祥子氏は次のように指摘している。^(註6)

朱雀院にとつての女三の宮と、御息所にとつての女二の宮とは、この場合全く等価であり、内親王という身分を誇り高く保つ独身主義が最上の生き方として標榜されるのも、二人のそれぞれのいとおしみ方に対応するものであろう。

御息所が「氣高うもてなしきこえむと思いたる」(夕霧 ④ 四二〇頁)と、皇女という身分を強く意識して落葉の宮を遇していることは、彼女の言動に明らかである。例えば、柏木亡き後の一条宮は「うち荒れたる心地すれど、あてに氣高く住みなしたまひ」(横笛 ④ 三五三頁)ており、小野でも「はかなき小柴垣もゆゑあるさまにしなして、かりそめなれどあてはかに住まひなしたまへり。」(夕霧 ④ 三九八頁)とあるように、皇女にふさわしい住まいとして気を配っている。

その御息所にとつて、女三の宮の嬪として適任ではないと退けた柏木に娘を縁づけられたことは不本意であった。御息所は、その昔「いまめかしうかどありとは言はれたまひし更衣」(柏木 ④ 三三三頁)であった。彼女は皇女を産むことで御息所となったが、世間は「下臈の更衣」という目でしか見ていなかったのである。

しかし、彼女の娘は皇女なのだ。落葉の宮の夫としての柏木に対

する御息所の評価は厳しい。

故督の君の御心ざまの思はずなりし時、いとうしと思ひしかど、おほかたのもてなしは、また並ぶ人なかりしかば、こなたに力ある心地して慰めしだに世には心もゆかざりし

(夕霧 ④ 四二五頁)

御息所は、柏木の冷たさを恨み、表向き大切に扱ってくれることは一応評価しつつも満足はしていない。一方「女二の宮のなかなかうしろやすく、行く末長きさまにてもものしたまふなること、とのたまはせけるを伝え聞きし」(若菜下 ④ 二一八～二一九頁)という

様子から、朱雀院は彼の表面上だけの取り繕いを見て満足していることがわかる。そこには、女三の宮程彼女のことを気にかけない朱雀院の姿が示されている。白方勝氏は、この結婚を「不自然」であり「安易に運ばれすぎた」と述べ、「一度は婿がねからはずした柏木に、婿選びも行わずに二宮を降嫁させた」理由を「二宮が次愛の娘であった」ことと「下臈の更衣腹」の娘であったことだと指摘している。^(註7)落葉の宮の出自の低さは、父親でさえも彼女を軽く見る要因になっていたのである。

五 降嫁の事情

落葉の宮については、彼女が「下臈の更衣腹」であることが繰り返し述べられており、彼女の人生に大きな影響を与えていることは明らかである。その一方で、彼女の人となりについて語られることは少ない。なぜならこの結婚で、柏木を含めた太政大臣家が必要だったのは皇女という身分であり、彼女の人となりは考慮する必要がなかったからある。また、結婚後も彼女は表向きの後見を柏木から受けるとともに、最大の庇護者である母・御息所が常に側に居ることとで二重に庇護されており、彼女自身が表面に出てくる必要がなかったために言及されることもなかったのだ。

落葉の宮については、わずかに箏と御手については言及されている。例えば、箏は「院の御前にて、女宮たちのとりどりの御琴ども試みきこえたまひしにも、かやうの方はおぼめかしからずものしたまふとなむ定めきこえたまふめりし」(横笛 ④ 三五三～三五四頁)と御息所が述べていることから、かなりの腕であったと考えていいだろう。実際、彼女の箏の「奥深き声」に、夕霧は心を惹かれている。

また、御手については夕霧が次のような感想を述べている。

・御息所の代わりに落葉の宮が書いた文について

いとをかしげにてただ一行などおほどかなる書きざま、言葉もなつかしきところ書き添へたまへる(夕霧 ④ 三九七頁)

・小少将がよこした彼女が書いたものについて

古言など、もの思はしげに書き乱りたまへる、御手なども見たころあり。
(夕霧 ④ 四五五頁)

また、落葉の宮が夕霧の娘・六の君の代わりに書いた文は「あてやかにをかしく書きたまへり」(宿木 ⑤ 四一一頁)と匂宮が評している。光源氏が、女三宮の手を「御手、げにいと若く幼げなり。さばかりのほどになりぬる人はいとかくはおはせぬものを」(若菜上 ④ 七二頁)と感じたことと比べれば、彼女達の年齢差を考慮しても落葉の宮が優れていることは明らかである。

その一方で、妻として落葉の宮を敬うことも愛することもなかった柏木は、彼女の性質を批判することもなかった。批判する程彼は彼女と真剣に向き合っていなかったとも考えられる。柏木が落葉の宮自身のこと言及するのは次の二点である。

人柄も、なべての人に思ひなずらふれば、けはひこよなくおはすれ
(若菜下 ④ 二一七頁)

うちながめて、箏の琴なつかしく弾きまさぐりておはするけはひも、さすがにあてになまめかしけれ

(若菜下 ④ 二三二頁)

つまり、柏木は落葉の宮を一人の女性として見れば、皇女という身分にふさわしい女性であると思うが、女三の宮と比べるとやはり劣

ると感じているのだ。しかし、柏木の女三の宮に対する評価は表面的なものだけであり、光源氏が隠している彼女の幼さや至らなさを知らない。彼は、表面上の美しさや身分にのみ心を奪われて、本質を見ようとしていない。実は、落葉の宮は女三の宮に比べてはるかに皇女にふさわしい女性であったと断言している。にもかかわらず、彼女は「下臈の更衣腹」故にその人となりや正当に評価されない。あはれ何ごとかは人に劣りたまへる。いかなる御宿世にて、やすからずものを深く思すべき契り深かりけむ

(夕霧 ④ 四三六〜四三七頁)

御息所が嘆いたこの言葉が、落葉の宮の人生を端的に示しているといえる。

六 落葉の宮が得たもの

最後に、この結婚は彼女に何をもたらしたのだろうか。表面的なことでは、生活するために必要な後見人を得たことだ。彼女は、母・御息所とともに柏木の庇護を受けている。たとえ結婚生活が「人目に咎めらるまじきばかりにもてなしきこえたまへり」(若菜下 ④ 二一七頁)という有様で、皇女として尊敬されるでもなく、妻として愛されていなくても、物質面で安定した生活を送ることが

できる意味は大きい。

その一方で、彼女は孤独だった。柏木は、同じ邸に住みながら「わが方に離れゐて」という有様でおよそ夫婦らしい生活ではない。

女宮も、かかる気色のすさまじげさも見知られたまへば、何ごととは知りたまはねど、恥づかしくめざましきに、もの思はしくぞ思されける。女房など物見にみな出でて人少なにのどやかなれば、うちながめて、箏の琴なつかしく弾きまさぐりておはする

(若菜下 ④ 二二三頁)

落葉の宮は、なぜ柏木が自分を遠ざけるのかその理由がわからない。夫に疎まれていたことは事実であり、そのことは心外ではあるが嘆かわしい現状でもある。夫と睦み合うこともなく、同じ家に居ながら彼女は独りである。さらに、柏木は病に臥し太政大臣邸に引き取られてしまう。

女宮の思したるさま、またいと心苦し。

(若菜下 ④ 二八一頁)

宮は、とまりたまひて、言ふ方なく思しこがれたり。

(若菜下 ④ 二八三頁)

先に示した結婚生活をみれば、彼女が夫を恋いこがれるというのは違和感が残るが、病の夫から引き離される妻の感情としては理解できる。結局、彼女は夫の死を看取ることすらできなかった。

年ごろ、下の心こそねむごろに深くもなかりしか、おほかたには、いとあらまほしくもてなしかしづきこえて、気なつかしう、心ばへをかしう、うちとけぬさまにて過ぐいたまひければ、つらきふしもことになし。ただかく短かりける御身にて、あやしくなべての世すさまじう思ひたまへけるなりけりと思ひ出でたまふにいみじうて、思し入りたるさまいと心苦し。

(柏木 ④ 三一八―三一九頁)

落葉の宮は柏木から愛されることはなかったが、彼に対して恨みを抱くこともなかった。彼女は、柏木の態度について寿命の短い人だったので夫婦仲というものをつまらないものと考えていたのだと推測する。柏木の心の内を知ることのない彼女が、彼を偲んで思い沈む様は哀れである。

この結婚が彼女にどのような影響を与えたのか。柏木の死後、夕霧からの求婚を拒否する理由にそれは表れている。

かれは、位などもまだ及ばざりけるほどながら、誰も誰も御ゆるしありけるに、おのづからもてなされて見馴れたまひにしを、それだにいとめざましき心のなりにしさま

(夕霧 ④ 四一〇頁)

周囲に認められた結婚であったはずが、夫から冷淡な仕打ちを受けたことは彼女にとって心外なものであったことが解る。

故君のことなることなかりしだに、心の限り思ひ上がり、御容貌まほにおはせずと、事のをりに思へりし気色を思し出づれば、まして、かういみじう衰へにたるありさまを、しばしにても見忍びなんやと思ふもいみじう恥づかし

（夕霧 ④ 四八〇～四八一頁）

そして、彼女は自身の容貌に関して自信を失っていることが示されている。彼女は柏木が「御容貌まほにおはせず」と思っていたことを知っていた。自分に求婚している夕霧の「限りもなう清げなり」という様子は、柏木とは比べものにならないくらい美しい。このように美しい男が、柏木にさえ疎まれた容貌、しかもあの頃よりさらに衰えてしまった自分にいつまで辛抱できるだろうかと不安を抱いているのだ。

柏木の態度は、彼女から女性としての自信を喪失させてしまった。渋谷孝氏は、彼女と柏木の結婚を決めた朱雀院の行為を指して「こういう父親の仕打ちに対する負い目も強かったのである。落葉の宮は父帝からも愛されず、つらい思いだけが残って男性への不信感がつのって行った。」と述べている。^{（註3）}彼女が朱雀院から愛されていたかどうかについては、光源氏の「かの皇女こそは、ここにものしたまふ入道の宮よりさしつぎには、らうたうしたまひけれ。」（夕霧 ④ 四五八頁）という言葉信じれば、彼女が女三の宮の次に愛

されていたといえる。また、柏木との結婚を不本意なものと考えていたのは彼女よりむしろ母・御息所であり、彼女がこの結婚を不本意と思っていたかどうかは、はなはだ疑問である。確かに男性への不信感もあつただろうが、むしろこの結婚は彼女の女性としての自信を失わせたと見た方が良いのではないか。降嫁し未亡人になったという不幸は、彼女自身に負のイメージを植え付け、意識させることになったのである。

そして、柏木の死で彼女は将来にわたる後見人を失ってしまう。そのうえ、母・御息所が亡くなることで、彼女は庇護者も失ってしまう。皇女の再婚という命題に、彼女は一人で立ち向かうことになったのである。

註

註1 後藤祥子「皇女の結婚―落葉宮の場合」一〇九頁（『源氏物語の史的空間』所収 東京大学出版会 昭61・2）

註2 森 一郎「皇女の結婚 ―源氏物語主題論の一節―」一六九頁（『源氏物語考論』所収 笠間書院 昭62・9）

註3 宮川葉子「落葉宮」二六七頁（『源氏物語講座 第二巻 物

語を織りなす人々』所収 勉誠社 平3・9)

註4 森 一郎『落葉宮物語 ―その主題と構造―』一一五頁(『源

氏物語作中人物論』所収 笠間書院 昭54・12)

註5 白方 勝「まめ人の乱れ」一六三頁(『源氏物語の探求 第

九輯』所収 風間書房 昭59・4)

註6 註1に同じ 九四―九五頁

註7 註5に同じ 一六二頁

註8 渋谷 孝「夕霧・御法」五七―五八頁(『源氏物語講座 第

4巻 各巻と人物Ⅱ』所収 有精堂 昭46・8)

3 夕霧との再婚

一 はじめに

のぼりにし峰の煙にたちまじり思はぬかたになびかずもがな

(夕霧 ④ 四六三〜四六四頁)

夕霧から迎えの車を差し向けられ、女房達に勧められ、大和守に説得されて帰郷する落葉の宮だが、夕霧の思うとおりにはならないという強い意志を持っていた。しかし、落葉の宮は夕霧の妻となり、六の君の養母として宇治十帖に登場する。

落葉の宮に再婚皇女という命題が科された理由はすでに母・一条御息所の身分の低さに求めた。^(註1)母方に後見人に足る人物を持たない落葉の宮が生きていくためには、彼女自身を後見してくれる人物が必要だった。

たけう思すとも、女の御心ひとつにわが御身をとりましたためかへりみたまふべきやうかあらむ。なほ人のあがめかしづきたまへらんに助けられてこそ。深き御心のかしこき御おきても、それにかかるべきものなり。

(夕霧 ④ 四六二〜四六三頁)

実に現実的な大和守の意見である。何をするにも、どう生きるにも経済的基盤を支える後見人の必要性はここに明らかである。

しかし、落葉の宮は夕霧との結婚を望まなかった。夕霧の求婚を逃れる様が繰り返し描かれることで、彼女の結婚拒否の姿勢が印象づけられる。その一方で、物語は彼女が再婚せざるを得ない状況を作り出している。夕霧の気持ち彼女に向かつていく様は、夕霧と落葉の宮の距離に表れている。落葉の宮は、母・一条御息所の病のために小野へと居を移し、母の死後夕霧の手によって一条宮に戻される。彼女の居が変わることで、訪れる夕霧の滞在位置が変化し、それによって夕霧と落葉の宮を隔てていた距離も縮まっていく。転居によって二人の距離がどのように変化していくのか、本文に即して整理してみたい。

二 理想の形

ところで、落葉の宮が夕霧に望んだ関係とはどのようなものだったのか。その答えは、夕霧の父・光源氏によって示されている。

かの想夫恋の心ばへは、げに、いにしへの例にもひき出でつべかりけるをりながら、女は、なほ人の心移るばかりのゆゑよしをも、おぼろけにては漏らすまじうこそありけれ、と思ひ知らるることどもこそ多かれ。過ぎにし方の心ざしを忘れず、かく長き用意を人に知られぬとならば、同じうは心清くて、とかく

かかづらひゆかしげなき乱れなからむや、誰がためも心にくく
めやすかるべきことならむと思ふ（横笛 ④ 三六六頁）

夕霧から一条宮の人々の様子を聞きながら、光源氏は二人が想夫恋を弾いたことに懸念を示す。想夫恋は夫を恋する曲である。光源氏は、夕霧が想夫恋を弾いたことに彼の落葉の宮に対する想いを感じるが、一方で落葉の宮は想夫恋を弾くべきではなかったと非難し、彼のことをたしなめたくて、光源氏の考える二人の好ましい関係を提示する。それは、結婚という形をとらずに亡き柏木との友情から発した心遣いを続けることであつた。柏木と夕霧の妻・雲井雁が兄妹であること、落葉の宮の父が彼の兄・朱雀院であること、そうした人間関係の柵を踏まえた上での、親として当然の忠告であつた。落葉の宮は自分が柏木に疎まれていたと思つてゐる。上辺は大切に扱われたが、彼が彼女と向かい合つて心を通い合わせることはなかった。その彼女が再び結婚という状況を望むとは考えにくい。落葉の宮もまた、源氏が示した「心清」い関係を望んでいたと考えられる。

しかし、父の忠告は夕霧には届かなかつた。父の好き心を覗いてた夕霧にとって、この忠告を父が行うことは心外であり、自分の気持ちを自制しようという気持ちが生まれるはずもない。夕霧が父の忠告に反発した時点で、二人の関係が「心清く」終わる可能性は、

費えたのである。

三 一条宮にて

落葉の宮は、夕霧と再婚するまでに二度転居している。一条宮から小野へ、そして再び一条宮へ。それぞれの場で、夕霧と彼女の距離が近づき触れ合う状況が見受けられるが、その二人の距離は転居毎に近づいているのだ。また、彼女の住居であつた一条宮は、小野から帰京した際に彼女が「古里とおぼえず疎ましくうたて思さるれ」（夕霧 ④ 四六五頁）と感じたように別の場所かと思えるほど変えられていた。居住場所の移動と夕霧との距離の変化。物語は落葉の宮を夕霧と結婚せざるを得ない状況に誘うのである。

では、まず起点である一条宮における二人の距離を整理してみよう。「一条にものしたまふ宮、事にふれてとぶらひきこえたまへ」（柏木 ④ 三一七―三一八頁）という柏木の遺言に忠実に、夕霧は一条宮を訪れている。彼は度々一条宮を訪れているようだが、テキストに表出している訪問は三回である。

それでは、それぞれの場面を見ていくことにする。

① 柏木の死後その悲しみに暮れる一条宮。

「御前の木立いたうけぶりて、花は時を忘れぬけしき」の頃

母屋の廂に御座よそひて入れたてまつる。おしなべたるやうに人々のあへしらひきこえむは、かたじけなきさまのしたまへれば、御息所ぞ対面したまへる。
(柏木 ④ 三二八頁)

夕霧の場所は母屋の廂。対応したのは一条御息所であり、彼は彼女から落葉の宮の消息を聞くのみである。

ここは、柏木の死後初めて夕霧が一条宮を訪れる場面である。夕霧の身分・地位を考え、彼の対応は女房ではなく、一条御息所があることになった。この時点で、御息所が対応できない場合、女房ではなく落葉の宮が応じざるを得ない状況が設定されたと考えていいだろう。

②「常にとぶらひきこえたまふ」うちのある日。

「四月ばかりの空は、そこはかとなう心地よげに、一つ色なる四方の梢もをかしう見えわたる」頃

今日は、簀子にあたまへば、褥さし出でたり。いと軽らかなる御座なりとて、例の、御息所おどろかしきこゆれど、このごろなやましとて寄り臥したまへり。
(柏木 ④ 三三七頁)

夕霧の場所は簀子。御息所は調子が悪くすぐには対応できない状況にある。

「ことならばならしの枝にならさなむ葉守の神のゆるしありきと

御簾の外の隔てあるほどこそ、恨めしけれ」とて、長押に寄りあたまへり。「なよび姿、はた、いいたうたをやぎけるをや」とこれかれつきしろふ。この御あへしらひ聞こゆる少将の君といふ人して、

「柏木に葉守の神はまさずとも人ならすべき宿の梢かうちつけなる御言の葉になむ、浅う思ひたまへなりぬる」と聞こゆれば、げにと思すにすこしほほ笑みたまひぬ。

(柏木 ④ 三三八頁)

夕霧の詠みかけた和歌に対し、落葉の宮が少将の君を通して返歌している。その後、一条御息所が出てきたので、彼女に落葉の宮の様子を尋ねた。この場面は、故人が丹精した前栽が手をかけられることなく茂り合うといった荒廃した様子とともに、夕霧の訪れが語られる場面である。早速①で懸念した通り一条御息所が夕霧の対応に出られない状況が生じている。何とか女房達が話をつないだが、落葉の宮の言葉を女房が取り次ぐうちに夕霧と和歌を詠み合うことになった。一步二人の間が近づいたのである。ただ、御息所が何とか対応に出ることでそれ以上のことは回避された。

③「秋の夕のものあはれなる」頃

うちとけしめやかに御琴どもなど弾きたまふほどなるべし。深くもえとりやらで、やがてその南の廂に入れたてまつりたまへり。

(横笛 ④ 三五二頁)

夕霧の場所は南の廂の間。応対は一条御息所。夕霧は落葉の宮の和琴を所望する。

月さし出でて曇りなき空に、翼うちかはす雁がねも列を離れぬ、うらやましく聞きたまふらんかし、風肌寒く、ものあはれなるにさそはれて、箏の琴をいとほのかに掻き鳴らしたまへるも奥深き声なるに、いとど心とまりはてて、なかなか思ほゆれば、琵琶を取り寄せて、いとなつかしき音に想夫恋を弾きたまふ。「思ひおよび顔なるはかたはらいたけれど、これは言問はせたまふべくや」とて、切に簾の内をそのかしきこえたまへど、ましてつつましきさし答へなれば、宮はただものをのみあはれと思しつづけたるに、

言に出でていはぬもいふにまさるとは人に恥ぢたるけしきをぞ見る

と聞こえたまふに、ただ末つ方をいささか弾きたまふ。

深き夜のあはればかりは聞きわけのことよりほかにえや言ひける

(横笛 ④ 三五四～三五五頁)

想夫恋を弾く夕霧に対して、落葉の宮は慎重に返答している。「うちとけしめやかに御琴どもなど弾きたまふ」しみじみとした風情ある場所に夕霧が登場する。いつものように一条御息所が応対するが、そこに「律に調べられて、いとよく弾きならしたる、人香にしみてなつかしうおぼゆ」(横笛 ④ 三五三頁)和琴が置かれている。女の移り香の染みついた和琴が、夕霧の落葉の宮への想いをかき立てたであろうことは想像に難くない。さらに、その和琴で想夫恋を弾くことになる。夕霧の落葉の宮に対する心の距離が、一気に縮まった場面である。

以上のように、小野に移る前の一条宮では、夕霧と応対するのは一条御息所であり、落葉の宮が直接彼に対応することはない。彼の訪問は、彼女の母・一条御息所から「あはれにありがたき御心ばへにもあるかな」(夕霧 ④ 三九五頁)と感謝されている。夕霧は、恋心を彼女達に知られることなく親切な良い人という役割を演じている。一方、一条宮側の夕霧のもてなし方は、彼の身分にふさわしく丁寧に遇しており、そこには落葉の宮と彼を再婚させようという思惑は見受けられない。

しかし、①では夕霧と一条御息所の応対だったのが②では落葉の宮が女房を通してではあるが返歌をし、③では夕霧の琵琶にあわせ

て曲の終わりを少し弾いている。消息から始まり、人を介しての和歌によってその心境を表し、自らの弾く琴の音を聞かせる。落葉の宮という人物について徐々にその実像が夕霧の前に表出されているのである。実際に、夕霧が彼女に近づくことはない。しかし、彼の内に芽生えた落葉の宮に対する想いが、確実に形作られていったことは明らかであろう。

また、②に示した和歌のやりとりには、夕霧の心を揺さぶり今後の展開を予感させる状況が示されている。

「今は、なほ、昔に思ほしなずらへて、疎からずもてなさせたまへ」など、わざと懸想びてはあらねど、ねむごろに気色ばみて聞こえたまふ。直衣姿いとあざやかにて、丈だちものものしうそぞろかにぞ見えたまひける。「かの大殿は、よろづのこととなつかしうなまめき、あてに愛敬づきたまへることの並びなきなり。これは男々しうはなやかに、あなきよらとふと見えたまふにほひぞ、人に似ぬや」とうちささめきて、「同じうは、かやうにても出で入りたまはましかば」など、人々言ふめり

(柏木 ④ 三三九～三四〇頁)

ここで初めて夕霧は自らの落葉の宮への気持ちをはのめかす。その姿は彼の地位・身分にふさわしく堂々としたものであったことが見受けられる。さらに、こうした彼の様子を垣間見る女房たちは、夕

霧が落葉の宮と結婚することを望んでいるのだ。そこには、それまで見せてきた彼の態度や心遣いに魅せられると同時に、自分たちの将来の安定を望む女房たちの本音が透けて見える。

さらに、③の状況は夕霧によって光源氏に語られ、先にあげた光源氏の忠告を引き出している。夕霧の言動に、光源氏は彼の心が落葉の宮に傾いていることを認識しており、そのことが周囲にもたらず影響を懸念したのだ。

一方、落葉の宮は②及び③の和歌に見られるように夕霧に対して心を寄せることはない。夕霧のほめかしに対して、彼女は毅然と拒絶しているのである。

はじめより懸想びても聞こえたまはざりしに、ひき返し懸想ばみなまめかむもまばゆし、ただ深き心ざしを見えたてまつりて、うちとけたまふをりもあらじやは、と思ひつつ、さるべきことにつけても、宮の御けはひありさまを見たまふ。みづからなど聞こえたまふことはさらになし。

(夕霧 ④ 三九五～三九六頁)

落葉の宮に心を動かされた夕霧は、機会を見つけては宮の様子を窺っている。彼は、先だって彼女の琴を聞くことができたように、何かしら彼女自身を表するものを聞きたい、触れたいと望んでいるのだろう。しかし、落葉の宮が自分で応対することはなく、夕霧との

距離を保っているのである。

四 小野にて

夕霧の心が解き放たれるのは小野の地である。落葉の宮が小野へ転居した理由は、一条御息所の病にあった。物の怪を調伏した律師が叡山にこもっており、彼を招いて見てもらう為に小野にあった手持ちの山荘に移ったのである。小野へ移転する際の世話は夕霧が行った。したがって夕霧が小野を訪れることは、彼にとっては当然のことである。なお、一条御息所の法事も夕霧が執り行なったが、その件で小野に赴いた記述もなく、落葉の宮に関する記述もないので除外した。ただしこの件は、致仕大臣の怒りをかい落葉の宮を孤立させることになった。

以下、小野に夕霧が訪れた場面をあげていく。ここで注目すべきは、④に示した場面である。先に示した③で、夕霧は落葉の宮への想いを募らせている。一方の落葉の宮は、母御息所の苦しむ姿に心を痛め、夕霧に対する警戒を少し怠ったと思われる。それを逃さず、夕霧は一気に落葉の宮に近づいて、想いの丈を述べるのである。二人の心の距離と、身体の距離、そして時間。二人の関係の転機となる小野でのやりとりを時間の流れと二人が居る位置に注目して整理

してみた。

④八月の二十日頃

寝殿とおぼしき東の放出に修法の壇塗りて、北の廂におはすれば、西面に宮はおはします。(略) 客人のあたまふべき所なければ、宮の御方の簾の前に入れたてまつりて、上臈だつ人々御消息聞こえ伝ふ。

(夕霧 ④ 三九八―三九九頁)

夕霧の場所は宮の部屋の御簾の前。上臈の女房が一条御息所との間を取り次ぐ。夕暮れ時、口上を取り次ぐ女房の後について、夕霧が御簾の中に入る。

まだ夕暮の、霧にとちられて内は暗くなりたるほどなり。あさましうて見返りたるに、宮はいとむくつけうなりたまうて、北の御障子の外にみざり出でさせたまふを、いとようたどりて、ひきとどめたてまつりつ。御身は入りはてたまへれど、御衣の裾の残りて、障子はあなたより鎖すべき方なりければ、引き開てさして、水のやうにわななきおはす。

(夕霧 ④ 四〇五頁)

障子をおさへたまへるは、いとものはかなき固めなれど、引きも開けず、「かばかりのけぢめをと、強ひて思さるらむこそあはれなれ」とうち笑ひて、うたて心のままなるさまにもあらず。

(夕霧 ④ 四〇七頁)

月明かき方にいざなひきこゆるもあさましと思す。心強うもてなしたまへど、はかなう引き寄せたてまつりて、「かばかりたぐひなき心ざしを御覧じ知りて、心やすうもてなしたまへ。御ゆるしあらでは、さらにさらに」といとけざやかに聞こえたまふほど、明け方近うなりにけり。

(夕霧 ④ 四〇九〜四一〇頁)

夕霧は落葉の宮の裾を捉え、さらに明け方近く宮を引き寄せた。

⑤ 一条御息所の死後

一条御息所の死を知り夕霧が弔問に訪れる。彼女の死の要因は、落葉の宮に対する夕霧の行為を悲観したことにある。母の死の原因である夕霧に対して、落葉の宮が心を閉ざすのは当然の結果であった。

ゆゆしげにひき隔てめぐらしたる儀式の方は隠して、この西面に入れたてまつる。大和守出て来て、泣く泣くかしこまり聞く。妻戸の簀子に押しかかりたまうて、女房呼び出でさせたまふに、あるかぎり心もをさまらず、ものおぼえぬほどなり。

(夕霧 ④ 四四〇頁)

夕霧の場所は西面、妻戸の前。大和守が応対し女房達はなかなか応

対できず。宮は返事もせず。

⑥ 九月十日過ぎ

例の妻戸のもとに立ち寄りたまて、やがてながめ出だして立ちたまへり。(略)もの思ひの慰めにしつべく、笑ましき顔のにほひにて、少将の君をとりわきて召し寄す。

(夕霧 ④ 四四八〜四四九頁)

夕霧の場所は、いつもの妻戸。応対は少将の君。夕霧、宮の様子を聞く。

御消息とかう聞こえたまへど、「今は、かくあさましき夢の世を、すこしも思ひさますをりあらばなん、絶えぬ御とぶらひも、聞こえやるべき」とのみ、すくよかに言はせたまふ。

(夕霧 ④ 四五二頁)

夕霧の挨拶に、女房を通して素っ気ない返事を返す落葉の宮。時間が流れても、彼女の心が夕霧に近づくことは期待できない様子が見て取れる。

小野では④にあるように、夕霧は大胆な行動に出る。彼をこのような行動に駆り立てた要因に、京にある一条及び自宅(三条)と小野の間の距離があげられる。離れたことで、直接訪れることは減っ

たが、夕霧は加持祈祷に必要な品々を小野に届けることを忘れない。一方の一条御息所は病のために返事を書くことが出来ない。その結果、身分高い夕霧に対する礼として、落葉の宮が返事を書くことになり、その「いとをかしげにてただ一行などおほどかなる書きざま、言葉もなつかしきところ書き添へたまへる」(夕霧 ④ 三九七頁)様子に夕霧は想いを募らせることになるのだ。京と小野という距離が宮の筆跡を夕霧のもとに運び、それが彼に彼女の人となりを想像させたのである。

また、小野の住まいは山荘のため一条宮に比べ狭い。したがって、夕霧が訪ねてくれば彼を宮の御簾の前に通すしかない。宮の気配を感じられるまでの距離に夕霧は近づいてきたのである。さらに、一条御息所が苦しみ始めたことで女房たちが彼女の方に集まり、宮の前が人少ない状況になったことも夕霧の行動を後押ししたことは想像に難くない。ついに、夕霧は御簾の中に入り、宮の裾を捉え引き寄せるのだ。

伊藤博氏は、小野への転居と夕霧の言動の関係について次のように述べている。^(註2)

舞台を小野に設定したことはまめ人にとって内外の桎梏からのある解放を意味したに違いない。京都の貴族社会における日常生活の諸規範からの脱出がなされるからである。夕霧の恋がこ

の巻に入って加速度的に燃え上がることとこのことは決して無縁ではないはずだ。

京から遠く離れた小野は非日常空間でもある、その非日常の空間の中で今までにない距離に近づいたことが、夕霧の行為を生み出したのであれば、彼のこの一連の行為はなんの不思議もない。ただ、引き寄せただけでそれ以上の行為に及ばなかった点は、非日常下でも彼は夕霧であったということではなからうか。

しかし、この彼の行為は結果として一条御息所を死に至らしめることになった。⑤及び⑥に見られたように、実際は距離の近いところに居ながら二人の心は遠く離れ、彼は落葉の宮に拒絶されるのである。

以上のように、京から離れた小野という地に移ったことで二人の拠点は遠く離れた。しかし、そのことが夕霧の想いを増幅させるための導火線となる宮の筆跡を提示させ、さらに小野という非日常空間で二人が御簾を隔てただけの互いの気配を感じられる空気を共有したことで、彼に大胆な行動を起こさせたのである。その一方で、こうした夕霧の行為は逆に落葉の宮の心を遠ざけるとともに、彼女が常に夕霧の言動を封じる手だてを取るようになった。小野では、彼女は夕霧に決してついている隙を見せなかったのである。

五 再び一条宮へ

父・朱雀院に出家を反対された落葉の宮は、夕霧の手で再び一条宮へ戻るようになった。

一条に渡りたまふべき日、その日ばかりと定めて、大和守召して、あるべき作法のたまひ、宮の内払ひしつらひ、さこそいへども女どちは草しげう住みなしたまへりしを、磨きたるやうにしつらひなして、御心づかひなど、あるべき作法めでたう、壁代、御屏風、御几帳、御座などまで思しよりつつ、大和守のたまひて、かの家にぞ急ぎ仕うまつらせたまふ。

(夕霧 ④ 四六一〜四六二頁)

彼によつて飾り立てられた一条宮が、以前の宮とはまるで異なるものであつたことは、先にあげた落葉の宮の「古里とおぼえず疎ましくたて思さるれ」という心情に明らかである。この新しい一条宮での二人の關係が描かれるのは、二日間である。ここに、簡単にまとめてみよう。

一日目―落葉の宮の帰郷の日

夕霧は落葉の宮より先に一条宮に居る。

その日、我おはしめて、御車、御前など奉れたまふ。

(夕霧 ④ 四六二頁)

殿は東の対の南面をわが御方に仮にしつらひて、住みつき顔におはす。

(夕霧 ④ 四六五頁)

人々が寝静まつた頃。

かく心強けれど、今はせかれたまふべきならねば、やがてこの人をひき立てて、推しはかりに入りたまふ。宮はいと心憂く、情けなくあはつけき人の心なりけりとねたくつらければ、若々しきやうには言ひ騒ぐともと思して、塗籠に御座一つ敷かせたまで、内より鎖して大殿籠りにけり。(夕霧 ④ 四六七頁)

夕霧は、落葉の宮の居間。落葉の宮はその塗籠の中。夕霧、塗籠に入らず泣く泣く帰宅。

二日目―帰郷翌日

夕霧一条宮へ(自分の居間か)。落葉の宮はいまだ塗籠の中。

「内々の御心づかひは、このたまふさまにかなひても、しばしは情ばまむ。世づかぬありさまの、いとうたてあり、またかりとてひき絶え参らずは、人の御名いかがいとほしかるべき。ひとへにものを思して、幼げなるこそいとほしけれ」など、この人を責めたまへば、げにとも思ひ、見たてまつるも今は心苦しう、かたじけなうおぼゆるさまなれば、人通はしたまふ塗

籠の北の口より入れたてまつりてけり。

(夕霧 ④ 四七七〜四七八頁)

夕霧塗籠の中へ入り、夜明け方契りをかわす。

新しい一条宮で、二人の位置が変化したことは明らかである。以前の一条宮及び小野では、落葉の宮の居に夕霧が訪れていた。今も一条宮が彼女の居であることは変わらないが、彼女が帰宅する前に既に夕霧が主顔で居るため、落葉の宮は男君に迎えられた形になった。居住の場における主従の逆転は、その場における主導権の移行である。つまり、帰宅した時から彼女は自らの身を守る手段を奪われていたのだ。

ところが、夕霧との結婚を厭う落葉の宮は、塗籠の中に畳を一枚敷き中から鍵をかけて休むという行為にでた。それも「これもいつまでにかは。」とあるように完全な備えではないことは、彼女自身が理解していたはずである。事実二日目には少将によって塗籠の北口が開かれ、夕霧はその中に入ることに成功した。塗籠という狭い空間の中では落葉の宮も抵抗のしようがなく、ようやく、夕霧は自身の想いを遂げたのである。最後の砦であった塗籠という空間を夕霧に奪われた落葉の宮は、彼の支配下に置かれた一条宮という場の主として生きていくしかなかったのだ。

六 おわりに

塗籠に籠もる落葉の宮の行為は、周囲への最後の抵抗であった。

夕霧の意志、女房たちの欲望、世間の思惑。冷めた目で見れば、彼女の行為は無駄であり、自己を慰める手段でしかない。しかし、これが彼女の出来る精一杯の抗議だったのだ。再婚拒否、それは自らの置かれた境遇に対する彼女の望みであった。しかしそれは叶えられることはなく、生きるための現実に取り込まれた。

『源氏物語』において、結婚拒否を貫ぬくことが出来たのは朝顔姫君と宇治の大君だけである。朝顔姫君は、彼女の居住空間である桃園宮から出ることはなく、光源氏と文を交わすことはあっても、桃園宮を訪れた源氏に対して直接声をかけることはなかった。彼と距離を置くことに常に注意を払い、光源氏の想い人の一人になることを最後まで拒んだのである。一方の宇治大君もまた、宇治の八宮邸より出ることはなかった。落葉の宮と同様に、薫に御簾の中まで気に入られるが何ごともなくその夜をやり過ごし、その後は細心の注意を払って彼を遠ざけた。最後は自らの死をもって結婚拒否を貫いたのである。

二人に共通するのは、いうまでもなく自らの居住空間から出るこ

とがなかったという点である。そのことは、彼女たちが男君と距離を保つうえで必要であつたのだ。しかし、落葉の宮は二度転居した。その転居の度に夕霧との距離は縮まり、最後にはその居住空間の主の座さえ奪われた。元の自分の居住地に自分らの意志で帰るのではなく、夕霧に迎えられるに至り、落葉の宮が結婚を拒否できる可能性は消えたのだ。それ以前、朝顔姫君や宇治大君と比べて考えれば、一条宮から小野へ転居した時点で落葉の宮が結婚を拒否できる可能性はなくなっていた。別のいい方をすれば、落葉の宮と夕霧の関係を無理なく構築するために、二度の転居が必要だったのだ。

註

註1 第二節 1「落葉の宮の出自」 参照

註2 伊藤 博「夕霧物語の位相」三四四頁（『源氏物語の原点』

所収 明治書院 昭55・11）

4 皇女の再婚

一 はじめに

落葉の宮と夕霧の結婚は、皇女の再婚という命題を担うものである。物語の中で再婚した皇女はいない。したがって、女三の宮の降嫁以上にこの問題が検討されてもおかしくはない。女三の宮の降嫁は朱雀院の苦悩をはじめとして彼女に関わる人々に対して多くの問題を生み出した。同様に落葉の宮の再婚も周囲に影響を及ぼしたが、女三の宮の降嫁ほど物語が展開することはなかった。そして、この命題は明らかな決着を見ないまま、物語は進み匂兵部卿巻で「丑寅の町に、かの一条宮を渡したてまつりたまひてなむ、三条殿と、夜ごとに十五日づつ、うるはしう通ひ住みたまひける。」（匂兵部卿⑤ 二〇頁）と夕霧のまめ人たる生活が描かれるのである。

物語唯一の皇女再婚問題は、女の生きがたさという点で考えさせられるものがあつた。「女ばかり、身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし」（夕霧 ④ 四五六頁）と、夕霧と落葉の宮の噂を聞いた紫の上が語る女の宿世が、『源氏物語』における一つの大きな命題であることは、周知のことである。しかし、この言葉を引き出すきっかけとなった「皇女の再婚」というテーマは、

浮かび上がってこない。その理由は、求婚者にあつたのではないか。皇女の結婚は皇家の力と権力をもたらすものであり、そのために注目を集め人々を惑わせる。しかし、落葉の宮は権力に関わることで注目されることはなかった。この求婚譚は、求婚者が夕霧だったことでまめ人夕霧の浮気問題の方に注目を集めてしまった。ここでは物語唯一の皇女再婚というテーマにこだわらず、それがなぜ埋もれてしまったかについて詳しく検討してみたい。

二 皇女の降嫁

まず、皇女の結婚について改めて考えてみたい。

例えば、宇治十帖で帝は母を亡くした女二の宮と薫の縁談をとりまとめる。

天の下響きていつくしう見えつる御かしづきに、ただ人の具したてまつりたまふぞ、なほあかず心苦しく見ゆる。

（宿木 ⑤ 四七四〜四七五頁）

この降嫁について皇女の相手が臣下であることを物足りなく不憫だと世間が感じていることが示されている。また、この度の決定が今までにないものであることは、次の夕霧の言葉から明らかである。めづらしかりける人の御おぼえ宿世なり。故院だに、朱雀院の

御末にならせたまひて、今はとやつしたまひし際にこそ、かの母宮を得たてまつりたまひしか。我は、まして、人もゆるさぬものを、拾ひたりしや
(宿木 ⑤ 四七五頁)

光源氏は晩年になって皇女を正妻に迎え、自分に至っては人が赦さない宮を手に入れたと夕霧は語る。夕霧と落葉の宮との関係は、ここで語るにはいささか例外のものである。しかし、それを差し引いたとしても、皇女の降嫁をこの様に性急に決めてしまうことは、過去の例を鑑みても特別であることは明らかであった。

『源氏物語』において、皇女と結婚した人物は少ない。桐壺帝同腹の妹が左大臣に降嫁。先帝の後腹の四の宮(後の藤壺)が桐壺帝に入内。朱雀院の女三の宮が光源氏に降嫁。同じく女二の宮が柏木に降嫁。そして薫である。そもそも、皇女は独身を貫くものとされてきた。薫に降嫁した女二の宮の姉・女一の宮の生き方こそ、理想的な皇女の生き方といえる。彼女は明石女御を母に持つことで夕霧の後見を受けて経済的にも不自由のない生活を送ることができた。朱雀院が、女三の宮の将来を憂えた際に問題にしたように、結婚によつて生じる後悔や腹立ちなどを避けるためにも、独身を通すことが最善であったのだ。

一方、臣下にとって皇女と結婚することは、権力を得ることにつながる。藤原家をはじめとする有力な臣下は、娘を入内させ生まれ

る皇子を帝にすることで権力を手にした。同様のことが、皇女降嫁の際にも生じるのだ。「歴史的に見て、皇女との結婚はまず、人臣の中で最も優れた男への帝王のなし得る最高のはなむけであったろう。」と後藤祥子氏が述べるように、皇女の相手に選ばれるということ自体が最高のステータスであり、将来を約束される意味があった。

一例を挙げれば、若菜巻で柏木が女三の宮を望む理由もそこにあった。冷泉帝の後宮で、彼の妹・弘徽殿女御は光源氏が後見する斎宮女御に立后争いで敗れ、春宮の後宮においても夕霧の妹・明石女御に対抗すべく入内させられる娘がいない内大臣家にとって、権力を維持するためには嫡子・柏木に皇女をいただくことが唯一の道だったからである。

このように、皇女降嫁は政治的に大きな意味を持つものであった。若菜巻での朱雀院の苦悩は、女三の宮の性質に拠るところも大きい。皇女という身分や社会的影響を加味したものであったことはいうまでもない。一方の落葉の宮の降嫁について、女三の宮の場合のように詳細に検討された様子がないことは、第二部・第一章・第二節・1・五「落葉の宮の立場」で考察した。母・御息所は反対したが、柏木の父である大臣の懇願に押し切られる形で決まった降嫁であった。しかし、相手が内大臣家の嫡子だからこそ朱雀院も降嫁に

同意したことは「院にもよろしきやうに思しゆるいたる御気色」から明らかである。

三 再婚に至る経緯

では、再婚についてはどうだろうか。

ただ人だに、すこしよろしくなりぬる女の、人二人と見る例は心憂くあはつけきわざなるを、ましてかかる御身には、さばかりおぼろけにて、人の近づききこゆべきにもあらぬを。

(夕霧 ④ 四三五～四三六頁)

夕霧とのことを律師から聞かされた御息所は、少しでも良い身分の女性が再婚するということは情けなく軽率であると落葉の宮に対して苦言を呈している。確かに、御息所は皇女という身分にこだわりの持った人物であった。皇女が結婚することすら認めていなかった彼女にとって、再婚はあり得ないものであっただろう。また、朱雀院も「げに、あまたとざまかうざまに身をもてなしたまふべきことにもあらねど」(夕霧 ④ 四五九～四六〇頁)と、再婚を容認してはいない。夕霧と落葉の宮の結婚は、朱雀院の言葉でいえば「親に知られず、さるべき人もゆるさぬに、心づからの忍びわざし出でたるなむ、女の身にはますことなき疵とおぼゆるわざなる」(若菜

上 ④ 三四頁)ものであったといえる。

落葉の宮と夕霧のことが噂になったのは、まだ彼女の両親が健在であつた頃である。皇女はその結婚自体が慎重に検討されるものであり、親の決めた者の所へ降嫁するものであつた。しかし、二人のことは光源氏も含めどちらの親も賛成していない。ただ、双方とも初婚ではないのであれば親の承諾は問題にならないかもしれないが、皇女の結婚としては彼女の両親の意向は無視できないだろう。

後に、御息所は、夕霧との関係が事実であれば二人の結婚を容認せざるを得ないと考えており、朱雀院は再婚は容認しないといながらその代案を示す事が出来ない。状況は、二人の結婚を認めざるを得ない方向に進んでいったのだ。

四 立場の違い

落葉の宮のおかれた状況に対して、皇女再婚とについてなぜ議論されることがなかったのか。その理由は、主として落葉の宮が皇家とそれに付随する政治権力から遠い存在だったことにある。

朱雀院の鍾愛の姫君が女三の宮であつたことは、今さら指摘するまでもない。朱雀院は、皇女たちの将来を「いづれをも、思ふやう

ならん御世には、さまざまにつけて、御心とどめて思し尋ねよ。」

(若菜上 ④ 二〇頁)と春宮に依頼ながらも、落葉の宮を含めた他の皇女たちには後見があることを理由に、女三の宮の事だけを熱心にいいおくのである。院の女三の宮に対する溺愛ぶりは周知の事であり、男達の求婚対象が女三の宮に限られたことは当然のことであつた。他の皇女に対する院の関心の低さを求婚者達は冷静に見つめている。自分にとって有益なのは誰なのか。「朱雀院鍾愛の皇女」は、皇家とのつながりを深め政治権力を得るために必要不可欠だったのだ。

この「鍾愛の皇女」と対照的なのが落葉の宮である。同じ皇女でありながら、その降嫁決定の経緯にも大きな違いがあつた。女三の宮の場合は、慎重に検討を重ねたうえで光源氏に降嫁させたが、落葉の宮の場合は柏木の父・太政大臣の懇願に答える形で降嫁が決まつた。降嫁後も、朱雀院は女三の宮に対してあれこれと気を配るが、落葉の宮に対する気遣いが示されることはない。院の配慮を考慮して、兄・帝も女三の宮を二品に叙することで彼女の格をあげている。准太上天皇の正妻として、そして評判の高い紫の上に対抗する意味もあつての昇進であつた。一方、落葉の宮に対してはこうした配慮はない。落葉の宮は臣下の妻であり彼女以外に妻がいなかったに配慮の必要がなかったと理由付けすることも可能であるが、彼女

が皇家の中で注視されていないことが最大の要因であつたのではないか。

また、女三の宮は母が皇女であつたが、落葉の宮の母は下臈の更衣であつたことも考慮の必要がある。二人の出自の違いも、落葉の宮を政治権力から遠ざける一因であつたと考えられるからである。どちらの母親にも、相応の後見がいたわけではないが、その血筋の違いはそれぞれの皇女に対して待遇に差をつける要因になった。皇女を母とする女三の宮は、尊い血筋であり、その彼女を将来にわたつて皇家が庇護するのは、当然のことであつた。そして、帝自身も皇女や皇子達の行く末を考えなければならない。そう考えれば、下臈の更衣腹の落葉の宮を女三の宮と同様に、もしくは近い待遇で遇することは難しいといえる。皇女として本来受けるべき皇家の庇護を、落葉の宮はその出自と女三の宮の存在によって手にすることが出来なかつたのだ。

政治権力を得るために皇女との結婚を望む男たちにとって、皇家の庇護を受ける女三の宮は魅力的な存在であつた。一方、皇家の中で重んじられていない落葉の宮は、彼らにとっては魅力がない。事実、朱雀院が女三の宮の婿選びに苦悩していた時に「かうやうにも思しやらぬ姉宮たちをば、かけても聞こえ悩ましたまふ人もなし。」(若菜上 ④ 三六頁)とあるように、彼女以外の皇女たちは求婚

対象になっていない。仮に再婚する皇女が女三の宮であれば、彼女の有する皇家の力もあり大いに議論されたに違いない。しかし、再婚問題は落葉の宮に生じたのである。皇女の降嫁は、身分ではなく権力との結びつきにおいて大きな意味を持つのが一般的であった。落葉の宮の再婚は権力の旨味をもたらさないために問題にならなかったのだ。

五 夕霧の事情

さて、この落葉の宮の再婚問題は「まめ人」夕霧が妻・雲井雁以外の女性に心に移したことに始まる。そもそも、夕霧が落葉の宮を尋ねることになったのは、柏木から彼女を見舞うよう遺言されていたからだ。

一条にものしたまふ宮、事にふれてとぶらひきこえたまへ。心苦しきさまにて、院などにも聞こしめされたまはむを、つくろ

ひたまへ
(柏木 ④ 三一七―三一八頁)

柏木との友情から始まった「落葉の宮の後見」が夕霧に与えられた役割であり、「まめ人」夕霧はその役割を忠実にこなしていく。

夕霧の接近が歓迎されたのは彼の誠実な人柄、世俗の論理を超える彼の特異な人物のゆえであった。宮の側が夕霧を歓迎する

心情はこれをおいて外になく、そこに夕霧が女世帯にしげしげと来訪することのいっさいが何のさまたげもなく自然に諒とせられた事情がある。

森一郎氏が指摘する^(註2)ように、これまでに示された夕霧の言動をかえり見れば、落葉の宮側が彼の来訪を歓迎こそすれ、拒む理由は見つからない。しかし、「夕霧の宮家への援助が、本人の意志はどうであらうと、世間ではいやおうなく男女関係と見られるというところから、物語が発^(註3)している」という篠原昭二氏の指摘があるように、本人たちの意思にかかわらずこの「後見」が世間では「結婚」に結びつけて取りざたされる可能性があったのだ。

結婚による後見といえ、光源氏と女三の宮の関係を思い浮かべるだろう。光源氏は、紫の上を育てた実績とその地位と財力によって彼女の後見を依頼された。この時、夕霧は大納言で大将を兼任している。父は准太上天皇・光源氏、妹・明石女御の産んだ皇子は春宮。彼自身多くの子女を持ち、後に彼の娘は春宮に入内する。将来において皇家とのつながりは深く、政権における地位は盤石であるといえる。既に母方から三条邸を譲り受け、〈源氏〉の後継者として十分な財力を得ていることは容易に推測できる。つまり、夕霧は権力も財力も有し、将来の布石も怠りなく順風満帆の人生を約束されているといえる。したがって、権力を得るために皇女に近づく必

要はないのだ。落葉の宮が皇女であるかどうかは、夕霧にとって必要な条件ではなかったのだ。

私は求婚者が夕霧であったことが、皇女再婚が大きく問題にならなかった理由であると考える。柏木と藤原家は、帝とのつながりを求めて皇女の降嫁を望んだ。一方、明石女御腹の皇子が春宮となっている今、夕霧には性急に皇家との新たなつながりを求める必要性がない。そのことは、御息所に忠告する小野の律師の言葉からも明らかであろう。

このこといとも切にもあらぬことなり。人はいと有職にものしたまふ。なにがしらも、童にものしたまうし時より、かの君の御ためのことは、修法をなん、故大宮ののたまひつけたりしかば、一向にさるべきこと、今にうけたまはるところなれど、いと益なし。本妻強くものしたまふ。さる時にあへる族類にて、いとやむごとなし。若君たちは七八人になりたまひぬ。え皇女の君おしたまはじ。また女人のあしき身を受け、長夜の闇にまどふは、ただかやうの罪によりなむ、さるいみじき報いをも受くるものなる。人の御怒り出できなば、長き絆となりなむ。

（夕霧 ④ 四一七～四一八頁）

律師は、夕霧の本妻つまり雲井雁とその一族の力が強く、落葉の宮の皇女という身分をもってしても彼女にかなわないとしてこの結婚

に異議を唱えている。多くの子をなし、長く夕霧の正妻として暮らしてきた雲井雁の前では、皇女という身分しか持たない落葉の宮など取るに足らない存在であると律師は見ていたのだ。

権力に近いのは雲井雁であって、落葉の宮ではない。皇家の庇護の無い皇女という身分は、彼の正妻の前では自身の身を守る器でなかった。しかし、求婚者夕霧はすでに十分な権力を得ているために、彼女のそうした事情が問題になることはなかったのだ。

むしろ、ここで注目されたのは、落葉の宮が柏木の妻であったことから生じる人間関係であった。柏木は夕霧の親友であると同時に、正妻・雲井雁の兄である。律師の指摘する強力な一族とは、彼女の夫の一族である。こうした事情から、皇女との再婚問題は友人の妻との再婚問題にズラされ、藤原家と夕霧と落葉の宮の入り組んだ関係が前景化されてしまったといえよう。問題の中心が、落葉の宮ではなく夕霧と雲井雁の関係に移ったのである。

六 再婚問題の行方

夕霧が落葉の宮に心惹かれた理由に雲井雁との生活とは得られない落ち着きがあったことは、注目したい。秋の夕べ一条宮で想夫恋を合奏したその日の夜、三条邸に帰った夕霧は余韻を楽しみ月を

愛でようとする。しかし、雲井雁との生活はそうしたゆかしさとは無縁のものであった。

君たちの、いはけなく寝おびれたるけはひなどここかしこにうちして、女房もさしこみて臥したる、人げにぎははしきに、ありつる所のありさま思ひあはするに、多く変りたり。

（横笛 ④ 三五八〜三五九頁）

この君いたく泣きたまひて、つだみなどしたまへば、乳母も起き騒ぎ、上も御殿油近く取り寄せさせたまで、耳はさみしてそそくりつくろひて、抱きてゐたまへり。いとよく肥えて、つぶとをかしげなる胸をあけて乳などくくめたまふ。児も、いとうつくしうおはする君なれば、白くをかしげなるに、御乳はいとかはらかなるを、心をやりて慰めたまふ。男君も寄りおはして、「いかなるぞ」などのたまふ。撒米し散らしなどして乱りがはしきに、夢のあはれも紛れぬべし。

（横笛 ④ 三六〇頁）

育児に追われる妻との生活はおよそ風流とはかけ離れており、三条邸での日常の騒々しさは、落葉の宮に心を傾ける夕霧の心情を致し方ないものとさえ思わせる。しかし、夕霧が主顔で一条宮にいることから、雲井雁は実家に家出した。

大將殿も聞きたまひて、さればよ、いと急にものしたまふ本性

なり、この大殿も、はた、おとなおとなしうのどめたるところさすがになく、いとひききりに、はなやいたまへる人々にて、めざまし、見じ、聞かじなど、ひがひがしきことどもし出でたまうつべき、と驚かれたまうて、三条殿に渡りたまへれば、君たちもかたへはとまりたまへれば、姫君たち、さてはいと幼きとをぞ率ておはしにける、見つけてよろこび睦れ、あるは上を恋ひたてまつりて愁へ泣きたまふを、心苦しと思す。

消息たびたび聞こえて、迎へに奉れたまへど御返りだになし。かくかたくなしう軽々しの世やと、ものしうおぼえたまへど、大殿の見聞きたまはむところもあれば、暮らしてみづから参りたまへり。寝殿になむおはするとて、例の渡りたまふ方は、御達のみさぶらふ。若君たちぞ乳母に添ひておはしける。

（夕霧 ④ 四八三頁）

夕霧の繰り言も、雲井雁のふてくされた態度も、長い年月を過ごした夫婦の日常の一コマであり、おそらくは今後変わることもないであろう現実が透けて見える。白方勝氏はこうした二人の日常に「家庭小説としての一面」を指摘し、「中年夫婦の慣れと倦怠期の現実」を見ている。^{〔註4〕}『源氏物語』において、こうした倦怠期にある夫婦のなれなれしさと、夫の浮気による夫婦喧嘩が描かれるのはこの二人の関係においてだけである。

泣く子をあやす妻、多くの子供に囲まれた日常は、疑似後宮ともいわれた雅な六条院では決して描かれることはなかった。生活感、いや生活臭のない世界が、これまでの『源氏物語』の世界であった。それ故に夕霧と雲井雁夫婦の日常が印象づけられるといえよう。

落葉の宮と夕霧の関係は、こうした日常の生活と平行して進んでいる。生活のために夕霧の援助を望む女房達と世間体を気にしてかたくなに心を閉ざす落葉の宮。後見を旗印に結婚を迫る夕霧。一条宮で繰り広げられているのは、それぞれの将来を見据えた駆け引きであった。三者三様に、自らの望みを叶えるために知恵を絞っている。ここでの、主人公は夕霧である。落葉の宮には拒まれ、妻は家出する。「まめ人」夕霧の浮気は、女性二人に振り回される彼の姿を描き続ける。落葉の宮の再婚は、こうした夕霧の日常の一コマに組み込まれることで、そのテーマの重要性を失ってしまったのである。

註

註1 後藤祥子「皇女の結婚―落葉宮の場合」九七頁（『源氏物語

の史的空間』所収 東京大学出版会 昭61・2）

註2 森 一郎「落葉宮物語 ―その主題と構造―」一二〇頁（『源

氏物語作中人物論』所収 笠間書院 昭54・12）

註3 篠原昭二「夕霧の巻の成立」二三九頁（『源氏物語の論理』所収 東京大学出版会平4・5）

註4 白方 勝「まめ人の乱れ」一八三―一八四頁（『源氏物語の探求 第九輯』所収 風間書房 昭59・4）

第二章 宮家の姫君

第一節 末摘花が表したものの

1 末摘花と左大臣家

一 はじめに

『源氏物語』には数多くの女性が登場するが、その中で容貌の劣る人物といえば末摘花、花散里、空蟬があげられる。中でも末摘花は、その名前の巻で容貌を詳細に語られている。先に挙げた花散里や空蟬はその容貌に言及することはあっても、詳細に語られているわけではない。一方、末摘花は彼女の容貌のみならずその衣装に至るまで明らかにされている。

まづ、居丈の高く、を背長に見えたまふに、さればよと、胸つぶれぬ。うちつぎて、あなかたはと見ゆるものは鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先の方すこし垂りて色づきたること、ことのほかにうたてあり。色は雪はづかしく白うて、さ青に、額つきこよなうはれたるに、なほ下がちなる面やうは、おほかたおどろおど

ろしう長きなるべし。瘦せたまへること、いとほしげにさらばひて、肩のほどなど、痛げなるまで衣の上まで見ゆ。何に残りなう見あらはしつらむと思ふものから、めづらしきさまのしたれば、さすがにうち見やられたまふ。頭つき、髪のかかりはしも、うつくしげにめでたしと思ひきこゆる人々にもをさをさ劣るまじう、桂の裾にたまりて引かれたるほど、一尺ばかり余りたらむと見ゆ。

着たまへる物どもをさへ言ひたつるも、もの言ひさがなきやうなれど、昔物語にも人の御装束をこそまづ言ひためれ。聴色のわりなう上白みたる一かさね、なごりなう黒き桂かさねて、表着には黒貂の皮衣、いときよらにかうばしきを着たまへり。古代のゆゑづきたる御装束なれど、なほ若やかなる女の御よそひには似げなうおどろおどろしきこと、いともてはやされたり。

（末摘花 ① 二九二～二九三頁）

明け方の雪明かりに浮かぶ末摘花の描写は、彼女の容姿を余すことなく明らかにしただけでなく、衣装についてもそのみすばらしさが表されている。彼女の鼻は普賢菩薩の乗り物のようにあきれるほど高く長く伸びており、その先は少し垂れて赤く色づいている。顔の色は雪よりも白く青みを帯びていて額はとてつもなく広く、下半分の顔が長いのは全体も長い顔なのだろう。瘦せた身体は骨張ってい

て肩の辺りは衣の上からも骨張っているのが解る。唯一美しいのは頭の形と髪のかかり方、その量と長さであつた。また、彼女の衣装は色の白けた単衣、もとの色目が分らないくらい黒く汚れた桂だつたが、上に羽織る黒貂の皮衣だけは立派で香がたきしめられている。黒貂の皮衣は高価な品ではあるが、女性が着るものではない。

亡き宮の持ち物であつたのだろうか。単衣や桂は宮家の姫君が身につけるようなものではないにもかかわらず、男性用の羽織り物は立派なのである。これが常陸宮家の現状であり、没落した宮家の有り様を示したものといえる。

これらは、末摘花という人物を強く印象付けると同時に、「何に残りなう見あらはしつらむ」という光源氏の後悔と衝撃の大きさを余すことなく伝えている。また、「あさましう高うのびらかに、先の方すこし垂りて色づきたる」という彼女の赤い鼻は、この巻及び彼女の呼び名となる「末摘花」に通じるものとして光源氏と命婦の和歌、紫の上との遊び等で繰り返される。この特徴的な「赤い鼻」が彼女の呼び名になったのだ。

しかし、この末摘花巻を見てみるとこうした記述が見られるようになるのは巻の後半になってからだ。巻の名が示すように、これは末摘花と呼ばれる姫君の物語である。にもかかわらず、彼女の容姿等が紹介されるのは、物語の後半なのだ。しかも、その彼女の容貌

は「めづらしきさま」として詳細に示される。『源氏物語』の中でもこの様に醜く描かれた女性はいない。その反面、巻前半においては彼女はその姿を明らかにせず、大輔命婦の語りと常陸宮邸の状況といった抽象的なものによつてのみ、その人物像が形作られているのだ。

この巻は桐壺・帚木・空蝉・夕顔・若紫に続く巻であり、光源氏の若い頃の恋愛譚が続く流れの中に位置し、それぞれの巻と関係しながら紡ぎ出された物語でもある。この頃の光源氏は、彼自身が力を持っているのではなく、父・桐壺帝や舅・左大臣の庇護下で成長している時期である。とすれば、光源氏と末摘花の関係にも〈左大臣家〉が影響を与えているのではないかと考えた。そこで、この〈左大臣家〉に注目して末摘花巻を読み解いてみたい。

二 〈左大臣家〉と常陸宮

末摘花巻は、亡くなった夕顔を忘れられない光源氏の姿を示すことで始まる。

ここもかしこも、うちとけぬかぎりの、気色ばみ心深き方の御いどましさに、け近くうちとけたりし、あはれに似るものなう恋しく思ほえたまふ。

いかで、ことごとしきおぼえはなく、いとらうたげならむ人のつつましきことならむ、見つけてしがなと懲りずまに思しわたれば、すこしゆるぎて聞こゆるわたりは、御耳とどめたまはぬ限なきに、さてもやと思しよるばかりのけはひあるあたりにこそ、一行をもほめかしたまふめるに、なびききこえずもて離れたるはをさをさあるまじきぞいと目馴れたるや。

（末摘花 ① 二六五頁）

巻冒頭において、まず光源氏の求める女性像として具体的に夕顔が提示され、彼女の様な女性を求めるが巡り会うことの出来ない彼の現状が描かれる。つまり、この巻は夕顔巻を承けるとともに、帚木巻から始まった光源氏の恋人探しが続く行われていることを示しているのである。恋人を求める理由「ここもかしこも、うちとけぬかぎりの、気色ばみ心深き方の御いどましき」が改めて示されていることにも注目したい。この「うちとけぬかぎりの、気色ばみ心深き方」が葵や六条御息所を指していることは改めて指摘するまでもない。彼女たちは、身分高く教養のあるいわゆる貴婦人である。彼の身分・教養に釣り合う女性たちではあるが、彼が恋しく想うのは彼女たちではない。彼が求めるのは「ことごとしきおぼえはなく、いとらうたげならむ人の慎ましきことならむ」女性であり、夕顔こそが求める理想の女性像として彼の心を占めているのである。

さて、この巻における光源氏の行動範囲は宮中・左大臣邸・二条院・常陸宮邸の四カ所であり、六条御息所邸は出てこない。そこで、この巻での「うちとけぬかぎりの、気色ばみ心深き方」は（左大臣家）の葵と考えれば、この巻での光源氏の妻及び恋人は、葵・夕顔・末摘花の三人となる。したがって、三人の女性について少し整理しておきたい。

光源氏の正妻・葵は、左大臣と北の方の一人娘であり、将来の春宮妃として大切に育てられた。二人の結婚については第一部第二章第2節すでに述べたように、彼は葵を「うちとけぬかぎりの、気色ばみ心深き方」と思っている。そのため彼の足は積極的に（左大臣家）に向くことははない。しかし、彼女が世間にも認められた正妻である以上、（左大臣家）に通う事は彼の日常であり、そこから外れることは難しい。

夕顔は、彼にとつて「ことごとしきおぼえはなく、いとらうたげならむ人の慎ましきことならむ」女性であったが、突然亡くなったことで彼の理想の女性と成り得たといえる。彼女の身分・素性は、彼女の死後右近によって光源氏に伝えられ、その際に彼女が以前は頭中将の恋人であり彼の娘がいることも伝えられる。奇しくも、光源氏と頭中将は夕顔を巡ってライバル関係にあったのだ。この事実とは、末摘花を巡る二人の関係に影響を与えているが、それについて

は後に述べることにする。

さて、末摘花は宮の姫君である。

故常陸の親王の末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御むすめ、心細くて残りゐたる

(末摘花 ① 二六六～二六七頁)

常陸宮が晩年にもうけ、たいそうかわいがって育てたという彼女は、宮腹の姫君である葵よりもその身分は高いといつていいだろう。末摘花はその容貌や言動から軽く見られがちな印象を受けるが、夕顔とは異なり、葵と対等な扱いを受けてもいい姫君なのである。ただ、末摘花は「心細くて残りゐたる」姫君であり、一方の葵は権力の中枢にいる〈左大臣家〉の大切な一人娘であった。何も持たない娘と権力者の娘。その境遇の差に、光源氏が末摘花に対して興味を抱くことになった要因を見ることができるといえる。

次に、この巻での光源氏の行動範囲である宮中・左大臣邸・二条院・常陸宮邸の様子を見ておきたい。この中で、宮中・左大臣邸・二条院は彼が日常生活を送る場である。

内裏には、もとの淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方の人々まで散らずさぶらはせたまふ。里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨下りて、二なう改め造らせたまふ。もとの木立、山のたえずまひおもしろき所なりけるを、池の心広くしなして、めで

たく造りののしる。

(桐壺 ① 五〇頁)

宮中での宿直所は、母・更衣がいた淑景舎であり彼女の生前時と同様に設えている。里邸である二条院も、帝の命で彼にふさわしい屋敷へと修繕されている。

一方の左大臣邸は、当代の権力者の邸であることを考えれば、その様子も自ずと想像できよう。

おほかたの気色、人のけはひも、けざやかに気高く、乱れたるところまじらず、なほこれこそは、かの人々の棄てがたくとり出でしまめ人には頼まれぬべけれど思すものから、あまりうらはしき御ありさまの、とけがたく恥づかしげに思ひしづまりたまへる

(帚木 ① 九一頁)

殿にも、おはしますらむと心づかひしたまひて、久しう見たまはぬほど、いとど玉の台に磨きしつらひ、よろづをととのへたまへり。

(若紫 ① 二二六頁)

いずれも光源氏を迎えるために整えられた左大臣邸の様子的一端である。〈左大臣家〉の気高さやその財力が覗える一方で、そのきまじめさや窮屈さが表れている。しかし、宮中・二条院・左大臣邸と彼が日常生活を送る場所が、当時としても華やかで美しい場所であったことを忘れてはならない。こうした場所があるために、常陸宮邸の寂れた様子が鮮やかに描き出されるのだ。

末摘花の住む常陸宮邸の現状は、「いといたう荒れわたりてさびしき所」(末摘花 ① 二六九頁)、「あはれげなりつる住まひのさま」(末摘花 ① 二七四頁)と表され、その古さと荒れた様子があちらこちらに描かれている。

几帳など、いたくそこなはれたるものから、年経にける立処変らず、おしやりなど乱れねば、心もとなくて、御達四五人ゐたり。御台、秘色やうの唐土のものなれど、人わろきに、何のくさはひもなくあはれげなる、まかでて人々食ふ。隅の間ばかりにぞ、いと寒げなる女ばら、白き衣のいひしらず煤けたるに、きたなげなる褶ひき結びつけたる腰つきかたくなしげなり。

(末摘花 ① 二八九〜二九〇頁)

御車寄せたる中門の、いといたうゆがみよろぼひて、夜目にこそ、しるきながらもよろづ隠ろへたること多かりけれ、いとあはれにさびしく荒れまどへる (末摘花 ① 二九五頁)

先に示した末摘花の着ているものの様子と併せて考えれば、常陸宮邸の荒れ果て、貧しい様子は明らかである。

以上の様に、「ことごとしきおぼえはなく、いとらうたげならむ人の慎ましきことならむ」女性・夕顔の代わりになるかもしれない末摘花は、光源氏が日常を送る(左大臣家)と比較対象されながら造型されている。左大臣邸と常陸宮邸、この二つの邸が対極にある

ことは、光源氏が常陸宮邸を訪れた際にも明らかである。彼は十六夜の月が美しい頃常陸宮邸を訪れ、彼女の弾く琴を聴いた。

ほのかに掻き鳴らしたまふ、をかしう聞こゆ。なにばかり深き手ならねど、物の音がらの筋ことなるものなれば、聞きにくくも思されず。

(末摘花 ① 二六九頁)

上手というほどではないがかすかにかき鳴らされる琴の音はおもしろく聞こえた。この宮邸から帰るところを頭中将に見つかり二人で左大臣邸に向かうことになるが、そこで行われたのは合奏だった。つれなう今来るやうにて、御笛ども吹きすさびておはすれば、大臣、例の聞き過ぐしたまはで、高麗笛とり出でたまへり。いと上手におはすれば、いとおもしろう吹きたまふ。御琴召して、内にも、この方に心得たる人々に弾かせたまふ。

(末摘花 ① 二七三頁)

頭中将と二人笛を吹きあわせば、左大臣が高麗笛で参加し、さらには女房達に琴を弾かせて楽の遊びとなっていく。これは女房も含めた(左大臣家)の人々の教養であり嗜みなのだ。この二つの場面の連続は、今をときめく(左大臣家)と顧みる人のいない常陸宮邸の差を鮮やかに描き出している。

三 光源氏と末摘花

次に、光源氏が末摘花と関係を持つ過程について見ていく。夕顔の様な女性を求めてやまぬ光源氏に、末摘花のことを耳に入れたのは大輔女房であった。彼女の人となりや暮らしぶりは大輔女房から聞かされるだけであり、彼が彼女自身を知る手段は何一つなかった。光源氏は大輔女房からの情報と、彼の聞き知った常陸宮像から末摘花という姫君を想像するしかない。そこに彼の錯誤が生じる。

「心ばへ容貌など、深き方はえ知りはべらず。かいひそめ人疎うもてなしたまへば、さべき宵など、物越しにてぞ語らひはべる。琴をぞなつかしき語らひ人と思へる」と聞こゆれば、「三つの友にて、いま一くさやうたてあらむ」とて「我に聞かせよ。父親王の、さやうの方にいとよしづきてものしたまうければ、おしなべての手づかひにはあらじと思ふ」と語らひたまふ。「さやうに聞こしめすばかりにははべらずやあらむ」と言へば、「いたう気色ばましや。このごろのおぼろ月夜に忍びてものせむ。まかでよ」とのたまへば、わづらはしと思へど、内裏わたりものどやかなる春のつれづれにまかでぬ。

（末摘花 ① 二六七頁）

先に示したように、常陸宮が晩年にもうけ大変かわいがって育てたといわれる姫君が末摘花である。大輔命婦は、末摘花という人物に

ついてその性質や容貌はよく知らないといいながら、誰ともつきあわずひっそりと暮らしていることや、琴が特に親しい友であることを伝えている。一方の光源氏は、噂や伝聞で彼女の人となりや想像して、琴の音を聴きたいと望む。大輔命婦は洩るが、結局彼に負けて段取りを整えることになった。光源氏にしてみれば、想像するしかない姫君の実情を推し測る一つ的手段として彼女の琴を聴くという行為を望んだのであろう。「寂しく暮らす宮の姫君」に興味を抱いた光源氏は、漸く彼女を訪問する機会を得たのだ。

さて、実際に末摘花の琴の腕はどの程度のものであったのか。琴の演奏を促す大輔命婦に「聞き知る人こそあなれ。もしきに行きかふ人の聞くばかりやは」（末摘花 ① 二六八頁）と末摘花が答えていることから、彼女は自分の腕に自信をもっていたことが伺える。しかし、大輔命婦が光源氏に対して姫君の琴をあまり聴かせないよう振る舞ったことを見れば、その演奏がどの程度のものであったのか容易に推測出来るだろう。

いという荒れわたりてさびしき所に、さばかりの人の、古めかしうところせくかしづきすゑたりけむなごりなく、いかに思ほし残すことなからむ、かやうの所にこそは、昔物語にもあはれなることどももありけれなど思ひつづけても、ものや言ひ寄らましと思せど、うちつけにや思さむと心恥づかしくて、やす

らひたまふ。

(末摘花 ① 二六九頁)

琴の音を聞くことができた彼は、末摘花を「荒れ果てた邸に住み悲しい思い抱きながら暮らす気の毒な姫君」としてとらえ、近づきたいが姫君に失礼に当たるのではないかとためらいを見せている。彼は末摘花を「宮の姫君」という身分にふさわしい女性と認識し、対応しているのだ。

さらに、光源氏の気持ちを彼女に向かわせる要因として〈左大臣家〉の頭中将が関わってくる。光源氏が常陸宮邸を訪れた十六夜の月、彼の後を追って頭中将もまた宮邸を訪れ彼女の琴の音を聞いていたのである。

君たちは、ありつる琴の音を思し出でて、あはれげなりつる住まひのさまなども、様変へてをかしう思ひつづけ、あらましごとに、いとをかしうらうたき人の、さて年月を重ねゐたらむ時、見そめていみじう心苦しくは、人にももて騒がるばかりやわが心もさまあしからむなどさへ、中将は思ひけり。この君のかう気色ばみ歩きたまふを、まさにさては過ぐしたまひてむやと、なまねたうあやふがりけり。

(末摘花 ① 二七四頁)

この一件で、頭中将にとっても末摘花は心惹かれる女性となった。その結果、末摘花のもとには光源氏と頭中将の二人から文が届く。頭中将の存在は光源氏を刺激し、必要以上に彼の心を彼女に向かわ

せることとなった。つまり、彼への対抗心から光源氏はわずかな琴の音を聞いただけの末摘花を得ることに心を砕くのである。ここには、夕顔を挟んで彼と頭中将がライバル関係にあったことも影響しているのではないか。末摘花が夕顔の代わりと考えているのは光源氏だけであり、夕顔と頭中将の関係を知っているのも彼だけである。藤井貞和氏も指摘する^(註1)ように、こうした状況が彼から冷静さを奪ったと考えてよいはずだ。

しかし、二人から文をもらった末摘花が彼らに文を贈ることはない。彼女は返事を返すことが出来る様な女性ではなかったのだ。しかし、末摘花という人物を知らない彼らは、彼女が相手だけに文を送ったのではないかと疑い、互いのライバル心から必要以上に彼女に関心を持つに至る。

君は、深うしも思はぬことの、かう情なきを、すさまじく思ひなりたまひにしかど、かうこの中将の言ひ歩きけるを、言多く言ひ馴れたらむ方にぞなびかむかし、したり顔にて、もとのことを思ひ放ちたらむ気色こそ愁はしかるべけれど思して、命婦をまめやかに語らひたまふ。

(末摘花 ① 二七五―二七六頁)

実際のところ、光源氏は彼女に対して深い関心を持つてはいなかった。しかし、頭中将がいろいろ寄っていることを耳にしてからは、彼を

出し抜くために大輔命婦に相談を持ちかける。頭中将が末摘花に關心を持たなければ、光源氏もこれ程強く彼女を得ようとは考えなかっただろう。

「いでや、さやうにをかしき方の御笠宿にはえしもやと、つきなげにこそ見えはべれ。ひとへにものつつみし、ひき入りたる方はしも、ありがたうものしたまふ人になむ」と、見るありさま語りきこゆ。

(末摘花 ① 二七六頁)

大輔命婦は、末摘花は内気で源氏の立ち寄り所としては不向きであると告げる。彼女は末摘花という人物がこの二人を夢中にするような姫君ではないことを知っていて、光源氏にそのことをほのめかしているのである。しかし、頭中将への対抗心から冷静さを欠いている彼は、この命婦の言葉に耳を貸さないばかりか、更に錯誤を重ねる。

「らうらうじうかどめきたる心はなきなめり。いと兎めかしうおほどかならむこそ、らうたくはあるべけれ」

(末摘花 ① 二七六頁)

隙がなく物慣れた様を嫌うのは〈左大臣家〉の葵に対する反発から来るものだろうか。彼女の子どもつばい所がいじらしいと感じる彼は、大輔命婦の言葉の裏を読み取ることができない。〈左大臣家〉の頭中将の行動も気がかりになっている。つまり、光源氏に末摘花

のことを教えたのは大輔命婦だが、彼女を得ることに彼を駆り立てたのは〈左大臣家〉だったのだ。

四 光源氏の苦悩

秋のころほひ、静かに思いつづけて、かの砧の音も、耳につきて聞きにくかりしさへ、恋しう思し出でらるるままに、常陸の宮にはしばしば聞こえたまへど、なほおぼつかなのみあれば、世づかず心やましう、負けてはやまじの御心さへ添ひて、命婦を責めたまふ。

(末摘花 ① 二七七頁)

秋になり、夕顔を思い出した光源氏は末摘花に文を送るが何の手応えもない。そのことで彼は命婦を責めるが、その彼の感情に「負けてはやまじの御心」があることが示されている。季節が巡っても、いまだ彼が錯誤の中に漂っている様が見て取れるのだ。あれこれと命婦を責め立てた結果、とうとう光源氏は末摘花と逢うことができた。

正身は、ただ我にもあらず、恥づかしくつつましきよりほかのことまたなければ、今はかかるぞあはれなるかし、まだ世馴れぬ人のうちかしづかれたると見ゆるしたまふものから、心得ずなまいとほしとおぼゆる御さまなり。何ごとにつけてかは御心

のとまらむ、うちうめかれて、夜深う出でたまひぬ。

（末摘花 ① 二八四頁）

暗い中で直接向き合った姫君に対して、光源氏は今まで抱いていた好印象とは異なる感触を得る。彼女に対して抱いた違和感についてその理由を彼はあれこれと考えてみるのだが、どうにも合点がゆかず「うちうめかれて」常陸宮邸を辞することになった。

この段階で、彼は末摘花の容姿を見たわけではない。おそらく語り合うこともなかったであろうし、当然心通わすことも安らぎを覚えることもなかったであろう。ようやく彼は夕顔の身代わりという幻想と〈左大臣家〉を意識することで生じた錯誤から抜け出し、末摘花本人を認識し始めるのである。

二条院におはして、うち臥したまひても、なほ思ふにかなひがたき世にこそと思いつづけて、軽らかならぬ人の御ほどを心苦しと思しける。
（末摘花 ① 二八五頁）

常陸宮邸から自邸へ帰った光源氏は思い通りに行かない現実を嘆き、彼女のことをその身分を考えれば軽々しく扱えない現状を思い悩んでいる。しかし、こうした悩ましい現状から彼を救い出すのもまた〈左大臣家〉の頭中将であった。頭中将は光源氏を宮中へ誘い、本来存在すべき日常へと引き戻す。「朱雀院の行幸」という行事を控え、光源氏は日暮れまで宮中に滞在した。この段階で、すでに彼

は末摘花に対する興味関心を失っている。彼女のもとを訪れないばかりか、後朝の文さへも夕方に届ける始末である。彼女に対して過大な期待を抱いていた彼の受けたショックが大きかったことは想像に難くない。しかし、末摘花の身分を考えれば、あまりにひどい仕打ちといえよう。

しかし、末摘花も「正身は、御心の中に恥づかしう思ひたまひて、今朝の御文の暮れぬれど、なかなか咎とも思ひわきたまはざりけり」
（末摘花 ① 二八六頁）とあるように光源氏の態度を失礼だとも思わず、非難することもない。そのうえ返事の文も書けぬ有様で、いつものように侍従が教えて書かせるのであった。彼女は、女房達にせかれ侍従に依存する姫君であり、そこに彼女の意志はない。恥づかしいという感情はあるが、どうすればいいのか分からない幼子のような彼女自身が存在するだけである。

紫の紙の年経にければ灰おくれ古めいたるに、手はさすがに文字強う、中さだの筋にて、上下ひとしく書いたまへり。見るかひなうち置きたまふ。いかに思ふらんと、思ひやるもやすからず。かかることを悔しなどはいふにやあらむ、さりとていかはせむ、我はさりともし心長く見はててむと思しなす御心を知らねば、かしこにはいみじうぞ嘆いたまひける。

（末摘花 ① 二八七頁）

宮中にいる光源氏の元へ届けられた彼女の文は、彼の彼女に対する失望をさらに大きくするものであった。宮中という場所と宮家の姫君の書いた古ぼけた時代遅れの文。常陸宮家の没落の様が強調されていると思うのは考えすぎだろうか。末摘花が暮らす常陸宮邸と光源氏の日常には大きな隔たりがあることは明らかである。

その夜、光源氏は宮中から退出する左大臣とともに（左大臣家）に向かう。ここでは行幸の準備に忙しく、技を競い合う楽の音が賑やかである。行幸の準備の忙しさにかこつけて、彼は末摘花を訪れようとはしない。（左大臣家）での日常を送る光源氏には、常陸宮邸も末摘花もすでに遠い存在でしかないのだ。

（左大臣家）に代表される日常に戻った光源氏だったが、結局末摘花を見棄てることはできなかった。大輔命婦の訴えもあり行幸の準備の忙しさが一段落ついた後、彼は常陸宮邸を訪れる。この雪の日の明け方、光源氏は末摘花の容姿を目にする。彼女の容貌と彼の受けた衝撃は既に述べた。しかし、ここで彼が彼女と常陸宮邸の現状に直面した事は、彼に自らの取るべき道をはっきりと認識させることになったのである。

世の常なるほどの、ことなることなさらば、思ひ棄ててもやみぬべきを、さだかに見たまひて後はなかなかあはれにいみじくて、まめやかなるさまに常におとづれたまふ。黒貂の皮な

らぬ絹、綾、綿など、老人どもの着るべき物のたぐひ、かの翁のためまで上下思しやりて奉りたまふ。かやうのまめやか事も恥づかしげならぬを、心やすく、さる方の後見にてはぐくまむと思ほしとりて、さまことにさならぬうちとけわざもしたまひけり。

（末摘花 ① 二九七頁）
自分以外、誰が彼女の世話をできようか。光源氏はそう考えることで、彼女の暮らし向きの後見を務めることにする。末摘花がこうした援助を恥づかしがらないことも幸いした。

例のありさまよりは、けはひうちそよめき世づいたり。君もすこしたをやぎたまへる気色もてつけたまへり。

（末摘花 ① 三〇三頁）
正月七日の夜に訪れた常陸宮邸の様子は、これまでよりも賑やかで、末摘花も少しもの柔らかな様子である。光源氏の援助によつて、彼女は常陸宮家の姫君としての対面を保つことのできる生活を手に入れたのだ。

「世の常なるほどの、ことなることなさらば、思ひ棄ててもやみぬべき」とあるように、彼女が世間並みの容貌ならば光源氏はこのまま彼女との関係を解消していただろう。彼女はその醜さ故に光源氏の庇護を受けて生活できるようになった。そこには、常陸宮の遺児を援助する意味もあったのだ。

我ならぬ人はまして見忍びてむや、わがかうて見馴れけるは、故親王のうしろめたしとたぐへおきたまひけむ魂のしるべなめ

り
(末摘花 ① 二九五～二九六頁)

源氏はこの末摘花との関係を、姫君の身を案じた常陸宮の導きと考えている。安定した生活を送る光源氏は、同じ皇族として末摘花の姫君の生活を支えたのである。

五 おわりに

光源氏が「ことごとしきおぼえはなく、いとらうたげならむ人の慎ましきことならむ」女性を求めたのも、彼が末摘花を得ようと大輔命婦をせかしたことに、(左大臣家)の影響があつた。その一方で、光源氏を本来あるべき日常に戻したのも(左大臣家)であつた。

末摘花が、夕顔の代わりとして登場したことは疑うべくもないが、彼女に常陸宮の姫君という身分を与えたのは(左大臣家)の葵の比較対象として考えたためではないだろうか。権力者の一人娘と忘れられた宮の姫君。美女と醜女。この二人は常に対極に位置し、光源氏の日常と非日常を形成している。しかし、葵本人はこの末摘花巻には登場しない。左大臣と頭中将によって(左大臣家)の存在が表されることで、そこに居るはずの葵の存在が意識されているのだ。

父・桐壺帝や舅・左大臣の庇護下にある光源氏の恋愛譚に、正妻・葵の存在は決して欠くことができない。とすれば、この末摘花の物語に(左大臣家)が影響を与えることも当然のことだったのだ。

末摘花の性質や容貌を目の当たりにした光源氏は、(左大臣家)という日常に戻る。

かかることを悔しなどはいふにやあらむ、さりとていかがはせむ、我はさりともし心長く見はててむと思しなす

(末摘花 ① 二八七頁)

源氏は末摘花に失望するとともに自らの過ちを悔やむ一方で、彼女の世話をするのは自分しかいないと考えている。これは、常陸宮の血筋に対する同族からの援助という意味合いもあつただろう。石川徹氏は末摘花を援助する光源氏の姿に、彼の人間的成長を指摘している。^(註2)援助を「故親王のうしろめたしとたぐへおきたまひけむ魂のしるべ」と思う光源氏に、皇族を支える意識があつたとすれば、それは(源氏)であることを彼が意識したことになるのではないか。この後(左大臣家)から離れ対立しながら(源氏)の家を築く光源氏の姿の始まりがここに見られることも、末摘花と(左大臣家)の関係が産み出したものなのかも知れない。

註

註 1 藤井貞和氏は次のように述べている。

夕顔が、頭中将のさきを知る女性であつたのにたいして、この女性にはさきに近づこうと、源氏はむきになり、あせらされてゆく。

「末摘花の巻の方法」(『源氏物語論』所収 岩波書店
平 12・3)

註 2 石川徹氏は次のように述べている。

短編小説として見ずに、光源氏の一生の伝として見る長編的見方からいえば、この若げの過ちに、光君の人的成長を助ける、いわばその人生航路上の一つの試練としての意義を持たせてもいるのであって、末摘花との出会いは、光君という人間に幅や深みを増し、いわゆる禍福転移の道を開いたことにもなる。

「末摘花論」(『平安時代物語文学論』所収 笠間書院
昭 54・4)

2 蓬生巻と〈受領〉

一 はじめに

蓬生巻は末摘花巻に続く末摘花の物語である。しかし、末摘花巻では印象的に描かれた彼女の容姿について、蓬生巻ではほとんど触れられることがない。

音泣きがちに、いと思し沈みたるは、ただ山人の赤き木の実ひとつを顔に放たぬと見えたまふ御側目などは、おぼろけの人の見たてまつりゆるすべきにもあらずかし。くはしくは聞こえじ、いとほしうもの言ひさがなきやうなり。

(蓬生 ② 三三六頁)

困窮した生活の中、乳母子の侍従にも去られることになって泣き暮れる末摘花の姿が、見るに堪えないものであっただろうことは想像に難くない。それを「ただ山人の赤き木の実ひとつを顔に放たぬ」として「おぼろけの人の見たてまつりゆるすべきにもあらずかし。くはしくは聞こえじ、いとほしうもの言ひさがなきやうなり」とさりと触れるだけで済ませている。彼女の容姿はすでに強く印象づけられており今更語るまでもない。その彼女がこの巻では荒れはてた邸とその調度品を故常陸宮より受け継いだものとして決して手放

さずに守り、光源氏の訪れを静かに待つ一人の女性として描かれている。

この二つの巻に描かれる末摘花の人物像が異なる印象を与えることはすでに多くの先学によって指摘されている。森一郎氏は蓬生巻における末摘花について「古風さということを、常陸宮の姫君という高い出自に胚胎するものとして、末摘花という人物の持つ唯一最上の美質としてとらえる描き方がなされ、殊に源氏との再会の場面では、朴念仁、末摘花らしからぬ、女君らしい艶情すら見られる」として、その理由に須磨に蟄居することで人々の心の移ろいを認識した光源氏の変化を指摘する。その上で、末摘花巻と蓬生巻での彼女の描かれ方の違いについて次のように述べている。^(註1)

末摘花巻の構想、主題と、蓬生巻の構想、主題とが全然別個であるところに、同一人物の性格への照明の当て方がちがつてきたことが知られよう。

末摘花自身が変化したのではなく、彼女の担う役割によって強調されるべき性質が異なったのだと指摘している。武原弘氏もまた「末摘花像が変貌したかに見えるのは、両巻の方法のちがいによるもので、そこに作者の創作技法と人間認識の進展を見たい。」と述べており、末摘花の本質は変化していないとの立場をとっている。^(註2)

末摘花・蓬生両巻が末摘花の物語であることはいうまでもない。

では、なぜ両巻における彼女の人物像に差異があるのか。その理由は、彼女をとりまく人々の違いにあると考える。両巻を通して末摘花という存在は変わらない。彼女に与えられた常陸宮の姫君という身分・立場も変わらない。この変わらない〈宮家〉が蓬生巻にどのような影響を与えているのか、そこに答えが見えてくるのではなからうか。

二 末摘花と紫の上

蓬生巻の登場人物の中で、上流貴族社会に属する人物は光源氏と紫の上・花散里の三名である。この中で花散里については末摘花の存在を光源氏に気づかせる役割を担っただけで、宮邸で彼女が噂されることもない。一方、紫の上は〈宮家〉の姫君であると同時に光源氏の庇護を寵愛という形で受けている。彼女の生活は光源氏によって十分に保証されており、彼が須磨へ蟄居することになってもそれは変わることがなかった。その点は、末摘花と大きく異なっている。まずは蓬生巻における紫の上と末摘花の違いについて見ておきたい。

蓬生巻冒頭は、光源氏の須磨への蟄居と都に残された女性たちの様子が描かれている。

二条の上などものどやかにて、旅の御住み処をもおぼつかかなからず聞こえ通ひたまひつつ、位を去りたまへる飯の御よそひをも、竹の子の世のうき節を、時々につけてあつかひきこえたまふに慰めたまひけむ、なかなか、その数と人にも知られず、立ち別れたまひしほどの御ありさまをもよそのことに思ひやりたまふ人々の、下の心くだきたまふたぐひ多かり。

（蓬生 ② 三二五頁）

紫の上はその暮らしに不自由はなく、文のやりとりや衣装を整えるなど光源氏との関係は深い。彼女以外にも彼の不遇に胸を痛める女性が多かったようである。その中で、末摘花の姫君にスポットライトを当てたのがこの蓬生巻である。そして、この巻で光源氏に近い人物としてその存在が語られるのが紫の上なのだ。

大将殿の造り磨きたまはむにこそは、ひきかへ玉の台にもなりかへらめとは頼もしうははべれど、ただ今は式部卿宮の御むすめより外に心わけたまふ方もなかなり。昔よりすきずきしき御心にてなほざりに通ひたまひける所どころ、みな思し離れにたり。まして、かうものはかなきさまにて藪原に過ぐしたまへる人をば、心清く我を頼みたまへるありさまと尋ねきこえたまふこと、いと難くなむあるべき

（蓬生 ② 三四〇頁）

かの殿には、めづらし人に、いとどもの騒がしき御ありさま

にて、いとやむごとく思されぬ所どころにはわざともえ訪れたまはず。まして、その人はまだ世にやおはすらむとばかり思し出づるをりもあれど、たづねたまふべき御心ざしも急がであり経るに、年かはりぬ。 (蓬生 ② 三四三〜三四四頁)

都に帰った光源氏が紫の上のみを寵愛していること、他の女性の所を訪れることがないことが示されている。このような光源氏の行動は、末摘花巻にも見ることができた。

かの紫のゆかり尋ねとりたまひては、そのうつくしみに心入りたまひて、六条わたりにだに離れまさりたまふめれば、まして荒れたる宿は、あはれに思しおこたらずながら、ものうきぞわりなかりける。 (末摘花 ① 二八九頁)

光源氏の寵愛する式部卿宮の姫君・紫の上と訪れる気にならない常陸宮の姫君・末摘花。ただ、紫の上は式部卿宮の姫君ではあっても父宮とは疎遠であり、実母と育ててくれた祖母とはすでに死別している。宮家の血筋と頼るべき人物の欠如は二人の姫君に共通しているが、彼女たちの容貌は大きく異なる。また、祖母の死により居住する場所を失った紫の上は光源氏に引き取られ二条院に生活の場を与えられるが、末摘花は父宮から引き継いだ常陸宮邸に住み続けている。このことは、紫の上が転居することで光源氏が属する上流貴族社会に存在し続けることができた一方で、宮邸から動かないこと

で末摘花がそこからこぼれ落ちたことを示しているのである。

末摘花巻は宮中・左大臣邸・二条院・常陸宮邸の四カ所を舞台とし、彼女の宮家の姫君という出自もあつて上流貴族社会との関わりの中で物語が展開している。しかし、蓬生巻は全編常陸宮邸を舞台とし、その邸内から離れることなく物語が展開している。上流貴族社会に属する紫の上はその消息が語られるのみで、光源氏が末摘花を訪れることもない。つまり、この巻での常陸宮邸は上流貴族社会から完全に切り離された空間として存在しているのだ。その結果、受領という新たな身分社会がこの空間に影響を与え物語を展開させるのであるが、それは後に述べることで、まずは常陸宮邸という物語空間がどのように変化していったのかを見ておきたい。

三 常陸宮邸

元々、常陸宮邸は忘れられた邸であった。

父親王おはしけるをりにだに、古りにたるあたりとておとなひきこゆる人もなかりけるを、まして今は、浅茅分くる人も跡絶えたる (末摘花 ① 二七八〜二七九頁)

御車寄せたる中門の、いいたうゆがみよろぼひて、夜目にこそ、しるきながらもよろづ隠るへたること多かりけれ、いと

あはれにさびしく荒れまどへるに、松の雪のみあたたかげに降りつめる
(末摘花 ① 二九五頁)

常陸宮が存命の時ですえ時流に乗った宮家でもないこの邸を尋ねる人はなく、宮が亡くなった後は人も途絶えている。光源氏の乗る車を寄せた中門も傾き、雪の積もった松の木だけが暖かそうに見える。常陸宮邸の困窮した様子は光源氏の眼で明らかにされ、彼の援助によつて宮家としての暮らしが保てるようになった様を描いて末摘花巻は閉じられた。

一方、蓬生巻では光源氏は須磨で蟄居生活を送っており、そのため彼からの援助は絶えてしまっている。援助が絶たれた常陸宮邸の荒廃は末摘花巻とは比較にならない程進んでいる。そして、その荒廃は建物だけで亡く仕える人もまた少なくなっていく様子が描かれている。

古き女ばらなどは、「いでや、いと口惜しき御宿世なりけり。おぼえず神仏の現れたまへらむやうなりし御心ばへに、かかるよすがも人は出でおはするものなりけりとありがたう見たてまつりしを、おほかたの世のことといひながら、また頼む方なき御ありさまこそ悲しけれ」とつぶやき嘆く。さる方にありつきたりしあなたの年ごろは、言ふかひなきさびしさに目馴れて過ぐしたまふを、なかなかすこし世づきてならひにける年月に、

いとたへがたく思ひ嘆くべし。すこしもさてありぬべき人々は、おのづから参りつきてありしを、みな次々に従ひて行き散りぬ。女ばらの命たへぬもありて、月日に従ひて、上下の人数少なくなりゆく。
(蓬生 ② 三二六―三二七頁)

光源氏の援助が途絶えて生活が苦しくなってきたことを古女房は嘆く。貧しい生活が普通であった昔であればある程度の貧乏は我慢できていただろうが、世間並みの暮らしに慣れてしまったために女房たちは辛抱ができなくなって次々に去って行った。元からいた女房たちも年配の者は「女ばらの命たへぬ」こともあつて、彼女を知り守る者が減っていったのだ。

さらに、宮邸の荒れた様子は繰り返し、そして詳細に描き出されている。

もとより荒れたりし宮の内、いとど狐の住み処になりて、疎ましく遠き木立に、鼻の声を朝夕に耳馴らしつつ、人げにこそさやうのものもせかれて影隠しけれ、木霊など、けしからぬ物ども所を得てやうやう形をあらはし、ものわびしきことのみに数知らぬに
(蓬生 ② 三二七―三二八頁)

浅茅は庭の面も見えず、しげき蓬は軒をあらそひて生ひのぼる。葎は西東の御門を閉じ籠めたるぞ頼もしけれど、崩れがちなるめぐりの垣を馬、牛などの踏みならしたる道にて、春夏になれ

ば、放ち飼ふ総角の心さへぞめざましき。

(蓬生 ② 三二九頁)

狐の住み処、梟の鳴き声、木霊。常陸宮邸は住む人にとって気味の悪い場所へと変化している。また、軒まで生い茂った蓬、葎は東西の門が開かない程生い茂り、崩れがちな垣は馬や牛が踏みならした場所が通り道になっている始末。あげくに春夏になれば牛飼いの童が屋敷の中で放牧している。もはや、宮邸とは認知されていないのではないかとさえ思わせる状態である。八月に野分が吹き荒れて、宮邸はさらなる崩壊に見舞われる。

廊どもも倒れ伏し、下の屋どものはかなき板葺なりなどは骨のみわづかに残りて、立ちとまる下衆だになし。煙絶えて、あはれにいみじきこと多かり。盗人などいふたぶる心ある者も、思ひやりのさびしければにや、この宮をば不用のものに踏み過ぎて寄り来ざりけれ

(蓬生 ② 三二九～三三〇頁)

渡り廊下も倒れ下屋の簡単な建物は骨組みしか残らず、下仕えの者すらいなくなった。炊事の煙も絶えた今、盗人ですら近づかない程困窮している様を示される。

霜月ばかりになれば、雪、霰がちにて、外には消ゆる間もあるを、朝日夕日をふせぐ蓬、葎の蔭に深う積もりて、越の白山思ひやらるる雪の中に、出で入る下人だになくて、つれづれと

ながめたまふ。

(蓬生 ② 三四三頁)

蓬や葎が生い茂るここ常陸宮邸では、他の邸で消える雪が消えることなく残っている。出入りする下人もいない。そこに「つれづれとながめたまふ」末摘花が生きているのだ。

時間の流れの中で、常陸宮邸は怪しいとさえ評される様に荒廃していく。屋敷が崩れ、仕える人もいなくなる。もともと人と関わることが少なかった常陸宮邸という空間が、その荒廃によりさらに閉ざされたものへと変化していく。末摘花巻では何とか上流貴族社会に連なっていた常陸宮邸も、そこから大きく離脱したことを認めざるを得ない。そこで新たにこの常陸宮邸に関わりを持つてくるのが受領階級であった。次は〈受領〉をキーワードに蓬生巻を見ていきたい。

四 〈受領〉

常陸宮邸は、荒廃したとはいっても皇族の住まいである。そこにある立木や調度は皇族の身分を体現したものであり、そうした高貴な物を求めているのが〈受領〉という階級であった。

まれまれ残りてさぶらふ人は、「なほいとわりなし。この受領どもの、おもしろき家造り好むが、この宮の木立を心につけて、

放ちたまはせてむやと、ほとりにつきて案内し申さするを、さやうにせさせたまひて、いとかうもの恐ろしからぬ御住まひに、思し移ろはなむ。立ちとまりさぶらふ人もいとたへがたし」など聞こゆれど、「あないみじや。人の聞き思はむこともあり。生ける世に、しかなごりなきわざはいかがせむ。かく恐ろしげに荒れはてぬれど、親の御影とまりたる心地する古き住み処と思ふに慰みてこそあれ」と、うち泣きつつ思しもかけず。

(蓬生 ② 三二七〜三二八頁)

宮邸がもはや人の住むところではなくなっていることは先に示した通りである。狐と梟に加えて木霊などのあやかしまでもが我が物顔で跋扈する屋敷に、女房が悲鳴を上げるのも無理はない。そんな宮邸の木立の見事さに目を付けた〈受領〉の存在が示される。風流を好む〈受領〉は「おもしろき家」を造るために宮邸の木立を譲ってほしいと申し出る。女房たちはこの申し出を受けてまじな邸に住み替えることを望むが、末摘花はそれを拒否する。「人の聞き思はむこともあり。」とあるように彼女は自身の宮家の血筋を意識して外聞を恐れる一方で、この荒れはてた屋敷に両親の面影を見ている。恐らくは、女房が求めるように屋敷を〈受領〉に売って別の場所に移れば当面の生活に必要な資金を得ることはできただろう。しかし、女房を含めこの現状を招いた宮家の人々に、資金を得て新たな生活

を切り開く才覚があるとは思えない。売っても残っても、大きな差はなかったのではなからうか。

また、宮家の調度品の数々を欲しがる人物の存在も示される。

御調度どもも、いと古代に馴れたるが昔様にてうるはしきを、なま物のゆゑ知らむと思へる人、さるもの要じて、わざとその人かの人にせさせたまへるとたづね聞きて案内するも、おのづからかかる貧しきあたりと思ひ悔りて言ひ来るを、例の女ばら、「いかがはせん。そこそは世の常のこと」とて、取り紛らはしつつ、目に近き今日明日の見苦しさをつくるはんとする時もあるを、いみじう諫めたまひて「見よと思ひたまひてこそしおかせたまひけめ。などてか軽々しき人の家の飾りとはなさむ。亡き人の御本意違はむがあらはれること」とのたまひて、さるわざはせさせたまはず。

(蓬生 ② 三二八〜三二九頁)

常陸宮家の調度品を欲する人は「おのづからかかる貧しきあたりと思ひ悔りて言ひ来る」とあるように、彼女の困窮の様につけ込み見下すような人物である。ここでも調度売って日々の生活の糧を得たい女房に対して、末摘花はそれを拒否する。このような常陸宮邸の困窮と主従の関係について池田利夫氏は次のように述べている。^(註3)

貧窮に耐えがたいのは姫君に仕える周囲の者達であつて、姫君もそうした状況を心細く思はするが、本人自身は割と平気で

ある。軒が傾いたとは言え、邸も土地も、また古めきはしたが
見事な調度も数多くある。貧乏だけであつたなら、不如意な衣
食住にも耐えられる強さを、この姫君はまだまだ持つていられ
そうである。少なくとも、容易に極限に達しないであろう。耐
えがたきは身分の尊厳がいささかでも損なわれるときである。

池田氏が指摘するように、〈受領〉の申し出を受けることを勧める
のは女房たちであり、末摘花に土地や調度を日々の糧に変えようと
いう発想はない。ここで末摘花がこだわるのは、宮家の血筋と体面
であつた。「人の聞き思はむこともあり。生ける世に、しかなごり
なきわざはいかがせむ。」「などてか軽々しき人の家の飾りとはな
さむ。」日々の生活の改善を求める女房たちに対して、あくまでも
宮家としての誇りに拘る末摘花。それは、彼女の生活にも見て取れ
る。

さすがに寝殿の内ばかりはありし御しつらひ変らず、つややか
に掻い掻きなどする人もなし、塵は積もれど、紛るることなき
うるはしき御住まひにて明かし暮らしたまふ。

(蓬生 ② 三三〇頁)

野分によつてあちこちが崩壊した邸の中で「寝殿の内ばかりはあり
し御しつらひ変らず」は変化のないことを良しとすべきなのか、変
えられない末摘花が悪いと受け止めるのか。いずれにせよ、彼女は

変わることなく彼女の知る「正しい」生活を送っている。この「紛
るることなきうるはしき御住まひ」は末摘花巻でもその一端が示さ
れている。

うちとけたる宵居のほど、やをら入りたまひて、格子のはさま
より見たまひけり。されど、みづからは見えたまふべくもあら
ず。几帳など、いたくそこなはれたるものから、年経にける立
処変らず、おしやりなど乱れねば、心もとなく

(末摘花 ① 二八九〜二九〇頁)

光源氏がのぞき見た末摘花の部屋では、ひどく痛んだ几帳を脇に除
けることなく昔から決まった場所に置いているため彼女の姿をのぞ
き見ることはできない。この部屋の様子は、末摘花の融通の利かな
い几帳面さを示すものと捉えていいだろう。

はかなき古歌、物語などやうのすさびごとにてこそ、つれづ
れをも紛らはし、かかる住まひをも思ひ慰むるわざなめれ、さ
やうのことにも心おそくものしたまふ。わざと好ましからねど、
おのづから、また急ぐことなきほどは、同じ心なる文通はしな
どうちしてこそ、若き人は本草につけても心を慰めたまふべけ
れど、親のもてかしづきたまひし御心おきてのままだに、世の中
をつつましきものに思して、まれにも言通ひたまふべき御あた
りをもさらに馴れたまはず、古りにたる御厨子あけて、唐守、

藐姑射の刀自、かぐや姫の物語の絵に描きたるをぞ時々まさぐりものにしたまふ。 (蓬生 ② 三三〇～三三一頁)

末摘花の暮らしは世間一般の姫君の暮らしとは異なる。「親のもてかしづきたまひし御心おきてのままに」暮らしているのであり、この姿勢は邸を売るとか調度品を売るという話を拒絶する彼女の姿勢に通じるものである。

古歌とても、をかしきやうに選り出で、題をも、よみ人をもあらはし心得たるこそ見どころもありけれ、うるはしき紙屋紙、陸奥国紙などのふくだめるに、古言どもの目馴れたるなどはいとすさまじげなるを、せめてながめたまふをりをりは、引きひろげたまふ。今の世の人のすめる経うち誦み、行ひなどいふことはいと恥づかしくしたまひて、見たてまつる人もなければ、数珠など取り寄せたまはず。かやうにうるはしくぞものしたまひける。 (蓬生 ② 三三一頁)

彼女が眺める和歌は珍しくも趣もない古歌であり、しかも陸奥国紙のような堅苦しい紙に書かれている。いわゆる姫君の徒然を慰めるものとはいえないような品しか持たない末摘花であるが、彼女はそれに対して不満や疑問を持つことはない。宮邸にあるもので今まで通り変わることなく過ごすことが、彼女の「かやうにうるはしくぞものしたまひける」生活なのである。

そうした彼女の日常がどうしようもなく荒れた宮邸の状況を示した後に語られることは興味深い。荒れ果てた邸内と彼女が正しいと信じているきちんとした生活。それこそが、末摘花という人物をわかりやすく示したものだといえるのではないか。〈受領〉に屈せず宮家の血筋を誇りにして暮らす彼女の姿は、末摘花巻の彼女の姿と何ら変わるものではない。ただ末摘花巻よりも彼女の生活は困窮し、彼女を取り巻く人間が上流階級に属する人々から、高貴性を求め奪おうとする〈受領〉階級の人々へと移ったために、彼女の性質が変化したように受け取られるのではないか。

五 〈宮家〉と〈受領〉

蓬生巻の末摘花は、末摘花巻の彼女より〈宮家〉の姫君としての性質が全面に出ている。それは彼女の持ち物を奪おうとする人々の出現、〈受領〉階級との対比によると考えられる。この〈宮家〉と〈受領〉にこだわりの持つ人物として末摘花の叔母が登場する。

この姫君の母北の方のはらから、世におちぶれて受領の北の方になりたまへるありけり (蓬生 ② 三三二頁)

「世におちぶれて」とあるように、〈宮家〉の北の方からすると〈受領〉の北の方はおちぶれた身の上と認識されている。「おのれをば

おとしめたまひて、面ぶせに思したりしかば、姫君の御ありさまの心苦しげなるも、えとぶらひきこえず」(蓬生 ② 三三二頁)と彼女は末摘花の母に蔑まれたことを恨み、「故宮おはせし時、おのれをば面ぶせなりと思し棄てたりしかば、疎々しきやうになりそめにしかど」(蓬生 ② 三三九頁)と常陸宮を恨んでいる。それ故に、末摘花の生活が苦しくなっても彼女は見舞うつもりはない。その彼女が末摘花を自分の娘の召使いにと考えていることが示される。

もとよりありつきたるさやうの並々の人は、なかなかよき人のまねに心をつくるひ思ひあがるも多かるを、やむごとなき筋ながらも、かうまで落つべき宿世ありければにや、心すこしなほなほしき御叔母にぞありける。わがかく劣りのさまにて、侮らはしく思はれたりしを、いかでか、かかる世の末に、この君をわがむすめどもの使ひ人になしてしがな、心ばせなどの古びたる方こそあれ、いとうしろやすき後見ならむ、と思ひて、「時々ここに渡らせたまひて。御琴の音もうけたまはらまほしがる人なむはべる」と聞こえけり。(蓬生 ② 三三二～三三三頁)この叔母は「心すこしなほなほしき御叔母にぞありける」と表され、なにかと自らを貶めた常陸宮家に復讐するために末摘花を自分の思うとおりに使ってみたいと考えている。しかし、末摘花巻の彼女を

見れば、他者と関わることができはるはずがない。にもかかわらず、叔母は彼女に自分の元へ来るようにいつづけるのだ。叔母は末摘花が彼女に親しくしないことを忌々しく思っているが、元来末摘花と叔母の間には互いに理解できないものがある。それが末摘花が守る〈宮家〉であり、それ故に二人が歩み寄ることがないのは明らかである。

大貳の北の方、さればよ、まさにかくたづきなく人わるき御ありさまを、数まへたまふ人はありなむや、仏、聖も罪軽ろきをこそ導きよくしたまふなれ、かかる御ありさまにて、たけく世を思し、宮、上などのおはせし時のままにならひたまへる御心おごりのいとほしきこと、といとどをこがましげに思ひて

(蓬生 ② 三三五頁)

移り住むことを拒否する末摘花に対して、叔母は繰り返し彼女が常陸宮の血筋を鼻にかけて自分を見下しているという。女房たちも生活に疲れたのだろう、叔母の意見に賛成している。

このように、末摘花の叔母は〈受領〉の妻になった自分を、〈宮家〉の人々が見下したことに對して、その意趣返しを末摘花に行おうとしている。一方の末摘花は、叔母のそうした悪意に気づくことはないが、叔母の意見を受け入れることは考えない。〈受領〉の叔母が抱いている劣等感が繰り返し述べられることで、末摘花の〈宮

家〉の血筋が必要以上に認識されているのだ。また、叔母が常陸宮邸に出入りするようになった時期は光源氏が帰京した時期と重なっている。閉じていく常陸宮邸の世界をこじ開け、光源氏との再会を準備するための下地造りを担ったのも〈受領〉である叔母だったのではないか。

なほかくかけ離れて久しうなりたまひぬる人に頼みをかけたまふ。御心の中に、さりとて、あり経ても思し出づるついであらじやは、あはれに心深き契りをしたまひしに、わが身はうくて、かく忘られたるにこそあれ、風の伝てにても、我かくいみじきありさまを聞きつけたまはば、かならずとぶらひ出でたまひてん、と年ごろ思しければ、おほかたの御家居もありしよりけにあさましけれど、わが心もて、はかなき御調度どもなども取り失はせたまはず、心強く同じさまにて念じ過ごしたまふなりけり。

（蓬生 ② 三三六頁）

叔母という第三者によつて、光源氏の帰京と自らの置かれた立場を認識する末摘花が描かれる。しかし、彼女は光源氏を信じている。いつか思い出してくれるだろう、自分の惨めな様子を耳にしたら訪ねてくれるに違いない。彼女はその一念で調度品を売ることもせず、昔通り堪え忍んで生きているのだ。

六 光源氏の帰京と末摘花

さるほどに、げに世の中に赦されたまひて、都に帰りたまふと天の下のよろこびにて立ち騒ぐ。我もいかで人より先に深き心ざしを御覧ぜられんとのみ思ひきほふ男女につけて、高きをも下れるをも、人の心ばへを見たまふに、あはれに思し知るところとさまざまなり。かやうにあわたたしきほどに、さらに思ひ出でたまふ気色見えで月日経ぬ。

（蓬生 ② 三三四頁）

須磨での蟄居を終え都に戻った光源氏は、わが身に受けた様々な仕打ちと人々の本音を鑑みて思うことは多い。慌ただしく過ごす中で末摘花のことを思い出しもしないのは、先に示したように彼にとつて彼女は援助はしても心惹かれる存在ではなかったことの証左である。

一方の末摘花は、常陸宮邸から出ることなく品々を売ることもなく、荒れるに任せ堪え忍んで生きている。彼女がただ光源氏を信じて待ち続けていたのかと問えば、そうとばかりはいえない。何も音沙汰がないまま冬を迎え、彼女は兄・禪師の君から光源氏の執り行つた御八講のすばらしさを教えられる。光源氏を仏や菩薩の化身にたとえる兄に対して、末摘花は思う。

さても、かばかりつたなき身のありさまを、あはれにおぼつか

なくて過ぐしたまふは、心憂の仏、菩薩や、とつらうおぼゆるを、げに限りなめりとやうやう思ひなりたまふ

(蓬生 ② 三三七―三三八頁)

私を省みない光源氏がなぜ仏や菩薩なのか。彼女にしては珍しく皮肉な感想を抱きつつ、もう光源氏に思い出してもらえないことはないのではなにかとあきらめの気持ちを持ち始める。光源氏の帰還は末摘花の生活に何の変化もたらさなかった。光源氏に思い出されない現状に「かひなき世かな、と心くだけてつらく悲しければ、人知れず音をのみ泣きたまふ。」(蓬生 ② 三三五頁)と気落ちして泣く末摘花の姿がある。

その末摘花もようやく光源氏に見つけ出された。

いみじうあはれに、かかるしげき中に、何心地して過ぐしたまふらむ、今までとはざりけるよ、とわが御心の情なさも思し知らる。

(蓬生 ② 三四七頁)

さすがに、光源氏もこの蓬生の中で末摘花がどのように過ごしたかを思えば自身の薄情さを自覚せずにはいられない。

月入り方になりて、西の妻戸の開きたるより、さはるべき渡殿だつ屋もなく、軒のつまも残りなければ、いとはなやかにさし入れば、あたりあたり見ゆるに、昔に変わぬ御しつらひのさまなど、忍ぶ草にやつれたる上の見るめよりはみやびかに

見ゆるを、昔物語に、たふこぼちたる人もありけるを思しあはするに、同じさまにて年ふりにけるもあはれなり。ひたぶるにものづつみしたるけはひの、さすがにあてやかなるも心にくく思されて、さる方にて忘れじと心苦しく思ひしを、年ごろさまざまのものの思ひにほればしくて隔てつるほど、つらしと思はれつらむといとほしく思す。

(蓬生 ② 三五二頁)

荒れ果てた外観とは異なり、以前と変わらぬ部屋の設えと、彼女の数少ない美点「ひたぶるにものづつみしたるけはひの、さすがにあてやかなる」様は、昔と変わらぬ(宮家)常陸宮邸の世界であった。

源氏が須磨明石退居の頃、源氏との関係が世に出ていない日陰の女性たちの、物心両面のなげきということが蓬生巻冒頭に述べられて、その一例として末摘花が取り上げられるという語り方がなされるが、源氏が須磨明石から帰京後、女君たちと再会するという構想の中で末摘花がとりあげられているということに注目しなければならぬ。源氏の須磨退居という事態に人々が見せた不誠実な心との対比の中で、末摘花の性格が美質としてとらえられるのである。

森一郎氏が指摘するところによれば、この変わらぬ空間、しかし荒れはてた空間に存在し続けた末摘花という存在は、源氏にとって希有な存在だった。彼女がかたくなに守りづけた(宮家)の誇りが、

光源氏には美質と受け取られたのである。

また、この光源氏と末摘花の再会に故・常陸宮の存在が関係することも忘れてはならない。

いとどながめまさるころにて、つくづくとおはしけるに、昼寝の夢に故宮の見えたまひければ、覺めていとなごり悲しく思して、漏り濡れたる廂の端つ方おし拭はせて、ここかしこの御座ひきつくろはせなどしつつ、例ならず世づきたまひて、

亡き人を恋ふる袂のひまなきに荒れたる軒のしづくさへ

添ふ

も心苦しきほどになむありける。(蓬生 ② 三四五頁)

寂しさに耐える末摘花の夢に常陸宮が現れるたことで、彼女は人並みに濡れた廂の間を拭かせたり敷物をかたづけたりして場を整えていた。結果として光源氏を迎える準備をしたことになったのだ。このことは、末摘花巻で彼女との関係は常陸宮の魂が導いたのだろうと光源氏が思うところに呼応している。

我ならぬ人はまして見忍びてむや、わがかうて見馴れけるは、故親王のうしろめたしとたぐへおきたまひけむ魂のしるべなめり (末摘花 ① 二九五―二九六頁)

この後、末摘花は光源氏の援助を受け、再び以前の様な〈宮家〉の生活に戻ることになる。

七 おわりに

蓬生巻は常陸宮邸を舞台に、その閉ざされ寂れゆく空間に生きる末摘花を描いた物語である。彼女は〈宮家〉にこだわりその空間から出て行こうとしない。この〈宮家〉という空間を外から刺激するのが〈受領〉である。光源氏からの援助が途絶えた宮邸はもはや上流貴族階級に属してはいない。〈受領〉である叔母は、光源氏が帰京した頃に〈宮家〉に現れ、彼女が太宰府に下った後に光源氏の援助が復活する。〈受領〉が離れることで、彼女は再び上流貴族社会に戻ることができただけでなく、宮邸という閉ざされた空間から脱出し新しい世界へ一歩踏み出した。

末摘花が変貌したかと問われれば、否と答える。彼女はただ父・常陸宮の教えを守り〈宮家〉の娘として常陸宮邸で生きている。そこに彼女の変貌を見ることはできない。彼女を取り巻く環境が、貴族から〈受領〉へ変化したことで、彼女の持つ〈宮家〉氣質が強調されたのだ。末摘花を顧みない理由として同じ〈宮家〉の姫君・紫の上の存在が語られることも忘れてはならない。二条東院に移った末摘花が、再び笑われる姫君となることも、彼女が変貌したといえない理由の一つである。末摘花は常陸宮邸という閉ざされた空間の

中でのみ〈宮家〉の姫君たる性質を表出することが出来たのだ。

註

註1 森一郎「源氏物語における人物造型の方法と主題との連関」

一八四～一八五頁〔『源氏物語の方法』所収 桜楓社 昭44

・6）

註2 武原弘「末摘花論 ―変貌問題をめぐって―」二七二頁〔『研

究講座 源氏物語の視界3 光源氏と女君たち』所収 新典

社 平8・4）

註3 池田利夫「蓬生・関屋」一六一頁〔『源氏物語講座 第三卷

各巻と人物I』所収 有精堂 昭46・7）

註4 註1に同じ 一八四頁

第二節 朝顔の姫君を形作ったもの

一 はじめに

私は、落葉の宮が夕霧と再婚せざるを得なかった理由の一つに、彼女の転居に伴って二人の距離が縮まったことを指摘し、彼女とは対照的に相手と距離を置くことに常に注意を払って結婚拒否を貫いた女性として朝顔姫君をあげた。^(註1)彼女に光源氏が和歌を送ったことはすでに箒木巻に見られ、若菜下巻で彼女の消息が光源氏によつて語られている。つまり、彼女は光源氏の人生にかなり長い年月の間関わっているのだ。にもかかわらず、彼女は光源氏を拒み続ける。なぜ朝顔姫君は光源氏を拒み続けられたのか、その理由に彼女の描かれ方があると考える。彼女は拒否する女として造型されているのだ。

物語において、彼女の名が見えるのは「箒木」「葵」「賢木」「朝顔」「少女」「梅枝」「若菜上」「若菜下」の八巻。関わった年月に比して彼女の表出は少なく、そのほとんどが二人の間にかわされる〈文〉(和歌の贈答)と彼女の〈噂〉で構成されている。

〈文〉を送るということは、二人の間に距離があるということに他ならない。その一方で、その距離を縮めるのも〈文〉であり、用

いる紙や添える植物の選択で、書かれた内容以上の趣を相手に伝えることができる。それは送り手のセンスが問われるものであり、受け取る相手にも相応の嗜みが要求される。書かれる和歌も同様である。思いの丈を込めた三十一文字が示すものは見過ごせない。

一方の〈噂〉は嘘も真も含まれる不確かなものである。安藤徹氏は「〈へうわさ〉の物語社会学」と題した一連の論の中で次のように述べている。^(註2)

〈へうわさ〉とは不確かなもので、伝播していく中で変容を遂げ、また事実・実体とは別個に〈へうわさ〉が独立して歩き(走り)はじめる。^(註3)

実体・事実と対立すると見なされる〈へうわさ〉によつて、しかし事実でないことまでもが事実化していくということが起こるのだ。^(註4)

氏は、前者の例として紫の上死去の噂を聞いた柏木を、後者の例として未遂に終わった浮舟自殺の噂をあげている。つまり〈噂〉もまた物語なのである。朝顔姫君に関する〈噂〉についてその根拠と影響を分析することは、彼女という人物が造型された意味を考えることに繋がるだろう。

古りがたく同じさまなる御心ばへを、世の人に変り、めづらくもねたくも思ひきこえたまふ。
(朝顔 ② 四七八頁)

昔から今まで自分に靡くことがなかったことを忌々しいと思う一方で、世の人とは違う見事な人だと光源氏は彼女を評している。この様に彼に評される朝顔姫君とはどのような人物であったのか。それを解くカギが〈文〉と〈噂〉ではないかと考えたのだ。

二 朝顔姫君と〈文〉

まずはじめに、朝顔姫君が描かれた部分を「**噂**・**文**・**評**」の三つに分類し、それぞれ通し番号を付けた。描かれた内容は簡単に項目立てにし、**噂**は彼女に関して他者が述べた内容を、**文**は書かれた和歌も含めたいわゆる手紙を、**評**は光源氏が紫の上に語った朝顔姫君のことを指す。例外として、薫き物あわせの際に兵部卿宮が下した判定を**評3**とした。また、朝顔姫君に「いかで人に似じと深う思せば」（葵 ② 一九頁）と決意させた六条御息所に関する〈噂〉を**噂①**として提示した。その結果が次に示す表である。

帯木	<ul style="list-style-type: none"> ・紀伊守邸で女房達による朝顔姫君の噂 噂1
葵	<ul style="list-style-type: none"> ・六条御息所と光源氏の噂を聞いた朝顔姫君の決意 ・祭りに供奉する光源氏を棧敷席から見る朝顔姫君 ・葵上の死後、服喪の光源氏と朝顔姫君の文の遣り取り 噂① 文1

賢木	<ul style="list-style-type: none"> ・朝顔姫君斎院に卜される ・雲林院に籠もる光源氏と朝顔姫君の文の遣り取り ・右大臣邸にて右大臣と弘徽殿女御の会話 文2 噂2
朝顔	<ul style="list-style-type: none"> ・父宮服喪につき斎院を退く。光源氏からの見舞いの文 ・光源氏、朝顔姫君を訪ねる―和歌の贈答 ・翌朝朝顔の花に寄せて文の遣り取り ・紫の上、光源氏と朝顔姫君の噂を聞く ・光源氏、朝顔姫君を訪ねる―和歌の贈答 ・光源氏、紫の上に朝顔姫君のことを弁明 ・光源氏、紫の上を相手に女性を評す 文3 文4 噂3 評1 評2
少女	<ul style="list-style-type: none"> ・年が改まり、光源氏と朝顔姫君の文の遣り取り ・女五の宮、朝顔姫君と対面して意見を述べる 文5
梅枝	<ul style="list-style-type: none"> ・朝顔姫君、光源氏に依頼されていた香を届ける ・兵部卿宮、朝顔姫君の香を褒める ・光源氏、女性達の筆跡を評す ・光源氏、朝顔姫君の筆跡を兵部卿宮から隠す 文6 評3 評4
若菜上	<ul style="list-style-type: none"> ・女三の宮の乳母、朱雀院に降嫁先として光源氏を薦める ・紫の上、光源氏と女三の宮のことを否定する理由に朝顔姫君との一件をあげる 噂4

若菜下

・光源氏、紫の上に朝顔姫君について語る

評5
噂5

この表を見れば、朝顔姫君がそのほとんどを「**文・評**」によって形づくられていることは明らかである。特に「**文**」の遣り取りは、そこに新たな発見と感情を呼び起こすことから重要である。また、彼女の登場と退場に「**噂**」が関わっていること、光源氏が朝顔姫君を訪ねるのは二度でそれが朝顔巻のみに見られることも分かる。

例えば、「**文1**」から「**文3**」はそれぞれ葵上、桐壺院、朝顔姫君の父・式部卿宮の死が関係している。また「**文5**」は藤壺の除服と式部卿宮の喪から生じたものである。このような「**文**」と死との関係については、松井健児氏が次のように指摘している。^(註6)

さらに留意しておくべきことは、光源氏にとって朝顔の姫君との関係とは、たえず死とともにあったということであろう。その存在を希求しながらもついに一体とはなることができなかった人々、葵上・桐壺院・藤壺との永遠の別れとともに朝顔の姫君は想起される。つまり姫君に対する光源氏の側には、あらかじめ喪失の感覚とそれへの慰撫の願いがあったことを意味し、同時にそれは、光源氏をとりまく状況がそれほどまでに閉塞し、孤独と困難に陥った時であったと考えるとよい。

「**文3**」に関して私は父宮の死に対する見舞いの「**文**」と捉えたが、松井氏は藤壺の死による喪失感が光源氏の「精神的危機」を生み「朝顔の姫君への直接的な接近」を招いたと述べている。^(註7) 光源氏の立場で考えれば、松井氏の指摘通りであろう。しかし、藤壺と光源氏の関係を朝顔姫君が知るはずはなく、したがって「**文3**」は父宮の死に対する見舞いであり、斎院を退いた彼女への光源氏の執着を示すものと捉えてもよいのではないかと。「**文3**」は書かれたはずの和歌や「**文**」の体裁に関する記述はない。

斎院は御服にておりゐたまひにきかし。大臣、例の思しそめつること絶えぬ御癖にて、御とぶらひなどいとしげう聞こえたまふ。宮、わづらはしかりしことを思せば、御返りもうちとけて聞こえたまはず。いと口惜しと思しわたる。

(朝顔 ② 四六九頁)

光源氏の度々の文に対し朝顔姫君が気をゆるすことはない。また、ここでは「**文**」の内容について詳しく表されることはなく、姫君からの返事も明らかではない。そのため、この「**文**」については情緒的なものもなく、そのために二人の関係の新たな展開を推測させる役割を担っているといえるのではないかと。実際に彼女のもとを訪れた光源氏は、二度とも女房を介した人づての返事しかもらえない。そこには彼女が光源氏に対して一定の距離を取ることを心がけてい

る様うかがえる。その一方で、朝顔姫君は決して光源氏を疎ましく思っていないのだ。

おほかたの空もをかしきほどに、木の葉の音なひにつけても、過ぎにしものあはれとり返しつつ、そのをりををかしくもあはれにも深く見えたまひし御心ばへなども、思ひ出できこえさす。

（朝顔 ② 四七五頁）

げに人のほどのをかしきにもあはれにも思し知らぬにはあらねど、もの思ひ知るさまに見えたてまつるとて、おしなべての世の人の、めできこゆらむ列にや思ひなされむ、かつは軽々しき心のほども見知りたまひぬべく、恥づかしげなめる御ありさまをと思せば、なつかしからむ情もいとあいなし、よその御返りなどはうち絶えて、おぼつかかなかるまじきほどに聞こえたまひ、人づての御答へはしたなからで過ぐしてむ

（朝顔 ② 四八七頁）

先にあげた記述からは、二人が共有するしめやかな情景の広がりを感じられ、朝顔姫君は折々に見られた趣のある情味あふれた光源氏の人柄を懐かしく思い出している。後者には光源氏の人柄が立派であることやその趣きある心を知るが故に、一通りのつきあいは絶やしたくはないが結婚には踏み切れない朝顔姫君の想いが表れている。彼女は光源氏に惹かれつつも、二人の關係に結婚を介在させる

ことを望んでいない。穏やかに続いていた二人の關係に変化を求める光源氏の態度に、朝顔姫君は困惑と恐れを抱いているのだ。

では、若き日の彼女と光源氏の關係はどのようなものであったのか。例えば葵上の喪に服していた光源氏は、その悲しみを理解してもらえぬ相手として朝顔姫君を選んでいる文1。

なほいみじうつれづれなれば、朝顔の宮に、今日のあはれはさりとも見知りたまふらむと推しはからるる御心ばへなれば、暗きほどなれど聞こえたまふ。絶え間遠けれど、さのものとなりにたる御文なれば咎なくて御覽ぜさす。空の色したる唐の紙に、

「わきてこの暮こそ袖は露けけれもの思ふ秋はあまたへぬれど

いつも時雨は」とあり。御手などの心とどめて書きたまへる、常よりも見どころありて、「過ぐしがたきほどなり」と人々も聞こえ、みづからも思されければ、「大内山を思ひやりきこえながら、えやは」とて、

秋霧に立ちおくれぬと聞きしよりしぐるる空もいかかとぞ思ふ

とのみ、ほのかなる墨つきにて思ひなし心にくし。何ごとにつけても、見まさは難き世なめるを、つらき人しもこそと、あ

はれにおぼえたまふ人の御心ざまなる。つれなながら、さるべきをりをりのあはれを過ぐしたまはぬ、これこそかたみに情も見はつべきわざなれ
(葵 ② 五七―五八頁)

光源氏の〈文〉は、空色の唐の紙に涙に暮れる自身の心情をしたためた風情あふれるものであり、それに対する朝顔姫君の返事もまた彼の期待を裏切らぬ奥ゆかしい〈文〉であった。その一方で、「絶え間遠けれど、さのものとなりにたる御文なれば咎なくて御覽ぜさす。」とあるように光源氏からの〈文〉はそう度々あつたわけではなく、朝顔姫君もまたそのことに關して不満を持つこともない。光源氏が良しとした二人の關係は「つれながら、さるべきをりをりのあはれを過ぐしたまはぬ、これこそかたみに情も見はつべきわざなれ」という彼の心内語に集約されている。折節の風情を見過ごさずそれを解する心を持つ人こそ生涯にわたってつきあっていけるだろうというこの言葉は、この後の二人の關係の可能性を示すものであつたのだ。

しかし、**文2** **文3**で光源氏は朝顔姫君に接近する。**文1**に關連して示された理想の關係を光源氏自ら破壊しようとするのだ。一方の朝顔姫君は今までの關係を維持することを望む。結局は彼女が光源氏との距離を維持したことで、彼の求婚譚は成立しなかつた。

年かはりて、宮の御はても過ぎぬれば、世の中色あらたまり

て、更衣のほどなどいまめかしきを、まして祭のころは、おほかたの空のけしき心地よげなるに、前齋院はつれづれとながめたまふを、前なる桂の下風なつかしきにつけても、若き人々は思ひ出づることどもあるに、大殿より、「御禊の日はいかにのどやかに思さるらむ」ととぶらひきこえさせたまへり。

「今日は、

かけきやは川瀬の波もたちかへり君がみそぎのふちのやつれを」

紫の紙、立文すくよかにて藤の花につけたまへり。をりのあはれなれば、御返りあり。

「ふぢごろも着しはきのふと思ふまにけふはみそぎの瀬にかはる世を

はかなく」とばかりあるを、例の御目とどめたまひて見おはす。御服なほしのほどなどにも、宣旨のもとに、ところせきまで思しやれることどもあるを、院は見苦しきことに思しのたまへど、をかしやかに、気色ばめる御文などのあらばこそ、とかくも聞こえ返さめ、年ごろも、公さまのをりをりの御とぶらひなどは聞こえならはしたまひていとまめやかなれば、いかがは聞こえも紛らはすべからむともてわづらふべし。

(少女 ③ 一七―一八頁)

藤の花に添えられた〈文〉は紫色の紙に書かれ立て文に結ばれている。そこからは、朝顔姫君にいい寄っていた光源氏の姿はうかがえない。友人として〈文〉が交わされているのだ。文5は変化した二人の関係を鮮やかに浮かび上がらせている。この〈文〉は、趣のある文1を想起させるものであり、二人は「つれながら、さるべきをりをりのあはれを過ぐしたまはぬ、これこそかたみに情も見はつべきわざなれ」関係に戻ったと見ていいだろう。

さらに、光源氏は除服に際し宣旨宛に多くの品々を贈っている。つまりは、朝顔姫君に対して数多くの心遣いの品を贈っているのだ。朝顔はそれによって世間に様々に推測されることをつらく思うが、品に添えられたのが「をかしやかに、気色ばめる御文」ではないだけに、彼女も宣旨も断る理由が見つけられない。文1に見られるように折に触れた見舞いのやり取りが続いていることを利用し、「いとまめやか」な〈文〉を介することで、光源氏は朝顔姫君への物質的援助者の立場を確保し、若き頃とは異なる関係の構築を成し遂げたいというだろう。

三 朝顔姫君と〈噂〉

文が二人の関係を鮮やかに描き出すのとは対照的に、噂は事実と

異なる状況をあたかも事実のように肯定し、思わぬ方向に物語を導いていく。

例えば、右大臣と弘徽殿女御の会話の中でくる〈噂〉噂2がある。右大臣は朧月夜と光源氏の密会の事実を弘徽殿女御に伝える。それまでも光源氏に対して含むところのあった彼女は激怒し、光源氏の失脚を目論む。

男の例とはいひながら、大将もいとけしからぬ御心なりけり。斎院をもなほ聞こえ犯しつつ、忍びに御文通はしなどして、けしきあることなど、人の語りはべりしをも、世のためのみにもあらず、わがためもよかるまじきことなれば、よもさる思ひやりなきわざし出でられじとなむ、時の有識と天の下をなびかしたまへるさまことなめれば、大将の御心を疑ひはべらざりつる」などのたまふに、(略)「(略)斎院の御事はましてさもあらん。何ごとにつけても、朝廷の御方にうしろやすからず見ゆるは、春宮の御世心寄せことなる人なればことわりになむあめる」

(賢木 ② 一四七―一四八頁)

人々が〈噂〉するのは「斎院をもなほ聞こえ犯しつつ、忍びに御文通はしなどして、けしきあること」である。斎院は神に仕える者であり、彼女にいい寄ることは神への犯である。つまりは、今上帝への反逆と取られても仕方がない。右大臣からその〈噂〉を聞いた弘

徽殿女御は、〈噂〉を「齋院の御事はましてさもあらん」と肯定すること、光源氏を失脚させる理由として利用するのである。

この〈噂〉の元は、雲林院に籠もる光源氏が朝顔の君に出した〈文〉^{文2}にある。桐壺院の死によって右大臣一派の力が強まり、

光源氏にとっては不本意な日々が続いていた。雲林院に参詣した彼は先ず、妻となった紫の上と〈文〉を交わし、「吹きかふ風も近き」

(賢木 ② 一一九頁) 所にいる朝顔姫君にも〈文〉を出したのである。

中将の君に、「かく旅の空になむもの思ひにあくがれにけるを、思し知るにもあらじかし」など恨みたまひて、御前には、

「かけまくはかしこけれどもそのかみの秋思ほゆる木綿襷かな

昔を今にと思ひたまふるもかひなく、とり返されむもののやうに」と、馴れ馴れしげに、唐の浅緑の紙に、櫛に木綿つけなど、神々しうしなして参らせたまふ。御返り、中将、「紛るることなくて、来し方のことを思ひたまへ出づるつれづれのままには、思ひやりきこえさすること多くはべれど、かひなくのみなむ」と、すこし心とどめて多かり。御前のは、木綿の片はしに、

「そのかみやいかはありし木綿襷心にかけてしのぶらん
ゆゑ

近き世に」とぞある。御手こまやかにはあらねど、らうらうじう、草などをかしうなりにけり。まして朝顔もねびまさりたまへらむかしと、思ひやるもただならず、恐ろしや。(略)。院もかくなべてならぬ御心ばへを見知りきこえたまへれば、たまさかなる御返りなどは、えしもて離れきこえたまふまじかめり。すこしあいなきことなりかし。

(賢木 ② 一一九―一二〇頁)

光源氏の〈文〉は「唐の浅緑の紙に、櫛に木綿つけなど、神々しうしなして参らせたまふ。」と風流めかしただけでなく、「昔を今に」と和歌まで引いて彼女への思いを詠みかける。それに対し朝顔姫君は何の事やら分らないと「木綿の片はし」に「御手こまやかにはあらねど、らうらうじう」書いて切り返す。光源氏の馴れ馴れさを朝顔姫君はさらりと受け流しているが、風流ぶった〈文〉を送る光源氏と無視や拒否ではなく返歌程度は応じる彼女というのがここでの二人の関係である。

この^(註8)文2と噂2に関して藤村潔氏は、次のように述べている。

この姫君は道心は堅固であっても、源氏に対しては、決して人憎くは振舞わない。源氏は朝顔のそうした点を、やはり普通の姫君とは違うとして心ひかれるのである。このようなつかず離れずの関係で、姫君が齋院になっても、齋院と源氏の消息のや

りとりは、きわめて自然に続けられてゆく。それは右大臣方から見れば齋院をおかし奉るという源氏の不敵な行為となるのだが、事情をよく知っている読者にとっては、格別の咎としては意識されないのである。

〔文2〕は、〔文1〕に比べて馴れ馴れしさを感じるが、かといって二人の関係が進展するような危うさは感じられない。光源氏の好き心に眉を顰めることはあっても、藤村氏のいうように右大臣方がいい立てるような関係はない。その一方で、光源氏の好き心を「恐ろしや」、朝顔姫君の返事を「すこしあいなきことなりかし」とする批判も示されている。この語り手の苦言は、〔噂2〕から生じる右大臣方のいい分を示唆しているのであり、そこに噂のはらむ事実との齟齬が見て取れる。

また、朱雀院による女三の宮の婿選びの場面でも、〈噂〉が大きな影響を与えている〔噂4〕。女三の宮の降嫁先を迷う朱雀院に対して彼女の乳母は光源氏を推薦する。

かの院こそ、なかなか、なほいかなるにつけても、人をゆかしく思したる心は絶えずものせさせたまふなれ。その中にも、やむごとなき御願ひ深くて、前齋院などをも、今に忘れがたくこそ聞こえたまふなれ
(若菜上 ④ 二八頁)

乳母が光源氏を推す理由の一つに彼は身分の高い妻を望む気持ち

強く、そのため朝顔姫君のことも今だにあきらめずにいるらしいと聞き及んだことをあげている。おそらく乳母は〔文3〕に見られるような光源氏の朝顔姫君に対する執着心が今も続いていると錯覚している。実際は〔文5〕に見られるように、二人は結婚による結びつきとは異なる関係を構築しており、〔文6〕に見られるように光源氏の側にいわゆる好き心は見受けられない。

以上のように、朝顔姫君に関する〈噂〉は〈文〉の存在から派生している。そのため、〈文〉に書かれた事実とは異なり、〈噂〉する人に都合の良いように改められている。しかし、それは物語を進めるために必要な事象であった。朝顔姫君という人物が〔噂・文・評〕によって構成されることで物語が展開していくのだ。

四 おわりに

〈噂〉によって登場した朝顔姫君は、光源氏に〈噂〉されることで物語から消えていく。

齋院、はた、いみじう勤めて、紛れなく行ひにしみたまひになり。なほ、こころの人のありさまを聞き見る中に、深く思ふさまに、さすがになつかしきことの、かの人の御なずらひにだにもあらざりけるかな。
(若菜下 ④ 二六三頁)

彼は紫の上との語らいのなかで彼女が仏道に専念しているという
〈噂〉を語り、「深く思ふさまに、さすがになつかしきこと」に關
しては彼女と並ぶ人はいないと最大の賛辞を送っている。注目すべ
きはその賛辞に続いて女の子を育てる難しさを語ることである。

女子を生ほしたてむことよ、いと難かるべきわざなりけり。宿
世などいふらんものは目に見えぬわざにて、親の心にまかせが
たし。生ひたたむほどの心づかひは、なほ力入るべかめり。

(略) 皇女たちなむ、なほ飽くかぎり人に点つかるまじくて、
世をのどかに過ぐしたまはむに、うしろめたかるまじき心ばせ、
つけまほしきわざなりける。(若菜下 ④ 二六三〜二六四頁)

皇女にはつまらぬ〈噂〉の的にならぬよう生きて欲しいと願う光源
氏が、思い浮かべるのは朝顔姫君の生き方であった。

朝顔の姫君は、いかで人に似じと深う思せば、はかなきさまな
りし御返りなどもさをさなし。さりとして、人憎くはしたなく
はもてなしたまはぬ (葵 ② 一九頁)

結婚拒否という自分の決意を曲げることなく、しかし相手に気まず
い思いをさせない彼女の振る舞いを光源氏は格別なものと賞賛して
いる。

また、彼女の自分との距離の取り方の見事さに、紫の上にもその
ように育って欲しいと思っていた。

何ごとにつけても、見まさは難き世なめるを、つらき人しも
こそと、あはれにおぼえたまふ人の御心ざまなる。つれななが
ら、さるべきをりをりのあはれを過ぐしたまはぬ、これこそか
たみに情も見はつべきわざなれ、なほゆゑづきよし過ぎて、人
目に見ゆばかりなるは、あまりの難も出で来けり、対の姫君を
さは生ほしたてじ、と思す。 (葵 ② 五八頁)

表中に示した 評1 から 評5 はすべて朝顔姫君に対する光源氏の賛辞
である。例えば彼女の筆跡も当代の名手と褒め 評4、兵部卿官には
見せることもしない。また会話がおもしろいのはもう彼女しか残っ
ていないとまでいつている 評2。

前斎院の御心ばへは、またさまことにぞみゆる。さうざうしき
に、何とはなくとも聞こえあはせ、我も心づかひせらるべきあ
たり、ただこの一ところや、世に残りたまへらむ

朝顔姫君の〈噂〉↓彼女への賛辞↓女の子を育てる難しさ↓
(朝顔 ② 四九二頁)

〈噂〉されぬ皇女の生き方

このように光源氏が語るのは、彼が皇女の将来像として朝顔姫君の
生き方を理想としたことに他ならない。彼女は光源氏の求婚を拒ん
だからこそ、新たな関係を構築することができた。 噂・文・評 いず
れも高い評価を得ることで皇女の生き方の理想型としてその人物造

型が行われたのである。

註

註1 第二部 第一章 第二節 3 「夕霧との再婚」 参照

註2 安藤徹氏は著書の中で「I（うわさ）の物語社会学」として「1 物語と（うわさ）」「2 「おのずから」の物語社会」等を論じている。（『源氏物語と物語社会』所収 森話社 平18・2）

註3 安藤徹「物語と（うわさ）」四一頁（『源氏物語と物語社会』所収 森話社 平18・2）

註4 註3に同じ 四三頁

註5 松井健児「朝顔の斎院」一六五～一六六頁（『物語を織りなす人々 源氏物語講座 第二巻』所収 勉誠社 平3・9）

註6 註5に同じ 一六八頁

註7 藤村 潔「朝顔の姫君と空蟬物語との関係」（『源氏物語の構造』所収 桜楓社 昭41・11）

第三節 宮の御方が消えた理由

一 はじめに

宇治十帖の前に置かれた三帖―句・紅梅・竹河―は、その成立や作者に関して多くの議論がなされる巻である。句巻は光源氏の死後、彼と関わりのあった人々の行末が語られている。句宮、薫、冷泉院の女一の宮、夕霧の六の君等宇治十帖に関わる人物の紹介がなされる一方で、物語自体は短く、通り一遍の紹介に終始している感を受ける。また、紅梅巻は故致仕の大臣家の後日譚、竹河巻は故髭黒太政大臣家の後日譚となっている。

一般に正篇の主人公が光源氏であるのに対して、宇治十帖の主人公は句宮と薫の二人とされている。彼らは光源氏ほど多くの女性と関係を築くわけではない。政治的な配慮から、句宮は夕霧の娘・六の君と結婚し、薫は帝の女二の宮を正妻に迎える。一方、彼らの恋愛対象として宇治八の宮の姫君たちがいる。句宮の妻・宇治中の君は、宮家の姫という身分であっても財政基盤が弱い。それ故に日々の暮らしにかかる品々を薫に頼らざるを得ない状況に置かれている。彼女の異母妹・浮舟は、薫と句宮の二人と関係を持つ。彼らは、宇治と都を行き来しつつ互いに抜き差しならない状況に追い込まれ

ていく。華やかな印象を与える正篇とは異なり、宇治十帖は重く暗い物語が続いていく。

この宇治十帖と正篇をつなぐのがこの三帖である。そのためこの三帖は、その後の物語の展開を模索する過程にあると考えられている。例えば、土方洋一氏は次のように述べている。^(註1)

句宮三帖においては、句宮巻末尾の冷泉院の女一の宮、紅梅巻の宮の御方、竹河巻の玉鬘の大君というように、第二部までに登場していなかった女性たちがヒロインたる可能性を秘めた人物として次々に繰り出され、しかもことごとくが物語的な展開を見せないままに終わっている。

確かに、この三名について後に物語として描かれることはない。冷泉院の女一の宮について多くを語られることはなく、玉鬘の大君に至っては、竹河巻でその存在は物語から消えている。宮の御方にしても、宿木巻に一度その名が示されるのみである。

あだなる御心なれば、かの按察大納言の紅梅の御方をもなほ思し絶えず、花紅葉につけてものたまひわたりつつ、いづれをもゆかしくは思しけり。
(宿木 ⑤ 三八一―三八二頁)

夕霧の娘・六の君との結婚話が具体化しつつあるなかで、句宮の多情を示す具体例として宮の御方への諦めきれぬ心情が示されている。にもかかわらず、「紅梅の御方」と呼ばれる彼女の言動が明ら

かにされることもなく、物語に影響を及ぼす人物として造型される気配もない。

しかし、薫と匂宮という二人の貴公子の恋愛対象が宇治八の宮の姫君たちだったことを考えれば、この三帖のひとつ紅梅巻に宮の御方が造型されたことに意味があるのではないか。宇治十帖において、皇女や宮家の姫君の生き方や行く末について多く語られるのは、若菜上巻における朱雀院の婿選びの苦悩が発端になっていると考えられる（第二部・第一章・第一節・1・11「朱雀院の不安」）。彼の苦悩を形成しているのは、女三の宮の性質と身分のある娘でも生きがたい世の乱れの二点であった。かつては女性の身分の高さを尊ぶこともあったが、今の乱れた世では「下れる際のすき者どもに名を立ちあざむかれて、亡き親の面を伏せ、影を辱むるたぐひ多く聞こゆる」（若菜上 ④ 三三頁）ことを危惧している。こうした考えは、その後の物語の展開に多大な影響を与えている。宇治大君の結婚拒否、女二の宮降嫁は朱雀院が示した危惧を避けるために取られた手段である。中の君が匂宮との結婚生活に不安を感じ宇治を出たことを後悔するのも、真木柱が娘・宮の御方の将来について自分が亡き後は尼にしようと語るのも、そうした考えが根底にあるといえよう。宇治十帖は、身分高き姫君たちの生きがたさや苦悩を描いた物語でもあるのだ。

では、なぜ宮の御方の物語はその表層から消えたのだろうか。私はその理由が二つあると考える。一つは、按察大納言家の家庭の事情であり、もう一つは宮の御方が二つの宮家を背負っているという彼女自身の事情である。ただ、どちらも宮の御方の母・真木柱と按察大納言の結婚に起因するもので、彼女自身が招いたものではない。以下、紅梅巻を中心に宮の御方の物語が消えた二つの理由を明らかにしていきたい。

一 按察大納言家の立場

まず始めに、物語における按察大納言家の政治的地位を確認しておく。

そのころ、按察大納言と聞こゆるは、故致仕の大臣の二郎なり、亡せたまひにし衛門督のさしつぎよ、童よりらうらうじう、はなやかなる心ばへものしたまひし人にて、なりのぼりたまふ年月にそへて、まいていと世にあるかひあり、あらまほしうもてなし、御おぼえいとやむごとなかりけり。

（紅梅 ⑤ 三九頁）

致仕大臣の二郎君といえは、かつて高砂を謡った四の君腹の子息である。致仕大臣家の嫡男は柏木であったが、彼は表向き子孫を残す

ことなく亡くなっている。正妻腹の二郎君が家を継ぐのは当然のことであつた。また、今上帝は朱雀院の皇子であり、朱雀院の母・弘徽殿太后は二郎君の母・四の君の姉という関係から、彼は幼少より帝に仕えているため皇家とのつながりも強い。

しかし、按察大納言家だけが帝の信頼を得ていたわけではない。

「紅梅巻の発端における新しい人間関係の設定は、紛れもなく匂宮巻の発端部分と重ね合わせられる関係で読まれるべきものである。」と大朝雄二氏も指摘しているように、匂宮巻では光源氏の嫡男・夕霧の揺るぎない地位と権力が示されている。彼は、按察大納言よりも帝に近い位置にいる。中宮が彼の妹・明石姫君であるというだけでなく、次世代後宮の掌握に向けても万全の布石を打っている。

大殿の御むすめは、いとあまたものしたまふ。大姫君は春宮に参りたまひて、またきしろふ人なきさまにてさぶらひたまふ。

その次々、なほみなついでのままにこそはと世の人と思ひきこえ、後の宮ものたまはすれど、この兵部卿宮はさしも思したらず、わが御心より起こらざらむことなどは、すさまじく思しぬ

べき御気色なめり。
(匂兵部卿 ⑤ 一九頁)

大君は春宮に、中の姫は二の宮に興入れすることにより、夕霧右大臣家と皇家の結びつきはますます強くなっている。さらに、明石中宮は匂宮にも夕霧の娘を娶せようと考えている。匂宮は、自ら望ん

だ縁談ではないために乗り気ではないが、中宮の意向、世間の思惑、夕霧の意向等を考えれば、この話が具体化されれば匂宮が拒否できないであろうことは想像に難くない。

このような状況のもとで、按察大納言は夕霧に対抗するために大君を春宮に入内させる。

例の、かくかしづきたまふ聞こえありて、次々に従ひつつ聞こえたまふ人多く、内裏、春宮より御気色あれど、内裏には中宮おはします、いかばかりの人かはかの御けはひに並びきこえむ、さりとして、思ひ劣り卑下せんもかひなかるべし、春宮には、右大臣殿の並ぶ人なげにてさぶらひたまへばきしろひにくけれど、さのみ言ひてやは、人にまさらむと思ふ女子を宮仕に思ひ絶えては、何の本意かはあらむ、と思したちて、参らせたまつりたまふ。七八のほどにて、うつくしうにほひ多かる容貌したまへり。
(紅梅 ⑤ 四一頁)

按察大納言家にとって、入内は特別な意味を持つ。かつて桐壺帝の後宮で弘徽殿女御が立后を逃して以来、彼の一族から中宮は出していない。藤壺中宮・秋好中宮・明石中宮と〈源氏〉の娘が立后する中で、〈藤原氏〉である彼の一族は負け続けているのである。その彼の願いは娘の立后であつたため、既に明石中宮が存在する帝への入内は考えず、春宮のもとに入内させた。ライバルは先に入内してい

る夕霧の娘である。

春日の神の御ことわりも、わが世にやもし出で来て、故大臣の、院の女御の御事を胸いたく思ひてやみにし慰めのこともあらなむと心の中に祈りて、参らせたまつりたまひつ。いと時めきたまふよし人々聞こゆ。かかる御まじらひの馴れたまはぬほどに、はかばかしき御後見なくはいかがとて、北の方そひてさぶらひたまふは、まことに限りもなく思ひかしづき後見きこえたまふ。

（紅梅 ⑤ 四二―四三頁）

春日の神のご神託を持ち出し、北の方が付き添って世話をする等一家を挙げてのプロジェクトである。政権争いにおいて、按察大納言もまた、夕霧に対抗すべく布石を打っていくのである。

右の大殿、致仕の大殿の族を離れて、きらきらしうきよげなる人はなき世なりと見ゆ。

（竹河 ⑤ 九六頁）

左大臣亡せたまひて、右は左に、藤大納言、左大将かけたまへる右大臣になりたまふ。次々の人々なり上がりて、この薫中将は中納言に、三位の君は宰相になりて、よろこびしたまへる人々、この御族より外に人なきころほひになんありける。

（竹河 ⑤ 一〇七頁）

匂宮巻及び紅梅巻を受け、竹河巻では夕霧と按察大納言の一族が他を圧倒する権勢であることが明らかになっている。かつて、右大臣

亡き後は左大臣家と光源氏が政権を握り他を圧倒した。その後、彼らは権力を確実に自分のもとに引き寄せるために後宮で立后争いを繰り広げた。絵合といった華やかな争いも含めた戦いは光源氏が勝利し、彼は自らの権力を盤石にしたのだ。この匂・紅梅巻では、彼らの子どもたちが過去を彷彿とさせる状況にある。夕霧は、すでに春宮と二の宮に娘を娶せた。とすれば、大君を入内させた按察大納言が、次に考えるのは中の君の結婚相手だった。彼女の結婚は年齢の近い宮の御方の存在を浮かび上がらせることになり、彼の思惑とは異なる方向に物語は進むことになる。

三 按察大納言の家族構成

次に、按察大納言家の家族構成を見ておきたい。

北の方二人ものしたまひしを、もとよりのは亡くなりましたまひて、今ものしたまふは、後太政大臣の御むすめ、真木柱離れがたくしたまひし君を、式部卿宮にて、故兵部卿の親王にあはせたまつりたまへりしを、親王亡せたまひて後忍びつつ通ひたまひしかど、年月経れば、えさしも憚りたまはぬなめり。御子は、故北の方の御腹に、二人のみぞおはしければ、さうざうして、神仏に祈りて、今の御腹にぞ男君一人まうけたまへる。故宮の

御方に、女君一ところおはす。(紅梅 ⑤ 三九〇四〇頁)

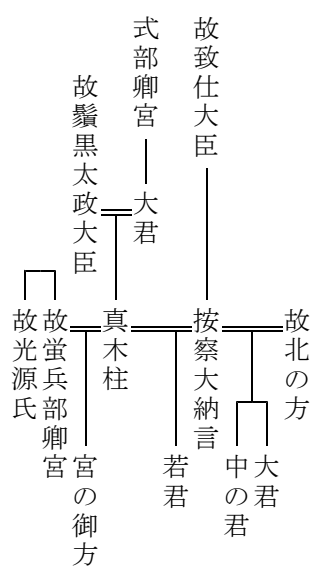
この家族は按察大納言と真木柱が互いの子どもを連れて再婚したことで構築されている。真木柱との結婚が「忍びつつ通ひたまひしかど、年月経れば、えさしも憚りたまはぬ」ものであったのは、次の記述からも明らかである。

故宮亡せたまひて、ほどもなくこの大臣の通ひたまひしことを、いとあはつけいやうに世人はもどくなりしかど、思ひも消えず、かくてものしたまふも、さすがさる方にめやすかりけり。

(竹河 ⑤ 一一二頁)

彼らの結婚は、周囲から歓迎されたものではなかった。しかし当人同士のは気持ちは変化することなく今に至っており、世間が取りざたしたような浮ついたものではなかったことは、彼らの今の生活が証明したといえる。

〔按察大納言家構成図〕



さて、按察大納言の実子は三人。うち故北の方に姫君が二人、真木柱に若君が一人。そして真木柱の連れ子の姫君が一人。以上四名の子どもと夫婦がこの一家の家族構成である〔按察大納言家構成図参照〕。按察大納言と真木柱の間に生まれた若君は、大君・中の君とは腹違い、宮の御方とは父親違いの兄弟という複雑な親子関係が生じている。本来、子どもは母方で養育されるものであり、その点から考えれば若君に親しいのは宮の御方ということになる。母親の異なる大君・中の君とは疎遠に育つのが通常であり方だ。しかし、実際は異なったようである。

なかなか異方の姫君は、見えたまひなどして、例のはらからのさまなれど、童心地に、いと重りかにあらまほしうおはする心ばへをかひあるさまにて見たてまつらばやと思ひ歩くに、春宮の御方のいとはなやかにもてなしたまふにつけて、同じこととは思ひながらいと飽かず口惜しけれ (紅梅 ⑤ 五二頁)

大納言家では、大君たちの方が若君に姿を見せることもあり、同母の兄弟のように接している。かつて光源氏が夕霧と明石中宮を幼少より親しませ、長じて互いに助け合うように仕向けたことを思い起こせば、これは大納言家の将来のために有益である。むしろ、宮の御方との接点が少ないことの方が気にかかる。ただ、若君は彼女を「いと重りかにあらまほしうおはする心ばへ」と感じている

ことが示されており、この点は問題ないといえよう。

隔てわからず、いづれをも同じごとと思ひきこえかはしたまへるを、おのおの御方の人などはうるはしうもあらぬ心ばへうちまじり、なまぐねくねしきことも出で来る時々あれど、北の方、いと晴れ晴れしくいまめきたる人にて、罪なくとりなし、わが御方さまに苦しかるべきことをもなだらかに聞きなし、思ひなほしたまへば、聞きにくからでめやすかりけり。

君たち、同じほどに、すぎすぎおとなびたまひぬれば、御裳など着せたてまつりたまふ。七間の寝殿広くおほきに造りて、南面に、大納言、大君、西に中の君、東に宮の御方と住ませたまつりたまへり。

(紅梅 ⑤ 四〇頁)

実子と妻の連れ子の同居に関して、大納言はどの姫君にも同じように親子としての愛情を注ぐが、それぞれの姫君に仕える女房たちの間ではきれいな事ではすまされない揉事が生じているようだ。ただし真木柱がうまく取りさばくので、聞き苦しい噂を立てられることなく暮らしている。表向きは平穩に見えても、内実はやはりこのように問題が生じるものであり、それがこの関係の危うさに繋がっていると考えていいだろう。そして、その危うさが中の君の結婚話に宮の御方を巻きこむ形になったのだ。

四 式部卿宮家と兵部卿宮家

さて、私は先に宮の御方の物語が消えた理由として、彼女が二つの宮家を背負っていることをあげた。宮の御方の父は螢兵部卿宮であり、それが彼女の背負う宮家の一つである。そしてもう一つ、彼女の母・真木柱の祖父・式部卿の宮家が彼女の背景に存在すると考えるべきである。

真木柱は、両親が別れた後母の実家である式部卿宮家に引き取られ、そこで養育されている。父・鬚黒は彼女を手元に引き取りたいと考えたが、祖父である式部卿宮は許さなかった。そのため、宮は彼女の結婚に対して「この君をだに、人笑へならぬさまにて見む」(若菜下 ④ 一五九頁)という強い思いを抱いていたのだ。

おほかたも、いまめかしくおはする宮にて、この院、大殿にさしつぎたてまつりては、人も参り仕うまつり、世人も重く思ひきこえけり。大將も、さる世の重しとなりたまふべき下形なれば、姫君の御おぼえ、などてかは軽くはあらむ。

(若菜下 ④ 一六〇頁)

式部卿の宮と実父・鬚黒、どちらも宮中で権力を持つ者であり、彼らと血のつながりがある真木柱を妻に求める男性が多いのも当然のことといえよう。しかし、式部卿宮はその求婚者たちとの結婚を許

可しない。

何かは。かしづかむと思はむ女子をば、宮仕につぎては、親王たちにこそは見せたてまつらめ。ただ人の、すくよかになほなほしきのみ、今の世の人のかしこくする、品なきわざなり

（若菜下 ④ 一六一頁）

彼が考える彼女の結婚相手は、まずは帝。次が親王。臣下では品位がないという式部卿宮の考えは、娘である大君（真木柱の母）が鬚黒とうまういかなかったことを踏まえたものだろう。その結果、多くの求婚者から祖父宮を選んだのは、螢兵部卿宮であった。

大宮は、女子あまたものしたまひて、さまざまもの嘆かしきをりをり多かるに、もの懲りしぬべけれど、なほこの君のことの思ひ放ちがたくおぼえてなむ、母君は、あやしきひがものに、年ごろにそへてなりまさりたまふ、大将、はた、わが言に従はずとて、おろかに見棄てられためれば、いとなむ心苦しき、とて、御しつらひをも、起居御手づから御覧じ入れ、よろづにかたじけなく御心に入れたまへり。

（若菜下 ④ 一六一―一六二頁）

式部卿宮の真木柱の結婚に対する思い入れの強さがうかがえる記述である。ここには真木柱が、宮家の影響下で生活していたことも示されている。しかし、式部卿宮が幸せであれと願った真木柱の結婚

は、彼女に幸福をもたらすものではなかった。

宮は、亡せたまひにける北の方を、世とともに恋ひきこえたまひて、ただ、昔の御ありさまに似たてまつりたらむ人を見む、と思しけるに、あしくはあらねど、さま変りてぞものしたまひけると思すに、口惜しくやありけむ、通ひたまふさまいともうげなり。大宮、いと心づきなきわざかなと思し嘆きたり。

（若菜下 ④ 一六二頁）

螢兵部卿宮は亡き北の方を忘れられず、彼女の面影を求めていた。そのため、この結婚は最初から危ういものだったのだ。実際、真木柱は亡き北の方とは似たところがなく、兵部卿宮はこの結婚に身が入らない。そうした様子に式部卿宮は落胆する。

「親王たちは、のどかに二心なくて見たまはむをだにこそ、はなやかならぬ慰めには思ふべけれ」とむつかりたまふを、宮も漏り聞きたまひては、いと聞きならはぬことかな、昔いとあはれと思ひし人をおきても、なほはかなき心のすさびは絶えざりしかど、かうきびしきもの怨じはことになりしものを、心づきなく、いとど昔を恋ひきこえたまひつつ、古里にうちながめがちにのみおはします。さ言ひつつも、二年ばかりになりぬれば、かかる方に目馴れて、たださる方の御仲にて過ぐしたまふ。

（若菜下 ④ 一六三―一六四頁）

兵部卿宮と式部卿宮、それぞれの思惑の違いは宮の北の方の言葉によつて決定的なものとなった。彼らは別れはしなかったが、「たださる方の御仲にて過ぐしたまふ」彼女の結婚が決して幸せなものではなかったことは指摘するまでもないだろう。しかし、一点付け加えるならば、祖父宮が真木柱の結婚相手として最初に考えたのは柏木だったのだ。

聞こえ出づる人々事にふれて多かれど、思しも定めず。衛門督を、さも気色ばまばと思すべかめれど、猫には思ひおとしたてまつるにや、かけても思ひよらぬぞ口惜しかりける。

(若菜下 ④ 一六〇頁)

当時の柏木は、女三の宮に心を奪われていた。春宮を利用して女三の宮の猫を手に入れその猫に執心する日々であり、結婚というものに目を向ける余地がない。しかし宮が柏木を真木柱の結婚相手に望んだのは、彼が太政大臣家の嫡男であつたからだ。ならば、柏木亡き後彼の弟である紅梅大納言と再婚した真木柱の選択は、長い目で見れば祖父宮の選択にかなうものであつたのではないか。

真木柱の結婚に関して、式部卿宮が主導権を保持していたことは事実であり、常に彼は真木柱の行く末を気にかけていた。こうした式部卿宮の思いが、彼女を通して宮の御方に伝わったと見ることは可能ではないか。真木柱が式部卿宮家で養育されそこで婿を迎えた

ということとは、彼女が宮家の娘としての位置づけられていたと見るべきであろう。つまり、真木柱と堂兵部卿宮の結婚は式部卿宮家と兵部卿宮家の結婚と見るべきであり、二人の間に誕生した宮の御方は、双方の宮家の立場を負う者として造型されたと考えられる。このことは、宮の御方の地位を高くした。つまり、按察大納言家の姫君達よりも高い身分であることが、より強調されることになっているのだ。また、後に示すように宮の御方が資産を有している裏付けでもあるといえるだろう。

五 中の君と宮の御方

これまで、按察大納言家の政治的な地位、家族構成、真木柱と式部卿宮家の関係について述べてきた。そして、按察大納言が中の君の婿に勾宮を望んだことで宮の御方の存在が注目された。例えば、大朝雄二氏は次のように述べている。^(註3)

紅梅巻では紅梅大納言が自分の姫の婿に勾宮を考える一方で、勾宮は宮の姫君に関心を寄せるといふ緊張を孕む状況の外に、大納言が夕霧大臣に対抗心を燃やして張り合っているという、もう一つの緊張関係が用意されている。社会的な緊張と家庭的な緊張とがからみ合つて、より劇的な展開になることは大いに

あり得ることと思われるのだが、紅梅巻の実際はそれがうまく構造化されるに至っていない。

大朝氏が指摘するように。中の君と匂宮の結婚は、同じく匂宮を娘の婿に望む夕霧への対抗心から生じたものであるが、一家を発展させるためにも帝と中宮が寵愛する匂宮を婿に迎えることは必要であった。しかし、匂宮が宮の御方を望んだために実子と連れ子という二人の関係がクローズアップされてしまったのだ。

では、この結婚譚は按察大納言家にどのような影響を与えたのだろうか。まず、当事者である大君・中の君・宮の御方の関係を見てみる。

西の御方は、ひとつにならひたまひて、いとさうざうしくながめたまふ。東の姫君も、うとうとしくかたみにもてなしたまはで、夜々は一所に御殿籠り、よろづの御事習ひ、はかなき御遊びわざをも、こなたを師のやうに思ひきこえてぞ誰も習ひ遊びたまひける

(紅梅 ⑤ 四三頁)

大君と中の君は同腹の姉妹で日々一緒に暮らしており、宮の御方もこの姉妹とは隔てなく暮らしていた様子がうかがえる。例えば、芸事や遊び事に関しては宮の御方を師のようにして姉妹は習っていたことも示されている。姫君たちの関係についてはここ以外記述がな

い。つまり、彼女たちの間は良好な関係が築かれていたと考えていいだろう。

次に、大君入内後の中の君がどのような立場にあったのかを見ておきたい。

中の君も、うちすがひて、あてになまめかしう、澄みたるさまはまさりて、をかしうおはすめれば、ただ人にてはあたらしく見せまうき御さまを、兵部卿宮のさも思したらばなど思したる。

(紅梅 ⑤ 四一〜四二頁)

按察大納言にとって、中の君は臣下の者と結婚させるのを躊躇する程美しく、彼女の夫には兵部卿宮こそがふさわしいと考えている。しかし、匂宮は宮の御方に関心を示す。

古めかしき同じ筋にて、東と聞こゆるは、あひ思ひたまひてんやと忍びて語らひきこえよ

(紅梅 ⑤ 五〇頁)

按察大納言の文使いを務める若君に、匂宮は宮の御方への橋渡しを依頼する。中の君と匂宮の結婚を望む按察大納言と宮の御方を望む匂宮というねじれが生じているのだ。宮の御方が実子であれば、按察大納言もその結婚に異論はないだろう。しかし、鷲山茂雄氏が「按察大納言からしても彼女は皇統の女で藤原でなく、自分の政治的地位を確保する手立てになる存在でもない」と指摘する^(註)ように、彼女と匂宮の結婚が按察大納言家にもたらすものは何もない。

匂宮が宮の御方を求めることを指して、三田村雅子氏は、薫の手引きで中の君に通う以前に「かしづかれた姫君に興味を示さず、不幸な宮腹の姫君に心魅かれる匂宮の姿を描いておくことは適当な処置であつたと思われる。」と述べている。^(註5)確かに、宮の御方は父を失い、母親の再婚相手の家に住まう状況にあるといえる。匂宮は彼女のことを「不幸な宮腹の姫君」と認識して執着しているのだ。

世の人も、時による心ありてにや、さし向かひたる御方々には、心を尽くしきこえわび、いまめかしきこと多かれど、こなたはよろづにつけ、ものしめやかに引き入りたまへるを、宮は御ふさひの方に聞き伝へたまひて、深う、いかでと思ほしなりにけり。

(紅梅 ⑤ 五四～五五頁)

按察大納言家に住まう姫君で、世の人々が求めるのは大納言の実子・中の君であり、引き籠もりの宮の御方を求める人はいない。彼らにとつての魅力は、按察大納言家の持つ財産と権力であり、父親がすでに亡くなっている宮家の血筋には魅力を感じないのは当然である。世間に見向きもされない宮家の姫君という存在に惹かれる匂宮の姿には、宇治の中の君に惹かれるそれと重なるものがある。その一方で、宮の御方が匂宮に一度も返事をしないことも「負けじの御心そひて、思ほしやむべくもあらず」(紅梅 ⑤ 五五頁)という彼の自尊心を揺さぶることになり、匂宮は彼女をあきらめきれない。

匂宮の好き心は、按察大納言家における宮の御方の不安定な立場を顕現させたのだ。

六 宮の御方という人物

では、宮の御方自身はどのような人物として造型されているのか。もの恥ぢを、世の常ならずしたまひて、母北の方にだに、さやかにをさをさし向かひたてまつりたまはず、かたはなるまでもてなしたまふものから、心ばへけはひの埋れたるさまならず、愛敬づきたまへること、はた、人よりすぐれたまへり。

(紅梅 ⑤ 四三頁)

彼女は自分の母親にすらはつきりと顔を見せないほどの人見知りであり、そのために必要以上に慎ましやかに振る舞っている。しかしその気性が内気であるとか暗いということではなく、人を引きつける魅力を十分に備えた女性であることが示されている。そして、彼女には結婚の意思がない。

宮の御方は、もの思し知るほどにねびまさりたまへれば、何ごとも見知り、聞きとどめたまはぬにはあらねど、人に見え、世づきたらむありさまは、さらにとと思し離れたり。

(紅梅 ⑤ 五四頁)

おそらくは、彼女の人見知りの性質が結婚という行為から彼女を遠ざけているのだろう。また、先に述べたように兵部卿宮家と式部卿宮家、二つの宮家を背負う高貴な身分を有する彼女に釣り合う結婚相手を見つけることが難しいこともあるのではないか。

さらに、彼女自身が財産を有していることが示されている。

おほかたにうち思ふほどは、父宮のおはせぬ心苦しきやうなれど、こなたかなたの御宝物多くなどして、内々の儀式ありさまなど心にくく気高くなどもてなして、けはひあらまほしくおはす。

（紅梅 ⑤ 四〇～四一頁）

おそらくは、祖父・式部卿宮、実父・髭黒大臣及び継父・螢兵部卿宮からの遺産であろうが、その財産が彼女の日常生活を「心にくく気高く」維持し、宮家の姫君としての対面を保つのに十分なものであったことは、この記述から明らかである。

そして、母親・真木柱は彼女を縁づけることはあきらめていることが示されている。

「さらにさやうの世づきたるさま思ひたつべきにもあらぬ気色なれば、なかなかならむことは心苦しかるべし。御宿世にまかせて、世にあらむかぎりは見たてまつらむ。後ぞあはれにうしろめたけれど、世を背く方にも、おのづから人笑へにあはつけきことなくて過ぐしたまはなん」などうち泣きて、御心ばせ

の思ふやうなることをぞ聞こえたまふ。（紅梅 ⑤ 四四頁）

真木柱は、結婚の意思のない宮の御方を縁づけたところで幸せになるとは考えていない。そのために、自分が生きているうちは世話をするが、亡くなった後は尼にでもなって人に笑われないよう暮らしてほしいと望んでいる。「おのづから人笑へにあはつけきことなくて過ぐしたまはなん」という真木柱の考えは、先に挙げた朱雀院の苦悩に通じるものでもあった。

七 物語不成立の理由

この紅梅巻で、結婚を拒否する宮の御方が宇治の大君につながることは、多くの研究者によつて指摘（註6）されている。二人に共通するのは、宮家の姫君であること、姫君自身が結婚を望んでいないこと、宮家の血筋を誇りに思っていることである。その一方で、宇治大君の人物造型が物語として成立し、宮の御方が成立しなかった理由は何だったのか。

まず第一に、按察大納言家の家族構成が考えられる。真木柱は按察大納言と再婚し、二人の間には若君が誕生している。故北の方腹が姫君ばかりであることを考えれば、この若君が按察大納言家を継ぐことは明らかである。宮の御方と同腹の若君が後継者である意味

は大きい。同腹ならば若君が宮の御方の後見をすることに何の問題もないからだ。彼女の現状は、住むところを按察大納言から提供されており、彼女が所有する財産によって宮家の姫君にふさわしい生活を維持している。今は母・真木柱という庇護者がいるが、その後継者の役割を果たすのは若君だろう。彼女の同腹の兄弟である彼は、按察大納言家の財産と権力を受け継ぐ者である。したがって、彼女の後見を行うことは容易であろう。

宇治大君には後見を依頼できる人物が存在しない。そのために、父宮が亡くなった後は彼女自身が中の君を後見し宮家を支えていかなければならない。彼女は自ら考え決断する人物へと変貌せざるを得ない。その彼女の生き方、考え方が物語となったのだ。宮の御方は、彼女に与えられた複雑な家庭環境が幸いし、現状の生活を続けられる見通しが立っている。変化の必要のない人物が、物語の主人公になることは難しい。

また、宮が二つの宮家を背負っていることも、忘れてはいけない。大朝雄二氏は源氏物語に登場する宮家の姫君が意外に少ないことを指摘した上で次のように述べている。^(註1)

「宮の君」と呼ばれる女性は、皇孫であることを唯一の支えにするものに外ならず、血筋の尊貴さと裏腹な頼りなげな状態を自ら孕んでいる、と理解されるものである。

大朝氏のいう「頼りなげな状態」は、若君の存在と受け継いだ財産によって回避されると考えられる。一方、「血筋の尊貴さ」は二倍になり、彼女の背負う誇りもそれだけ大きいといっていだろう。その高貴さが、彼女を物語の主人公から遠ざけているのだ。それは、匂宮巻における冷泉院の女一の宮が物語のヒロインになれなかったことと同じなのである。

紅梅巻は、宮の御方の存在を明らかにした。彼女の高貴さと複雑な家庭環境から生じた人物関係が、彼女を物語のヒロインとはしなかった。しかし、正篇と宇治十帖を繋ぐ紅梅巻において、宮家の姫君が造型された意味は大きい。宇治十帖に綴られる宮家の姫君たちの受難と朱雀院が抱いた苦悩を繋ぐ者として、宮の御方の人物像は造型されたのである。

註

註1 土方洋一 「宇治の物語の始動 ― 第二部から第三部へ ―」

九四頁(『源氏物語のテキスト生成論』笠間書院 平12・6)

註2 大朝雄二 「匂宮巻の並びの紅梅・竹河と橋姫巻」三六頁

(『源氏物語続編の研究』桜楓社 平3・10)

註3 大朝雄二 「薫像の定立をめぐつて」 八七頁（註2に同じ）

註4 鷺山茂雄 「宇治十帖主題論」 三八七頁（『源氏物語の語り
と主題』武蔵野書院 平18・4）

註5 三田村雅子 「源氏物語第三部発端の構造」 二五頁（『日本文
学』昭50・11）

註6 吉岡曠 「匂宮・紅梅・竹河巻について」（『源氏物語論』笠
間書院 昭47・12）、藤井貞和 「匂薫十三帖の時間の性格」
（『源氏物語論』岩波書店 平12・3）、神野藤昭夫 「紅梅
巻の機能と物語の構造——『源氏物語』宇治の物語論のため
の断章——」（『今井卓爾博士喜寿記念 源氏物語とその前後』
桜楓社 昭61・5）等

註7 大朝雄二 「宇治の女のはらから論序説」 二二一頁（註3に
同じ）

第四節 姫君たちの生き方

一 はじめに

『源氏物語』宇治十帖は、第二部冒頭の朱雀院の懸念(第二部・第一章・第一節・1・2「朱雀院の不安」)が現実であったことを示す物語である。庇護者である親に先立たれ、兄弟等の支援がない女性、たとえ身分が高くても、むしろその身分のために苦勞を強いられる。正篇で例を挙げれば、落葉の宮が当てはまるだろう。彼女は夫・柏木の死後後見となる人物がいなかったために夕霧と再婚せざるを得ない状況に追い込まれた。皇女としての体面を保つためには、地位と財力のある夫の存在が不可欠だったからだ。末摘花の困窮は宮家の姫君であっても、後見人不在では生活が維持できない見本といえる。荒れ果てた屋敷に着古した着物を着て行き場のない老女房と暮らす彼女は、その容貌と昔風な考えから滑稽な人物としてとらえられているが、宮家の姫でありながら日々の暮らしに事欠くほど貧しい彼女の生活環境は女の生きがたさを示したものに他ならない。その彼女も、後に光源氏に引き取られ、晩年を「亡き親の面を伏せ、影を辱むるたぐひ多く聞こゆる」ことなく暮らすことができた。

また、同じ宮家の姫君として朝顔姫君の存在も忘れてはならない。父・桃園式部卿宮亡き後の邸は「ほどもなく荒れにける心地して、あはれにけはひしめやかなり。」(朝顔 ② 四六九頁)と、主が亡くなって間もないにもかかわらず、荒れていく様子が示されている。彼女は光源氏の妻にはならなかったが、その生活を維持するために同じ血筋の者である光源氏の援助を受けざるを得なかった。

一方、宇治十帖においては八の宮の姫君たちの人生に生かせることができる。橘姫巻冒頭より語られる八の宮の人生は、高貴な身分に生まれ財産にも恵まれていた人物が没落していく様を描き出している。

をりふしにとぶらひきこえたまふこといかめしう、この君も、まづさるべきことにつけつつ、をかしきやうにもまめやかなるさまにも心寄せつかうまつりたまふこと、三年ばかりになりぬ。

(橘姫 ⑤ 一三五頁)

阿闍梨から俗聖と噂のある八の宮の様子を聞いた薫は、宮を尋ねその教えを請う。彼は宮との関係を深める中で、彼に対して生活面への援助を行っていることが示されている。薫の援助によって保たれている八の宮邸の状況を鑑みれば、宮亡き後に女房たちが大君と薫の縁談をまとめようとするのは当然の結果であった。

二ところながらおはしまして、ことさらにいみじき御心尽くし

てかしづききこえたまはむに、えしもかく世にありがたき御事ども、さし集ひたまはざらまし。かしこけれど、かくいとたづきなげなる御ありさまを見たてまつるに、いかになりはてせたまはむと、うしろめたく悲しくのみ見たてまつるを、後の御心は知りがたけれど、うつくしくめでたき御宿世どもにこそおはしましけれとなむ、かつがつ思ひきこゆる。(略) ほどほどにつけて、思ふ人に後れたまひぬる人は、高きも下れるも、心の外に、あるまじきさまにさすらふたぐひだにこそ多くはべるめれ。それみな例のことなめれば、もどき言ふ人もはべらず。

まして、かくばかり、ことさらにも作り出でまほしげなる人の御ありさまに、心ざし深くありがたげに聞こえたまふを、あながちにもて離れさせたまうて、思しおきつるやうに行ひの本意を遂げたまふとも、さりとて雲、霞をやは

(総角 ⑤ 二四九～二五〇頁)

薫に中の君を娶せて自分は出家したいと望む大君に対し、弁の尼は現実的に具体例を挙げて彼女を諭している。両親が揃っていても薫や匂宮のような身分の高い男性との縁談が続けて持ち上がるのはまれであること、現在の暮らし向きを考えれば財力のある夫を持つ必要があること、どのような身分の女性でも親に先立たれた場合は身を落とす例が多く、それが普通であるとまで彼女は語るのだ。弁の

尼が説く内容は、かつて朱雀院が抱いた苦悩になぞらえることができる。ここで語られる女性の生きがたさは、宇治十帖を構成する要素の一つといいいい。そして、それは大君・中の君・浮舟という八の宮の三姉妹だけに与えられたテーマではない。名を持たない不特定多数の女性も、このテーマを与えられ物語を構成している。それが〈出仕〉する姫君たちである。彼女たちが、宇治十帖の物語世界を構成する重要な要素になっていることを明らかにするところに本稿の目的がある。

二 三条宮への〈出仕〉

いとやむごとなきものの姫君のみ多く参り集ひたる宮と人も言ふを、やうやう目とどめて見れど、なほ見たてまつりし人に似たるはなかりけりと思ひありく。(蜻蛉 ⑥ 二六二頁)

宇治で浮舟に仕えていた侍従は、彼女の入水後匂宮の伝で后の宮の元に出仕する。そこは、歴とした身分の高い家の姫君たちが仕えていると評判のところであった。この様に、宇治十帖では身分の高い姫君たちが女房として〈出仕〉していることが繰り返し示されている。その出仕先は中宮の他に女一の宮、三条宮であった。そして、中宮と女一の宮は匂宮の母と姉、三条宮は薫の母であることが、姫

君たちが〈出仕〉する事情に影響を与えていたのである。

まずは、三条宮への〈出仕〉の状況から見てみよう。

わが、かく、人にめでられんとなりたまへるありさまなれば、はかなくなげの言葉を散らしたまふあたりも、こよなくもて離るる心なくなびきやすなるほどに、おのづからなほざりの通ひ所もあまたになるを、人のためにことごとしくなどもてなさず、いとよく紛らはし、そこはかとなく情なからぬほどのなかなか心やましきを、思ひよれる人は、いざなはれつつ、三条宮に参り集まるはあまたあり。つれなきを見るも、苦しげなるわざなめれど、絶えなんよりはと、心細きに思ひわびて、さもあるまじき際の人々の、はかなき契りに頼みをかけたる多かり。さすがにいとつかしう、見どころある人の御ありさまなれば、見る人みな心にはからるるやうにて見過ぐさる。

（匂兵部卿 ⑤ 三〇～三一頁）

ことにをかしき言の数を尽くさねど、さまのなまめかしき見なしにやあらむ、情なくなどは人に思はれたまはず。かりそめの戯れ言を言ひそめたまへる人の、け近くて見たてまつらばやとのみ思ひきこゆるにや、あながちに、世を背きたまへる宮の御方に、縁を尋ねつつ参り集まりてさぶらふも、あはれなることほどほどにつけつつ多かるべし。（宿木 ⑤ 四一九頁）

三条宮に集まるのは、薫と何らかの関係を持った女性である。薫自身は出家を望んでおり、女性との関係も、出家の絆しにならぬよう心を配っている。そのような彼の態度を女性たちは物足りなく思う一方で、彼を恨む気持ちはないようである。結局は、薫の姿を見たい、声を聞きたいという気持ちから三条宮に〈出仕〉しているのだ。それは強制されたものではなく、出仕者本人の自発的意志によるものであった。武者小路辰子氏は彼女たちのことを次のように評している。^{（註）}

召人になると言うことが、墮落であると考えるのは現代的な考え方であろう。前にも述べた光源氏邸・薫邸に集まる女房志願者は、いわば召人志願者でもあり、世に幸人と言われる出世を望んだのである。

「はかなき契りに頼みをかけたる」「け近くて見たてまつらばや」という思いで〈出仕〉するのであるから、それを墮落と捉えるべきでないという武者小路氏の考えは理解できる。しかし、〈出仕〉することは男性を含めた他者に声を聞かれたり、顔を見られる可能性があるということだ。それは、身分の高い姫君に相応しいものではない。例えば〈妻〉ならば、御簾の奥で女房達に囲まれて過ごすことができる。しかし〈出仕〉とは〈妻〉を支える女房になることなのだ。とすれば「さもあるまじき際の人々」「ほどほどにつけつつ」

と身分の高さを繰り返すことで〈出仕〉する姫君たちに対して零落というイメージが喚起されてくるのも仕方がないといえる。

そこで次の記述に注目したい。

さるは、かの君たちのほどに劣るまじき際の人々も、時世に従ひつつ衰へて心細げなる住まひするなどを、尋ねとりつつあらせたまひなどいと多かれ
(宿木 ⑤ 三八九頁)

「かの君たちのほどに劣るまじき際の人々」とは、八の宮家の姫君に劣らぬ身分の女性を指す。薫は、そうした身分の高い女性たちの中で「時世に従ひつつ衰へて心細げなる住まひする」人を探し出しては自分の近くに仕えさせている。こうした女性が多く存在する現状は、それだけ女性が生きがたい世であるということであり、身分が高いことが暮らしていくためには何の役にも立っていないことを示しているのである。そこで、薫は〈出仕〉させることで女房としてではあるが、働く場所を提供することで彼女たちの生活を保障し助けていたのだ。

三 女一の宮への〈出仕〉

次に、女一の宮への〈出仕〉を取り上げる。

世になくかしづききこえたまひて、さぶらふ人々も、かたほに

すこし飽かぬところあるははしたなげなり。やむごとなき人の御むすめなどいとも多かり。御心の移ろひやすきは、めづらしき人々にはかなく語らひつきなどしたまひつつ、かのわたりを思し忘るるをりなきものから、訪れたまはで日ごろ経ぬ。

(総角 ⑤ 三〇五頁)

姫宮にこれを奉りたらば、いみじきものにしたまひてむかし、いとやむごとなき際の人多かれど、かばかりのさましたるは難くやと見たまふ。
(浮舟 ⑥ 一五五頁)

一品の宮の御方を慰め所にしたまふ。よき人の容貌をもえまほに見たまはぬ、残り多かり。
(蜻蛉 ⑥ 二四五頁)

彼女のもとへ〈出仕〉してきた女性たちは「やむごとなき人の御むすめ」「いとやむごとなき際の人」という身分の高さもさることながら「かたほにすこし飽かぬところあるははしたなげなり」「よき人の容貌」とあるように、その容貌が美しいことも強調されている。その理由として、彼女たちが匂宮の恋愛対象となる可能性を有していることと、匂宮が関係した女性を〈出仕〉させていることが考えられる。

例えば、「姫宮にこれを奉りたらば、いみじきものにしたまひてむかし」とあるように、彼は浮舟を女房として女一の宮の処に〈出仕〉させれば宮が大切にしてくれるだろうと考えている。懸想人を

女房仕えに出すという考えが特別ではないことは次の記述からも明らかである。

なべてに思す人の際は、宮仕の筋にて、なかなか心やすげなり、さやうの並々には思されず、もし世の中移りて、帝、後の思しおきつるままにもおはしまさば、人より高きさまにこそなさめなど、ただ今は、いとはなやかに心にかかりたまへるままに、もてなさむ方なく、苦しかりけり。 (総角 ⑤ 二九〇頁)

匂宮は中の君を京へ迎えるに際して、彼女が単なる懸想の相手なら宮仕えの女房にするが彼女をそのようには扱いたくないと考えている。ここで注意したいのは、彼の選択肢の中に懸想の相手を宮仕えの女房にするという考えが存在することである。また、後に明石中宮が「御心につきて思す人あらば、ここに参らせて、例ざまにのどやかにもてなしたまへ」(総角 ⑤ 三〇三頁)と匂宮の宇治通いを諫める際に、彼女もまた匂宮と同じ認識を持っていたことが解る。

我すさまじく思ひなりて棄ておきたらば、かならずかの宮の呼び取りたまひてむ、人のため後のいとほしさを、ことにたどりたまふまじ、さやうに思す人こそ、一品の宮の御方に人二三人参らせたまひたなれ、さて出で立ちたらむを見聞かむ、いとほしく (浮舟 ⑥ 一七五―一七六頁)

薫は自分が浮舟に対して愛想を尽かせば、匂宮が彼女を連れ去り女

一の宮の女房にするだろうと推測している。また、薫の聞いた話として「さやうに思す人こそ、一品の宮の御方に人二三人参らせたまひ」と、匂宮が関係を持った後、飽きた女性を女一の宮のもとに女房として〈出仕〉させていることも明らかにしている。

女一の宮のもとに〈出仕〉するということは、匂宮と関係を持つ可能性があるということであり、武者小路氏が指摘する「幸人と言われる出世」への足がかりを有していることは間違いない。しかし、彼と関係を持ったとしても、軽んじられたり飽きられたりすれば、後は再び〈出仕〉するだけである。この場合の〈出仕〉は、将来への希望を失った姫君たちの生活を保障する手段であつたといえる。

四 式部卿宮の姫君の〈出仕〉

物語は出自を明らかにしていない不特定多数の姫君たちの〈出仕〉を描いている。その中で、蜻蛉巻には〈出仕〉する姫君として「式部卿宮の姫君」が登場する。彼女は出自が明らかな女性であつた。

まず、彼女の身分について明らかにしておきたい。彼女の父・式部卿宮は「式部卿宮と聞こゆるも亡せたまひにければ、御叔父の服にて」(蜻蛉 ⑥ 二二七頁)とあることから光源氏の異母弟であることが解る。また、式部卿という役職が、宮の中でも重職である

ことは既に多くの先学によって示されている。^(註2) 式部省は人事関係全般及び礼儀に関することを司るところである。式部卿は四品以上の親王が着く職であり、親王が任官する卿のなかでも上位とされていた。つまり、親王の中でも重んじられていた人物を父に持つ姫君なのである。

後の宮の、御輕服のほどはなほかくておはしますに、二の宮なむ式部卿になりたまひにける。重々しうて、常にしも参りたまはず。
(蜻蛉 ⑥ 二四五頁)

彼女の父である式部卿宮亡き後、その職責を担ったのが次の春宮と目されている二の宮であったことから、その重要性は明らかであろう。また、式部卿宮の影響力については浮舟の母・中将の君の言葉に示されている。

人の言ふを聞けば、年ごろ、おぼろけならん人をば見じとのたまひて、右の大殿、按察大納言、式部卿宮などのいとねむごろにほのめかしたまひけれど聞き過ぐして、帝の御かしづきむすめを得たまへる君は、いかばかりの人かまめやかには思さん。

(東屋 ⑥ 三五―三六頁)

薫の結婚相手の父親として、夕霧、按察大納言と並んで式部卿宮が登場する。これは、高橋由記氏が指摘する^(註3)ように、式部卿宮家が当代の実力者であったことを示すことに他ならない。後の薫の回想の

中で「春宮にやなど思し」(蜻蛉 ⑥ 二六四頁)とあることから、宮の君は有力宮家の姫君としてその将来が期待されていたことは明らかである。

しかし、父・式部卿宮の死によって宮の君の運命は暗転する。彼女はどのように不幸になったのだろうか。

この春亡せたまひぬる式部卿宮の御むすめを、継母の北の方ことにあひ思はで、兄の馬頭にて人柄もことなることなき心かけたるを、いとほしうなども思ひたらで、さるべきさまになん契ると聞こしめすたよりありて、「いとほしう。父宮のいみじくかしづきたまひける女君を、いたづらなるやうにもてなさんこと」などのたまはせければ、いと心細くのみ思ひ嘆きたまふありさまにて、「なつかしう、かく尋ねのたまはするを」など御兄の侍従も言ひて、このごろ迎へとらせたまひてけり。姫宮の御具にて、いとこよなからぬ御ほどの人なれば、やむごとなく心ことにてさぶらひたまふ。限りあれば、宮の君などうち言ひて、裳ばかりひき懸けたまふぞ、いとあはれなりける。

(蜻蛉 ⑥ 二六三頁)

まず第一に、宮の北の方が彼女にとっては継母にあたり、その北の方が彼女に気を配ることがなかったことがあげられる。彼女に対して何の配慮もないことは、北の方が彼女自身の兄ではあるが官位も

低く人柄も卑しい馬頭と結婚させようとしたことから明らかである。浮舟の乳母も次のように語っている。

母おはせぬ人こそ、たづきなう悲しかるべけれ。よそのおぼえは、父なき人はいと口惜しけれど、さがなき継母に憎まれんよりはこれはいとやすし。ともかくもしたてまつりたまひてん。

（東屋 ⑥ 六七頁）

姉・中の君のもとに身を寄せていた時に勾宮に踏み込まれて嘆く浮舟に対し、乳母は母親が居るからどうかしてもらえ、意地の悪い継母に憎まれるより今の方が気楽であると彼女を慰める。まさに宮の君は「さがなき継母に憎まれ」たのであり、おそらくは実母が健在ならば馬頭のような人物との縁談が持ち上がることはなかったことは想像に難くない。

次に宮の君に有力な後見人がいなかったことが挙げられる。ここで彼女の後見人になる可能性があるのは、兄・侍従であろう。しかし、彼自身が彼女に明石中宮からの〈出仕〉の申し出を勧めていることを見れば、宮の君に対して父宮が抱いていた望みを実現させるだけの力を彼が持ち得ていなかったことは明らかである。侍従が権力と財力を有していれば、彼を後見として宮の君は父宮が望んだような結婚ができたはずだ。

このような彼女の境遇を「いとほしう」と思い、女一の宮のもと

に〈出仕〉させることを提案したのは明石中宮である。

女一宮のもとへの出仕には皇族の血統を守るといった意味合いが考えられ、後宮に入る貴頭の女子の付添女房として出仕するのは性格を異にしていると考えられる。従って、宮の君の出先が一品宮であったことも、式部卿宮女が馬頭と結婚することを良しとしない皇族の意識の反映ととらえることが出来る。その意味では〈馬頭との結婚〉と〈一品のもとへの出仕〉のどちらの方が式部卿宮女として相応しいかという問題はあつものの、東宮妃とも目されていた宮の君の立場を考えれば、出仕が喜ばしい筈もない。

高橋由記氏が指摘する^{註4}ように、この〈出仕〉で馬頭との結婚を逃れることは出来たものの、彼女にとって最良の選択ではなかったといえる。「姫宮の御具にて、いとこよならぬ御ほどの人なれば、やむごとなく心ことにてさぶらひたまふ」と身分に相応しく別格の扱いを受けているとはいっても「限りあれば、宮の君などうち言ひて、裳ばかりひき懸けたまふ」とあるように、女房には違いないからである。女一の宮が今上帝と中宮の鍾愛の娘であるといっても、彼女と宮の君が従姉妹であることを考えれば、宮の君の零落ぶりが一際強調されるのではなからうか。

こうした境遇の宮の君を、薫は同情の念を持って見ている。

大将、もどかしきまでもあるわざかな、昨日今日といふばかり、春宮にやなど思し、我にも気色ばませたまひきかし、かくはかなき世の衰へを見るには、水の底に身を沈めても、もどかしからぬわざにこそ、など思ひつつ、人よりは心寄せきこえたまへり。

(蜻蛉 ⑥ 二六四頁)

春宮妃か自分の妻か。いずれにせよ身分に相応しい相手の妻とならずだった姫君が、父宮の死により大きくその運命を変えられたことに薫は同情を禁じ得ない。彼は彼女の境遇を「かくはかなき世の衰へ」と捉えている。〈出仕〉することは宮の姫君という彼女の身分を考えれば、零落以外の何者でもないのだ。

この後、物語の書き手は薫の目を通して女房としての宮の君を表出させる。

宮の君は、この西の対にぞ御方したりける。若き人々のけはひあまたして、月めであへり。いで、あはれ、これもまた同じ人ぞかし、と思ひ出できこえて、親王の、昔心寄せたまひしものをと言ひなして、そなたへおはしぬ。(蜻蛉 ⑥ 二七三頁)

「もとより思し棄つまじき筋よりも、今は、まして、さるべきことにつけても、思ほし尋ねんなんうれしかるべき。うとうとしう、人づてなどにもてなさせたまはば、えこそ」とのたまふに、げにと思ひ騒ぎて、君をひき揺がすめれば、「松も昔の、

とのみながめらるるにも、もとよりなどのたまふ筋は、まめやかに頼もしうこそは」と、人づてともなく言ひなしたまへる声、いと若やかに愛敬づき、やさしきところ添ひたり。ただ、なべてのかかる住み処の人と思はば、いとをかしかるべきを、ただ今は、いかで、かばかりも、人に声聞かすべきものとならひたまひけんとなまうしろめたし。

(蜻蛉 ⑥ 二七四頁)

薫は女房の中では別格扱いである宮の君を尋ねる。薫に対して直に声をかける宮の君に対し、彼は失望すると同時に危惧を抱いている。声を聞かせるといういかにも女房らしい振る舞いは、宮の姫君の身分にはふさわしくないものであり、彼女が零落した姫宮であるという事実を再度認識させたのである。

五 おわりに

後見のいない女性はどうのように生きていかなばならなかったのか。親を亡くした姫君の将来は如何なるものであったのか。女性の生きがたさは、宇治十帖を貫く一つのテーマである。

宇治十帖には、女一の宮という皇女として理想の生き方を体现する人物も描かれている。后腹の彼女は、夕霧という強力な後見を持ち何の憂いもなく暮らしている。その一方で、零落した宮家の姫君

として、宇治の姫君たちの生き様が描かれている。父宮を失い、後見人を持たない彼女たちの人生が、薫と匂宮の思惑によつて翻弄される様はまさに女の生きがたさを示すものといえる。

そのうえで、物語は名もなき不特定多数の姫君の〈出仕〉を描いている。三条宮や女一の宮のもとに仕える女房たちの中に身分の高い女性が存在することが繰り返し語られている。それは、弁の尼が大君に語った零落の人生を想起させる。〈出仕〉することでは私たちの生活を維持するすべを持たない姫君たちの人生もまた、女の生きがたさを示すものといえよう。

更に物語は、身分が明らかな姫君を〈出仕〉させる。式部卿宮の姫君という高い身分を有し「宮の君」とよばれた彼女の〈出仕〉は、まさに零落する姫君の存在を明らかにするものである。彼女の境遇は、朱雀院が危惧した状況が現実のものとなったことを知らしめている。そして、宮の君の人生が女房として定まった後に物語は浮舟が出家する姿を描く。しかし、彼女は出家してもなお平穏な人生を送ることは出来ない。『源氏物語』は女の生きがたさを描きながら、そこから逃れるための答えを明らかにすることはしない。

註

註1 武者小路辰子「中将の君―源氏物語の女房観―」三二頁(『源氏物語 生と死と』所収 武蔵野書院 昭63・12)

註2 坂本昇「朝顔の生き方―親王の女(一)―」(『源氏物語構想論』所収 明治書院昭56・3)

藤本勝義「式部卿宮―「少女」巻の構造―」(『源氏物語の想像力―史実と虚構―』所収 笠間書院 平6・4)

註3 高橋由記氏は次のように述べている。

薫を婿に望んだのが夕霧右大臣・紅梅大納言・蜻蛉式部卿宮であることは示唆的である。先述の立后争いと同様に、式部卿宮家は源氏の長者(夕霧右大臣)や藤氏の代表(紅梅大納言)と比較しても遜色ない家柄と見なされていたことが理解される。「蜻蛉」巻の宮の君―式部卿宮女の出仕―」(『國語國文』七九八号 平13・2)

註4 註3に同じ

第三部 『紫式部日記』

式部の〈出仕〉

一 はじめに

『源氏物語』は、多くの女性の人生を描く中で女の生きがたさを繰り返し説いている。特に若菜巻では朱雀院に皇女を含めた身分の高い姫君たちが零落していく様子を語らせる。また、宇治十帖では三条宮や女一宮、明石中宮のもとに〈出仕〉する姫君たちが描かれている。そこで、第二部・第二章・第四節「姫君たちの生き方」では姫君たちの〈出仕〉について取りあげた。

紫式部もまた、中宮彰子に〈出仕〉している。そして、宮中や土御門邸で彼女が見聞きした事柄を記したものが、『紫式部日記』である。敦成親王誕生に沸く土御門邸の様子。皇子誕生に伴う様々な儀式。宮中での日常。華やかな儀式や雅な日常を女房の視線で捉え克明に記録した所にこの『紫式部日記』の意義があることは改めて指摘するまでもない。特に女房たちの装束に関する詳細な記録は、彼女の観察力を示すものである。

その一方で、その記録の中に〈出仕〉へのつらさや女房としての

我が身を嘆く記述が散見される。

世にあるべき人かずとは思はずながら、さしあたりて、恥づかし、いみじと思ひしるかたばかりのがれたりしを、さも残ることなく思ひ知る身の憂さかな。
(一六九―一七〇頁)

一例として、久しぶりに実家で過ごす式部の心情を取りあげた。実家という本来の自分を取り戻せる空間で〈出仕〉する我が身を振り返れば、そこには負の感情しか存在しなかったのだ。式部はなぜそこまで〈出仕〉する我が身を憂うのだろうか。

人づてともなく言ひなしたまへる声、いと若やかに愛敬づき、やさしきところ添ひたり。ただ、なべてのかかる住み処の人と思はば、いとをかしかるべきを、ただ今は、いかで、かばかりも、人に声聞かすべきものとならひたまひけんとなまうしろめたし。
(蜻蛉 ⑥ 二七四頁)

蜻蛉巻では、宮の君が女一の宮のもとに〈出仕〉している。薫は自分と直に言葉を交わした宮の君に女房としての彼女の将来を垣間見て同情と哀れみを感じている。この薫が視たものが、式部が〈出仕〉という行為を厭う要因である。ただし、これは一例に過ぎない。式部が憂いた〈出仕〉の実情を『紫式部日記』から拾いあげ、その理由を考えてみたい。

二 「出仕」先と女房の容姿

先に述べたように、宇治十帖における女性の「出仕」先は、明石中宮、女一の宮、三条宮があげられている。明石中宮は今上帝の中宮、女一の宮は今上帝と明石中宮の姫宮、三条宮は朱雀院皇女であり准太上天皇・光源氏の正妻である。いずれも出仕先である女主人の身分は高い。その中で、例えば女一の宮については次のような記述がある。

世になくかしづきこえたまひて、さぶらふ人々も、かたほにすこし飽かぬところあるははしたなげなり。やむごとなき人の御むすめなどもいと多かり。
(総角 ⑤ 三〇五頁)

女一の宮は先に述べたように中宮腹の姫宮として、最も高い身分の女性である。かつて、紫の上が最も慈しんだのもこの姫宮であった。帝も中宮も彼女を大切に育てている様子を示すことで、女一の宮という人物をより高貴な女性として印象づけている。その高貴な女性のもとに「出仕」している女房は、その容姿が優れているだけでなく、身分ある人の娘も多く含まれていることが明らかになっている。明石中宮のところにも「いとやむごとなきものの姫君のみ多く参り集ひたる宮と人も言ふ」(蜻蛉 ⑥ 二六二頁)と記されるように、高い身分の姫君が「出仕」することは珍しいことではなくなってい

る現状が垣間見える。

一方、式部の「出仕」先である彰子は道長の娘であり今上帝の中宮である。明石中宮と同等の「出仕」先といえよう。では、そこに仕える女房の出自はどうか。例えば、小少将の君と呼ばれるのは源雅信の子・右少弁時道の娘であり道長室倫子の姪にあたる。同じく倫子の姪・源雅信の子・左大弁扶義の娘、簾子は大納言の君と呼ばれた。宰相の君と呼ばれたのは藤原道綱の娘・讃岐守大江清通の妻・豊子で、彼女は敦成親王の乳母となる。つまり、相応の身分・出自の女性が「出仕」していたことがわかる。

次に彼女たちの容姿及びその日常を見ておきたい。例として宰相の君を取りあげる。なぜなら式部は宰相の君と親しく、彼女に対する記述が多く見られるからである。例えば、宰相の君の美しさについては日記のなかでも早くに触れられている。

上よりおるる途に、弁の宰相の君の戸口をさしのぞきたれば、昼寝したまへるほどなりけり。萩、紫苑、いろいろの衣に、濃きがうちめ心ことなるを上に着て、顔はひき入れて、硯の筥にまくらして、臥したまへる額つき、いとらうたげになまめかし。絵にかきたるものの姫君の心地すれば、口おほひを引きやりて、「物語の女の心地もしたまへるかな」といふに、見あけて、「もの狂ほしの御さまや。寝たる人を心なくおどろかすものか」と

て、すこし起きあがりたまへる顔の、うち赤みたまへるなど、こまかにをかしうこそはべりしか。
(二二八頁)

「おほかたもよき人の、をりからに、またこよなくまさるわざなりけり。」(二二八頁)と語るのは、昼寝を式部によって目覚めさせられた寝起きの様子であった。式部に「絵にかきたるものの姫君の心地」と評される彼女の寝姿は、その前に描かれた彼女の衣装の色合いとともにその美しさを十分に印象づけている。更に、小少将の君、宮の内侍、式部のおもなど個別に名を記してその容姿や性質について記されており、その内容から総じて彰子中宮に仕える女房たちの容姿が一定の水準以上であったことは明らかである。

日記に記された中宮彰子のもとに〈出仕〉する女房たちの容姿や身分の高さは、『源氏物語』に描かれた〈出仕〉する姫君たちに通じるものがある。日記を読む限り、身分のある女性であつても高貴なところであれば〈出仕〉する場合があり、またその数も少なくないことがうかがえる。また、先にあげた宰相の君の寝姿や起き抜けの姿の描写は、彼女の美しさを認識させるものであると同時に、女房仕えとはそうした姿を親しいとはいえ他者に見られてしまうという危うさを抱えていることを示唆していることも忘れてはならない。

三 彰子中宮に仕える女房

ここでは、『紫式部日記』に描かれる中宮彰子に〈出仕〉した女房の日常を見ていきたい。

師走の二十九日にまゐる。はじめてまゐりしも今宵のことぞかし。いみじくも夢路にまどはれしかなと思ひ出づれば、こよなくたち馴れにけるも、うとましの身のほどやおぼゆ。

(一八四頁)

例えば、式部のはじめての参内は「夢路にまどはれしかな」と語られていることから未知の体験に対する戸惑いを含めた期待を抱くものであったと推察できる。しかし〈出仕〉に慣れた今は、そのような我が身を疎ましいとさえ思っている。式部が、宮仕えに馴れることを厭う理由はどこにあったのだろうか。それは、女房とは見られるものであるという現実ではないかと考える。なぜならば、日記には見られる現実とそれに対する嫌悪感が繰り返して記されているからだ。そして、この視る行為は先に宰相の君に対して示されたような同性の他者ではなく、男性を含めた他者であるということが最大の要因であろう。

一例として、土御門邸に帝が行幸した時の記載を取りあげる。

殿、若宮抱きたてまつりたまひて、御前にあてたてまつりた

まふ。主上抱きうつしたてまつらせたまふほど、いささか泣かせたまふ御声いとわかし。弁の宰相の君、御佩刀とりてまゐりたまへり。身屋の中戸より西に、殿の上おはするかたにぞ、若宮はおはしませたまふ。主上外に出でさせたまひてぞ、宰相の君はこなたに帰りて、「いと顕証に、はしたなき心地しつる」と、げに面うちあかみてゐたまへる顔、こまかにをかしげなり。

衣の色も、人よりけに着はやしたまへり。 (一五七頁)

若宮誕生に伴う儀式は、女房が担う役割が大きい。宰相の君は敦成親王の乳母に任せられ、守り刀を捧げ持つて親王とともに進む。その大役を終えた彼女は「いと顕証に、はしたなき心地しつる」と述べているのだ。彼女が上品で美しく衣装の色合いも他の人より引き立っていることは式部が視て記したことで明らかである。つまり、親王の乳母として儀式に臨む宰相の君の姿は何ら引けを取らぬ様子であつたのだ。そして、当然のことながら儀式に臨む彼女の姿はそこに集う人々の目にさらされている。そのために、他者に見られたという現実が、彼女にとって決まり悪く思い顔を赤らめるものであつたことも示されるのだ。身分にふさわしい大役を務める立場を得ても、女房である以上視られることを避けては通れないという現実を認識させるものであつた。

もう一つ、御産養の儀式を取りあげる。

例は、御膳まゐるとて、髪上ぐることをぞするを、かかる折とて、さりぬべき人々をえらみたまへりしを、心憂し、いみじと、うれへ泣きなど、ゆゆしきまでぞ見はべりし。

(一四三―一四四頁)

産養という晴れがましい席であるため、倍膳の女房にはしかるべき女房を選んでいる。しかし、選ばれた女房にとって、それは髪をあげて人前に出ることを意味している。その結果、選ばれた者たちは「心憂し、いみじと、うれへ泣き」といった行為にいたる。髪をあげて人前に出ることは彼女たちにとって受け入れ難い行為であり、それを辛く感じることは当然であろう。しかし、これもまた女房としての現実なのだ。

『紫式部日記』では敦成親王誕生とそれに伴う様々な儀式が描かれている。儀式を行ううえで女房は重要な役割を担う。それは晴れがましいものであると同時に、他者の眼にさらされる現実を伴う。身分が高くても、女房である以上避けることができない。式部が繰り返して述べる〈出仕〉に対する憂いは、ここに起因するといつていいだろう。

四 姫君と上臈女房批判

ところで、先にあげた陪膳の女房たちが嘆く姿について、晴れがましい席にもかかわらず縁起が悪いことであると式部は評している。これは、女房としての自覚がない彼女たちに対する批判である。実は、日記の中で式部は中宮に仕える女房たち、特に上臈女房を批判している。

まづは、宮の大夫まゐりたまひて、啓せさせたまふべきことありけるをりに、いとあえかに児めいたまふ上臈たちは、対面したまふこと難し。また、あひても何ごとをか、はかばかしくのたまふべくも見えず。言葉の足るまじきにもあらず、心の及ぶまじきにもはべらねど、つつまし、恥づかしと思ふに、ひがごとくもせらるるを、あいなし、すべて聞かれじと、ほのかなるけはひをも見えじ。ほかの人は、さぞはべらざる。かかるまじらひなりぬれば、こよなきあて人も、みな世にしたがふなるを、ただ姫君ながらのもてなしにぞ、みなものしたまふ。

(一九九頁)

批判の対象となったのは、上臈女房が中宮大夫の訪れにも対面しないこと。対面したとしても、その対応に不安があることであった。それは男性に対応することを恥づかしく思い、姿を見られないための振る舞いから生じている。上臈女房とはいわゆる〈出仕〉している女性の中で身分が高いもの、出自の確かな者たちを指す。式部は

彼女たちの態度を女房らしからぬ振る舞いであると批判しているのだ。さらに、こうした姫君然とした上臈女房の存在が中宮の為にならないことを指摘している。

すこしよろしからむと思ふ人は、おぼろけにて出でゐはべらず。心やすく、もの恥ぢせず、とあらむかからむの名をも惜しまぬ人、はたことなる心ばせのぶるもなくやは。たださやうの人のやすきままに、たちよりてうち語らへば、中宮の人埋もれたり、もしは用意なしなどいひはべるなるべし。上臈中臈のほどぞ、あまりひき入りぎうずめきてのみはべるめる。さのみして、宮の御ため、もののかざりにはあらず、見ぐるしも見はべり。

(一九五―一九六頁)

人前に出ることを厭えば引つ込み思案といわれ、話をすれば奥ゆかしさがないと批判される。人は様々に批評するものである。しかし、貴人であることから抜け出せない女房の存在は、彼女たちの主人である中宮彰子の評判を下げる要因になっていることを式部は指摘しているのだ。

ただし、この様な批判を展開する一方で、それが特定の個人を指すものではないと述べており、そこには自分への批判をかわす意図もうかがえる。

これらを、かくしりてはべるやうなれど、人はみなとりどり

にて、こよなう劣りまसारこともはべらず。そのことよければ、かのことおくれ、などぞはべるめるかし。されど、若人だに重りかならむとまめだちはべるめる世に、見ぐるしうざればべらむも、いとかたはならむ。ただおほかたを、いとかく情なからずもがたと見はべり。

(一九六頁)

上臈・中臈の女房が訪れた人と戯れる様はひどく見苦しいことも事実であり、個人を批判するのではなく全体として無風流な雰囲気から脱却したいという式部の考えが示されている。個人に対する批判ではないことは、宰相の君や大納言の君、宣旨の君など何名かの名をあげてその容姿や人柄については好意的に記載されていることから推測できる。このいささか矛盾したような式部の言説については「上臈女房に対しては、きわめて好意的な筆致で、その容姿・性格を褒めてきたが、ここに至っては、年長者として、学識経験者として、社会的地位の高下を離れた大所からこれを見下し、忌憚なく批判する態度に変わっているのである。」と萩谷朴氏が述べている^(註)。

ここで、上臈女房の一人、小少将の君についての記述を見てみたい。

小少将の君の、いとあてにをかしげにて、世を憂しと思ひしみてゐたまへるを、見はべるなり。父君よりことはじまりて、人のほどよりは、幸ひのこよなくおくれたまへるなめりかし。

(一七四頁)

小少将の君は、そこはかとなくあてになまめかしう、二月ばかりのしだり柳のさましたり。様態いとうつくしげに、もてなし心にくく、心ばへなども、わが心とは思ひとるかたもなきやうにものづつみをし、いと世を恥ぢらひ、あまり見ぐるしきまで児めいたまへり。腹ぎたなき人、悪しざまにもてなしいひつくる人あらば、やがてそれに思ひ入りて、身をも失ひつべく、あえかにわりなきところついたまへるぞ、あまりうしろめたげなる。

(一八九―一九〇頁)

ここでは、美しい小少将の君の性質に注目したい。自分で物事を判断できないほどの遠慮の仕方、恥ずかしがり屋で子どもっぽい、悪口を聞くと氣に病んで死んでしまいそうなほど弱々しい。式部の指摘する小少将の君の性質は、本来の性質に加えて父親の出家以来の不幸と運の悪さから彼女が世を憂うようになったことも影響しているだろう。そして、この弱さが、実は「ただ姫君ながらのもてなしにぞ」と指摘されるところでもあるのではないか。式部は小少将の君のことを悪くいうことがない。ただ彼女の弱さを心配する様子に、年長者としての式部の気遣いを感じられる。さらにいえば、ここに描かれる小少将の君を後見のしつかりとした姫君として御簾の内に置いた場合、彼女の弱さは氣にされることなく美しくたおやかな女

性としてその人生を幸せに生きていけたのではないかと思わせる。そのような姫君が〈出仕〉している現実を改めて認識させたのではないか。

いわゆる式部の上臈女房批判は、彰子中宮御所が齋院方から批判されたことに対する式部の反論から派生したものであり、彰子中宮の為の批判であった。その一方で、〈出仕〉した姫君のその出自故の至らなさを明らかにし、女房としてのあり方を再認識させるものであったともいえるだろう。

五 見られる女房

さて、ここでもう一度容姿が明らかになるという行為について見てみたい。先に述べたのは、儀式の場での見られる様についてであった。ここでは、隠れるもの隠すものがないことに注目してみる。一例として、中宮が内裏に還啓する場面をあげる。この時、女房達は内裏までは車に乗れるが、それ以降は徒歩になっている。

月のくまなきに、いみじのわざやと思ひつつ、足をそらなり。
馬の中將の君を先にたてたれば、ゆくへもしらずただどしき
さまこそ、わがうしろを見る人、恥づかしくも思ひ知らるれ。
細殿の三の口に入りて臥したれば、小少將の君もおはして、

なほ、かかる有様の憂きことを語らひつつ、すくみたる衣ども
おしやり、厚ごえたる着かさねて、火取に火をかき入れて、身
も冷えにけるものの、はしたなさをいふ（一七二―一七三頁）
夜更けの内裏で、明るく照らす月が印象的な場面である。月は歩く女房たちを明るく照らしだしている。隠れるところもなく月の光に照らされる同僚を見ることで、自らも視られることを意識し、そのことに強い羞恥心を抱いたことは想像に難くない。更に寒さで体が冷えることも心を碎く一因になっただろう。局で火を起こし冷えた体を温めながら語りあう姿からは、宮仕えの負の部分しか伝わらない。

次に、五節の舞姫の参入する場面と童女要覧の儀を取りあげる。
隙間なく灯された光は昼間よりも明るく舞姫たちの入場する様を照らし出している。あらわに見える舞姫たちの様子は、普段自分の姿も同じ様に見られていることを改めて式部に気づかせる。自らの想像以上に視えていたことは「胸ふたがる」ことから明らかであろう。
東の、御前のむかひなる立蔭に、ひまもなくうちわたしつと
もしたる灯の光、昼よりもはしたなげなるに、あゆみいるさ
ども、あさましう、つれなのわざやとのみ思へど、人の上との
みおぼえず。ただかう、殿上人のひたおもてにさしむかひ、脂
燭ささぬばかりぞかし。屏幔ひきおひやるとすれど、おほかた

のけしきは、同じごとぞ見るらむと、思ひ出づるも、まづ胸ふたがる。
(一七五頁)

童女御覧の儀は、特に視られているということを式部に意識させることになった。そもそも、童女御覧とは卯の日に舞姫に付き添っている童女らを清涼殿に召して帝が御覧になる行事である。帝の前では顔を隠すための扇を下に置かせることがあり、控える女房たちだけでなく殿上人にもその容姿を視られるのである。

われらを、かれがやうにて出でゐよとあらば、またさてもさまよひありくばかりぞかし、かうまで立ち出でむとは思ひかけきやは。されど、目にみすみすあさましきものは、人の心なりければ、いまより後のおもなさは、ただなれになれすぎ、ひたおもてにならむやすしかしと、身の有様の夢のやうに思ひつづけられて、あるまじきことにさへ思ひかかりて、ゆゆしくおぼゆれば、目とまることも例のなかりけり。(二七九～一八〇頁)

宮仕えに慣れることで男性と直接顔を合わせることも恥ずかしいと思わなくなっていくであろう我が身を憂う式部の姿は注視すべきである。我が身を見られるだけでなく、男性を直視することは〈出仕〉している以上避けることはできないが、それこそが〈出仕〉を厭う最大の要因であるといえるからだ。

六 おわりに

『紫式部日記』は式部が視たことを記すと同時に、視られることに対する嫌悪感も記されている。身分の高い女性のもとへの〈出仕〉は、姫君にとって一見優良な落ち着き先に思われる。しかし、〈出仕〉は他者に視られることを意味し、そこから逃れることはできない。

『源氏物語』で〈出仕〉する姫君としては、やはり宮の君があげられる。

姫宮の御具にて、いとこよなからぬ御ほどの人なれば、やむごとなく心ことにてさぶらひたまふ。限りあれば、宮の君などうち言ひて、裳ばかりひき懸けたまふぞ、いとあはれなりける。

(蜻蛉 ⑥ 二六三頁)

宮の君の〈出仕〉については、明石中宮の配慮もあり、彼女の身分を意識した待遇であった。彼女の様子は薫の眼を通して描かれていくが、冒頭に示したように直に言葉を交わしたことは示されても、〈出仕〉の内容が詳しく記されることはない。ただ、男性の眼から女性の〈出仕〉が語られるところに作者の意図が感じられる。同性の眼から視た『紫式部日記』と逆の視点を用いることで、男性社会における女性の生きがたさを描いたのが『源氏物語』であるといえ

るのではないか。実は『源氏物語』では〈出仕〉内容について細かに語られることはない。男性の眼では、御簾の中の様子まで明らかにすることはできないからだ。しかし、実際の〈出仕〉については、『紫式部日記』において式部自身がその辛さ苦しさを吐露している。女性の眼で見た現実をそこに視なければならぬ。

註

註1 『紫式部日記前注釈』下巻 二一六頁（角川書店 昭48・3）

※『紫式部日記』の本文はすべて新編日本古典文学全集（小学館）に依る。

結 『源氏物語』における女性たちの生き方

本論は『源氏物語』において、権力がどのように人物造型に関わったかについて考察した人物論である。特に女性と権力の関係に着目し、その権力が男性に対してどのように作用し影響をおよぼしたのかを読み解くことで、その女性が作り出された意味を提示するとを心がけた。

第一部「〈源氏〉とそれを支えた女性たち」では、『源氏物語』第一部・桐壺巻から藤裏葉巻を中心に、権力を持つ女性と彼女たちの権力に支えられた男性を取り上げている。

第一章では、宮中における光源氏と朱雀帝の関係を〈公〉と〈私〉に分けて論じてみた。彼らは成長に伴い互いの立場が変化していく。互いの後見人が政治的に対立しているため宮中ではその影響を受けるが、兄弟として〈私〉の部分では互いを認め理解している。実はそれは互いの政治家としての部分にも当てはまることを指摘し、そこに彼らの人間性が認められることを明らかにした。特に齋宮を巡る二人の關係に顕著に認められる。

また、朱雀帝については、彼が帝の地位にふさわしい人物であり、最終的には自己を貫くことで後の世への影響力を有することに成功していると見るべきである。若菜巻の朱雀院像は、既にここで形作

られていることを指摘し、従来の朱雀帝像とは異なる人物造型を示すことができた。

第二章では、大臣家の姫君たちが担う権力に着目し、それがどのように男性に影響を及ぼしたのかについて考察するために、弘徽殿太后、右大臣四の君、葵の三名を取り上げた。

弘徽殿太后は、悪后と評されることが多い。しかし、宮中での立場で彼女の言動を見れば、彼女は女御として桐壺帝を諫めて後宮にあるべき姿に戻そうと試みていたことが見て取れる。彼女の言動に右大臣家の人材不足の影響を指摘し、右大臣家の権力を守り維持するために動かざるを得ない弘徽殿太后の立場を明らかにし、その人物像を再評価した。

右大臣家の四の君は、左大臣家・頭中将の正妻である。宮中における権力争いで〈源氏〉に対抗するのは藤原家である。人材不足の右大臣家はいつの間にか物語から消える。かつての右大臣家の権力や人脈を引き継いだのは頭中将であり、彼への権力の移行をスムーズに行うためには四の君が必要だったことを明らかにした。二人の結婚で左右両大臣家の財産をひとまとめにして頭中将が引き継ぎ、それを駆使して光源氏と権力闘争を繰り広げるのである。

葵はその人物像について多く語られることはない。彼女と光源氏の結婚は双方の父親たちの思惑による政略結婚であった。彼女は光

源氏に権力を与えるものであり、彼と左大臣家を繋ぐ絆として存在している。この絆は光源氏にとっては必要不可欠のものであり、その意味で登場回数の少ない彼女が物語に与えた影響の大きさについて考察した。

第三章では疑似後宮としての六条院を取りあげた。六条院は光源氏の〈私〉的生活空間であり、完成から七年の間華やかな絵巻物のような光景が繰り広げられている。この七年間に夕霧は結婚して三条邸に移り住み、明石姫君は入内し、光源氏は准太上天皇に叙せられる。六条院の七年間を時間の流れに沿って分析し、この後の物語の舞台となる六条院における光源氏の〈私〉の終焉と〈公〉に準ずる空間への変貌を論じている。変貌には女三の宮降嫁に伴い皇家の力の影響があることも指摘した。

第二節では〈源氏〉の後継者である夕霧の〈公〉における立場とその政治力について確認した。第三節では夕霧の見た六条院世界の危うさについて考察している。彼がなぜ六条院世界を視る人たり得たのか。そこには希薄な親子関係が存在しており、それ故に冷静に客観的に視ることができた。彼の眼は六条院及び光源氏が抱えるゆがみや嘘を明らかにしたが、そこには彼の成長があることも指摘した。

第四節では、頭中将の嫡男であり夕霧のライバルである柏木を取

りあげた。柏木が物語に登場してくるのは玉鬘への求婚譚からである。彼の言動はすべて権力を得るためのものであることを指摘し、玉鬘及び女三の宮への求婚から、柏木の権力欲や自負心を明らかにした。特に女三の宮と皇家の関わりと、そこから派生する政治力がどのように物語に影響を与えたかについて論じた。

第二部は「〈源氏〉の女性たち」として、皇女及び宮家の姫君を取りあげ、『源氏物語』のテーマとされる女の生きがたさについて権力との関わりから言及することを試みた。

第一節では女三の宮について考察した。まず第一に、女三の宮の降嫁決定は、朱雀院の錯誤ではなく〈公〉〈私〉両面から見ても最良の選択であったことを指摘した。皇女という身分には准太上天皇の正妻という地位がふさわしく、財力もあり、片なりな彼女を教え導くだけの経験があった光源氏に降嫁させたことは間違いではなかった。実際、女三の宮は宮中と変わらぬ生活に不満を抱いてはいない。柏木の思い込みから密通という事態を引き起こすが、それが世間に知られることなく済んだのは、光源氏の配慮に拠るところが大きい。また、彼女の出家は結果として彼女を男女関係の煩わしさから解放し、心穏やかな生活を保障した。光源氏は彼女の生活を経済的に支えるとともに、彼女自身の収入はすべて蓄えることで、光源氏亡き後の彼女の生活基盤を整えた。さらに、彼女の産んだ薫が長

じて彼女の面倒を見ている。こうして見ると、彼女の人生は決して不幸ではなかったと言つてよい。彼女は自らの皇家の力を最大限に生かして生きていると私は考えたのだ。この女三の宮に関わる一連の物語は皇家という視点をを用いることで、今までとは異なる見方ができることを提示した。

第二節では、同じ朱雀院の皇女、落葉の宮を取りあげた。彼女は女三の宮とは逆にその皇家が彼女の不幸を招いていると考えた。彼女の出自、立場はすべてにおいて彼女の不利になるように造形されている。彼女が独身を貫けなかったのも、皇女再婚という命題を背負われたのも、彼女が「下藹の更衣腹」だったからである。女三の宮は朱雀院からの財産分与も多く、皇家の力で守られているが、落葉の宮には皇家からの配慮は見受けられない。権力から遠い彼女は、「下藹の更衣腹」の皇女として軽んじられ、母方に彼女を後見できる人物がいなかったために柏木に降嫁した。柏木亡き後は出家を望んだが、先に女三の宮が出家したために果たせず、夕霧との関係を取りざたされるようになった。皇家の保護がなく権力を持たない皇女の生きがたさを落葉の宮によって明らかにした。

一方、落葉の宮が夕霧と再婚せざるを得なくなっていく過程を、彼女の二度の転居に伴う二人の距離の変化から読み解いた。この再婚に関しては、夕霧がすでに財力も権力も持っているため、彼女の

権力のなさは問題にならなかった。むしろ、夕霧の恋に注目が集まり、正妻・雲井雁の家出騒動を引き起こす。皇女再婚の問題を孕んだ夕霧の恋は、夕霧と雲居雁の生活感あふれる日常の一コマに取り込まれ、問題になることはなかった。

第二章では宮家の姫君を取りあげた。第一節では末摘花に注目した。末摘花巻と蓬生巻では末摘花の印象が異なると言われるが、私は彼女が別人として造型されたのではなく、彼女を取り巻く人物の違い―その人物の属する階級が彼女に影響を与え、その印象を異なるものと認識させたのではないかと考えた。まず末摘花巻では、末摘花が宮家の姫であることに焦点を当て、光源氏と〈左大臣家〉を含めたいわゆる上流階級に場所を絞って考察し、彼女が〈左大臣家〉の影響を受けていることを明らかにした。

一方、蓬生巻は〈受領〉をキーワードに読み解くことで〈宮家〉の姫君としての彼女が強調された。光源氏の援助が途絶え貧困生活を送る末摘花に〈受領〉が接触するようになる。しかし〈宮家〉の誇りを失わない彼女は〈受領〉を退け再び光源氏の援助を受けて上流階級に戻る。末摘花巻における〈左大臣家〉、蓬生巻における〈受領〉と〈宮家〉。この言葉をキーワードに考察することで、末摘花という人物の再評価ができたと考えている。

第二節では朝顔姫君という人物を〈文〉と〈噂〉で読み解くとい

う方法を試みた。彼女が光源氏と交わす〈文〉とささやかれる〈噂〉によつて人物造型されていることに結婚拒否の可能性を検討した。

彼女は身分ある女性の生き方の理想と言われているが、その理由を〈文〉と〈噂〉に求めた。

第三節では、宮の御方に注目した。彼女はほとんど取りあげられることはないが、数少ない宮家の姫君であり、彼女の置かれた立場や出自には興味を引かれるものがある。彼女は父方・母方双方が宮家という血筋で、個人的な財産もあり、その上で母の再婚相手・按察大納言の元で養育されている。彼女の置かれた立場は複雑であり彼女への求婚譚は物語として成立する要素を有していると考えられる。しかし物語化されず彼女自身も物語から消えていくのは、彼女の属する按察大納言家の入り組んだ親子関係と彼女が二つの宮家を背負うことによる高貴性に原因があると考え考察を試みた。

第四節は宇治十帖で描かれる〈出仕〉する姫君たちを取りあげた。女の生きがたさの行き着く先として、姫君の〈出仕〉が描かれている。式部卿宮の姫君の〈出仕〉は朱雀院が危惧した女の生きがたさが現実になった例である。〈出仕〉を受け入れるのは、権力も財力も持つ女性たちである。一方〈出仕〉する女性は様々な事情を抱えている。〈出仕〉を巡る人々について考察することで、女の生きがたさを招いたものは何か考えた。

『源氏物語』は帝・皇女・宮・宮家の姫といった高貴な血筋の人物が多数脇役として登場している。しかし経済的な基盤が弱く政治力も持たない高貴な家柄の女性はその処遇が難しい。

女性と権力との関わりについて論じられることは少ない。女性と男性の関係性に権力を介在させてその人物を読むことで、新たな見方が多少なりとも提示できたと思っている。特に、弘徽殿太后や末摘花についてはその人物像を再評価することができた。また、女三の宮や落葉の宮の降嫁についても今までとは異なる見方を示すことができたと考えている。

今後の課題は、まだ取り上げていない紫の上、藤壺中宮、朧月夜、花散里といった光源氏に関わった女性たちと権力の関わりについて考えてみたい。皇家との関わりも含めて見ていけば、光源氏との関係にも新しい見方が提示できるかもしれない。そして、この物語の行き着く先、宇治十帖の大君・中の君・浮舟が負った命題を追求することを今後の研究課題としたい。

初出一覧

序 女性が関わる〈公〉と〈源氏〉 書き下ろし

第一部〈源氏〉とそれを支えた女性たち

第一章〈源氏〉の始発

第一節 兄弟の変貌―齋宮との関わりから

「光源氏と朱雀院の変貌 ―齋宮の入内をめぐつて―」（徳島文理大学研究紀要第54号・平成9年9月）

第二節 朱雀帝の政治

「朱雀帝の御代についての一考察」（徳島文理大学研究紀要第62号・平成13年9月）

第二章 大臣家の姫君が担う役割

第一節 右大臣家の姫君

1 弘徽殿太后

「弘徽殿太后考」（徳島文理大学研究紀要第71号・平成18年3月）

2 四の君

「正妻としての四の君の役割 ―右大臣家の娘としての立場から―」（徳島文理大学文学論叢第25号・平成20年3月）

第二節 左大臣家の姫君

「正妻としての葵 ―左大臣家と繋ぐモノとして―」（徳島文理大学文学論叢第30号・平成25年3月）

第三章 六条院という空間―疑似後宮で生きる〈源氏〉

第一節 光源氏の創った世界―六条院

「六条院における光源氏の“私”」（徳島文理大学研究紀要第80号・平成22年9月）

第二節 政治家としての夕霧

「第一部における夕霧についての一考察 ―内大臣家と光源氏の関係から―」（徳島文理大学研究紀要第65号・平成15年3月）

第三節 観察者としての夕霧

「六条院世界をみつめる眼 ―視る人・夕霧についての一考察―」（徳島文理大学研究紀要第66号・平成15年9月）

第四節 後継者としての柏木

「柏木の変貌 ―挫折した結婚―」（徳島文理大学研究紀要第58号・平成11年9月）

第二部〈源氏〉の女性たち

第一章 皇女の生き方

第一節 女三の宮が暴き出すもの

- 1 結婚―父・朱雀院の立場から
「六条院世界の崩壊 ―女三宮の降嫁における朱雀院―」（徳島文理大学研究紀要第56号・平成10年9月）
- 2 結婚―準太上天皇の正妻として
「準太上天皇の結婚 ―第二の藤壺のゆかりがもたらしたもの―」（徳島文理大学研究紀要第57号・平成11年3月）
- 3 出家がもたらしたもの
「宇治十帖における女三宮についての一考察」（徳島文理大学研究紀要第61号・平成13年3月）
- 4 狂わされた男―柏木
「崩壊する柏木―若菜巻における一考察―」（徳島文理大学研究紀要第60号・平成12年9月）

第二節 落葉の宮が背負わされたもの

- 1 落葉の宮の出自
「落葉宮の結婚に関する一考察 ―母・一条御息所がもたらしたもの―」（徳島文理大学研究紀要第69号・平成17年3月）
- 2 柏木との結婚
「落葉宮と柏木の結婚について」（徳島文理大学研究紀要第67号・平成16年3月）
- 3 夕霧との再婚
「落葉宮と夕霧の関わり ―変化する位置と距離―」（徳島文理大学研究紀要第70号・平成17年9月）
- 4 消えた皇女再婚問題
「落葉宮についての一考察 ―消えた皇女再婚問題―」（徳島文理大学研究紀要第68号・平成16年9月）

第二章 宮家の姫君

第一節 末摘花が表したもの

1 末摘花巻と左大臣家

「末摘花巻についての一考察——末摘花が〈左大臣家〉から得たもの——」（徳島文理大学文学論叢第28号・平成23年3月）

2 蓬生巻と受領

「末摘花と〈宮家〉——蓬生巻における〈受領〉のかかわり——」（徳島文理大学文学論叢第29号・平成24年3月）

第二節 朝顔の姫君を形作ったもの

「揺るがぬ姫君——朝顔姫君人物造型に関する一考察——」（徳島文理大学研究紀要第73号・平成19年3月）

第三節 宮の御方が消えた理由を消したもの

「宮の御方論」（徳島文理大学研究紀要第77号・平成21年3月）

第四節 姫君たちの生き方

「〈出仕〉する姫君たち——その意味と機能——」（徳島文理大学文学論叢第26号・平成21年3月）

第三部『紫式部日記』

第一章 式部と〈出仕〉 書き下ろし

結 『源氏物語』における女性たちの生き方 書き下ろし

※収めた原稿には、加筆修正を加えた。